山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第３０４集

滝沢（たきざわ）遺跡（第３・４次）

一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書

２０１５．３

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第三〇四集

滝沢遺跡（第3・4次）

二〇一五・三

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

たき　ざわ

滝沢遺跡（第３・４次）

一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書

２０１５．３

山梨県教育委員会

山梨県県土整備部

滝沢遺跡（第 2 次〜第 4 次）モザイク合成写真

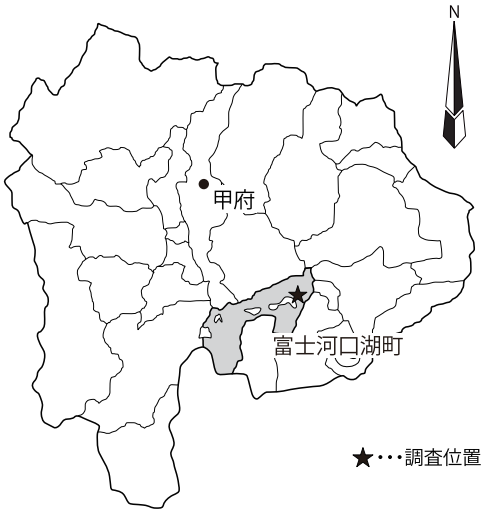
巻頭図版２

滝沢遺跡から御坂峠を望む（南東から）

滝沢遺跡から河口湖を望む（東から）

滝沢遺跡のあらまし

滝沢遺跡がある富士河口湖町河口は、古代には東海道から分岐して甲斐国府へ通じる御坂路（甲斐路）と呼ばれる官道が通っていました。平安時代の法典『延喜式』によると、官道の途中途中に設置された「駅家（うまや）」という馬を乗り継ぐ施設の一つ「河口駅」があったとされています。



滝沢遺跡の発掘調査はこれまでに二年次にかけて実施されて、主に平安時代の集落跡が見つかっていますが、そのほかにも弥生時代や古墳時代の土器が多く見つかっています。その中には山梨県の外から持ち込まれた土器が多くあり、古代官道が整備されるより前から他地域との関わりが深い地域であることがわかっています。

ここでは、二年次に分けて行った滝沢遺跡Ⅵ区の発掘調査で得られた新たな発見について、簡単に紹介していきます。今回の発掘調査では、弥生時代～平安時代の配石３基、平安時代の竪穴建物跡10軒、焼土２基のほか、中世以降の掘立柱建物跡や多数の土坑やピットなどが見つかりました。

発掘調査の経過

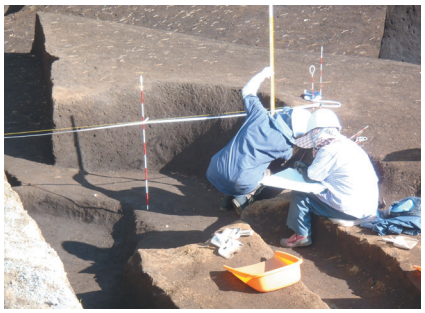
重機を使って、遺物や遺構が検出される深さまで掘り下げていきます。

遺構精査

遺構が検出される層が近づいてきたら、人力で少しずつ掘り下げて、土の色を見極めながら遺構を見つけていきます。

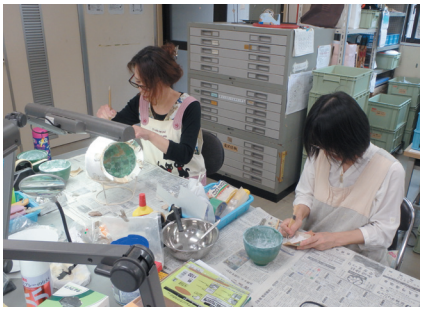
表土剥ぎ

測量・記録



遺構が見つかったら、遺構の位置や遺構を埋めている土層などの情報を測量や写真撮影などで記録していきます。

整理作業



現場で取った記録・測量図面や写真を整理して、報告書を作成します。

滝沢遺跡の発掘調査成果

集落形成時期の竪穴建物跡の発見

今回の発掘調査では８世紀末～９世紀初頭の竪穴建物跡が２軒見つかりました。この発見はこれまで考えられていた滝沢遺跡の集落の形成時期を古くするものでした。遺構の外から出土する土器片の時代からみても８世紀末～９世紀初頭頃が滝沢遺跡集落の形成時期と考えられ、集落の初期段階の遺構として重要な発見となりました。

滝沢遺跡形成期の建物跡

滝沢集落で何をしていたの？

今回の発掘調査でも、竪穴建物跡からたくさんの土器が見つかっています。その中でも10世紀前半の竪穴建物跡から、朱墨を磨った痕跡があるものが出土しました。滝沢遺跡ではこれまでに数多くの墨書土器が見つかっていますが、朱墨で書かれたものは見つかっていません。この時代の朱墨は、お寺の経典や事務書類などに使われたり、運搬する荷物を検閲するときに使われたりしていました。滝沢遺跡の周辺に駅家があったことを考えると、古代官道を通っていく荷物を検閲する人たちが住んでいたのかもしれません。

朱墨硯の痕跡が残る灰釉陶器

滝沢遺跡で見つかった製塩土器片

人間が生活していくうえで欠かせないものの一つに、「塩」があります。製塩土器とは、塩を作るもしくは塩を運ぶための土器のことを言います。海が無い山梨県では塩を作ることができないため、おそらく古代官道を通って、太平洋沿岸地域から持ち込まれたものでしょう。ただし、製塩土器を出土する県内の遺跡は大半が一つの遺跡から少量しか出土せず、今回の発掘調査でも５点の破片しかみつかっていません。この製塩土器がどのように使われたものなのか、今後の研究によって明らかにしていく必要があります。

滝沢遺跡から出土した製塩土器

山梨県外からやってきた土器

右の写真は古墳時代前期頃に作られた「受け口状口縁甕」と呼ばれる土器で、近江（現在の滋賀県）に系譜を持つと考えられています。滝沢遺跡では、平安時代のものに限らず他地域に出自を持つ土器が数多く見つかっています。第２次調査では畿内に系譜を持つ「叩き甕」と呼ばれる土器が見つかっており、特に西日本とのつながりがあったことが窺えます。

出土した受け口状口縁甕

序　文

本書は、南都留郡富士河口湖町河口地内に所在する滝沢遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴い、工事予定地内の2,066㎡の範囲を平成23年度（第3次調査）と平成25年度（第4次調査）の2年次にわたって実施しました。滝沢遺跡は河口湖の東部にあり、御坂山塊の一つを構成する霜山の西麓に形成された微傾斜地に位置します。滝沢遺跡が所在する富士河口湖町河口地区には古代の官道「御坂路（甲斐路）」が通っていたとされ、第4次調査が実施される直前の平成25年8月には、富士河口湖町教育委員会が調査した、滝沢遺跡の西隣にある「鯉ノ水遺跡」で古代官道と思われる道路遺構が発見されました。また、平安時代の法典『延喜式』には甲斐国に「加吉駅」、「河口駅」、「水市駅」の三つの駅が設置されたとされ、そのうち「河口駅」が同町河口地区に所在していたと推測されています。

滝沢遺跡の発掘調査は、これまでに第1次調査・第2次調査が実施されており、平安時代の竪穴建物跡30軒をはじめとする平安時代の遺構や遺物が数多く見つかっています。特に、この集落跡からは墨書や刻書が施された土器が数多く出土しており、近接する古代官道や河口地区に所在したと推定される河口駅といった官営施設の影響を色濃く窺うことができます。

今回の発掘調査では、第2次調査で行われたⅤ区調査区の北側にあたるⅥ区を調査しました。その結果、平安時代の竪穴建物跡10軒が発見されたほか、古墳時代～中世までの配石3基、土器集中3ヶ所、焼土2基、掘立柱建物跡2軒、溝状遺構2条、ピット28基、土坑32基が見つかりました。発見した竪穴建物跡のうち2軒は、これまでに見つかっていた竪穴建物跡の年代より古い8世紀末～9世紀初頭頃のもので、この集落の形成期にあたる遺構が初めて確認されました。遺物では、塩を運搬する際に使用する製塩土器の出土が第4次調査で初めて確認され、古代官道を中心とする交通の要衝としての機能を再認識することができる資料が見つかりました。また、竪穴建物跡から灰釉陶器を硯に転用したものが発見されており、その灰釉陶器の観察から朱墨を磨っていたことが明らかになりました。当時は朱墨の用途が限られており一般的な集落では使用しないものですので、河口駅に関連した機能を持つ集落であったことが疑われます。

今回発見した、集落の形成期に当たる竪穴建物跡の発見や、製塩土器・朱墨を磨った痕跡が残る灰釉陶器の出土などは、これまで実施された滝沢遺跡の調査成果に新たな方向性を示す重要な発見となりました。近年の発掘調査と研究活動により、河口湖北畔地域における古代の様相が明らかになりつつあります。その中で、本報告書が古代河口湖周辺地域ひいては山梨県の歴史を紐解く上で、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に当たってご指導・ご協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2015年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　八　巻　與　志　夫

凡　　例

1　調査区は世界測地系座標によって設定しており、全体図中におけるグリッド名と別に付した数値は座標線の数値である。よって南北のグリッド線及び図中の北印は真北を示す。

2　本書は平成23年度に実施した第3次調査と同25年度に実施した第4次調査をまとめた報告である。

3　調査区域名およびグリッド番号は第1次調査から連続して付したものである。

4　建物跡や土坑などの遺構番号は、各調査時に順次付したものであり、第1次及び第2次調査の遺構番号とは連続しない。なお。第3次及び第4次の各調査時において付した遺構番号は仮番号とし、本書においては、次項に記したとおり連続する遺構番号に変更した。

5　本書への掲載にあたり、原則として以下の規則により遺構種別（ローマ字）と個別番号（2桁）の数字を組み合わせるかたちに統一した。

　遺構種別はSB(掘立柱建物跡)、SD (溝状遺構)、SI(竪穴建物跡)、SK(土坑)、SP(ピット)、SS (配石)、SU (土器集中)、SL(焼土)とする。たとえば、VIa区調査時の1号住居はSI01となる。

　ただし、第3次調査の遺構個別番号は原則として調査当時に付したものを踏襲するが、第4次調査の遺構個別番号は調査時に付した遺構番号から変更となるため、調査記録との照合の際には注意されたい。

なお、新旧遺構個別番号の対照は下表の通りである。

旧		新
第３次調査		
４号住居	→	SI10
※第４次竪穴建物跡 07 と同遺構		
第４次調査		
竪穴建物跡 01	→	SI04
竪穴建物跡 02	→	SI05
竪穴建物跡 03	→	SI06
竪穴建物跡 04	→	SI07
竪穴建物跡 05	→	SI08
竪穴建物跡 06	→	SI09
竪穴建物跡 07	→	SI10
土坑 01	→	SK03
土坑 02	→	SK04
土坑 03	→	SK05
土坑 04	→	SK06
土坑 05	→	SK07
土坑 06	→	SK08
土坑 07	→	SK09
土坑 08	→	SK10
土坑 09	→	SK11
土坑 10	→	SK12

旧		新
土坑 11	→	SK13
土坑 12	→	SK14
土坑 13	→	SK15
土坑 14	→	SK16
土坑 15	→	SK17
土坑 16	→	SK18
土坑 17	→	SK19
土坑 18	→	SK20
土坑 19	→	SK21
土坑 20	→	SK22
土坑 21	→	SK23
土坑 22	→	SK24
土坑 23	→	SK25
土坑 24	→	SK26
土坑 25	→	SK27
土坑 26	→	SK28
土坑 27	→	SK29
土坑 28	→	SK30
土坑 29	→	SK31
土坑 30	→	SK32
土坑 31	→	SK33

旧		新
土坑 32	→	SK34
土坑 33	→	SK35
土坑 34	→	SK36
溝状遺構 01	→	SD01
溝状遺構 02	→	SD02
配石 01	→	SS01
配石 02	→	SS02
配石 03	→	SS03
焼土 01	→	SL02
土器集中区 01	→	SU02
土器集中区 02	→	SU03
※ピットSP01～SP36　→ 遺構個別番号の変更なし		

6　遺構挿図中に用いたスクリーントーンのうち、■は遺物を示し、■は焼土または粘土をそれぞれ示す。また遺物のドットは●が土器、■が土製品、○が石製品、△が鉄製品、☆が銅製品を示し、番号はそれぞれ遺物番号と対応している。出土遺物分布図についても同様である。

7　遺物挿図中、土器類の断面図において黒く塗りつぶしたものは須恵器、スクリーントーンは灰釉陶器を示す。また土器類の器面に用いたスクリーントーンは施釉、黒色処理、赤色塗彩された範囲を示す。

8　遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高を示す。

9　土器観察表中および土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』1990年度版による。

例　　言

1　本書は山梨県南都留郡富士河口湖町河口地内に所在する滝沢遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は一般国道 137 号吉田河口湖バイパス道路事業に伴う事前調査であり、山梨県県土整備部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。

3　発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体　　山梨県教育委員会
調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　平成 23 年度　小林健二（主査・文化財主事）・永田亮一（主任・文化財主事）
　　平成 25 年度　永田亮一（主任・文化財主事）・御山亮済（文化財主事）
整理作業　　平成 23 年度　小林健二（主査・文化財主事）・永田亮一（主任・文化財主事）
　　平成 25 年度　永田亮一（主任・文化財主事）・御山亮済（文化財主事）
　　平成 26 年度　御山亮済（文化財主事）

4　発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

平成 23 年度　発掘調査　10 月 4 日～ 12 月 5 日
　　基礎的整理作業　12 月 16 日～ 3 月 26 日
平成 25 年度　発掘調査　9 月 3 日～ 12 月 6 日
　　基礎的整理作業　1 月 8 日～ 3 月 28 日
平成 26 年度　本格的整理作業　5 月 12 日～ 3 月 20 日

5　本書の執筆・編集は御山が行った。なお、自然科学分析（放射性炭素年代測定・AMS 年代測定・微細物分析・炭化材種同定）についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告原稿を加筆修正して第 4 章に掲載した。文責はすべて御山が負うものである。

6　遺構写真・調査風景写真は平成 23 年度分を小林が、平成 25 年度分を御山および永田が撮影した。

7　報告書掲載遺物の写真は御山が撮影した。

8　発掘調査における世界測地系座標に基づく基準杭・グリッド杭設定・標高杭設定については、平成 23 年度は株式会社イビソク、平成 25 年度は株式会社ケイ・データエンジニアにそれぞれ委託した。

9　鳥瞰写真等航空写真撮影及び写真測量図化については、株式会社テクノ・プランニングに委託した。

10　出土鉄製品の保存処理については、財団法人山梨文化財研究所に委託した。

11　本報告に関わる記録図面・写真・出土遺物等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

12　発掘調査及び整理作業においては次の方々・機関にご協力、ご教示を賜った。記して謝意を表す次第である（順不同、所属・敬称略）。

末木健、室伏徹、平野修、望月秀和、杉本悠樹、小沢美和子、甲斐国古代官衙研究会、河口地区公民館

発掘作業および整理作業参加者は以下のとおりである。

〔平成 23 年度〕発掘作業員　石川泰永、栗原礼子、駒谷発男、沢登淳子、鈴木俊夫、高山光子、外川昌宏、中村かつ子、萩原里江子、古屋生代、堀内駒雄、正木なつ子、山脇照良
　　整理作業員　栗原礼子、萩原里江子、正木なつ子
〔平成 25 年度〕発掘作業員　石倉千春、井出清春、上野美紀、大額照明、斧田文夫、笠井達也、梶原利明、梶原悠太、小林千尋、小林正彦、駒谷発男、鈴木俊夫、高田悦三、高橋美奈子、田中泉、椿孝二、外川昌宏、中村公夫、古屋正弘、堀内初、蒔田宗人、松井友宏、山脇照良、渡辺友永、渡辺めぐみ
　　整理作業員　石坂恵理、猪股順子、垣内律子、梶原初美、佐藤あけみ、保坂理恵子
〔平成 26 年度〕整理作業員　新谷和美、石坂恵理、猪股順子、梶原初美、斉藤律子、清水真弓、新津多恵

目　　次

あらまし
序文
凡例・例言

第１章　調査の経緯・経過
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・　1
　第２節　調査の目的と課題・・・・・・・・・・　1
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・　2
　第４節　調査にかかる事務手続き・・・・・・　3
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と地理的環境・・・・・・　4
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・　4
第３章　調査の方法と成果
　第１節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・　7
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・　7
　第３節　発見された遺構と遺物・・・・・・・　7
　　第１項　古墳時代以前の遺構と遺物・・・・　11
　　第２項　奈良・平安時代の遺構と遺物・・・　12
　　第３項　中世以降の遺構と遺物・・・・・・　18
　　第４項　遺構外出土遺物・・・・・・・・・　20
第４章　滝沢遺跡の自然科学分析
　第１節　第３次調査における自然科学分析・・　84
　　第１項　放射性炭素年代測定・樹種同定・・　84
　　第２項　微細物分析・・・・・・・・・・・　86
　第２節　第４次調査における自然科学分析・・　91
　　第１項　微細物分析・・・・・・・・・・・　91
　　第２項　炭化材同定・・・・・・・・・・・　93
第５章　総括
　第１節　奈良・平安時代の滝沢遺跡・・・・・101
　　第１項　滝沢遺跡における
　　土器編年の再検討・・・101
　　第２項　集落の変遷について・・・・・・・102
　　第３項　出土遺物の検討・・・・・・・・・106
　　第４項　奈良・平安時代の集落像・・・・・108
　第２節　滝沢遺跡出土の
　　受け口状口縁甕について・・・108

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・　6
第 2 図　滝沢遺跡遺構配置図およびグリッド
　配置図・・・・・・・・・・・・・・・・　8
第 3 図　滝沢遺跡調査区位置図および
　土層観測地点・・・・・・・・・・・・　9
第 4 図　滝沢遺跡Ⅵ区基本土層図・・・・・・　10
第 5 図　滝沢遺跡Ⅵ区遺構配置図・・・・ 23 ～ 24
第 6 図　配石 SS03 平面図・見透図、土器集
　中 SU01 平面図・・・・・・・・・・・　25
第 7 図　土器集中 SU02・SU03 平面図・・・・　26
第 8 図　竪穴建物跡 SI01 平面図･遺物分布図･　27
第 9 図　竪穴建物跡 SI01 カマド平面図、
　SI02・SI03 平面図・・・・・・・・・　28
第 10 図　竪穴建物跡 SI02・SI03 遺物分布図、
　SI03 カマド平面図・・・・・・・・・　29
第 11 図　竪穴建物跡 SI04 平面図･遺物分布図･
　カマド土器出土状況・・・・・・・・　30
第 12 図　竪穴建物跡 SI05 平面図･遺物分布図･　31
第 13 図　竪穴建物跡 SI05 カマド a･b 平面図･　32
第 14 図　竪穴建物跡 SI06 平面図･遺物分布図･　33
第 15 図　竪穴建物跡 SI07 平面図･遺物分布図･　34
第 16 図　竪穴建物跡 SI07 カマド・周辺礫散乱
　状況･平面図、北東隅土坑平面図･･･　35
第 17 図　竪穴建物跡 SI08 平面図･遺物分布図･　36
第 18 図　竪穴建物跡 SI08 カマド平面図、南西
　隅土坑平面図・・・・・・・・・・・　37
第 19 図　竪穴建物跡 SI09 炭化材検出状況・平
　面図・遺物分布図、南西隅配石遺構
　平面図・・・・・・・・・・・・・・・　38
第 20 図　竪穴建物跡 SI09 カマド礫散乱状況・
　平面図・土器出土状況・・・・・・・　39
第 21 図　竪穴建物跡 SI10 平面図･遺物分布図･　40
第 22 図　竪穴建物跡 SI10 カマド、配石 SS01・
　SS02、焼土 SL01・SL02 平面図・・・　41
第 23 図　掘立柱建物跡 SB01・SB02 平面図・・　42
第 24 図　ピット SP01 ～ SP36 平面図・・・・　43
第 25 図　土坑 SK01 ～ SK22 平面図・・・・・　44
第 26 図　土坑 SK23 ～ SK36、溝状遺構
　SD01・SD02 平面図・・・・・・・・　45

第 27 図　滝沢遺跡Ⅵ区遺構外遺物出土状況・・・・・・・・・・・・ 47 ～ 48
第 28 図　出土土器 (1) 配石 SS03, 土器集中 SU01・SU02・SU03・・・・・・・・ 49
第 29 図　出土土器 (2) 竪穴建物跡 SI01・SI02・SI03(1)・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 30 図　出土土器 (3) 竪穴建物跡 SI03(2)・SI04 (1)・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 31 図　出土土器 (4) 竪穴建物跡 SI04(2)・・・ 52
第 32 図　出土土器 (5) 竪穴建物跡 SI04(3)・SI05・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第 33 図　出土土器 (6) 竪穴建物跡 SI07(1)・・・ 54
第 34 図　出土土器 (7) 竪穴建物跡 SI07(2)・・・ 55
第 35 図　出土土器 (8) 竪穴建物跡 SI07(3)・SI08(1)・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 36 図　出土土器 (9) 竪穴建物跡 SI08(2)・SI09(1)・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 37 図　出土土器 (10) 竪穴建物跡 SI09 (2)・・ 58
第 38 図　出土土器 (11) 竪穴建物跡 SI09 (3)・・ 59
第 39 図　出土土器 (12) 竪穴建物跡 SI09 (4)・・ 60
第 40 図　出土土器 (13) 竪穴建物跡 SI09 (5)・・ 61
第 41 図　出土土器 (14) 竪穴建物跡 SI10 (1)・・ 62
第 42 図　出土土器 (15) 竪穴建物跡 SI10 (2)、配石 SS01・SS02、焼土 SL01・・・・ 63
第 43 図　出土土器 (16) 土坑・ピット・遺構外縄文土器・弥生土器・・・・・・・・ 64
第 44 図　出土土器 (17) 遺構外 古墳時代 (1)・・ 65
第 45 図　出土土器 (18) 遺構外 古墳時代 (2)、奈良・平安時代 (1)・・・・・・・・・ 66
第 46 図　出土土器 (19) 遺構外 奈良・平安時代 (2)・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第 47 図　出土土器 (20) 遺構外 奈良・平安時代 (3)・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第 48 図　出土土器 (21) 遺構外奈良・平安時代 (4)、墨書土器・・・・・・・・・・・ 69
第 49 図　出土土器 (22) 遺構外 刻書土器 (1)・・ 70
第 50 図　出土土器 (23) 遺構外 刻書土器 (2)、製塩土器、出土土製品・・・・・・・ 71
第 51 図　出土鉄製品・・・・・・・・・・・・ 72
第 52 図　出土石製品・・・・・・・・・・・・ 73
第 53 図　滝沢遺跡遺構変遷図 (1)・・・・・・・ 103
第 54 図　滝沢遺跡遺構変遷図 (2)・・・・・・・ 104
第 55 図　滝沢遺跡遺構変遷図 (3)・・・・・・・ 105
第 56 図　滝沢遺跡出土の朱墨硯・・・・・・・ 106
第 57 図　製塩土器出土グリッド・・・・・・・ 107

表目次

第 1 表　ピット観察表・・・・・・・・・・・・ 18
第 2 表　土坑観察表・・・・・・・・・・・・・ 19
第 3 表　土器観察表 (1)・・・・・・・・・・・ 74
第 4 表　土器観察表 (2)・・・・・・・・・・・ 75
第 5 表　土器観察表 (3)・・・・・・・・・・・ 76
第 6 表　土器観察表 (4)・・・・・・・・・・・ 77
第 7 表　土器観察表 (5)・・・・・・・・・・・ 78
第 8 表　土器観察表 (6)・・・・・・・・・・・ 79
第 9 表　土器観察表 (7)・・・・・・・・・・・ 80
第 10 表　土器観察表 (8)・・・・・・・・・・・ 81
第 11 表　土器観察表 (9)・・・・・・・・・・・ 82
第 12 表　土製品観察表・・・・・・・・・・・ 82
第 13 表　鉄製品観察表・・・・・・・・・・・ 83
第 14 表　石製品観察表・・・・・・・・・・・ 83
第 15 表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第 16 表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・ 86
第 17 表　微細物分析結果・・・・・・・・・・ 87
第 18 表　微細物分析結果・・・・・・・・・・ 92
第 19 表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・ 94
第 20 表　甲斐型土器による編年対照表・・・・ 102

第１章　調査の経緯・経過

第１節　調査に至る経緯

山梨県県土整備部が実施している南都留郡富士河口湖町河口地区内における一般国道137号河口2期バイパス及び吉田河口湖バイパス建設工事に係り、平成14年度以降、山梨県埋蔵文化財センターが調査を継続してきた。上記道路建設は河口湖周辺地域および富士吉田市内の渋滞緩和及び富士山噴火や地震等災害時の避難経路の確保を目的としている。河口2期バイパスは国道137号河口湖大橋北詰以北を東に迂回する延長3.2kmの2車線道路で、平成22(2010)年12月16日に供用開始となっている。一方、吉田河口湖バイパスは、富士吉田市新倉から富士河口湖町河口までの延長3.0kmの2車線道路で、途中、新倉トンネル(2,476m)を抜けて富士河口湖町河口地内にて河口2期バイパスに接続する。

河口2期バイパス建設工事に先立ち、平成14年度には河口湖大橋北側の延長約2.5km部分に対して試掘調査が実施され、滝沢遺跡の範囲追加及び塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の4遺跡が確認され、翌平成15年度～16年度にかけて塚越遺跡・炭焼遺跡・井坪遺跡の発掘調査を実施し、平成17(2005)年3月には発掘調査報告書を刊行している。

滝沢遺跡に関しては、平成17年5月から11月まで第1次発掘調査が実施されている。その間、河口2期バイパス北端部では新規の埋蔵文化財包蔵地である疱橋遺跡が発見され、建設工事に伴い破壊される範囲に対して発掘調査が実施された。翌平成18(2006)年5月からは前年2月に行った試掘調査により新規発見された谷抜遺跡の発掘調査が実施され、翌平成19(2007)年8月には滝沢遺跡・疱橋遺跡・谷抜遺跡の発掘調査報告書が刊行された。

一方、本報告に関わる吉田河口湖バイパス建設に伴い、平成20(2008)年12月に河口2期バイパス建設用地のうち未買収であった区域と、河口湖側坑口からバイパス本線区間および本線に北接して建設されるトンネルに関連する電気施設予定地の約5,900㎡に対して試掘調査を実施した。その結果、試掘調査対象地全域に及び縄文時代から平安時代にかけての遺物包含層と古墳時代から平安時代の文化層(2層)1面が確認され、約5,900㎡の発掘調査が実施されることとなった。

以上の経過を受けて、県教育委員会学術文化財課および県土整備部富士東部建設事務所・吉田支所にて協議を行い、平成21(2009)年度以降に発掘調査を河口2期バイパス建設用地の未買収区域およびバイパス本線部分と電気施設部分の2回に分けて実施することとなり、平成21年には第2次発掘調査が実施された。なお、調査区域は、河口2期バイパスに伴う調査にて付されたⅠ～Ⅲ区に連続して、河口2期バイパス建設用地で未買収区域をⅣ区、バイパス本線部分をⅤ区、電気施設部分をⅥ区とし、第２次調査はⅣ区とⅤ区、第３・４次調査はⅥ区に該当する。また、Ⅵ区は工事工程の関係より、さらに2年次に分けて発掘調査を実施することとなり、平成23（2011）年の第3次調査区域をⅥa区、平成25（2013）年の第4次調査区域をⅥb区と設定している。なお、滝沢遺跡第２次発掘調査の報告書は平成24（2012）年3月に刊行している。

第２節　調査の目的と課題

滝沢遺跡では、これまでに約6,000㎡の範囲が発掘調査され、平安時代の竪穴建物跡のほか多数の遺構が発見されている。また、出土する土器のなかには墨書や刻書が施されるものも多くみられる。滝沢遺跡の立地する富士河口湖町河口地区には、東海道から分岐して甲斐国府へ通じる古代官道の「御坂路(・甲斐路)」が通っていたとされ、『延喜式』においては、古代官道に設置される「駅」の一つで、甲斐国に設置された三駅のうちの一つ「河口駅」が所在したと推定されている。これまでの当該地域における調査では、河口駅に関わる遺構及び遺物は出土しておらず、その実態は不明な点が多い。しかし、河口2期バイパス関連5遺跡では、縄文時代から近世に至るまでの多様な遺構や遺物が発見されており、特に信州系の弥生土器や東海系・武蔵型の土器が出土していることから、古来より交通の要衝であったことが示唆されている。平成25年8月には富士河口湖町教育委員会が

実施した「鯉ノ水遺跡」において古代官道の道路遺構が検出され、山梨県内における古代交通の研究に一石を投じたところである。

以上を踏まえて、縄文時代から中世以降にかけて連綿と検出される遺構・遺物の状況を記録保存するとともに、第1次及び第2次調査により発見した平安時代における集落の広がりや変遷を明らかにし、古代甲斐国と他地域を結ぶ交通拠点にある集落の一端を解明することを課題とした。

第３節　調査の経過

第3次調査は738㎡の範囲に対して平成23年度に実施した。発掘調査に先立ち、平成23年8月1日に県土整備部富士東部建設事務所・吉田支所および施工業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターによる現地協議を行い、調査の着手時期および排土置場、プレハブの設置場所や駐車場等について確認を行った。同年10月4日にはプレハブの設置および発掘機材等の搬入を行い、同11日に0.7㎥のバックホーを搬入した。翌12日に0.7㎥のバックホーを用いて表土剥ぎを開始し、同18日に終了した。翌19日には測量基準杭およびグリッド杭、ベンチマークを設置した。重機による表土剥ぎを開始した12日からは人力による遺構確認、遺構精査等掘削作業を実施し、必要に応じて遺構・遺物の測量を行った。調査により生じた排土はベルトコンベアーおよびクローラーダンプを用いて排出し、排土置場の整地には0.25㎥のバックホーを使用した。同年11月23日には、遺構が掘りあがった状態でラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影および測量を実施した。12月1日から12月5日に調査区の埋め戻しを実施し、同5日までにプレハブ、発掘機材等を撤収して調査を終了した。

調査期間は平成23(2011)年10月4日～同年12月5日で実働42日、調査員のべ84人、作業員のべ253.5人、0.7バックホーのべ7.5台、0.25㎥バックホーのべ55台、クローラーダンプ2tのべ55台を要した。

第４次調査は、Ⅵa区に南接する1,328㎡の範囲に対して発掘調査を実施した。発掘調査に先立ち、平成25年6月4日に県土整備部富士東部建設事務所・吉田支所および施工業者、学術文化財課、埋蔵文化財センターによる現地協議を行い、調査の着手時期および掘削深度、排土置場、プレハブの設置場所や駐車場等について確認を行った。同年9月2日にはプレハブ等の設置および発掘機材等の搬入を行い、翌3日に表土剥ぎに使用する0.7㎥バックホーを搬入した。同日には表土剥ぎを開始して17日に終了した。

9月4日の表土剥ぎにおいて、調査対象地北端部に大規模な攪乱を確認した。Ⅵa区調査以降に掘削されており、無断掘削にあたる可能性があったため、富士東部建設事務所・吉田支所および学術文化財課に報告を行い、翌5日に現地にて協議を行うこととなった。協議において、工事担当者がⅥa調査終了後の平成24年4月に富士東部建設事務所・吉田支所に工事計画書を提出し、了解を得たうえで7月に調査終了区域内においてトンネル工事により生じたズリ石を埋め立てた際、調査終了範囲を誤って未調査区域に及んで掘削を行ったことが判明した。原因として、平成24年度に富士東部建設事務所・吉田支所の担当者が異動となり、その際に引継ぎが十分になされておらず、Ⅵa区とⅥb区の境界を再度確認しないまま工事計画書に了解してしまったことが挙げられる。また、埋蔵文化財センターもⅥb区調査区に隣接する区域の掘削に対して立会等の対応を行っておらず、これらの人為的要因により遺跡が破壊されてしまい、大いに反省すべきである。協議の結果、発掘調査が終了した段階で無断掘削範囲に対して掘削深度を確認する調査を実施し、遺構の破壊状況を確認することとなった。

9月18、19日の2日間にわたり測量基準杭およびグリッド杭、ベンチマークを設置した。同10日からは人力による遺構確認、遺構精査等掘削作業を実施し、必要に応じて遺構・遺物の測量を行った。調査により生じた排土はベルトコンベアーおよびクローラーダンプを用いて排出し、排土置場の整地には0.25㎥のバックホーを使用した。同年11月26日には、遺構が掘りあがった状態でラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影および測量を実施した。その後、個別の遺構に対する測量および写真撮影等を実施した。12月6日には無断掘削範囲に対する確認調査に立会い、調査区北部の約50㎡について、遺構確認面より4m以上が掘削されているのを確認し、遺構が確実に破壊されていると判断したため、調査を終了した。この無断掘削により破壊されたと思われる遺構は、第3次発掘調査にて検出しⅥb区域にまで及んでいる竪穴建物跡SI01(1号住居)の南半分と第4次発掘調査に

て検出した竪穴建物跡SI04 (竪穴建物跡01)の北東隅約1㎡である((　)内の遺構名は調査当時に付した旧遺構個別番号)。同日までにプレハブ、発掘機材等を撤収して調査を終了した。

調査期間は平成25(2013)年9月3日～12月6日で実働116日、調査員のべ115人、作業員のべ760.5人、0.7㎥バックホーのべ10台、0.25㎥バックホーのべ96台、クローラーダンプのべ96台を要した。

また、第4次発掘調査の間、埋蔵文化財センターの普及活動の一環として平成25年10月27日に発掘体験セミナーを開催し、約30名の参加があった。また、平成26年3月15日には下半期遺跡調査発表会が開催され発掘調査の速報を行った。このほか、県立考古博物館において「山梨の遺跡展2013」が県立考古博物館と埋蔵文化財センターの共催で同年3月8日から4月6日まで開催され、滝沢遺跡第4次調査の出土品を出品した。

室内調査においては、第3次調査が終了した平成23年12月より基礎的整理を実施し、本格的整理は第4次調査の終了を待って行うこととした。第4次調査の基礎的整理は平成26年1月8日～3月28日の間に行われ、本格的整理を翌年度5月12日より開始し、第3次調査とともに遺物の復元、実測、拓本、遺構・遺物実測図のトレース、版組み及び遺物の写真撮影を行った。また、整理作業の段階において、自然科学分析として第3次調査では炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定、土壌微細物分析を、第4次調査では土壌微細物分析および焼失竪穴建物跡より出土した炭化材種同定の業務委託を実施した。

第４節　調査にかかる事務手続き

滝沢遺跡第3・4次調査にあたっては、文化財保護法に基づく報告・通知の他、発掘調査の成果に係る報告を行った。それらの事務手続きは以下のとおりである。

〔平成23年度〕

・平成23年10月4日　文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出し、山梨県教育委員会教育長への通知を依頼（教埋文第608号：埋蔵文化財発掘調査の報告について）

・平成23年12月5日　文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、富士吉田警察署長への通知を依頼（教埋文第848号：埋蔵文化財発見の通知について）

・平成23年12月8日　発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第867号：吉田河口湖バイパス建設に伴う発掘調査結果について）

・平成24年3月15日　発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第1137号：実績報告の提出について）

〔平成25年度〕

・平成25年9月6日　文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出し、山梨県教育委員会教育長への通知を依頼（教埋文第362号：埋蔵文化財発掘調査の報告について）

・平成25年12月11日　文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教育委員会教育長へ提出し、富士吉田警察署長への通知を依頼（教埋文第567号：埋蔵文化財の発見について）

・平成25年12月17日　発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文587号：吉田河口湖バイパス建設事業に伴う滝沢遺跡発掘調査の終了について）

・平成26年3月14日　発掘調査実績報告書を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第758号：実績報告の提出について）

〔平成26年度〕

・平成27年３月末　本格的整理作業の実績報告を山梨県教育委員会教育長へ提出（予定）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

富士河口湖町は本県中央部に位置する甲府盆地の南側の外縁に位置し、富士五湖のうち西から本栖湖、精進湖、西湖、河口湖の四湖を擁する。同町河口地区は、河口湖北岸から東岸にかけてそびえる御坂山地より河口湖に流れ込む６本の小規模河川が形成する扇状地に所在する。滝沢遺跡は御坂山地の一つである霜山の西麓、河口湖の北東約 1km の地点にある微傾斜地に位置しており、標高約 850m を測る。

富士河口湖町河口地区東側の山際には、平成 22(2010) 年に供用開始となった国道 137 号河口２期バイパスが通り、河口湖東において国道 137 号旧道と合流し、南下する。その先は富士吉田市に抜け、同市上吉田の富士山吉田口登山道の始点となる国道 139 号富士みちへ接続する。一方、国道 137 号を北上すると御坂峠を越えて笛吹市御坂町へ入り、一宮町坪井にて山梨県の大動脈である国道 20 号へと通じている。

富士河口湖町は、北から東に甲府盆地南辺をなす御坂山地、西に本栖湖とその南岸にある竜ヶ岳、南に富士山とその北麓に広がる富士山原生林と富士裾野に囲繞されている。山梨県は太平洋側気候区の中の中央高原型に分類され、その中で富士河口湖町は多雨冷涼区に属し、年間降水量では甲府市より 500mm 以上も多い。地質としては、御坂山地は石英閃緑岩類が貫入する泥岩や火山岩を主とするが、河口湖から三ツ峠山地域にかけては富士川層群に相当する河口湖累層が御坂山地の一部を構成しており、当地もこれに該当する。河口湖累層は火山岩礫を含む地層で、さらに三ツ峠礫岩と白滝火山礫凝灰岩に細分される (松田 2007)。

第２節　歴史的環境

山梨県内の遺跡分布を概観すると、縄文時代の遺跡数が多く中核をなし、次いで平安時代、古墳時代の順に遺跡が多い。滝沢遺跡のある富士河口湖町が属する南都留郡においては、縄文時代及び平安時代の遺跡数が多い傾向は同様であるが、古墳時代の遺跡は全体の傾向とは逆行して少ない。河口湖周辺地域に目を向けると、河口湖南畔では湖畔沿いに遺跡の分布がみられ、北畔においては河口湖へそそぐ６河川が集中する河口地区の山側に多く遺跡が分布する。河口地区にある河口湖畔域に遺跡が確認されないのは、現在より河口湖の水位が高く、湖岸が北側まで浸食していたためである。

縄文時代以前　河口湖地域において旧石器時代の痕跡は認められず、生活の痕跡が確認されるのは縄文時代になってからである。縄文時代には、河口湖南の湖岸沿い及び河口地区東側の山際に遺跡が分布する。最も古いものでは、谷抜遺跡において縄文時代早期の炉穴や柱穴といった遺構が発見されている。谷抜遺跡の近隣に所在する塚越遺跡では、縄文時代後期・晩期の敷石住居跡・竪穴住居跡が見つかったほか、井坪遺跡や疱橋遺跡、滝沢遺跡の過去の調査においても縄文時代の遺物を包含する層がみられる。

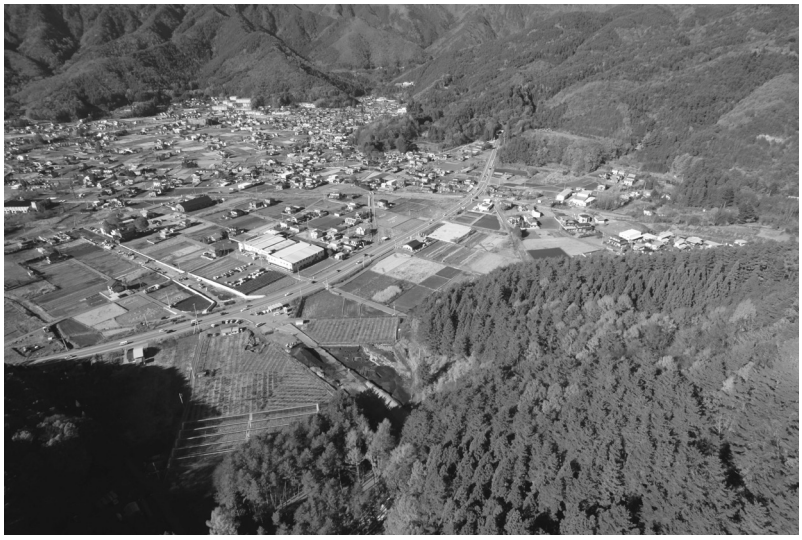
弥生時代　弥生時代の遺跡分布は縄文時代に比べてやや希薄になり、山梨県内の遺跡分布傾向と同調している。しかし、河口湖西部の湖上に浮かぶ昭和 20 年代後半から 40 年代にかけて発掘調査された鵜の島遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期を中心とした遺跡で、学史的にも注目される遺跡である。また、山梨県全域で痕跡が希薄となる弥生時代中期では、塚越遺跡において土坑や焼土跡が検出されているほか、滝沢遺跡Ⅳ区の調査では、県内最古とみられる方形周溝墓が見つかっている。

古墳時代　河口湖周辺地域では、これまでの調査において古墳時代の集落跡は発見されていないものの、各時期に帰属する土器が出土しており、当該地域に古墳文化が流入していたことは相違ない。甲府盆地南縁に所在する中道古墳群の存在や富士川西麓にあるルート上に古墳時代の遺跡が点在することから、甲府盆地への古墳文化の流入はこの経路をたどったとされるが、滝沢遺跡にみられる東海系の土器や畿内系の叩き甕の存在は、古代官道「御坂路 (甲斐路)」整備以前の交通路の存在を想定させる。

古代　改新の詔のもと地方行政制度の整備が行われ、その一環として駅伝制などの交通制度が定められる。『延喜式』「巻 28 兵部省諸国駅伝馬条」には甲斐国に三つの駅 (甲斐国三駅) が置かれたことが記されており、そのうち、「河口駅」が富士河口湖町河口地区に設置されたと推定されている。発掘調査では、貞観七 (865) 年に富士山噴火の鎮火のため勧請された河口浅間神社の西側に所在する西川遺跡において、8 世紀中頃から 10 世紀初頭にかけての土器が多数出土している。また、その中には硯への二次使用の痕跡がみられる土器や製塩土器、墨書土器といった遺物の出土も少量みられる。さらに、西川遺跡は旧鎌倉往還に隣接した場所にある。同様に、滝沢遺跡でも大量の墨書・刻書土器が出土しているほか、主軸を同様にした竪穴建物配置など河口湖北岸地域の広い範囲において知識層の介在がみられ、それは河口地区に設置されたとされる古代官道「御坂路 (甲斐路)」及び河口駅の影響とみて大過ないであろう。この官道は、東海道横走駅 (現在の静岡県御殿場市付近) で東海道より分岐し、水市駅、河口駅、加吉駅を経由して甲斐国府 (笛吹市春日居町国府または同市御坂町国衙付近) に接続したと考えられている。

中世以降　古代官道は中世でも鎌倉往還の名で機能しており、東海道を経由して甲斐国へ文物や文化、信仰などの往来の場となっていた。特に中世後半から江戸時代にかけて流行した富士講は、河口集落の盛衰に大きく関わる。現在おこなわれる富士講の御師でよく知られているのは吉田御師であるが、一時は河口御師が隆盛していた。富士講が流行して吉田御師が隆盛すると河口御師は衰退していった。

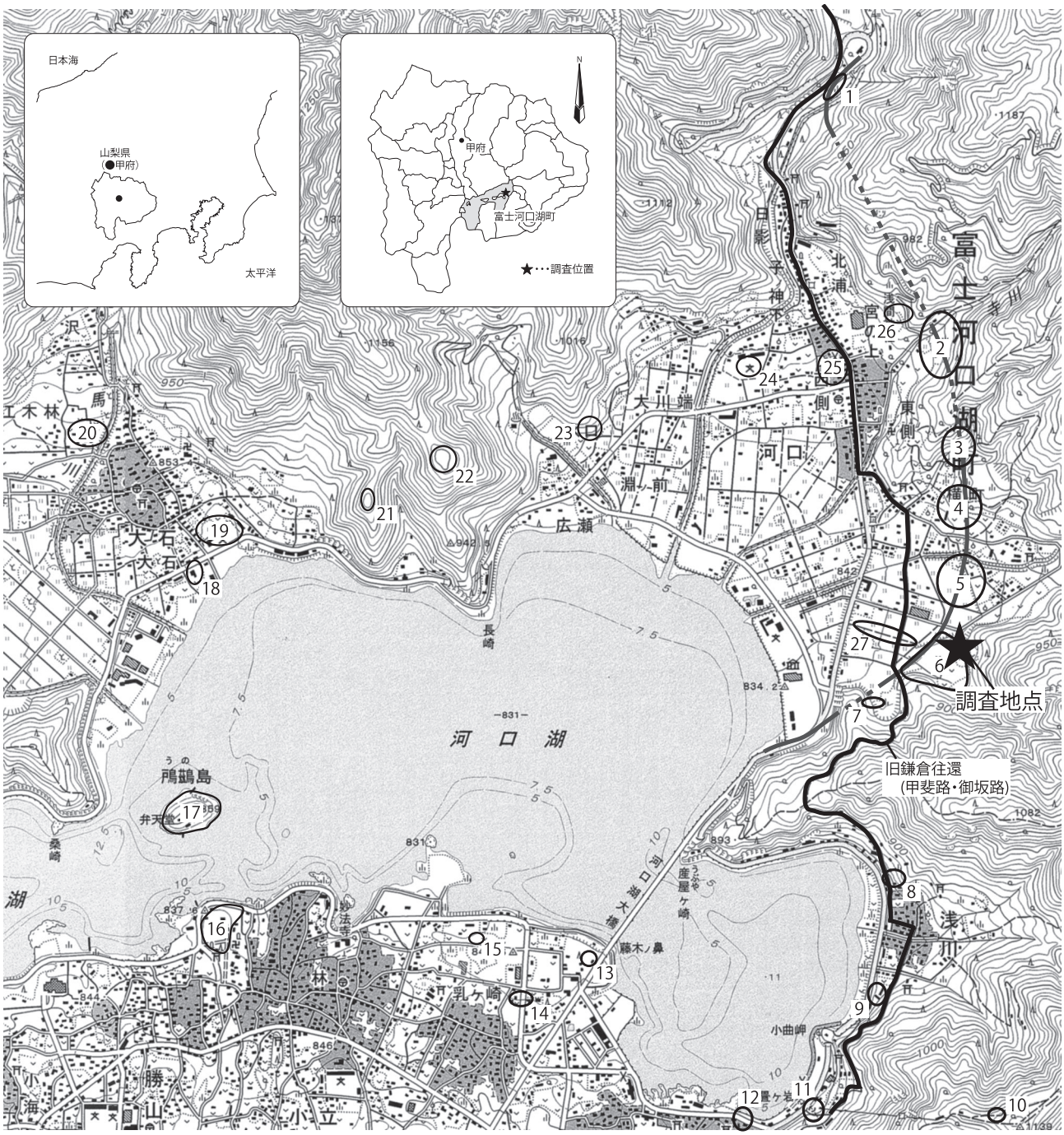
近代では畑作を中心として、養蚕業が特に大石村でさかんに行われた。戦後には交通路の整備や河口湖北畔地域の開拓事業が行われ、現在では富士五湖周辺及び富士山を中心とした観光業が特に発達している。



滝沢遺跡と河口集落（東から）

【参考文献】

角川日本地名大辞典編纂委員会 1984『角川日本地名大辞典 19　山梨県』角川書店
富士吉田市史編纂委員会 1998『富士吉田市史　史料編』第一巻　自然　考古
松田時彦 2007「富士山の基盤の地質と地史」『富士火山』山梨県環境科学研究所



1.疱橋遺跡(縄文～近世・散布地)
2.谷抜遺跡(縄文・平安～近世・散布地)
3.塚越遺跡(縄文・弥生・近世・集落跡)
4.炭焼遺跡(古墳・平安～近世・散布地)
5.井坪遺跡(縄文・平安・散布地)
6.滝沢遺跡(縄文～平安・集落跡)
7.追坂遺跡(縄文・散布地)
8.老坂遺跡(縄文・散布地)
9.宮の下遺跡(縄文～古墳・散布地)
10.天女山烽火台(中世・城館跡)
11.東電放水路遺跡(縄文・散布地)
12.船津浜中村遺跡(縄文・散布地)
13.梨宮公園遺跡(縄文・散布地)
14.鳥浜遺跡(弥生・散布地)
15.宝司塚遺跡(弥生・散布地)
16.宮里遺跡(縄文・城館跡)
17.鵜の島遺跡(縄文～古墳・散布地)
18.大石鐘つき戸(中世・城館跡)
19.大石遺跡(縄文・散布地)
20.水木原遺跡(縄文・散布地)
21.大石の城山(中世・城館跡)
22.広瀬の城古山(中世・城館跡)
23.金山遺跡(縄文・散布地)
24.大築地遺跡(縄文・散布地)
25.西川遺跡(縄文・奈良・平安・散布地)
26.宮ノ上遺跡(平安～近世・散布地)
27.鯉ノ水遺跡(古墳～平安・散布地)

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第３章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

発掘区とグリッドの設定　調査は試掘調査にて得られたデータを基に、表土を遺物包含層まで重機にて掘削した。表土の掘削が終了した段階で、調査区内に一辺 5m 間隔でグリッド杭を設置した。グリッドは世界測地系座標に即して設定し、グリッド名は既掘の滝沢遺跡Ⅰ区～Ⅴ区から連続して、調査区の南北方向はアラビア数字にて南から１・２・３・・・、東西方向はアルファベット大文字にて西から A・B・C・・・(Z の次は AA・AB・・・) の順に記号を与え、その交点を A-1 区のようにグリッド名を付した。調査区域の東西の最大範囲を擁するグリッドの座標値は、Y=25,160.000m(西端)、Y=25,240.000m(東端) で、南北の最大範囲を擁するグリッドの座標値は、X=-53,165.000m(北端)、X=-53,230.000m(南端) である。標高は調査区外の 4 ヶ所に任意でベンチマークを設置した。それぞれ、AS-22 区では H=847.400m、BA-16 区で H=851.300m、AP-21 区で H=847.100m、AZ-16 区で H=850.800m を測る。

発掘作業　発掘調査は、表土を 0.7㎥のバックホーにて掘削し、その後、人力にて残りの表土および包含層を掘削して遺構の精査を行った。確認した遺構については、竪穴建物跡は四分法を採用し、土坑・ピット・焼土は半裁して土層の確認を行い、図化・写真撮影等の記録をしたのち完掘した。出土した遺物については、遺構外より出土した遺物は、一辺 5cm 以上のものはドットを落として取り上げ、それ以下のものはグリッド毎に一括して取り上げた。

写真撮影　空中写真による全景写真撮影は、遺構がすべて掘りあがった状態で撮影を行い、上方から撮影したほか、御坂峠や河口湖に向かって撮影することで、地理的環境・歴史的景観における立地を表現することを目的とした。部分写真は、遺物の出土状況を示すもしくは、遺構の形成や埋没状況がよくわかる状態に掘りあがった状態で写真撮影を実施した。そのほか、遺構を特徴づける状態であれば、前述の状態以外でも写真撮影を実施した。遺構及び遺物の写真撮影には 35mm 一眼レフカメラ及び小型デジタルカメラを使用した。

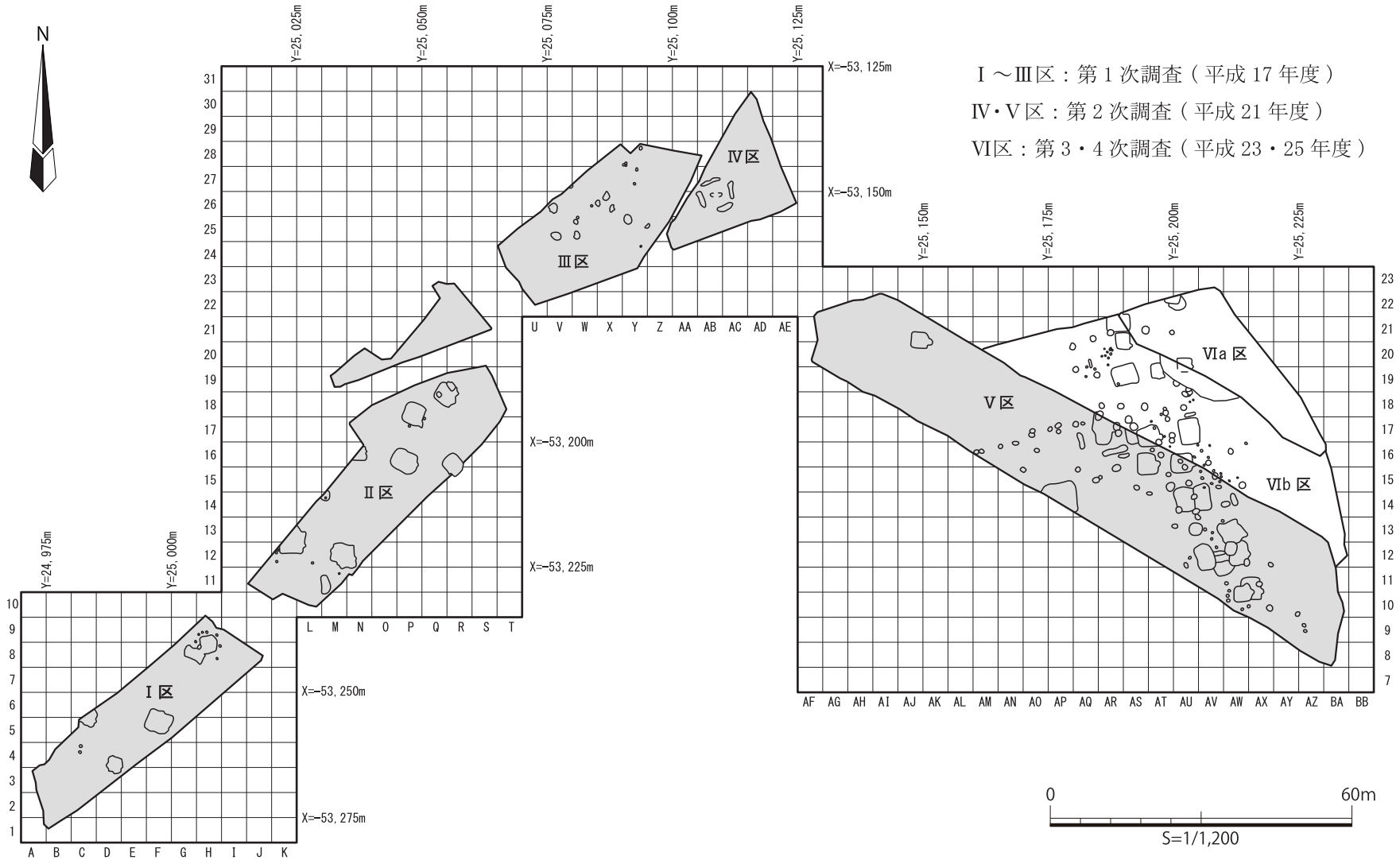
第２節　基本層序

Ⅵ区調査時にＡ～Ｅの５か所において土層の確認を行った。調査地は東から西へ傾斜する地形となっているが、調査区東の霜山から北側に張り出す尾根の方向に向かって土層は厚くなる。

Ⅵ区調査では 30 層の細別層が確認された。調査区の山側に該当する B・C 地点では土層の堆積は浅く、VI1・VI2 層の盛土 (・表土) より下層は黒色土が堆積する (VI7・VI8・VI11 層)、C 地点では VI11 層より下層は地山となるが、B 地点は黒色土より下層に褐色がかった土がみられるようになる。調査区における標高の低い地点に当たる A・D・E 各地点においても同様の黒色土→褐色土の傾向がみられ、各堆積層は薄く平面的に安定した層の形成をみる。D 地点では地表面下約 1.5m にみられる VI17 層はやや厚く堆積しており、古墳時代及び平安時代の土器を多く包含するほか、縄文土器と弥生土器の出土も少量みられる。また、E 地点における VI24 層においても同様の傾向がみられる。遺構は VI8・VI30 層のような黒色土の地山を掘り込んでいる。ただし、調査区中央部に位置する一部遺構については、遺構確認面と掘り込みの判別が困難であったため、判別可能な土層まで掘削して遺構確認を行っている。

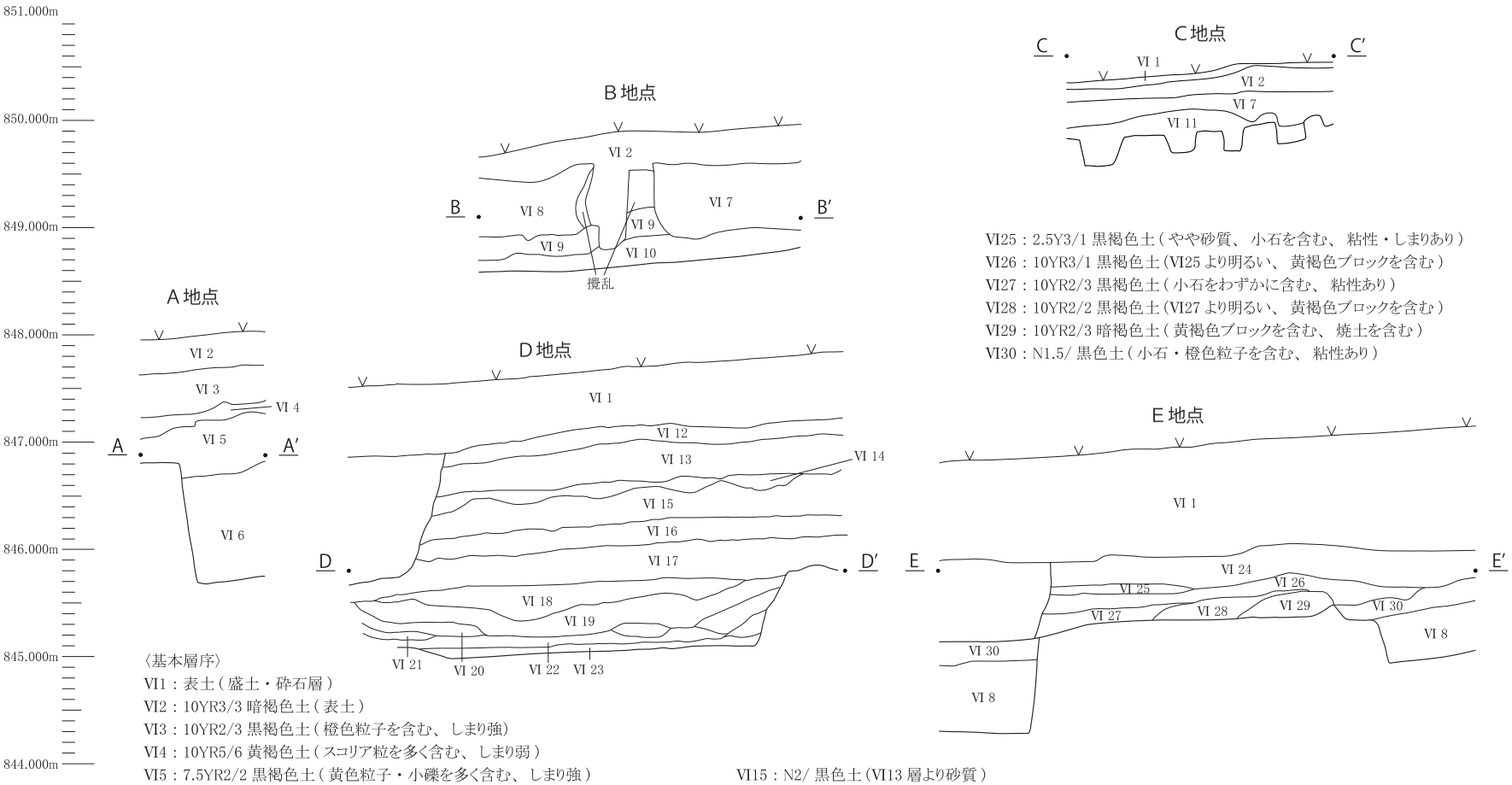
第３節　発見された遺構と遺物

第３次及び第４次調査では、弥生時代後期～中世以降にかけての遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期および平安時代の配石が合わせて３基、古墳時代前期の土器集中３ヶ所、奈良時代～平安時代の竪穴建物跡 10 軒、平安時代の焼土２基、中世以降の掘立柱建物跡２軒、ピット 28 基、土坑 32 基、溝状遺構２基である。



第２図　滝沢遺跡遺構配置図及びグリッド配置図

第３図　滝沢遺跡調査区位置図及び土層観察地点



VI25：2.5Y3/1 黒褐色土（やや砂質、小石を含む、粘性・しまりあり）
VI26：10YR3/1 黒褐色土（VI25 より明るい、黄褐色ブロックを含む）
VI27：10YR2/3 黒褐色土（小石をわずかに含む、粘性あり）
VI28：10YR2/2 黒褐色土（VI27 より明るい、黄褐色ブロックを含む）
VI29：10YR2/3 暗褐色土（黄褐色ブロックを含む、焼土を含む）
VI30：N1.5/ 黒色土（小石・橙色粒子を含む、粘性あり）

〈基本層序〉
VI1：表土（盛土・砕石層）
VI2：10YR3/3 暗褐色土（表土）
VI3：10YR2/3 黒褐色土（橙色粒子を含む、しまり強）
VI4：10YR5/6 黄褐色土（スコリア粒を多く含む、しまり弱）
VI5：7.5YR2/2 黒褐色土（黄色粒子・小礫を多く含む、しまり強）
VI6：N1.5/（橙色粒子を多く含む、粘性・しまり強）
VI7：N2/ 黒色土（橙色粒子を含む、しまり強）
VI8：N1.5/ 黒色土（橙色粒子を含む、粘性・しまり強）
VI9：10YR3/4 暗褐色土（橙色粒子を含む、粘性・しまり強）
VI10：10YR5/8 黄褐色土（ローム層）
VI11：10YR1.7/1 黒色土（しまり強）
VI12：N3/ 暗灰色土（橙色粒子を含む、しまり強）
VI13：N1.5/ 黒色土（小石・橙色粒子を多く含む）
VI14：10YR5/4 にぶい黄褐色土（小石・橙色粒子を多く含む）
VI15：N2/ 黒色土（VI13 層より砂質）
VI16：5B1.7/1 青黒色土（小石を含む、粘性・しまり強）
VI17：5B2/1 青黒色土（VI16 より明るい）
VI18：5PB1.7/1 青黒色土（小石をわずかに含む、粘性あり）
VI19：N3/ 暗灰色土（φ5 ～ 30mm の礫を多く含む、スコリア粒をわずかに含む）
VI20：N3/ 暗灰色土（VI19 より砂質）
VI21：2.5Y4/2 暗灰黄色（砂質・粘性あり）
VI22：2.5Y2/1 黒色土（VI19 より粘性あり）
VI23：10Y2/1 黒色土（黄褐色ブロックを含む、粘性・しまり強）
VI24：7.5Y2/1 黒色土（小石・橙色粒子を多く含む、しまり強）

第４図　滝沢遺跡Ⅵ区基本土層図

第 1 項　古墳時代以前の遺構と遺物

(1) 配石

SS03(第 6 図、第 28 図)

位置・調査年次　AS-17 区に所在。第 4 次（VIb 区）調査にて検出した。

遺構概要　東西 1.1m、南北 2.1m の範囲において礫の集積及び焼土がみられる。礫と焼土の配置に規則性は見られないが、焼土中に礫が入り込むことから同一の遺構である。

遺物出土状況　集積された礫の間もしくは礫直下より遺物の出土がみられる。遺物の出土量は少ないが、個々の破片は比較的大きい。配石及び焼土の形成とともに投棄されたものと思われる。

出土遺物 (第 28 図－ 1・2)　1 は単純口縁甕でやや稜を持つ肩部を呈する。2 は甕の肩部破片である。内外面ともに細かなハケメによる調整が施される。

時期　弥生時代後期～古墳時代前期

(2) 土器集中

SU01(第 6 図、第 28 図)

位置・調査年次　AS-22 区に所在。第 3 次（VIa 区）調査にて検出した。

遺構概要　東西 1.0m、南北 0.5m の範囲に土器片が集中する。土器集中の範囲が調査区外に出るため、より広範囲に破片が散布している可能性がある。SU01 より出土した土器片はすべて 1 個体に由来するものである。掘り込みは確認できなかった。

遺物出土状況　一辺約 5 ～ 10cm 程度の土器片が多く、一部約 20cm 大の破片が押しつぶされたような状況で出土している。破片の状態は非常に良好で、流れ込みによる遺物の混入も見られないことから、この場所に投棄または埋没した状態を保っていると思われる。

出土遺物 (第 28 図－ 3)　3 は古墳時代前期に帰属する受け口状口縁甕である。口縁端部には刻みを施さず、外面はナナメハケのちタテハケにより調整され、内面はヘラにより調整されている。体部下半には煤の付着がみられる。受け口状口縁甕は近江に出自を持つ土器であり、また他地域においても複数の地域間における交流を示す土器である。

時期　古墳時代前期

SU02(第 7 図、第 28 図)

位置・調査年次　AS-19・20 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 1.15m、南北 2.0m の範囲に土器が集中する。土器が散布する範囲の北側は SI08 により切られている。礫や焼土等の検出はなく掘り込みも確認できなかった。

遺物出土状況　出土した土器片の大半は一辺約 3cm 程度の小片である。土器片は厚く堆積していたが、破片が小さく、土器集中と認識するまでは出土する毎に取り上げを行っていたため、図では 1 面しか堆積していないように見える。ここでは 3 点を図化したが、破片の特徴を観察すると、図化した以外に少なくとも 5 個体分以上の土器が存在したと想定される。

出土遺物 (第 28 図－ 4 ～ 6)　4 は丸底壺の体部から頸部にかけての破片で暗い赤色の胎土が特徴的であり、体部に縦方向のミガキがみられる。5 は単純口縁台付甕で器体は歪みが著しい。6 は S 字状口縁台付甕である。

時期　古墳時代前期

SU03(第 7 図、第 28 図)

位置・調査年次　AP-19 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 0.12m、南北 0.14m の狭小範囲に土器片が集中する。掘り込みはない。調査区西部に堆積する暗褐色砂礫層中にて検出した。

遺物出土状況　出土する土器片はいずれも 1 個体に由来する。破片は大きく、上方からの圧力により潰れたような状態で出土した。調査区西部にて確認された砂礫層に埋もれた状態で検出されており、土砂災害等により流れ着いて埋没したものの可能性がある。

出土遺物 (第 28 図－ 7)　出土した土器は丸底壺 1 点 (7) のみである。外面体部上半はタテハケによる調整、下半はナナメハケによる調整が施される。

時期　古墳時代前期

第 2 項　奈良・平安時代の遺構と遺物

（1）竪穴建物跡

SI 01(第 8・9 図、第 29 図)

位置・調査年次　AT-19・20 区に所在。第 3 次 (VIa 区) 調査にて検出した。

遺構概要　北西隅は試掘トレンチにより掘削されたほか、南側半分は無断掘削により攪乱されており、発掘調査では全体の約 40% 程度が確認されたのみである。東西 2.7m 以上、南北 2.2m 以上の隅丸方形である。遺構深度は確認面からの深さは約 0.1m 程度と壁の立ち上がりは低い。柱穴は確認できなかった。

カマド　東辺中央やや南寄りに所在する。カマドは構築材の粘土とその内部に焼土が厚く堆積しており、遺存状態は良好と言える。カマド周辺には焼土が散乱し、焼土中より土器が多く出土した。

遺物出土状況　遺物の出土はカマド内及びカマド周辺に集中する。遺物量は少ない。土師器坏・小型甕・羽釜で構成される。

出土遺物 (第 29 図－ 8 ～ 11)　土師器坏 (8・9)、小型甕 (10)、羽釜 (11) の 4 点を図化した。8 は刻書土器であるが釈文は不明である。坏は、口縁部は丸縁で体部下半に斜位ヘラケズリが施される。底部は回転糸切り後外周ヘラケズリ。羽釜は体部外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで調整される。体部内外面には指頭圧痕がみられ、輪積み成形の痕跡もよく観察できる。

時期　10 世紀前半

SI02(第 9・10 図、第 29 図)

位置・調査年次　AT・AU-22 区に所在。第 3 次 (VIa 区) 調査にて検出した。

遺構概要　北西隅は SI03 により切られる。東西 3.25m、南北 2.85m 以上のやや隅丸の不整方形である。遺構深度は確認面より約 0.65m の深さまで掘り込まれる。東壁は垂直に近い角度で立ち上がるが、南壁および西壁は大きく内反して立ち上がる。柱穴やカマドなどの付属施設は確認されなかった。

遺物出土状況　遺物の出土は建物の中央に集中し、床面よりやや高い位置より出土する。遺物量は少ない。土師器坏・甕で構成される。

出土遺物 (第 29 図－ 12 ～ 14)　図化し得る遺物は土師器皿 (12･13) と甕 (14) のみでいずれも破片資料である。土師器坏は､口縁部は玉縁で体部下半に斜位ヘラケズリが施される。14 の甕口縁部は肥厚し､やや直線的に開く。

時期　9 世紀末～ 10 世紀初頭？

SI03(第 9・10 図、第 29・30 図)

位置・調査年次　AT・AU-22 区に所在。第 3 次 (VIa 区) 調査にて検出した。

遺構概要　南東隅が SI02 を切る。調査区北壁に東西 3.2m、南北 2.0m 以上の方形を呈する。北側半分は調査区外に出る。壁はやや内反して立ち上がり、遺構深度は確認面より約 0.8m の深さまで掘り込まれる。柱穴は確認できなかった。

カマド　南東隅に所在する。カマド構築材の粘土と焼土が良好な状態で遺存している。カマド内焼土はかき出されたのか、やや広範囲に焼土が散乱する。カマドより出土する遺物は多い。

遺物出土状況　建物内全体より遺物が出土するが、カマドに近いほど多く出土する傾向にある。遺物の出土は床面直上でみられる。遺物量は多い。土師器坏・甕・小型甕で構成される。

出土遺物 (第 29・30 図－ 15 ～ 33)　15 ～ 24 は土師器坏で 15 には墨書「半」が見える。口縁部は玉縁で体部下半に斜位ヘラケズリが施される。底部は回転糸切り後外周ヘラケズリにて調整される。20 は口縁部に煤の付着が目立ち、灯明皿としての用途が考えられる。25・26 は土師器皿。口縁部は玉縁を呈し、体部下半には斜位ヘラケズリ、底部は全面ヘラケズリが施される。27・28 は甕。口縁部は体部厚に比してやや厚い。29 ～ 32 は小型甕。32 は体部が膨らんだ器形を呈する。

時期　10 世紀前半

SI04(第 11 図、第 30 ～ 32 図)

位置・調査年次　AT-19・20 区に所在。第 4 次 (VIa 区) 調査にて検出した。

遺構概要　北東隅の約 10% は攪乱により破壊されている。東西 2.2m、南北 2.6m の隅丸方形を呈する。床面は軟弱で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構深度は確認面より約 0.3m の深さまで掘り込まれる。建物外南東隅には柱穴と思われる SP22 が隣接するが、このほかの柱穴は確認できなかった。

カマド　南東隅に所在する。一部袖石が遺存していたが、天井石や支脚石は原位置を留めていない。カマド内の焼土や灰は破壊行為の際にかき出されたようで、カマド前の広範囲に厚く堆積していた。微細物分析の結果、焼土中よりイネやコムギ、アワ等の穀類・雑穀類が確認された。

遺物出土状況　遺物量は多く、建物内全体に遺物が分布する。カマドやかき出された焼土、灰の中からは坏や甕、羽釜など多くの遺物が出土した。35 は完形の坏でカマドの破壊行為の際に置かれたものであろう。床面直上では、灰釉陶器壺頸部の破片 (52) や須恵器壺底部の破片 (53) などが出土している。土師器坏・甕・小型甕・羽釜・鉢に灰釉陶器壺・須恵器壺が伴出する。

出土遺物 (第 30 ～ 32 図－ 34 ～ 53)　34 ～ 41 は土師器坏。口縁部は丸縁と玉縁の 2 つが共存する。体部下半は斜位ヘラケズリが施され、底部は回転糸切り後外周ヘラケズリにて調整される。34 は「舎？」の墨書、35 は「川本」の刻書が認められる。42 は土師器皿で、口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として用いられたものであろう。43 ～ 45 は甕、46 ～ 49 は小型甕、50 は羽釜である。いずれもカマド内より出土した。甕口縁部は肥厚し、体部厚は薄い。44 はやや直線的に口が開く。51 は鉢で、口縁部は肥厚し、やや受け口状に段を作り出す。52 は灰釉陶器壺の頸部破片、53 は須恵器壺の底部破片である。

時期　10 世紀前半

SI05(第 12・13 図、第 32 図)

位置・調査年次　AU・AV-16・17 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 4.1m、南北 5.2m の方形を呈する。壁は垂直～やや内反して立ち上がり、遺構深度は確認面より約 0.5m の深さまで掘り込まれる。床面はやや軟弱で径 2cm 程の小礫を含む土層である。建物外南東隅には柱穴と思われる SP25 が隣接するが、ほかの柱穴は確認できなかった。中央北寄りには SK08 が遺構確認面より上層から掘り込まれるが床面まで達していない。

カマド　東辺中央やや南寄りと北東隅に 2 基が確認され、前者を「カマド a」、後者を「カマド b」とした。カマド a は袖石が一部確認されたが、ほとんどがカマドの破壊行為により失われている。袖石は黄褐色の粘土により固定されていたが、検出段階ではカマドの上半分がなく、粘土を馬蹄形に検出した。粘土および袖石に囲繞された内側には焼土および灰が堆積している。カマド b は原位置を留める構築材がなく、完全に破壊された状態で検出した。周辺には焼土および灰が堆積していた。カマド b より時期がわかる遺物が出土していないため、

カマドaとカマドbの前後関係は不明である。

遺物出土状況　全体に遺物が分布するが、遺物量は少ない。土師器坏・皿・甕・小型甕、須恵器壺？、鉄製刀子が出土している。

出土遺物(第32図－54～62、第51図－353)　54は土師器坏。口縁部は丸縁で、体部内面に放射状暗文が施される。55～57は土師器皿。55は底部と体部の境界に段を作るもので、57の見込み部には渦巻き状暗文が施される。58～60は甕でいずれもカマドaより出土した。体部から口縁部の厚さにはほとんど変化がない。59の口縁部は受け口状に段を作り、口縁部と体部の境界内面がやや突出する。61は小型甕でカマドbより出土した。62は須恵器壺？の底部破片である。鉄製品では刀子(353)が出土している。

時期　9世紀後半

SI06(第14図、第33図)

位置・調査年次　AU15・16区に所在。第2次(V区)・第4次(VIb区)調査にて検出した。

遺構概要　第2次(V区)調査において10号住居として報告された遺構の北東隅部分である。全体の20%程度を占める。先の調査成果と合わせると、東西3.9m、南北3.5mの隅丸方形となる。壁はやや外反して立ち上がる。遺構深度は確認面より約0.5mの深さまで掘り込まれる。第4次調査区では付属施設等は確認できなかった。

遺物出土状況　調査面積が狭小なため、遺物はごく少量のみ出土した。ただし、V区調査では多量の遺物の出土がみられ、特にカマド周辺に集中する。出土遺物は竪穴建物跡全体で土師器坏・皿・甕・小型甕・須恵器壺が出土している。

出土遺物(第33図－63・64)　63は土師器坏で「本人」の墨書が見える。口縁部は丸縁で、体部内面には放射状暗文、体部外面下半は斜位ヘラケズリが施される。64は土師器皿。第4次調査において、体部外面に「本人」と刻書された皿の破片が出土し、第2次調査10号住－9（第53図－9）と接合した。図は接合して再実測したものである。内面には渦巻き状暗文が施され、外面は回転ヘラケズリにて調整される。

時期　9世紀第4四半期

SI07(第15・16図、第33～35図)

位置・調査年次　AS・AT-16・17区に所在。第2次(V区)・第4次(VIb区)調査にて検出した。

遺構概要　第2次(V区)調査において12号住居として報告された遺構の北東隅部分である。全体の75%程度を占める。北西隅は試掘トレンチにより掘削され、南東隅はSK15により切られる。先の調査成果と合わせると、東西4.5m、南北4.0mの隅丸方形となる。壁はやや外反して立ち上がる。遺構深度は確認面より約0.25mの深さまで掘り込まれる。建物外東側には柱穴とみられるSP24・SP31・SP34が隣接する。建物内北東隅にはピットが所在し、底には焼礫が焼土とともに堆積していた。遺物の出土はなく、SI07に付属するものかは判然としない。

カマド　カマド南側はSK15により切られる。カマドの手前には焼土・灰の混土が広範囲に投棄されており、その上層には大礫が大量に投棄されていた。竪穴建物の廃絶後、焼土・灰混土→大礫の順に投棄され、また大礫がかなり高い位置に検出されることを鑑みれば、焼土・灰混土と大礫の投棄の間には時間差があったと推察できる。SI07のカマド袖石および天井石の多くが原位置で遺存していたことから、投棄された大礫はSI07外より持ち込まれたものと思われる。

　カマド内の土層はほとんど破壊されず遺存しており、焚口の最下層には灰が堆積している(5・6層)。カマド周辺には黄褐色粘土により貼り床が敷設される。

遺物出土状況　カマドを中心に建物内全体より出土する。遺物量は多い。カマド内では、焚口最下層の灰層より甕、小型甕、羽釜などが出土した。また、建物北東隅では、硯としての二次使用の痕跡がみられる灰釉陶器の底部が出土している。

出土遺物 (第 33 ～ 35 図－ 65 ～ 87)　65 ～ 72 に図化した土師器坏のうち、65・66 は口縁端部に煤の付着がみられ、灯明皿として使用されたものと思われる。65 は暗褐色の胎土を持ち、砂をやや多く含んでおり、甲斐型土器の胎土とは明らかに異なる。土師器坏の口縁部は玉縁が大半を占めるが、丸縁のものも客体的に含む。体部下半は斜位ヘラケズリにて調整され、底部は回転糸切り後外周ヘラケズリを施す。73 は須恵器坏、74 は灰釉陶器坏である。74 は見込み部および高台頂部の接地する部分が摩擦により滑らかになっているほか、見込み部にみえる灰釉が磨滅している箇所が確認できる。また、胎土の隙間と割れ口に朱の塊が入り込んでいることから、朱墨の硯として二次使用されたものであると考えられる。75 ～ 82 は甕で 79 はカマド内より出土した。甕口縁部はいずれも体部厚に対して肥厚する。83・84 は小型甕、85 は羽釜、86・87 は須恵器甕の破片である。

時期　10 世紀前半

SI08(第 17・18 図、第 35・36 図)

位置・調査年次　AR・AS-19・20 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　南側で SU02 を切る。東西 5.0m、南北 4.1m の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構深度は確認面より約 0.5m の深さまで掘り込まれる。建物内の南西隅には東西約 0.5m、南北約 0.4m、深さ約 0.3m の不整形を呈するピットが所在する。南北壁面を観察すると、東側には黒褐色土層、西側には暗褐色砂礫層がそれぞれ認められ、土層の堆積が変わる境界に竪穴建物が造られている。西側に堆積する暗褐色砂礫層は調査区西端部に堆積する砂礫層と同様の堆積層とみられる。出土遺物より、8 世紀後半～ 9 世紀初頭に帰属する竪穴建物と思われ、滝沢遺跡でこれまでに発見されたものの中で最も古い段階に該当する（第 1 次調査報告では、奈良・平安時代第 1 段階と区分されている）。過去の発掘調査では遺構外より出土する遺物の中に当該期の遺物が含まれており、遺構の存在は想定されていたが、実際の遺構としての検出は本事例が初めてである。8 世紀後半～ 9 世紀初頭に先行する奈良・平安時代の遺物が出土していないことから、集落の形成時もしくはその直近に造られた竪穴建物であると思われる。

カマド　北辺中央に所在する。建物の廃絶時に破壊されたようで、構築材と思われる礫が一部散乱しており、周囲には焼土がみられる。焼土を取り除くと焚口と思われる灰が堆積した窪みが確認された。

遺物出土状況　建物内全体より万遍なく出土している。床面よりやや高い位置から出土するものもあるが、大半は床面直上より出土する。カマド内より出土する遺物は数点で、図示できるものはなかった。

出土遺物 (第 35･36 図－ 88 ～ 98､第 51 図－ 347･369)　88 ～ 91 は土師器坏。口縁部は尖形または丸形を採り、全体的な形状は箱形を呈する。体部内面および見込み部には放射状暗文が施され、体部と見込み部の境界に沈線を施すものもある (89・90)。体部外面は横位のミガキで調整され、底部は回転糸切り後外周ヘラケズリまたは全面ヘラケズリで、ヘラケズリ後ミガキが施される。89 の体部下半には刻書があるが釈文は不明。92 は須恵器坏。93 は甕、94 ～ 97 は小型甕。98 は須恵器壺で、肩部に自然釉が多量に付着する。そのほか、鉄製品 2 点が出土している (347・369)。347 は刃部の途中で折損した鉄製刀子である。369 は一端が平らで、中央にねじりが入る棒状の鉄製品である。369 のような鉄製品は長野県松原遺跡や千葉県谷津貝塚などで出土事例があるが、用途不明である。

時期　8 世紀後半～ 9 世紀初頭

SI09(第 38・39 図、第 36 ～ 40 図)

位置・調査年次　AR・AS-20・21 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 2.9m、南北 3.4m の隅丸方形を呈する。遺構深度は確認面より約 0.2m の深さまで掘り込まれる。建物内全域の床面直上に炭化材および焼土が遺存する焼失竪穴建物跡である。炭化材は建築部材に由来するものであろうが、それぞれ部材の特定には至らなかった。樹種同定の結果、モミ属を主としてエノキ属、カヤ、カツラ、コナラ節、サクラ属の 5 樹種が確認された。建物跡の西半部には黄褐色粘土により貼り床が敷設される。

建物内南西隅には角礫を馬蹄形に配した配石遺構が所在する。角礫が配されない箇所には溶岩の磨き石が置かれる。遺物の出土はなく性格は不明である。

カマド　東辺中央やや南寄りに所在する。袖石および天井石、支脚石ともにほぼ原位置を留めて遺存している。カマドの手前には大礫が投棄されている。大礫は床面よりやや高位置で検出され、焼けた痕跡がみられないことから、建物の焼失後に投棄されたものと考えられる。炭化材は主に大礫の下から検出される。SI09 のカマド構築材がほぼ遺存していることから、SI07 同様、SI09 の外から持ち込まれて投棄されたと目される。

遺物出土状況　遺物量は非常に多く、特にカマド周辺および縁辺部に集中する。大半は焼土や炭化材より下層の床面直上より出土する。土師器坏はおおむね完形で遺存し、火を受けているものも多く、その他の遺物もその場で潰れたように出土することから、不意の出火により焼失したものと考えられる。カマドでは粘土等構築材の上面において皿 (115) が完形で出土したほか、カマド焚口最下層に堆積している灰層より大量の甕や小型甕、羽釜が出土した。

出土遺物（第 36 ～ 40 図－ 99 ～ 137、第 50 図－ 329、第 51 図－ 346・357、写真図版 18-381）99 ～ 110 は土師器坏。口縁部は丸縁と玉縁の両方が共存する。体部下半は斜位ヘラケズリ、底部は回転糸切り後外周ヘラケズリが施される。99・100 は墨書土器で、それぞれ「王」(99)、「合」(100) の文字が見える。101 は刻書土器で体部の対をなす位置で「十」が刻まれている。107 は内黒土器である。111 ～ 115 は土師器皿。口縁部は玉縁を呈し、体部下半は斜位ヘラケズリを施す。底部は全面ヘラケズリと回転糸切り後外周ヘラケズリの 2 つがある。116 ～ 127 は甕である。このうち 117 ～ 123・127 はカマド内より出土した。口縁部は肥厚し、直線的に開くものもある。129 ～ 133 は小型甕、134 は羽釜、135 は灰釉陶器壺の底部、136・137 は鉢である。329 は土錘である。他の土錘に比して端部の丸みがなく、円柱状を呈する。金属製品としては、刀子 2 点 (346・357) と花弁状銅製品が出土した (381)。346 は柄が炭化した状態で検出された。炭化材同定の結果、柄材はモモと同定された。357 は薄板状の鉄製品である。刀子の茎部であろうか。381 は平面形状から花弁状銅製品とした。小片が同位置から 6 片出土したが破損が著しいため接合しなかった。用途は不明。小片のため図化はできなかったが、写真図版 18 に写真を掲載した。

時期　10 世紀前半

SI10(第 21・22 図、第 41・42 図)

位置　AR・AS-21・22 区に所在。第 2 次 (VIa 区)・第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　第 3 次調査において東側の約 30%、第 4 次調査において西側の約 60% を検出した。南西隅は SK23 により切られる。建物内中央西寄りにも SK24 が掘り込まれるが底まで達しない。東西約 4.75m、南北約 3.7m の隅丸方形を呈する。壁は垂直よりやや外反する角度で立ち上がる。遺構確認面より約 0.5m の深さまで掘り込まれる。建物の東壁下には南東隅から東辺中央やや北側にかけて、幅約 0.15m の溝を検出した。滝沢遺跡では最も古い段階に帰属する竪穴建物であり、SI08 同様、第 1 次調査の報告で奈良・平安時代第 1 段階に区分される段階に該当する。

カマド　北辺中央やや東寄りに所在する。カマド掘方には構築材として設置された石材が一部残り、焼土の堆積もみられる。カマド掘方の手前には焼土が広く堆積しており、カマド破壊行為の際にかき出されたものと思われる。

遺物出土状況　多くはカマド周辺に集中するが、建物の中心部にも遺物の出土がみられる。9 層直上より遺物が多く出土している。9 層は貼り床の可能性がある。

出土遺物 (第 41・42 図－ 138 ～ 159、第 50 図－ 330・331、第 51 図－ 350)　138 ～ 145 は土師器坏。口縁部は尖形で、体部内面および見込み部に放射状暗文が施される。体部外面下半は斜位ヘラケズリで調整され、上半は横位のミガキを施す。底部は回転糸切り後外周ヘラケズリを施す。140 は底部、143 は体部下半に九字記号の刻書がみられる。146 ～ 150 は須恵器坏。底部から体部にかけて直線的に開き、箱形の器形を呈する。

149・150 は高台が付く。151 は須恵器蓋。152 ～ 155 は土師器甕。156 ～ 158 は須恵器甕の破片で、調整や器面の特徴からすべて別固体であると思われる。158 の内面には、同心円状当て具の痕跡が薄く残る。159 は小型甕。このほか、土錘 2 点（330・331）および鉄製刀子 1 点（350）が出土している。

時期　8 世紀後半～ 9 世紀初頭

(2) 配石

SS01(第 22 図、第 42 図)

位置・調査年次　AQ-20 区に所在。第 4 次（VIb 区）調査にて検出した。

遺構概要　東西約 1.3m、南北 0.9m の範囲に 10cm 程度の礫が集中する。掘り込みは確認できなかった。調査区西部に堆積する暗褐色砂礫層上にて検出した。礫の集積は 2 群に分かれ、東側の一群の比較的礫は大きい。礫の位置は高い位置から検出したように見えるが、礫の下から遺物の出土がみられたため、やや深く掘り下げたことによる。

遺物出土状況　礫の間および直下から出土する。遺物の出土量は少ない。

出土遺物 (第 42 図－ 160)　図示し得る資料は少なく、坏 (160)1 点のみである。体部下半は斜位ヘラケズリ、底部は全面ヘラケズリでそれぞれ調整される。体部下半および底部に釈文不明の刻書がみえる。

時期　9 世紀代

SS02(第 22 図、第 42 図)

位置・調査年次　AS・AT-20 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 1.8m、南北 1.3m の範囲に礫が集中する。礫の大きさに均一性はなく、約 30cm の大礫から 10cm 程度の小礫が混じって検出した。礫の配列に規則性はなく掘り込みも存在しない。配石周辺の土壌に対して微細物分析を行った結果、アワの破片が確認されたのみで特筆すべき点はない。

遺物出土状況　遺物量は極めて少なく、須恵器甕の破片が 1 点出土したのみである。

出土遺物 (第 42 図－ 161)　161 は須恵器甕の口縁部から頸部にかけての破片で、薄く自然釉がかかる。

時期　平安時代？

(3) 焼土

SL01(第 22 図、第 42 図)

位置・調査年次　AW-19 区に所在する。第 3 次 (VIa 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 1.4m、南北 0.7m、焼土層の厚さは約 12cm。やや高い位置より検出しているが、遺構精査の段階で遺構確認が困難であったため深く掘削したためである。掘り込み等は確認できなかった。

遺物出土状況　焼土上面および焼土中より出土する。遺物量は少ない。

出土遺物 (第 42 図－ 162・163)　小型甕 (162) および羽釜 (163) を図化した。帰属時期は平安時代である。

時期　10 世紀前半以降

SL02(第 22 図)

位置・調査年次　AV-16 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　東西 0.55m、南北 0.35m、焼土層の厚さは約 2cm で薄い。掘り込み等は確認できなかった。

遺物出土状況　焼土中より甕の破片 2 点が出土したのみである。

出土遺物　小破片のため図示できるものはない。

時期　平安時代？

第 3 項　中世以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB01(第 23 図)

位置・調査年次　AV-15 区に所在。第 2 次 (V 区)・第 4 次 (VIb) 調査にて検出した。

遺構概要　第 2 次調査において P02 ～ P06、第 4 次調査において P01・P07・P08 をそれぞれ検出した。3 間 × 2 間で梁間 3.8m、桁行 3.2m。柱間距離は統一性がなく、桁行方向で心々約 1.7m、梁間方向で心々 1.2m ～ 0.7m で梁間中央の 2 本の間が狭い。柱穴は径約 40cm ほどである。

遺物出土状況　出土遺物はない。

時期　中世以降

(2) 掘立柱建物

SB02(第 23 図)

位置・調査年次　AV15 区に所在。第 2 次 (V 区)・第 4 次 (VI b 区) 調査にて検出した。

遺構概要　第 2 次調査において P04、第 4 次調査において P01 ～ P03・P05・P06 が検出した。3 間× 2 間で梁間 3.7m、桁行 3.2m。柱間距離は統一性がなく、桁行方向で心々約 1.8m、梁間方向で心々 1.75m ～ 0.7m で梁間中央の 2 本の間が狭い点は SB01 と同様である。柱穴は径約 35cm。P06 の土層断面図より、柱の太さは径 10cm 程度であったと思われる。調査段階では掘立柱建物跡との認識はなく、また北東隅を含む 4 本分の柱穴が存在しなかったが、梁間および桁行の寸法が SB01 と酷似していたため、掘立柱建物跡として報告する。

遺物出土状況　出土遺物はない。

時期　中世以降

第 1 表　ピット観察表

遺構名	挿図番号	位置	時期	平面形	規模 (m)			備考
					長軸	短軸	深さ	
SP01	第 24 図	AT-17 区	―	円形	0.3	0.25	0.25	漏斗状に掘り込まれる
SP02	第 24 図	AR-20 区	-	円形	0.25	0.25	0.08	
SP03	第 24 図	AR-20 区	-	円形	0.25	0.25	0.15	
SP04	第 24 図	AR-20 区	-	不整形	0.35	0.25	0.35	
SP05	第 24 図	AR-20 区	-	円形	0.25	0.25	0.2	
SP06	第 24 図	AR-20 区	-	楕円形	0.35	0.25	0.15	
SP07	第 24 図	AR-20 区	-	不整円形	0.2	0.2	0.2	
SP08	第 24 図	AR-20 区	-	不整円形	0.3	0.3	0.2	
SP09	第 24 図	AR-20 区	-	円形	0.35	0.3	0.4	
SP10	第 24 図	AT-17 区	-	円形	0.3	0.25	0.25	
SP11	掘立柱建物跡 SB01-P07							
SP12	掘立柱建物跡 SB02-P02							
SP13	掘立柱建物跡 SB02-P03							
SP14	掘立柱建物跡 SB02-P06							
SP15	第 24 図	AQ-19 区	-	円形？	0.25	(0.25)	0.2	墨書土器「山口」(164) 出土
SP16	掘立柱建物跡 SB02-P05							
SP17	第 24 図	AQ-19 区	-	円形	0.35	0.3	0.2	
SP18	第 24 図	AR-20 区	-	楕円形	0.3	0.25	0.08	
SP19	第 24 図	AU-18 区	-	楕円形	0.35	0.3	0.35	
SP20	第 24 図	AU-18 区	-	円形	0.25	0.25	0.25	
SP21	第 24 図	AV-18 区	-	不整形	0.35	0.25	0.2	
SP22	第 24 図	AT-19 区	-	円形	0.3	0.3	0.25	SI04 に伴う柱穴か
SP23	第 24 図	AU-16 区	-	円形	0.3	0.3	―	図なし
SP24	第 24 図	AT-17 区	-	円形	0.45	0.45	0.3	SI07 に伴う柱穴か
SP25	第 24 図	AV-16 区	-	不整円形	0.4	0.3	0.25	SI05 に伴う柱穴か
SP26	第 24 図	AV-16 区	-	不整円形	0.3	0.25	0.3	
SP27	第 24 図	AV-16 区	-	隅丸方形	0.5	0.4	0.4	
SP28	掘立柱建物跡 SB01-P01							
SP29	掘立柱建物跡 SB01-P08							
SP30	掘立柱建物跡 SB02-P01							
SP31	第 24 図	AT-16 区	-	不整円形	0.4	0.35	0.1	
SP32	第 24 図	AQ-19 区	-	楕円形	0.25	0.2	0.2	
SP33	第 24 図	AW-16 区	-	不整円形	0.55	0.55	0.25	
SP34	第 24 図	AT-17 区	-	不整円形	0.25	0.25	0.2	SI07 に伴う柱穴か
SP35	第 24 図	AR-20 区	-	不整形	0.6	0.4	0.1	2 基連結
SP36	第 24 図	AT-17 区	-	不整円形	0.5	0.45	0.2	漏斗状に掘り込まれる

(3) ピット・土坑

発掘調査段階では 36 基のピットおよび 34 基の土坑を発見した (欠番等を含む)。土坑とピットの区分は径 50cm を境に小さいものをピット、大きいものを土坑とした。遺構確認の段階で遺構名称を付しているため、遺構規模と遺構区分間の齟齬や掘立柱建物跡の柱穴への移行などにより欠番になったものが多数ある。各々の遺構のデータは第 1 ・ 2 表にまとめた。

大半のピットおよび土坑は、遺構確認面に達するより上面にて遺構が確認できることから、中世以降に掘削されたものである。遺物を出土しない遺構が大半を占め、出土する遺構は流れ込みによる遺物である。

ここでは、ピットおよび土坑の特徴について概観する。

ピット (第 24 図)　ピットは 36 基が検出されており、そのうち 8 基が 2 軒の掘立柱建物跡 SB01・SB02 の柱穴に該当する。遺物を出土する遺構はほとんどなく、SP15 から「山口」の墨書が見える土師器坏 (164)、SP22 から「十」の刻書が見える土師器坏 (165) が出土したのみである。164 の墨書は端正な文字で書かれており、日常生活において文字を書く機会が多い人物が書いたかもしれない (平野修氏のご教示による)。口縁部は尖形で、体部内面および見込み部に放射状暗文が施され、体部下半は斜位ヘラケズリで調整される。165 の口縁部は玉縁を呈する。

第 2 表　土坑観察表

遺構名	挿図番号	位置	時期	平面形	規模 (m)			備　考
					長軸	短軸	深さ	
SK01	第 25 図	AT-21 区	-	円形	0.95	0.85	0.3	
SK02	第 25 図	AS-21 区	-	円形	1.5	1.5	0.45	
SK03	第 25 図	AU-16 区	-	楕円形	1.25	1.0	0.75	SK04 を切る
SK04	第 25 図	AU-17 区	-	円形	1.2	1.15	0.3	SK03 に切られる
SK05	第 25 図	AU-18 区	-	円形	1.1	1.05	0.45	
SK06	第 25 図	AT-17 区	-	不整円形	1.1	1.15	0.25	
SK07	第 25 図	AT-17 区	-	不整円形	1.2	1.05	0.35	SK11 に切られる
SK08	第 12 図	AU-17 区	-	円形	0.6	0.6	0.5	SI05 を切る
SK09	欠番							
SK10	第 25 図	AT-18 区	-	楕円形	1.65	1.45	0.35	
SK11	第 25 図	AT-18 区	-	不整円形	0.8	0.75	0.3	漏斗状に掘り込まれる
SK12	欠番							
SK13	第 25 図	AV-16 区	-	円形	0.6	0.6	0.2	南側を攪乱に切られる
SK14	第 25 図	AV-15 区	-	不整円形	1.25	1.2	0.4	北側を攪乱に切られる
SK15	第 25 図	AT-16 区	-	不整円形	1.3	1.25	0.65	SI07 を切る
SK16	第 25 図	AS-18 区	-	円形	1.25	1.25	0.3	
SK17	第 25 図	AQ-19 区	-	不整円形	1.2	1.05	0.8	
SK18	第 25 図	AQ-19 区	-	円形	1.2	1.15	0.7	
SK19	第 25 図	AP-20 区	-	不整形	1.5	1.05	0.75	
SK20	欠番							
SK21	第 25 図	AQ-21 区	-	円形	1.35	1.35	0.5	
SK22	第 25 図	AW-16 区	-	不整円形	1.2	0.9	0.1	
SK23	第 26 図	AR-21 区	-	円形	1.35	1.2	0.4	SI10 を切る
SK24	第 26 図	AR-21 区	-	円形	0.95	0.85	0.55	SI10 を切る
SK25	欠番							
SK26	第 26 図	AS-17 区	-	円形	1.75	1.65	0.25	
SK27	第 26 図	AS-17 区	-	円形	1.45	1.4	0.1	
SK28	第 26 図	AU-18 区	-	楕円形	1.3	1.1	0.35	SK29、30、35 を切る
SK29	第 26 図	AU-18 区	-	不整円形	1.15	1.1	0.4	SK30 を切る
SK30	第 26 図	AU-18 区	-	不整円形	1.35	1.3	0.25	SK28、29 に切られ、SK35 を切る
SK31	第 26 図	AU-19 区	-	不整円形	1.35	1.2	0.45	SK32 を切る
SK32	第 26 図	AU-19 区	-	不整形？	(1.35)	(0.7)	0.45	SK31 に切られる
SK33	第 26 図	AR-17 区	-	不整円形	1.6	(1.3)	0.1	
SK34	第 26 図	AR-18 区	-	楕円形	1.15	1.0	0.25	
SK35	第 26 図	AU-18 区	-	不整形？	1.05	(0.3)	0.15	SK28、30 に切られる
SK36	第 26 図	AX-15 区	-	不整円形	1.4	(1.35)	0.7	攪乱に切られる

土坑 (第 25・26 図)　土坑は 36 基が検出されており、規模は径 0.6m から径 1.75m まで様々ある。第 2 次調査で検出した土坑と合わせて俯瞰すると、東西 40m 以上×南北 35m 以上の方形に並ぶ。柱痕は確認できなかったが、芯々距離約 3m 程度に配置される柵状の遺構であると想定される。また、土坑が同様の位置で切り合っていることから、同じ場所に複数回の建て替えが行われている。この方形区画の性格は不明であるが、土坑が平安時代の生活面より上層から掘り込まれていることや軸が掘立柱建物跡と同様であることから、中世以降の所産であろうか。遺物を出土する土坑はほとんどなく、土器 2 点 (166・167) と土製品 2 点 (343・344) を掲載した

がいずれも流れ込みによるものであろう。166 は古墳時代の土師器坏で、内外面とも横位のミガキが施される。167 は土師器の皿であろう。底部から体部下半にヘラケズリがみられ、体部には墨書がある。343・344 は管玉状の土製品である。端部は丸みを持ち、表面は凹凸が多く粗雑な作りをしている。343 は SK33 から、344 は SK10 からそれぞれ出土した。用途は不明である。

(4) 溝状遺構

SD01(第 26 図)

位置・調査年次　AU-17 区に所在　第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　長辺 2.3m、短辺 0.55m の楕円形を呈する。遺構確認面より約 0.2m の深さであるが、上面から掘り込まれており、実際はこれよりも深い。

遺物出土状況　出土遺物はない。

時期　中世以降

SD02(第 26 図)

位置・調査年次　AQ-19・20 区に所在。第 4 次 (VIb 区) 調査にて検出した。

遺構概要　長辺 1.9m、短辺 0.5m と SD01 よりやや小規模である。深さは SD01 と同様に 0.2m 程度で遺構確認面より上層から掘り込まれる。SD01 と SD02 間は距離にして 20m 程離れているが、主軸は互いに直交する角度を採る。それぞれなにかを区画する溝の可能性があるが、現在のところ性格は不明である。

遺物出土状況　出土遺物はない。

時期　中世以降

第 4 項　遺構外出土遺物（第 43 図～第 52 図）

全体の遺構外出土遺物を概観する（第 27 図）と、AU-22 区から AV-15 区を結んだ南北ラインより西側において土器の出土が多くみられ、そのライン以東では、遺物の出土が希薄である。また、調査区西端部にみられる暗褐色砂礫層からの出土量も希薄になるようである。時期別にみると、縄文時代および弥生時代の遺物量は少ないが（第 43 図 -168、180、182、第 52 図 -378 など)、遺物が多く出土する範囲のうち東側に集中するようである。一方、古墳時代の土器（第 44 図 -188、194、199、第 45 図 -206、210 など）は西側に集中し、一部、調査区西端部の暗褐色砂礫層に埋没した状態での出土がみられる。奈良・平安時代の遺物は遺物が多く出土する範囲に万遍なく出土する。

(1) 土器（第 43 図～第 52 図）

遺構外出土土器は第 43 図～第 50 図 (168 ～ 328) に掲載し、出土土製品は第 50 図 (329 ～ 345)、出土鉄製品は第 51 図 (346 ～ 376)、出土石製品は第 52 図 (377 ～ 380) にそれぞれ器種ごとに掲載した。出土土器はおおむね時代毎に掲載しており、縄文土器 (168 ～ 170)、弥生土器 (171 ～ 183)、古墳時代 (184 ～ 210)、奈良・平安時代 (211 ～ 328) の順とした。また、奈良・平安時代の出土土器は、墨書・刻書土器 (268 ～ 323)・製塩土器 (324 ～ 328) は個別に掲載した。

縄文土器　168 は縄文時代前期後半の諸磯 B3 式深鉢の口縁部片。169 は縄文時代前期後半の諸磯 c 式。170 は縄文中期～後期の縄文土器片である。

弥生土器　171 は弥生時代中期中葉の栗林式土器の甕片である。174 は弥生時代中期中葉。竹管状工具による刺突痕がみられる。175 ～ 177 は条痕文土器片。175・176 は弥生時代中期中葉で、177 は弥生時代前～中期の所産である。178 は弥生時代中期後半以前で栗林式より古い段階のものであろう。斜行沈線により区画された中に横位の条痕文が施される。179・180 は弥生時代後期の所産で、口縁部から頸部にかけて櫛描羽状文が施

される。181 は甕の底部片。182 は弥生時代後期の単純口縁壺。183 は壺底部付近の破片で、破片上部には赤彩が施される。

古墳時代　184 ～ 193 は土師器坏。184・187・190 は外面または内外面にヘラナデがみられる。185・186・188・189・191 ～ 193 は内外面の調整にミガキが用いられる。185・186・188・189 は内外面に黒色処理が施され、187 は内面に煤が付着している。194・195 は土師器高坏。194 は器体部および脚部ともにヘラケズリにより調整される。脚部には穿孔がみられる。195 は高坏の脚部破片で、外面には縦方向のミガキが施される。196 は単純口縁甕で、口縁端部に刻みが入る。197 は体部から口縁部にかけて明確な段を作り出す甕である。198 は S 字状口縁台付甕の口縁部片。199 は単純口縁台付甕で体部内外面および脚部内面にハケメ調整がみられる。200・201 は甕底部の破片である。いずれも体部内面に横方向のミガキが施される。202 ～ 208 は丸底壺。202 は口縁部破片で、穿孔がみられる。204・205 は外面に縦方向のミガキが施され、204 は内面にミガキが施される。一方、205 の内面は横方向のヘラ調整が施される。206 ～ 209 はいずれも内外面にハケメによる調整がみられる。209 は小型甕。輪積みにより成形され、輪積みの継ぎ目には指頭圧痕が並ぶ。210 は小型鉢で、口縁部に段を持ち、体部には棒状工具を用いてミガキが施される。

奈良・平安時代　211 ～ 237 は土師器坏。211・212 は体部外面に小幅のミガキ、体部内面および見込み部に放射状暗文が施される。213 ～ 217・219・220 は底部から体部にかけて明確な角を持って立ち上がる形態をとる。体部内面に放射状暗文が施され、213・219 には体部下半に斜位ヘラケズリがみられる。217 は摩耗が激しく調整痕跡を読み取ることができない。218 は体部がやや外反して立ち上がる。放射状暗文が体部内面に施される。221 ～ 224 は底径が小さく体部下半に斜位ヘラケズリが施される。225 ～ 230 は口縁部～体部下半にかけての破片。玉縁を呈し、225・228・230 には体部下半斜位ヘラケズリが見える。227 は内面を丁寧に磨いている。231 ～ 234 は口縁端部が丸縁 (231・232) で、底部が回転糸切り後未調整のものである。236・237 は土師器皿。底部は全面ヘラケズリが施され、口縁端部形状は 236 が丸縁、237 は玉縁を呈する。238 は土師器坏蓋である。

239 ～ 242 は土師器甕の口縁部破片、243 ～ 245 は底部破片である。口縁部破片は、いずれも体部の器壁厚に比して肥厚する。241 は体部から口縁部にかけてやや直線的な作りとなっている。246 ～ 249 は小型甕である。246 は口径が小さくやや下膨れ形を呈する。

250 ～ 257 は灰釉陶器坏である。253 ～ 257 には高台が付く。255・256 の見込み部は摩耗しており、二次使用の痕跡が認められる。257 は見込み部に火襷状の当たり痕跡がみられるとともに、高台部を故意に打ち欠いた痕跡がある。性格は不明。258 ～ 261 は灰釉陶器壺である。258・259 は甕の可能性もある。260・261 は口縁部破片で、端部を受口状に作り出す。

262 ～ 267 は須恵器。262 は坏で、やや箱形の形状を呈すると思われる。底部は回転糸切り後未調整。263 は蓋。264 ～ 267 は甕の破片である。264 の見込み部は摩耗し、かつ中心部に朱墨が溜まっている様子が見える。SI07 出土の灰釉陶器 (74) 同様、朱墨としての二次使用が認められる。

墨書・刻書土器　出土した墨書・刻書土器は把握した限り全点掲載したが、ここでは小破片により判読が不可能なものも多いため、特筆すべきもののみ概説する。

268・269 は土師器坏の体部外面に「刀」と書かれている。268 は器体部の対象となる面に墨書され、一端は破損しているものの、「刀」と書かれた可能性が高い。滝沢遺跡では、V 区に出土例がみられる (2 号住－ 13、8 号住－ 11)。272 は土師器皿の器体部内面と底部にそれぞれ異なる墨書が書かれている。278 は体部外面下半に「舎」の墨書がある。II 区 4 号住－ 5 や V 区遺構外－ 349 は「合」と判別されているが、「舎」になる可能性もある。

刻書土器は墨書土器に比べて、やや多く出土しているが破片資料が大半を占め、判読できるものは少ない。309 は土師器坏底部に「春」の刻書が見える。310 は逆位の「大」と読める。313 は「刀」、317 は「＃」の刻書が見える。323 は須恵器甕の頸部に「人」の刻書がある。

製塩土器　滝沢遺跡 VI 区調査では製塩土器片が 5 点出土した。324 は口縁部の破片で、体部内外面ともにナデにより調整される。325 は他の製塩土器片に比べてやや硬質に焼成されるもので、外面はナデ、内面には縦

位のハケメが見える。326 は砂粒を多く含む胎土で、外面を斜位のハケメ、内面を縦位のナデにより調整する。327 はやや硬質に焼成される。内面は斜位のハケメ、外面は横位のハケメにより調整される。328 は、含まれる砂粒が大きい。内面は横位のハケメ、外面はナデにより調整される。本調査において、滝沢遺跡における製塩土器の出土が初めて確認された。第 5 章にて、詳細を述べる。

(2) 土製品（第 50 図）

滝沢遺跡では土製品に分類される遺物として、土錘・土製管玉・円盤状土製品が出土した。329 ～ 331 は竪穴建物跡内から、332 ～ 342 は遺構外より出土した土錘である。340 は算盤珠形の土錘である。345 は土製円盤の 1 面に「一」の線刻が見られる。

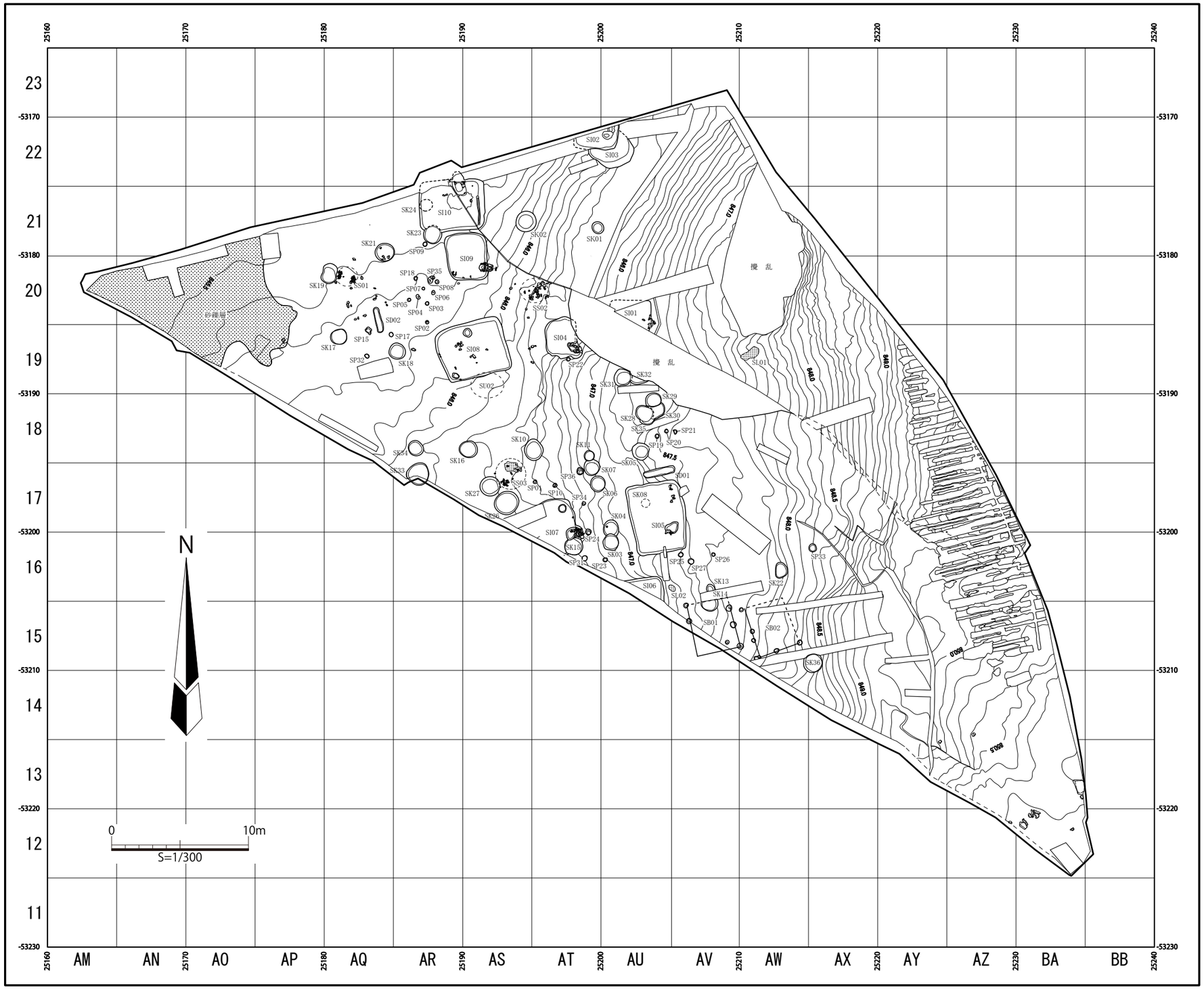
(3) 金属製品（第 51 図）

346 ～ 360 は刀子、361 ～ 365 は鉄鏃。366 は鉄釘であるが、新しい時代の所産かもしれない。367 は紡錘車。368 は火打石で中世の所産と思われる。369 はねじり棒状鉄製品、370 ～ 372 は棒状鉄製品。373 ～ 375 は端部に丸みを持たせた盤状を呈し、一端に孔を有する。374・375 に開けられた孔は一方に盛り上がりがみられることから、盤状に作り出された後に棒状の工具を用いて穿孔されたと思われる。376 は環状鉄製品である。用途不明。

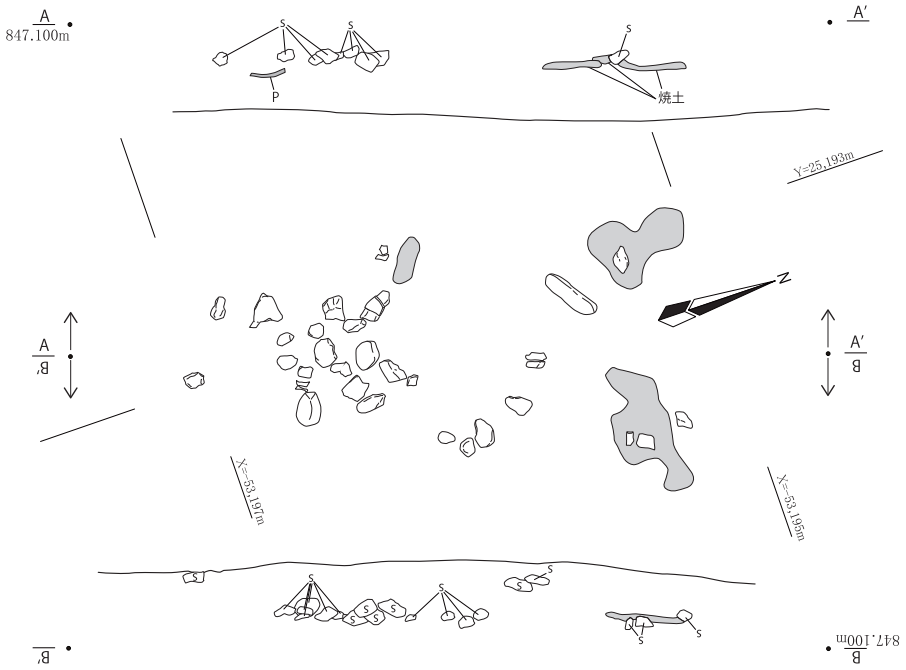
(4) 石製品（第 52 図）

377・378 は黒曜石製の石鏃である。いずれも透明度が高く、377 は斑状に、378 は縞状に黒みの強い部分がある。379 は安山岩製の叩き石、380 は砂岩製の砥石である。

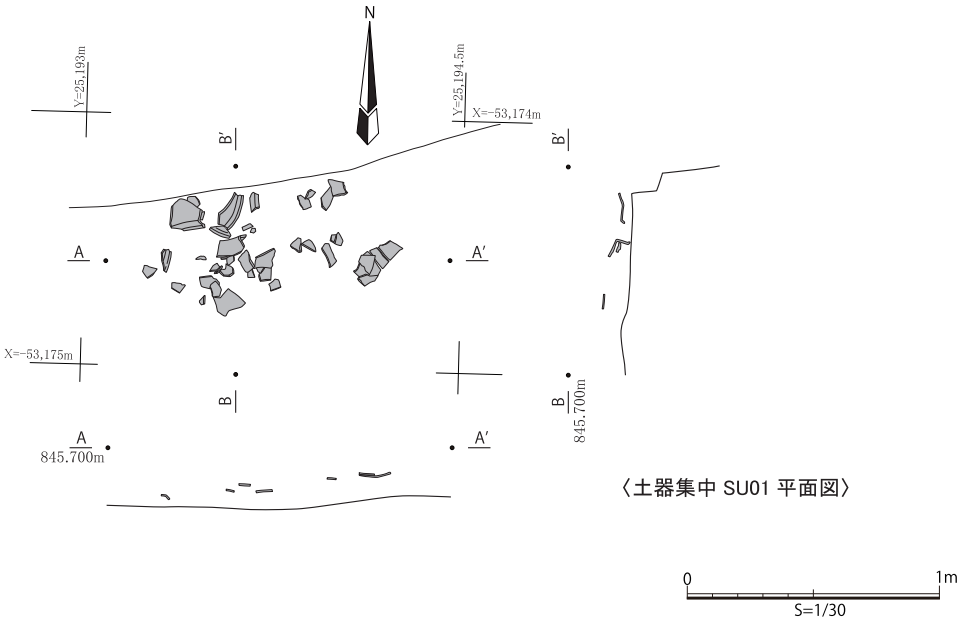
377 の基部形状は凹基である。抉りの深さは約 7mm で、平面形は縦長の二等辺三角形である。表裏両面とも剥離面におおわれており、素材面はみられない。先端と片側の基部は折損している。先端の折損面は表面に舌状に広がっており、刺突などに伴う衝撃による剥離である。378 は凸基の基部形状を持つ。身部の長さが約 17mm であるのに対し、幅は約 15.5mm と幅広く、五角形状を呈する。両面加工によって成形されているが、表裏面には素材面が残っており、素材剥片の打面側と基部側として製作されたことがわかる。379 は楕円礫を用いた叩き石である。円礫の頂部には敲打痕跡がみられ、一方の面は敲打の衝撃による剥離欠損がみられる。



第５図　滝沢遺跡Ⅵ区遺構配置図

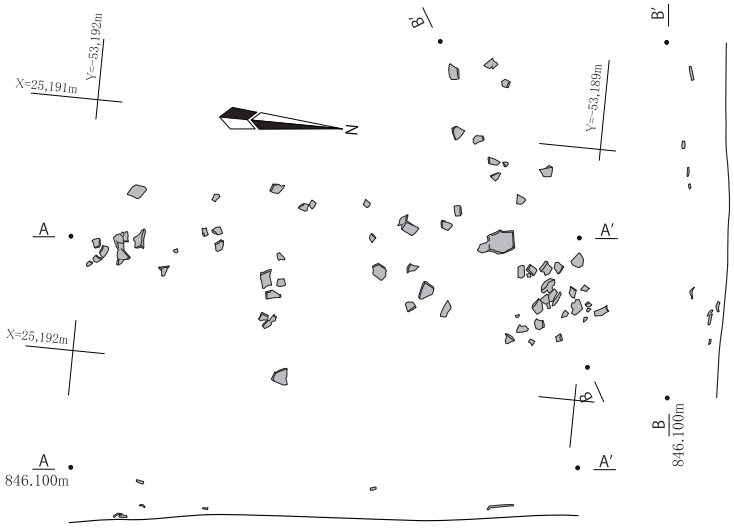


〈配石 SS03 平面図・見透図〉



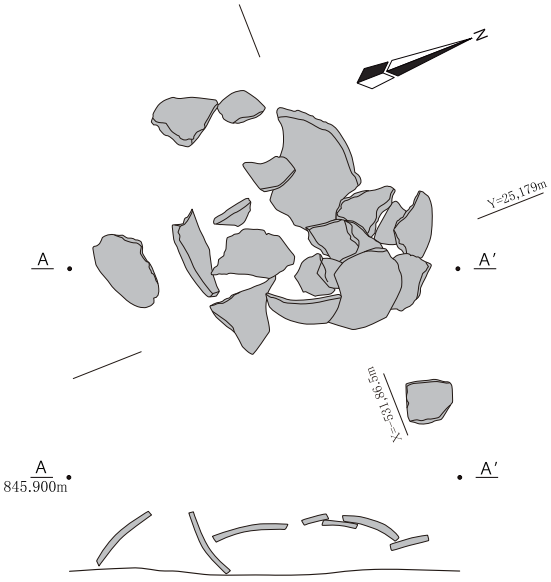
〈土器集中 SU01 平面図〉

第６図　配石 SS03 平面図・見透図、土器集中 SU01 平面図



〈土器集中 SU02 平面図〉

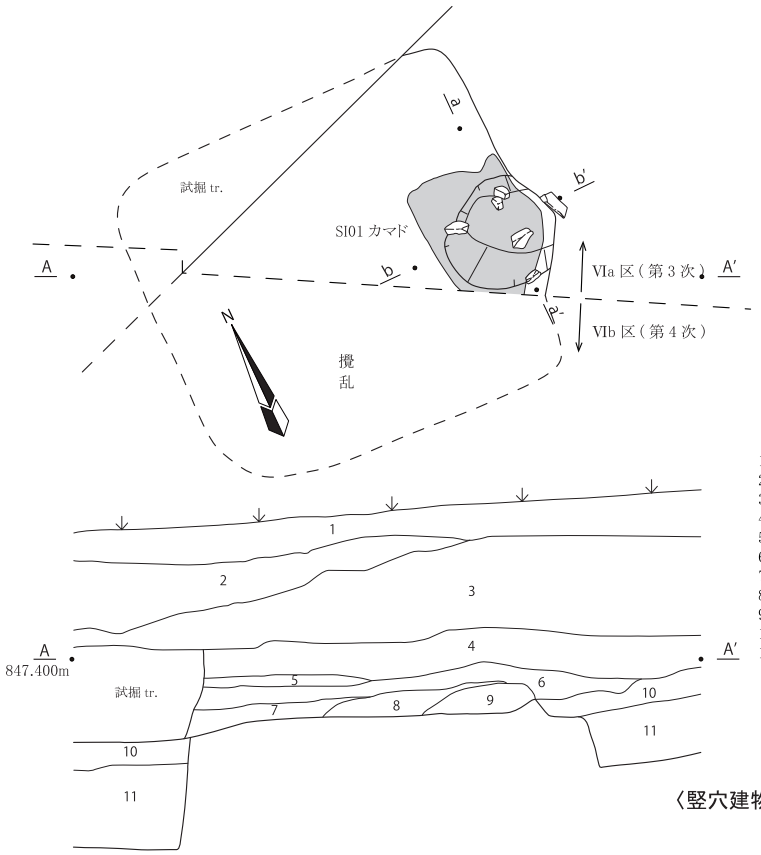
0 1m
S=1/30



〈土器集中 SU03 平面図〉

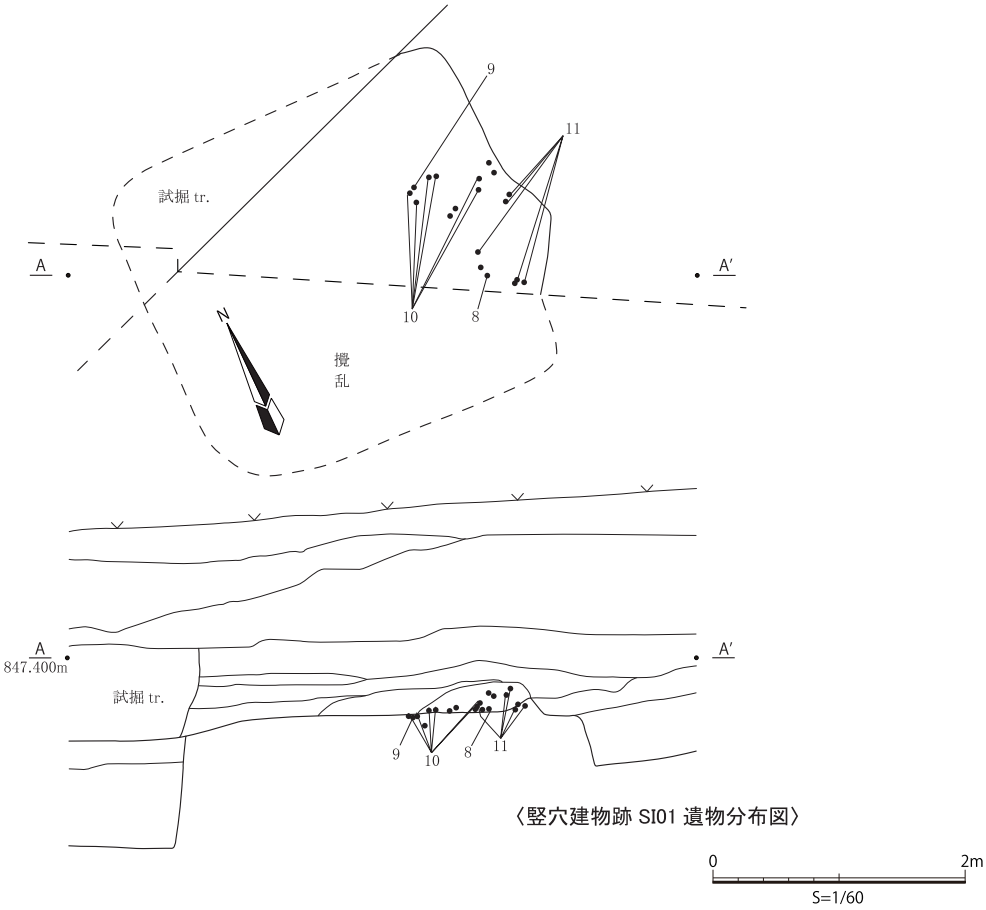
0 10cm
S=1/3

第７図　土器集中 SU02・SU03 平面図



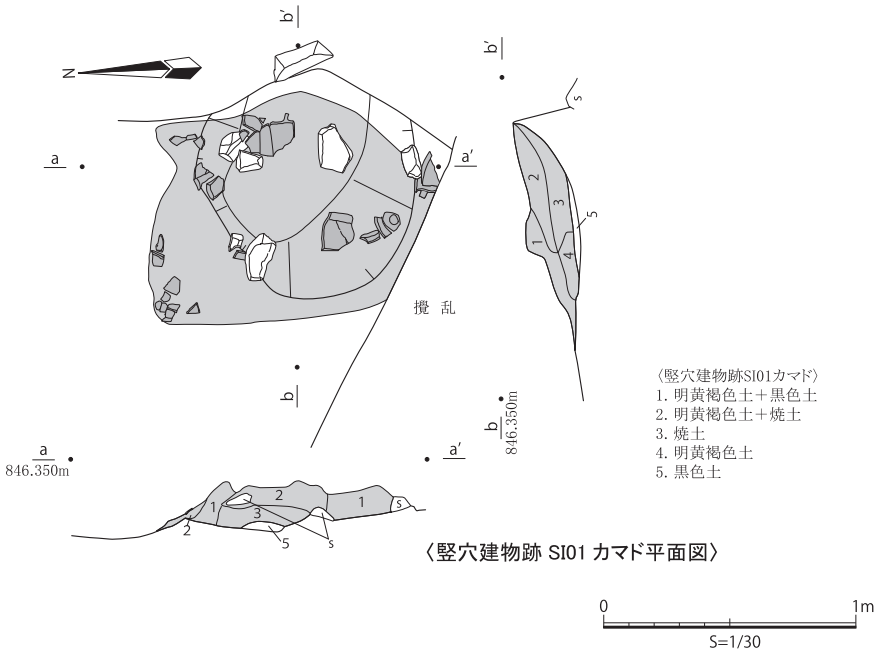
〈竪穴建物跡SI01〉
1. 砕石層(盛土)表土
2. N1.5/黒色土(盛土)
3. N1.5/黒色土(2より明るい)
4. N2/黒色土(しまり強、3より明るい、小石・橙色粒子を多く含む)
5. 2.5Y3/1黒褐色砂質土(粘性やや強、しまりやや強、小石含む)
6. 10YR3/1黒褐色土(5より明るい、黄褐色ブロック含む)
7. 10YR2/3黒褐色土(粘性やや強、小石微量含む)SI01覆土
8. 10YR2/2黒褐色土(7より明るい、黄褐色ブロック含む)SI01覆土
9. 10YR2/3黒褐色土(黄褐色ブロック・焼土含む)SI01覆土
10. N1.5/黒色土(粘性やや強、小石・橙色粒子を含む)
11. 10YR3/4黒色土(粘性やや強、橙色粒子を含む)

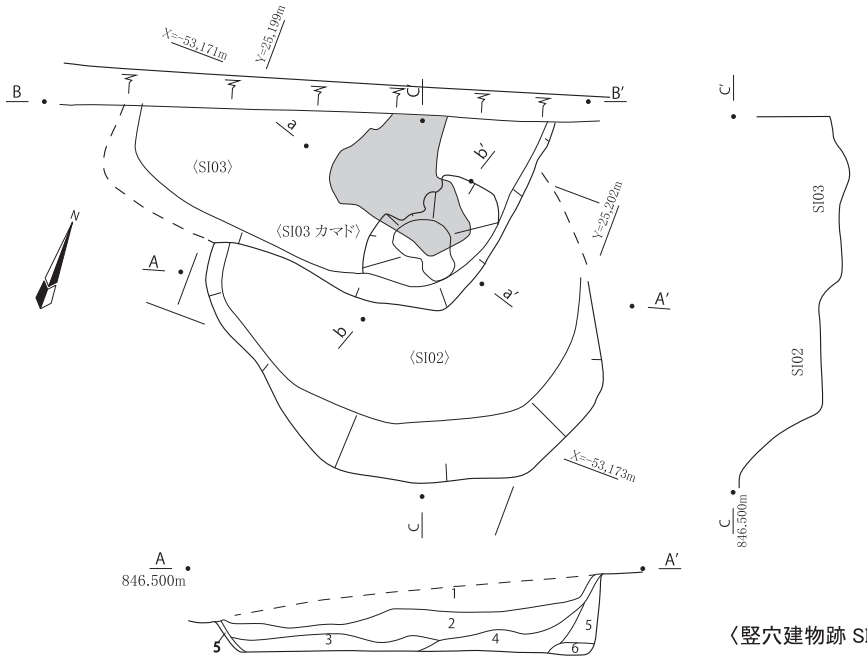
〈竪穴建物跡 SI01 平面図〉

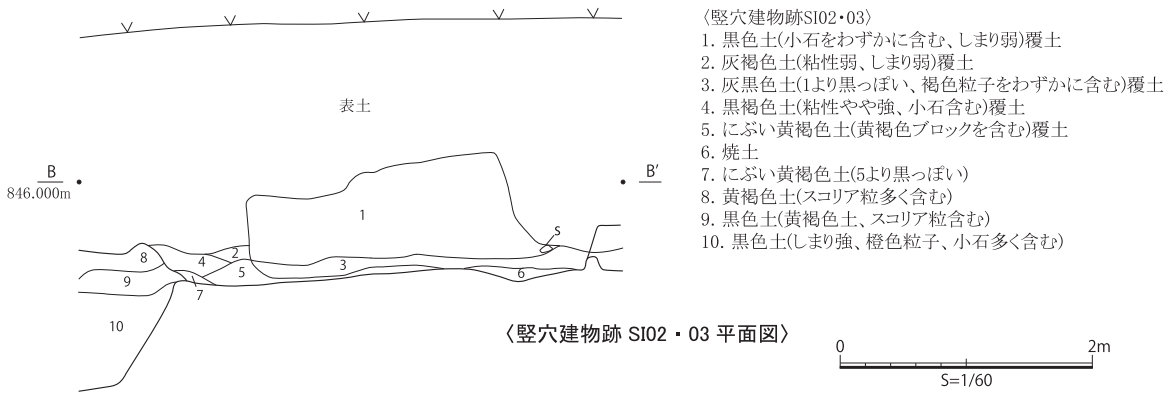


〈竪穴建物跡 SI01 遺物分布図〉

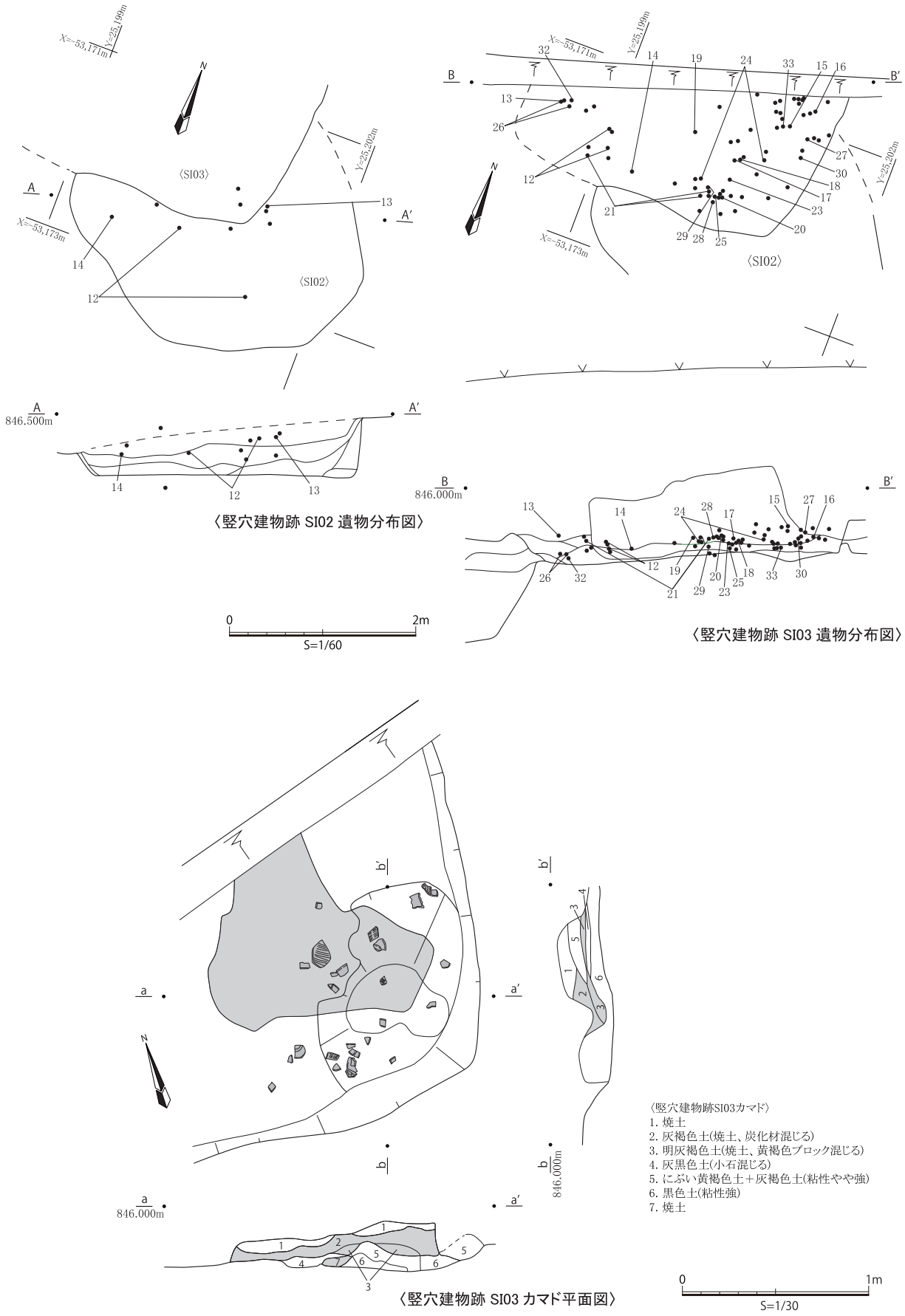
第８図　竪穴建物跡 SI01　平面図・遺物分布図



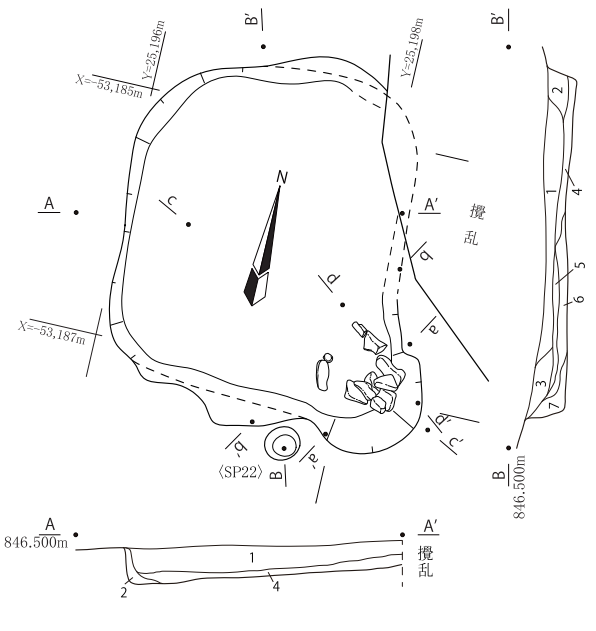




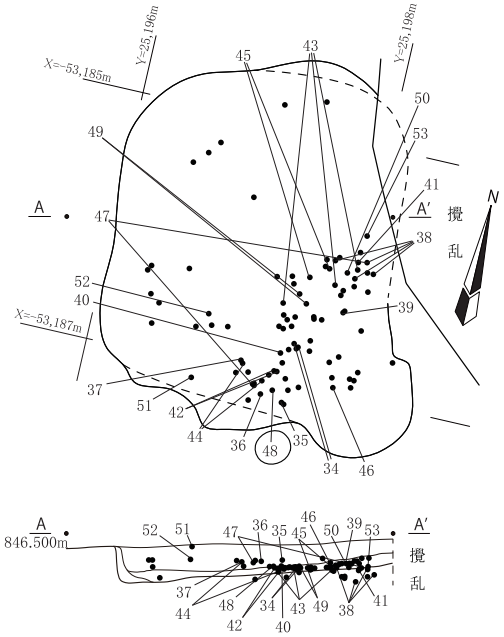
第９図 竪穴建物跡 SI01 カマド平面図、SI02・SI03 平面図



第10図　竪穴建物跡 SI02・SI03 遺物分布図、SI03 カマド平面図

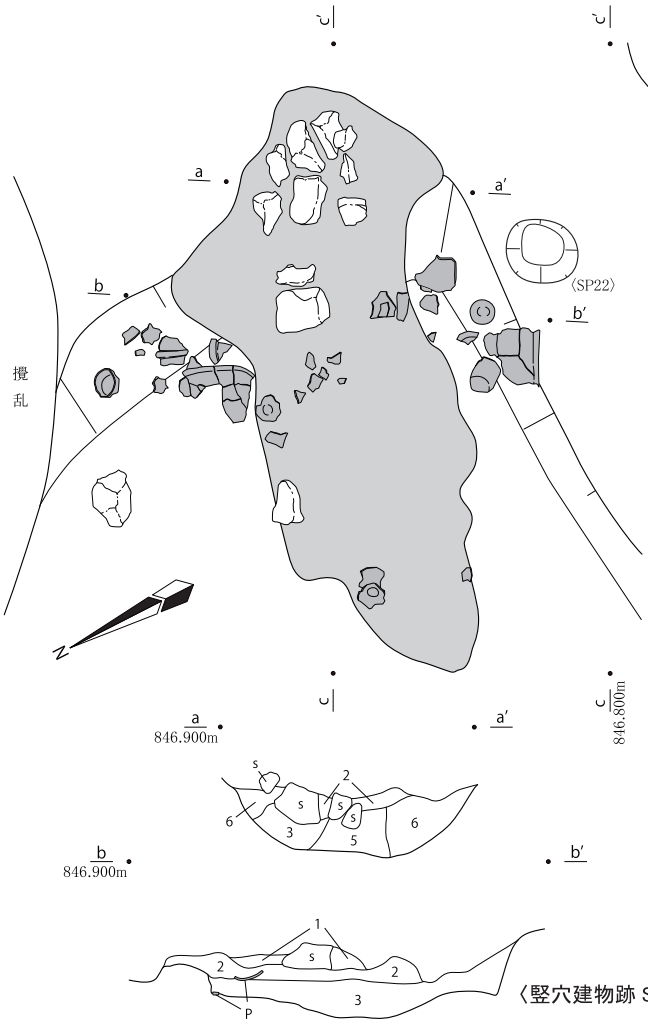


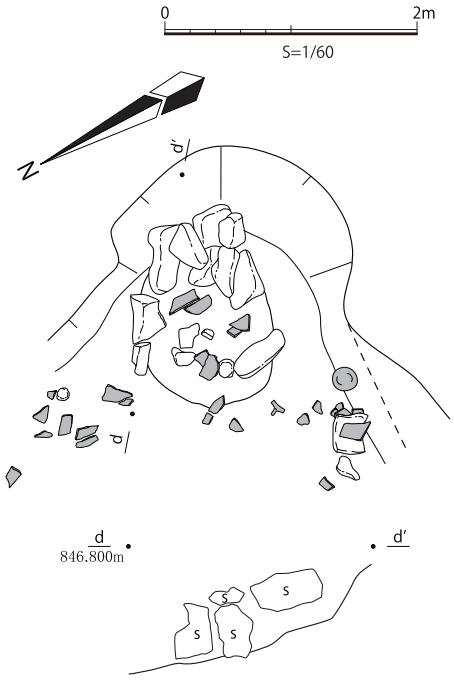
〈竪穴建物跡 SI04 平面図〉



〈竪穴建物跡 SI04 遺物分布図〉

〈竪穴建物跡SI04〉
1. 10YR2/1黒色粘質土(粘性やや強、しまりなし、スコリア粒子含む、砂混じり)
2. 10YR3/3黒褐色粘質土(粘性やや強、しまりなし、スコリア粒微量に含む、砂混じり)
3. 10YR2/2黒褐色砂質土(粘性弱、しまりなし、スコリア粒多く含む)
4. 10YR2/2黒褐色砂質土(粘性やや弱、しまり弱、スコリア粒含む、褐色粘土ブロック混じる)
5. 7.5YR4/6褐色粘土(粘性強、しまりやや強、粘土単層)カマド構築粘土
6. 10YR2/3黒褐色土(粘性弱、しまりやや強、スコリアなし)カマド内灰
7. 10YR3/1黒褐色粘質土(粘性やや強、しまり弱、5mm程の小礫含む)





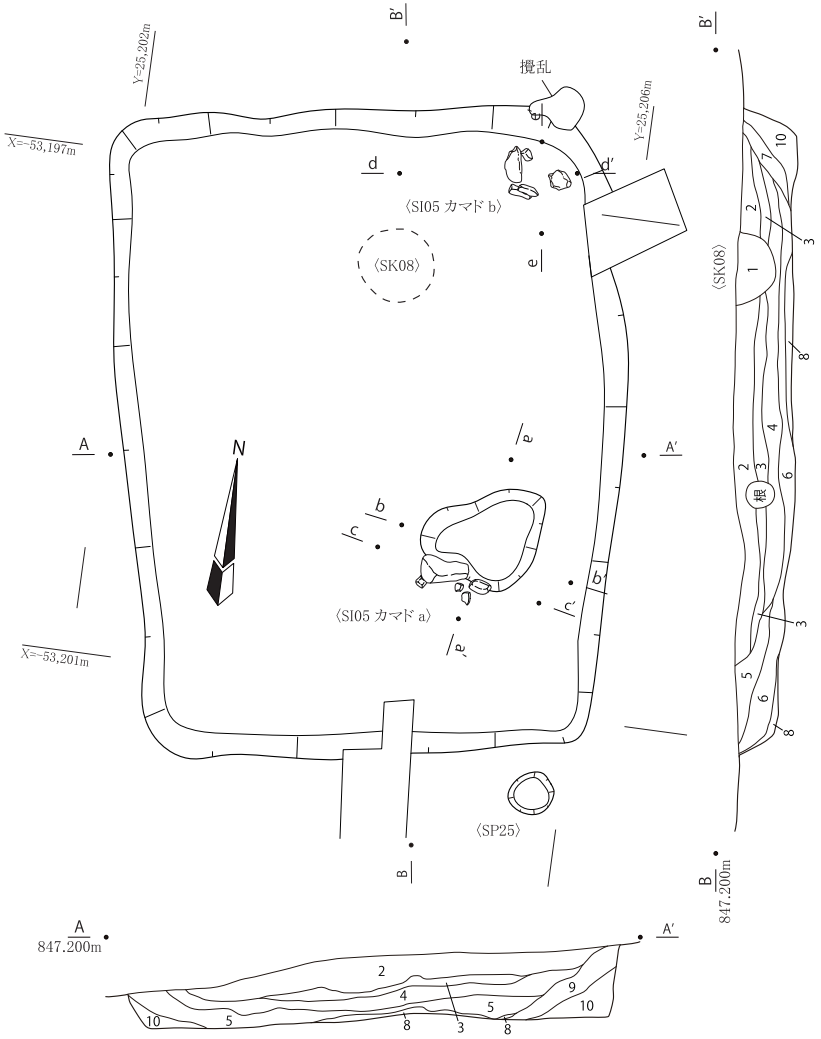
〈竪穴建物跡 SI04 カマド土器出土状況第 2 面〉

〈竪穴建物跡SI004カマド　第1面〉
1.10YR2/2黒褐色粘質土(粘性やや弱、しまりやや強、スコリア微量に含む、砂混じり)
2. 10YR3/3黒褐色粘質土(粘性強、しまり強、スコリア粒多量に含む)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土(焼土主体、粘性やや強、しまりなし)カマド内焼土
4. 10YR2/3黒褐色灰層(粘性弱、しまりやや強、スコリアなし)カマド内灰
5. 7.5YR4/6褐色粘土(粘性強、しまりやや強、粘土単層)カマド構築粘土
6. 10YR2/3黒褐色粘質土(粘性強、しまり強、スコリア粒多量に含む)

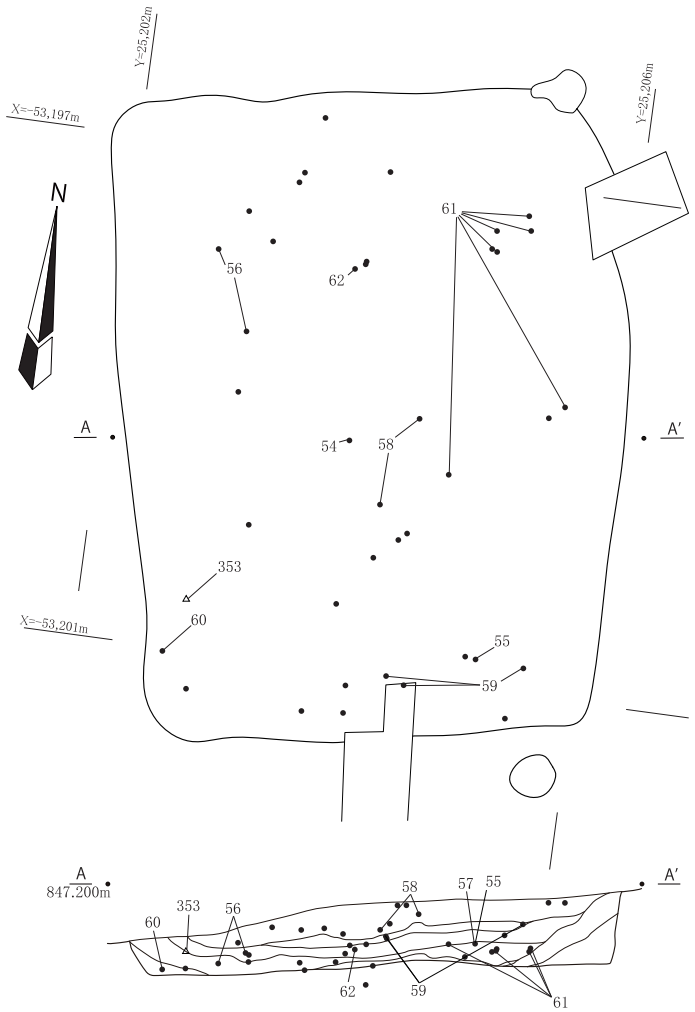
〈竪穴建物跡 SI04 カマド土器出土状況第 1 面〉

0　1m
1／30

第11図　竪穴建物跡 SI04 平面図・遺物分布図・カマド土器出土状況



〈竪穴建物跡 SI05 平面図〉



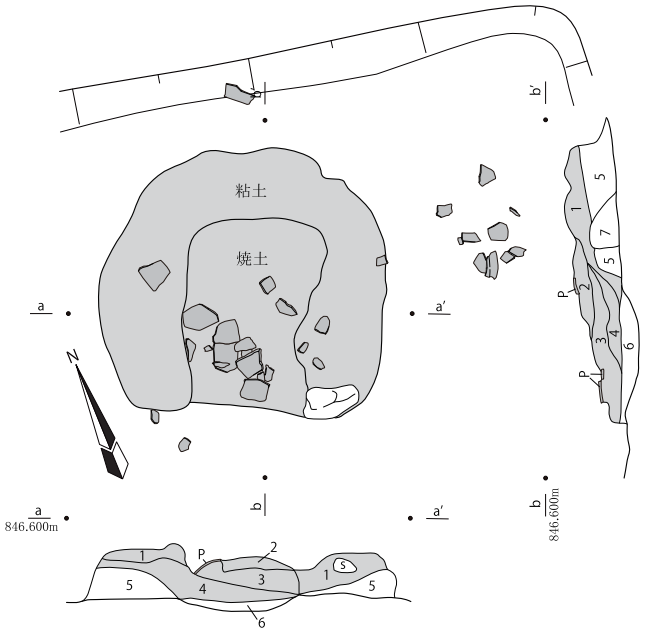
〈竪穴建物跡 SI05 遺物分布図〉

〈竪穴建物跡SI05〉

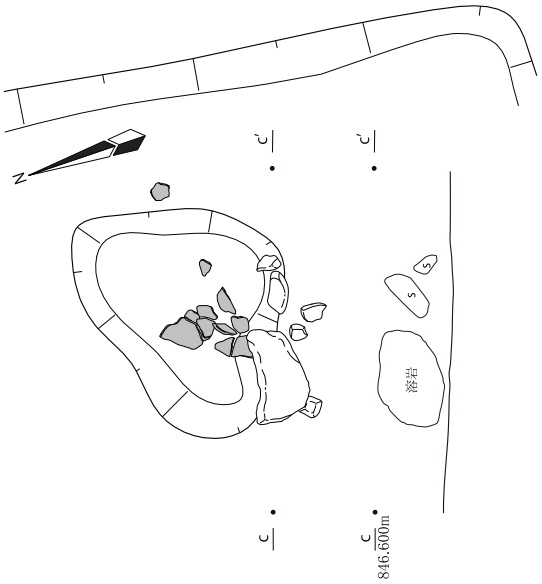
1. 10YR2/1黒色粘質土(粘性やや強、しまりなし、スコリア粒微量含む)SK08埋土
2. 10YR1.7/1黒色粘質土(粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒少量含む、砂混じり)
3. 10YR2/2黒褐色砂質土(粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒少量含む(2より少ない))
4. 10YR2/2黒褐色砂質土(粘性やや強、しまりなし、スコリア粒多量に含む)
5. 10YR3/2黒褐色砂質土(粘性なし、しまりやや弱、スコリア粒多量に含む)
6. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性強、しまりややあり、スコリア粒含まない)
7. 10YR2/3黒褐色砂(粘性なし、しまりややあり、スコリア粒多量に含む)
8. 10YR3/1黒褐色砂質土(粘性なし、しまりなし、スコリア粒少量含む)
9. 10YR3/2黒褐色土(粘性なし、しまりなし、スコリア粒多量に含む)
10. 10YR3/2黒褐色砂質土(粘性なし、しまりなし、スコリア少量含む)

0 2m
S=1/60

第12図 竪穴建物跡 SI05 平面図・遺物分布図

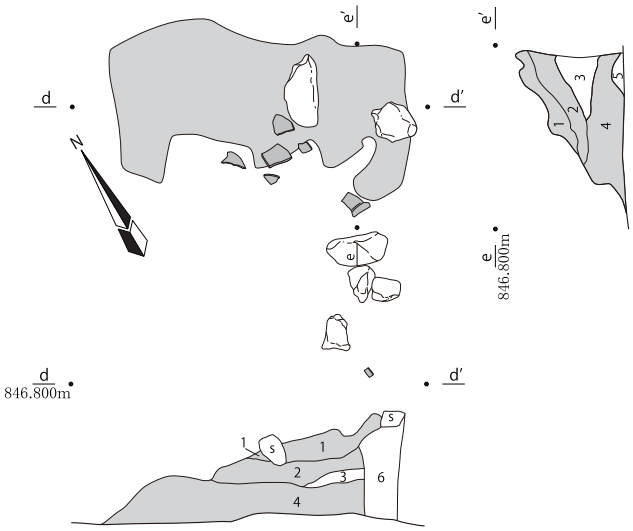


〈竪穴建物跡 SI05 カマド a 平面図第 1 面 〉



〈竪穴建物跡 SI05 カマド a 平面図第 2 面〉

〈 竪穴建物跡SI05カマドa 〉
1. 暗褐色粘土層(粘性強、しまり強)カマド構築粘土
2. 黒褐色粘質土(粘性やや強、しまりやや弱、焼土混じり)
3. 暗赤褐色粘質土(粘性やや強、しまりやや弱、灰少量混じる)焼土
4. 褐色焼土層(粘性強、しまり弱)焼土単層
5. 黒色粘質土(粘性やや弱、しまり強、スコリア粒多量に含む)
6. 黒褐色灰層(粘性なし、しまり弱)
7. 黒褐色砂質土(粘性弱、しまりやや弱、スコリア少量含む)

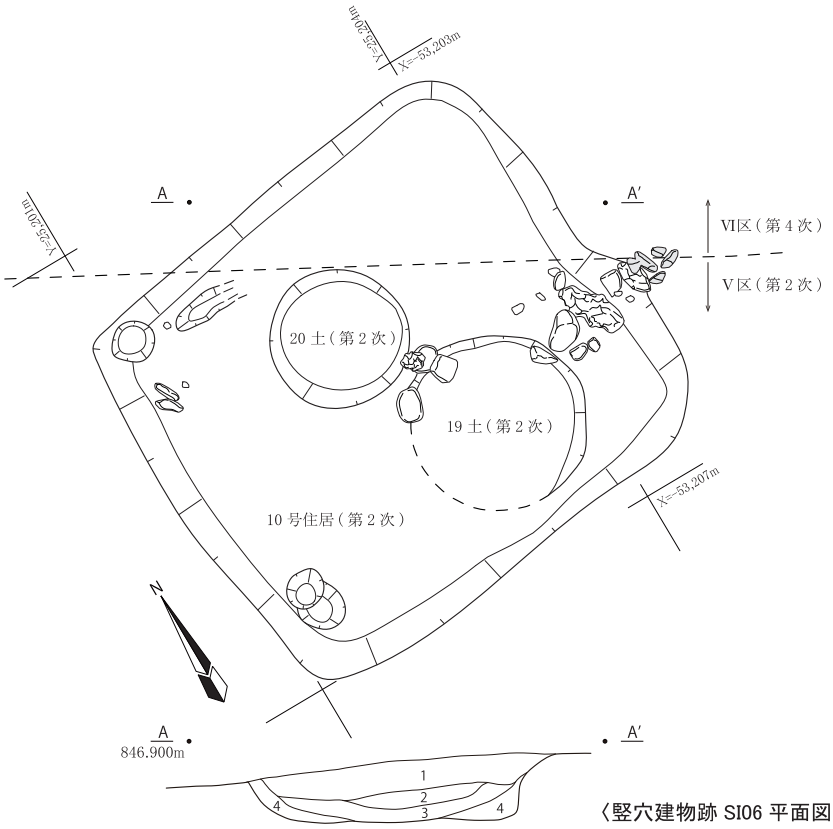


〈竪穴建物跡 SI05 カマド b 平面図〉

〈 竪穴建物跡SI05カマドb 〉
1. 明赤褐色焼土(粘性やや強、しまり弱)
2. 黒褐色粘質土(粘性強、しまりやや強、粘土混じる)
3. 黒褐色砂質土(粘性なし、しまり弱、小石含む、2より黒い)
4. 黒色土(粘性弱、しまりやや強、焼土混じる)
5. 暗褐色砂質土(粘性なし、しまり弱)
6. 黒褐色粘質土(粘性やや強、しまり弱)

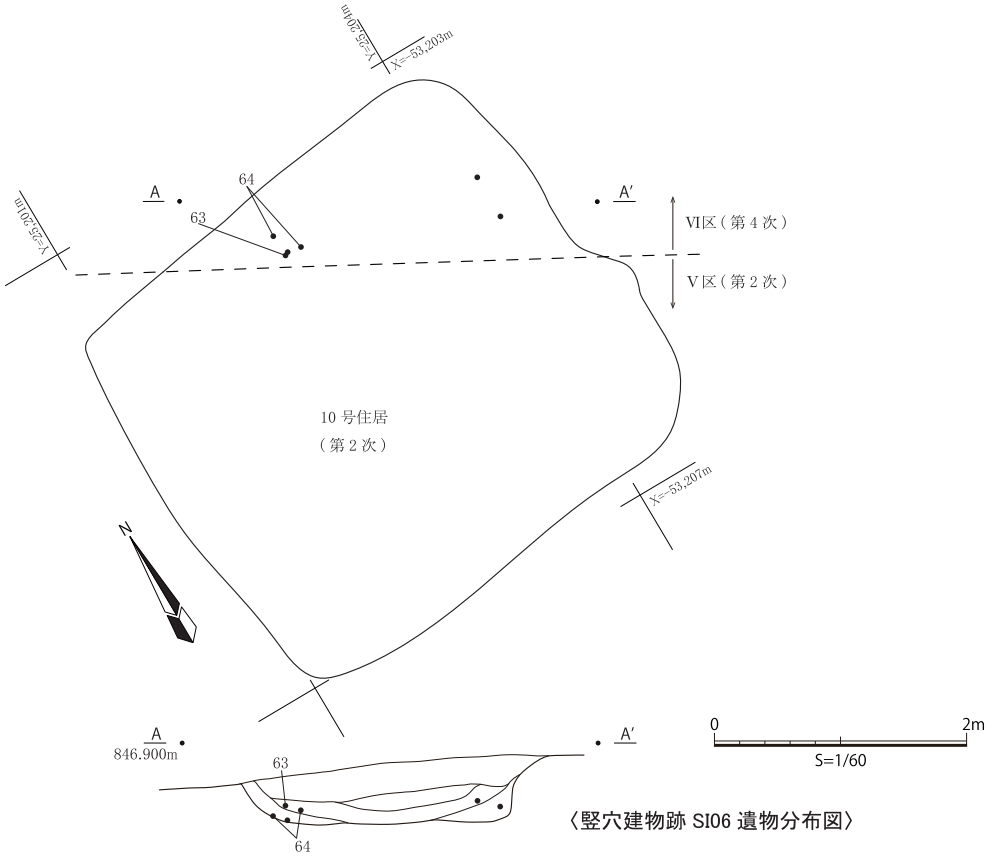
0 1m
S=1/30

第13図 竪穴建物跡 SI05 カマド a・b 平面図



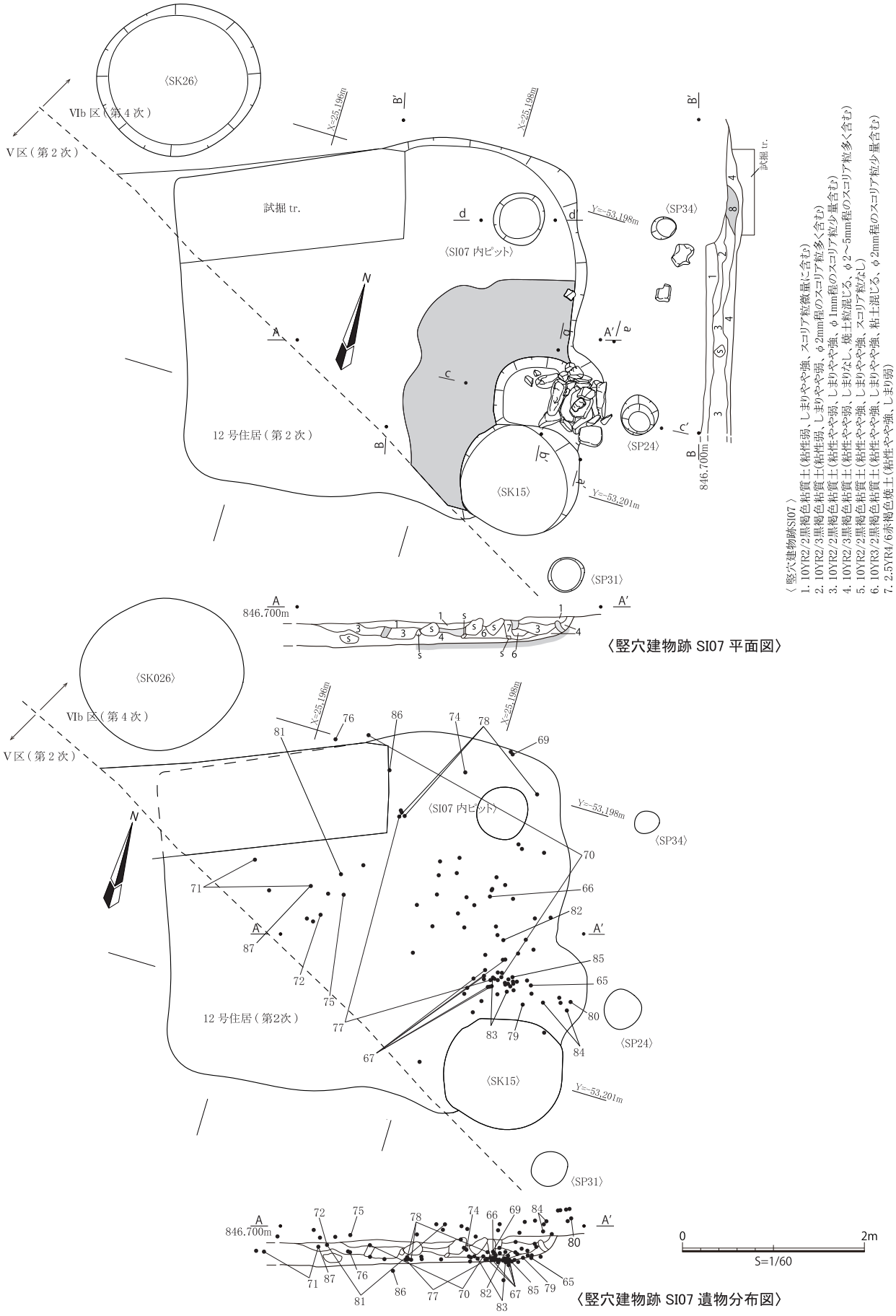
〈竪穴建物跡 SI06 平面図〉

〈 竪穴建物跡SI06 〉
1. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性やや弱、しまりなし、2～5mm程のスコリア粒少量含む、細砂微量含む)
2. 10YR2/3黒褐色土(粘性弱、しまりやや強、スコリア粒少量含む、2mm程の小石多く含む)
3. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性弱、しまり弱、2mm程の小石多く含む、砂を多量に含む)
4. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性なし、しまりなし、極小のスコリア粒多量に含む)



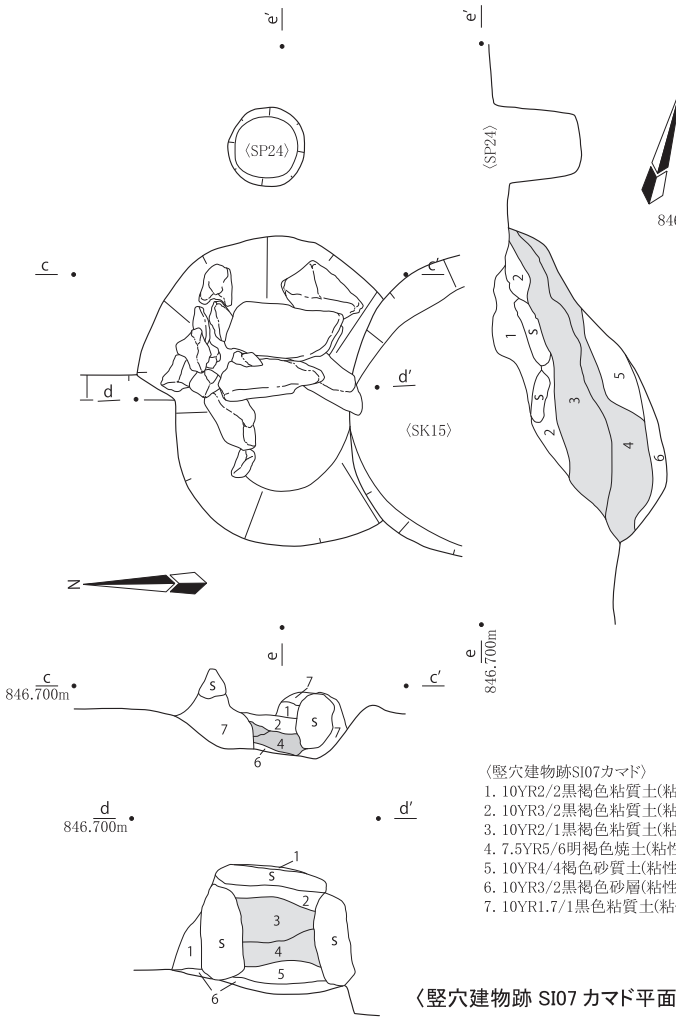
〈竪穴建物跡 SI06 遺物分布図〉

第14図 竪穴建物跡 SI06 平面図・遺物分布図

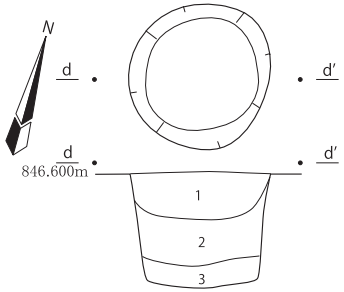


第15図　竪穴建物跡 SI07 平面図・遺物分布図

〈竪穴建物跡 SI07 カマド周辺礫散乱状況〉



〈竪穴建物跡 SI07 カマド平面図〉



〈竪穴建物跡 SI07 北東隅土坑〉

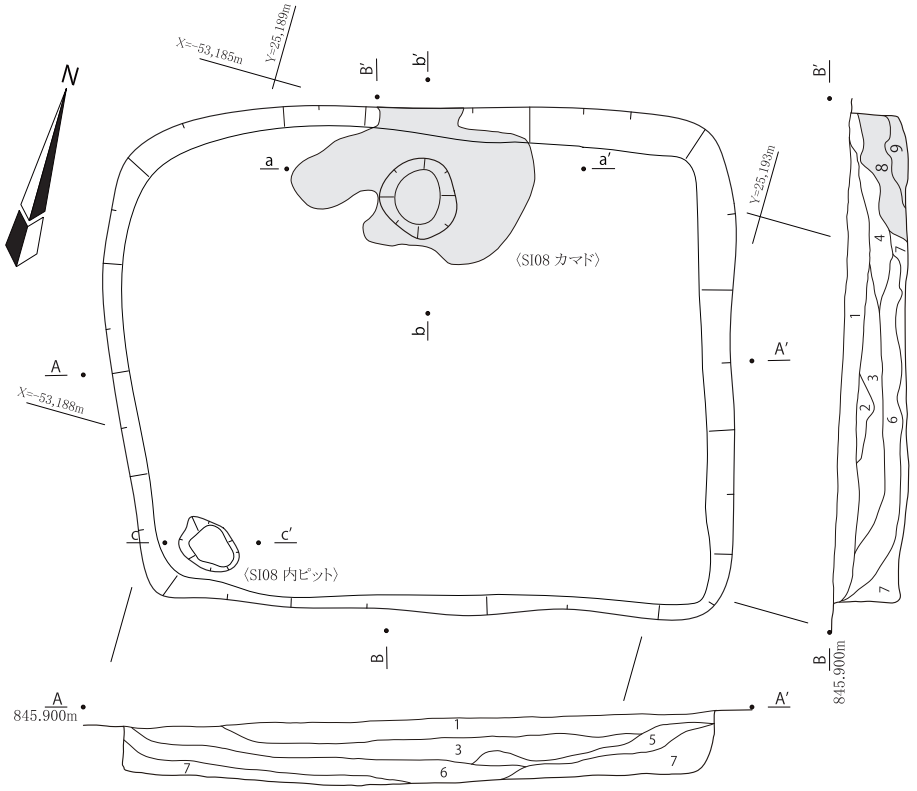
〈 竪穴建物跡SI07内土坑セクション〉
1. 10YR2/1黒色粘質土(粘性やや弱、しまりやや弱、小石多く含む、φ2mm程のスコリア粒多く含む)
2. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性やや強、しまりなし、φ2mm程のスコリア粒多く含む)
3. 5YR5/6明赤褐色焼土(粘性なし、しまりなし、焼礫主体)

〈竪穴建物跡SI07カマド〉
1. 10YR2/2黒褐色粘質土(粘性やや強、しまり弱、黄褐色粘土混じる)
2. 10YR3/2黒褐色粘質土(粘性強、しまりやや強、黄褐色粘土ブロック混じる)
3. 10YR2/1黒褐色粘質土(粘性やや強、しまり弱、焼土混じる)
4. 7.5YR5/6明褐色焼土(粘性やや弱、しまり弱、焼土単層)
5. 10YR4/4褐色砂質土(粘性弱、しまり弱、灰多量含む)
6. 10YR3/2黒褐色砂層(粘性なし、しまりなし、灰単層)
7. 10YR1.7/1黒色粘質土(粘性やや強、しまりやや強)

0 1m

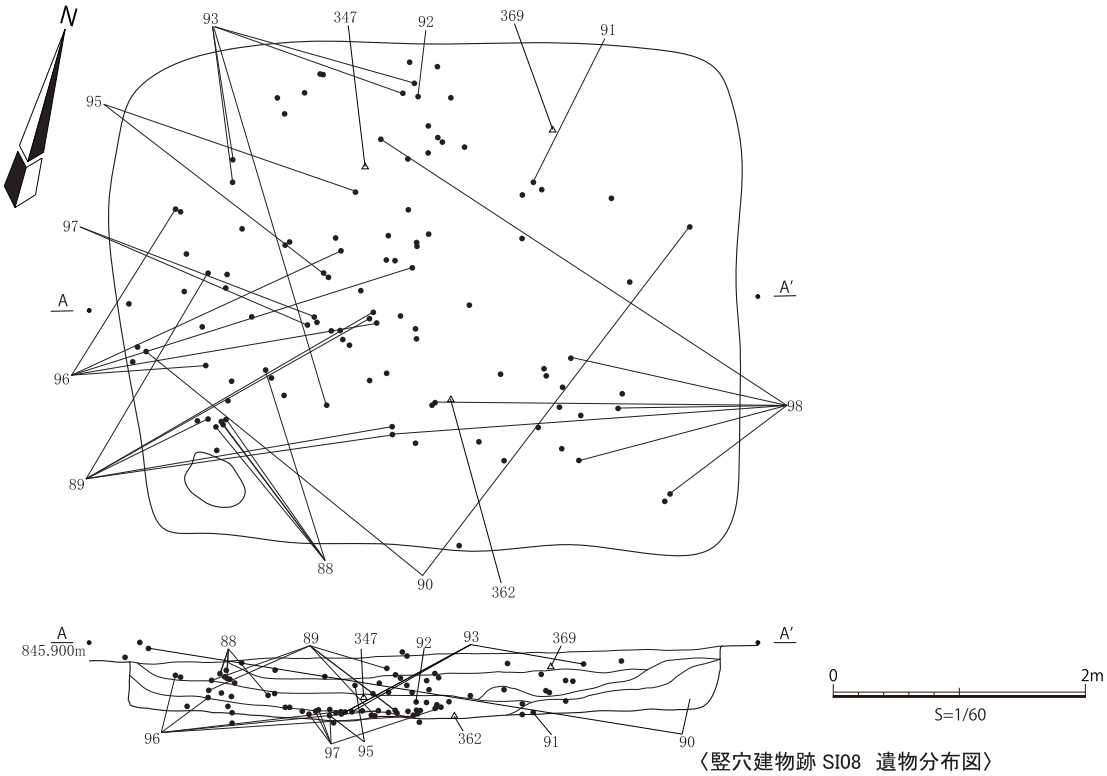
S=1/30

第16図 竪穴建物跡 SI07 カマド周辺礫散乱状況・平面図、北東隅土坑平面図



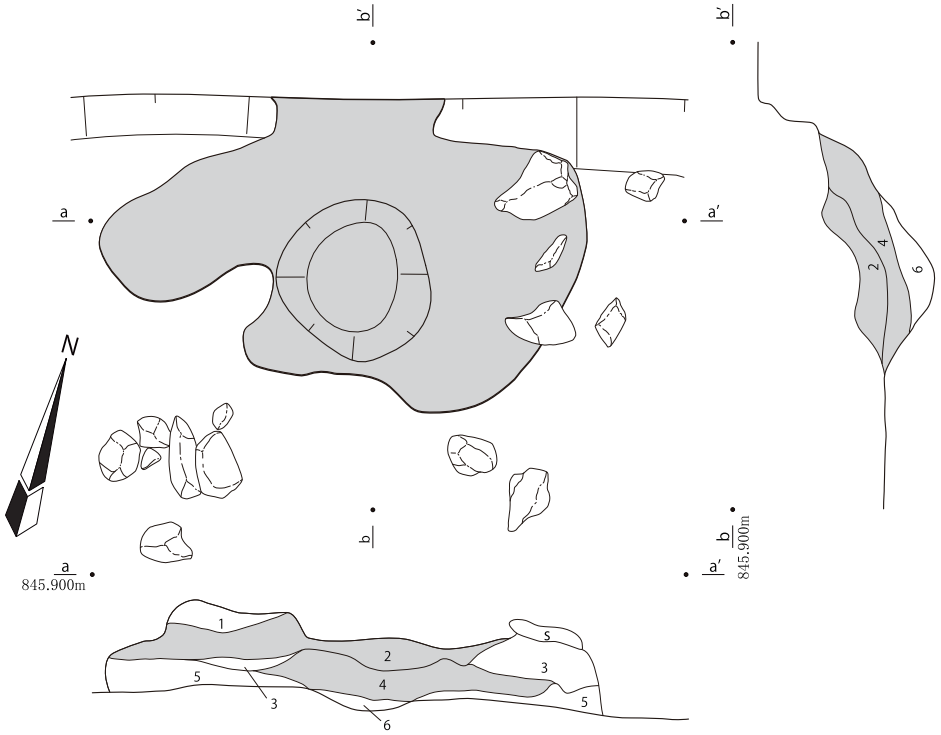
〈竪穴建物跡 SI08〉
1. 10YR1.7/1 黒色粘質土（粘性やや強、しまりなし、φ2mm 程のスコリア粒少量含む、極小砂礫少量含む）
2. 10YR2/1 黒色粘質土（粘性やや強、しまりやや弱、φ2mm 程のスコリア粒微量に含む、極小砂礫少量含む）
3. 10YR2/2 黒褐色土（粘性弱、しまりなし、φ10mm 程のスコリア粒多く含む、大礫微量に入る）
4. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性弱、しまりやや弱、極小スコリア粒微量に含む）
5. 10YR3/2 黒褐色粘質土（粘性なし、しまりやや強、φ2mm 程のスコリア粒多量に含む）
6. 10YR2/3 黒褐色粘質土（粘性弱、しまりなし、φ2mm 程のスコリア粒多量に含む、小礫入る、砂混じり）
7. 10YR2/2 黒褐色土（粘性なし、しまりなし、φ2mm 程のスコリア粒多量に含む、小礫入る、砂混じり）
8. 2.5YR4/6 赤褐色粘質土（粘性やや強、しまりなし、焼土）
9. 2.5YR4/8 赤褐色礫層（粘性なし、しまりなし、焼けた小礫主体）

〈竪穴建物跡 SI08 平面図〉



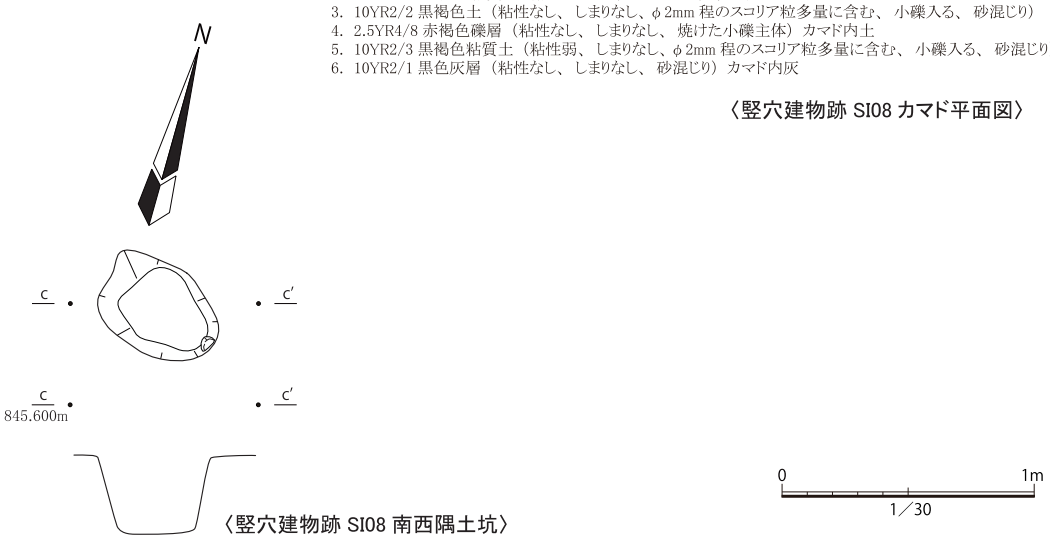
〈竪穴建物跡 SI08 遺物分布図〉

第17図 竪穴建物跡 SI08 平面図・遺物分布図



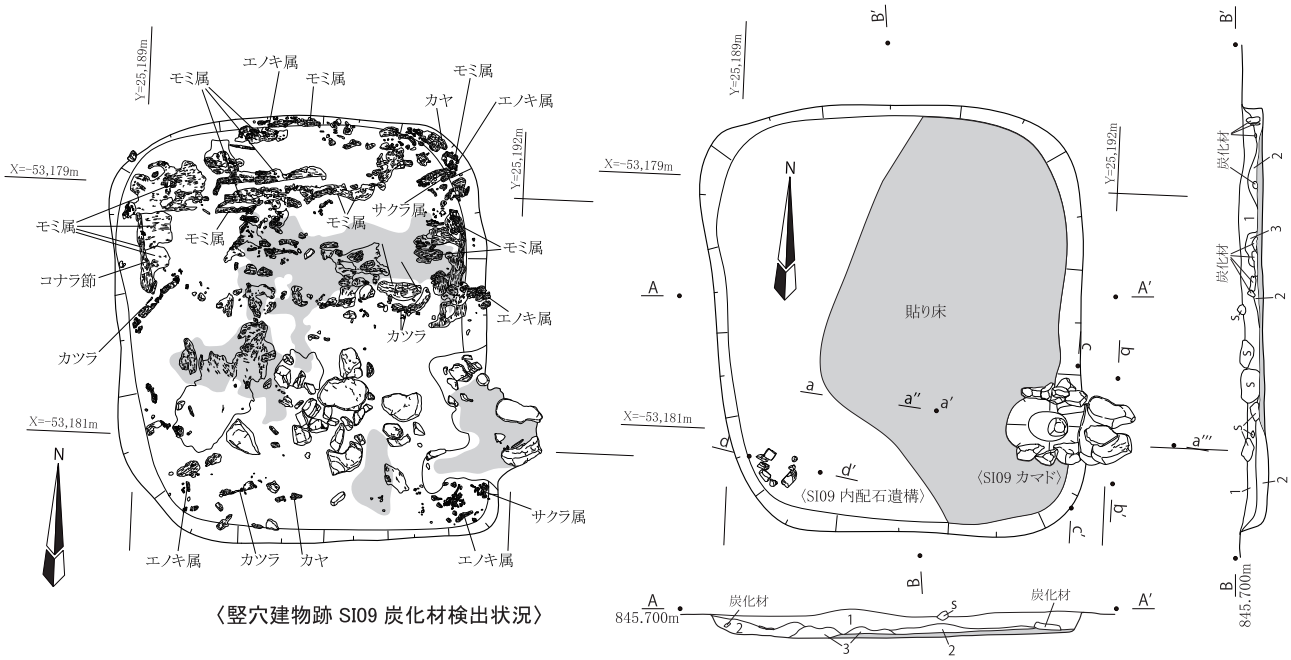
〈竪穴建物跡 SI08 カマド〉
1. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性弱、しまりやや弱、極小スコリア粒微量に含む）
2. 2.5YR4/6 赤褐色粘質土（粘性やや強、しまりなし、焼土）カマド内土
3. 10YR2/2 黒褐色土（粘性なし、しまりなし、φ2mm 程のスコリア粒多量に含む、小礫入る、砂混じり）
4. 2.5YR4/8 赤褐色礫層（粘性なし、しまりなし、焼けた小礫主体）カマド内土
5. 10YR2/3 黒褐色粘質土（粘性弱、しまりなし、φ2mm 程のスコリア粒多量に含む、小礫入る、砂混じり）
6. 10YR2/1 黒色灰層（粘性なし、しまりなし、砂混じり）カマド内灰

〈竪穴建物跡 SI08 カマド平面図〉

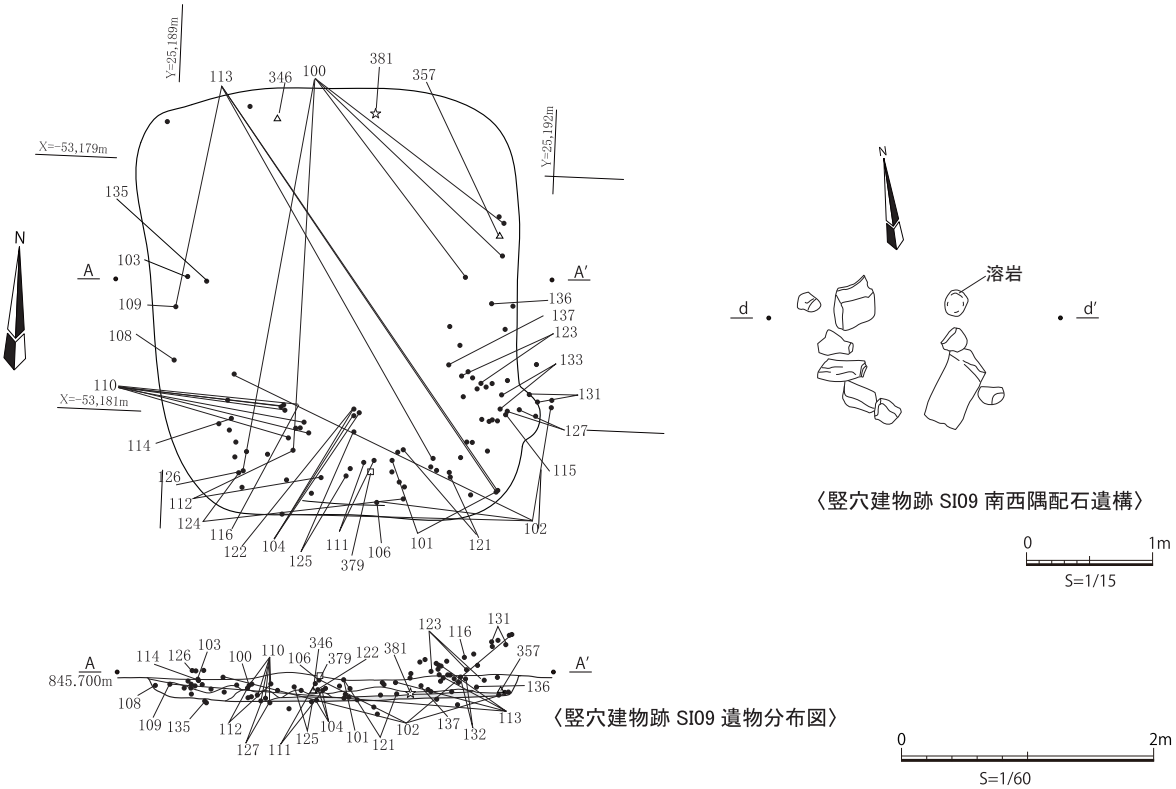


〈竪穴建物跡 SI08 南西隅土坑〉

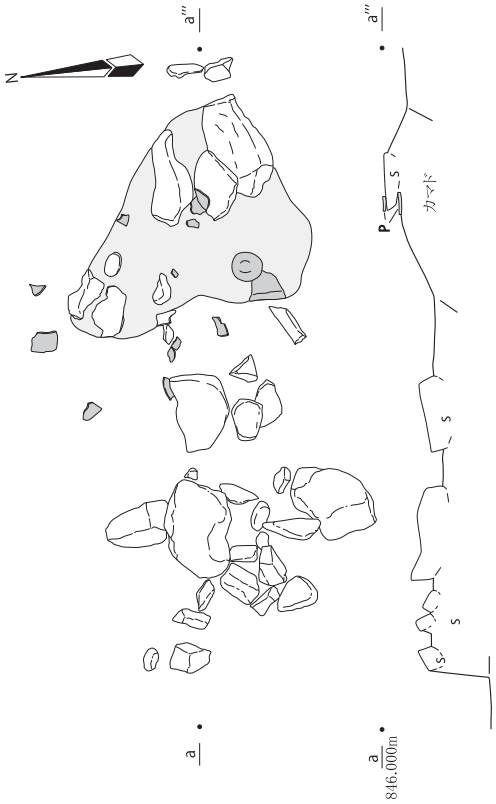
第18図　竪穴建物跡 SI08 カマド平面図、南西隅土坑平面図



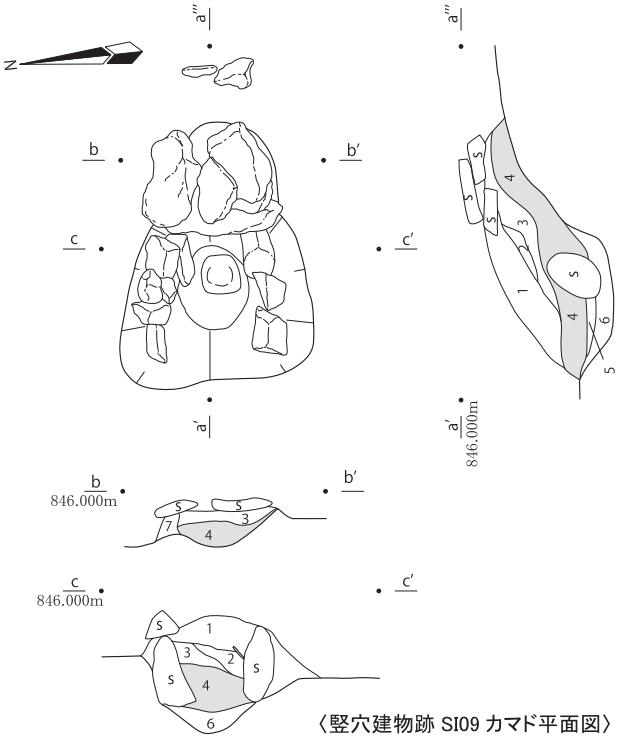
〈竪穴建物跡 SI09〉
1. 10YR2/2 黒褐色土（粘性やや弱、しまりやや弱、スコリア粒多く含む）
2. 10YR1.7/1 黒色土（粘性弱、しまりやや強、炭多く含む）
3. 5YR5/6 明赤褐色焼土（粘性やや強、しまりやや弱、炭化材多く含む、焼土単層）



第19図 竪穴建物跡 SI09 炭化材検出状況・平面図・遺物分布図、南西隅配石遺構平面図

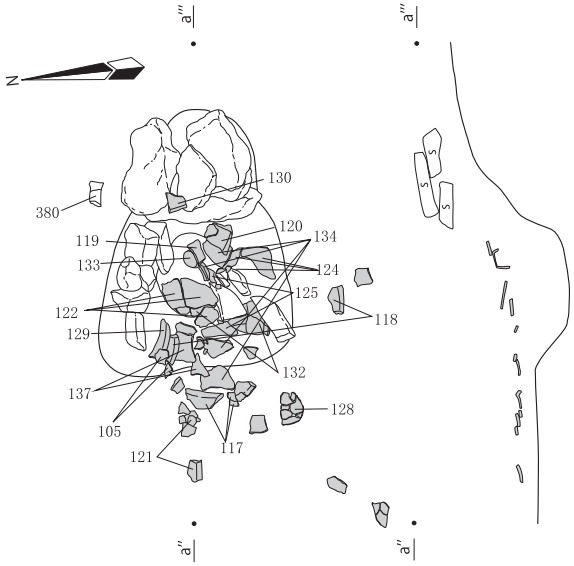


〈竪穴建物跡 SI09 カマド周辺礫散乱状況〉



〈竪穴建物跡 SI09 カマド平面図〉

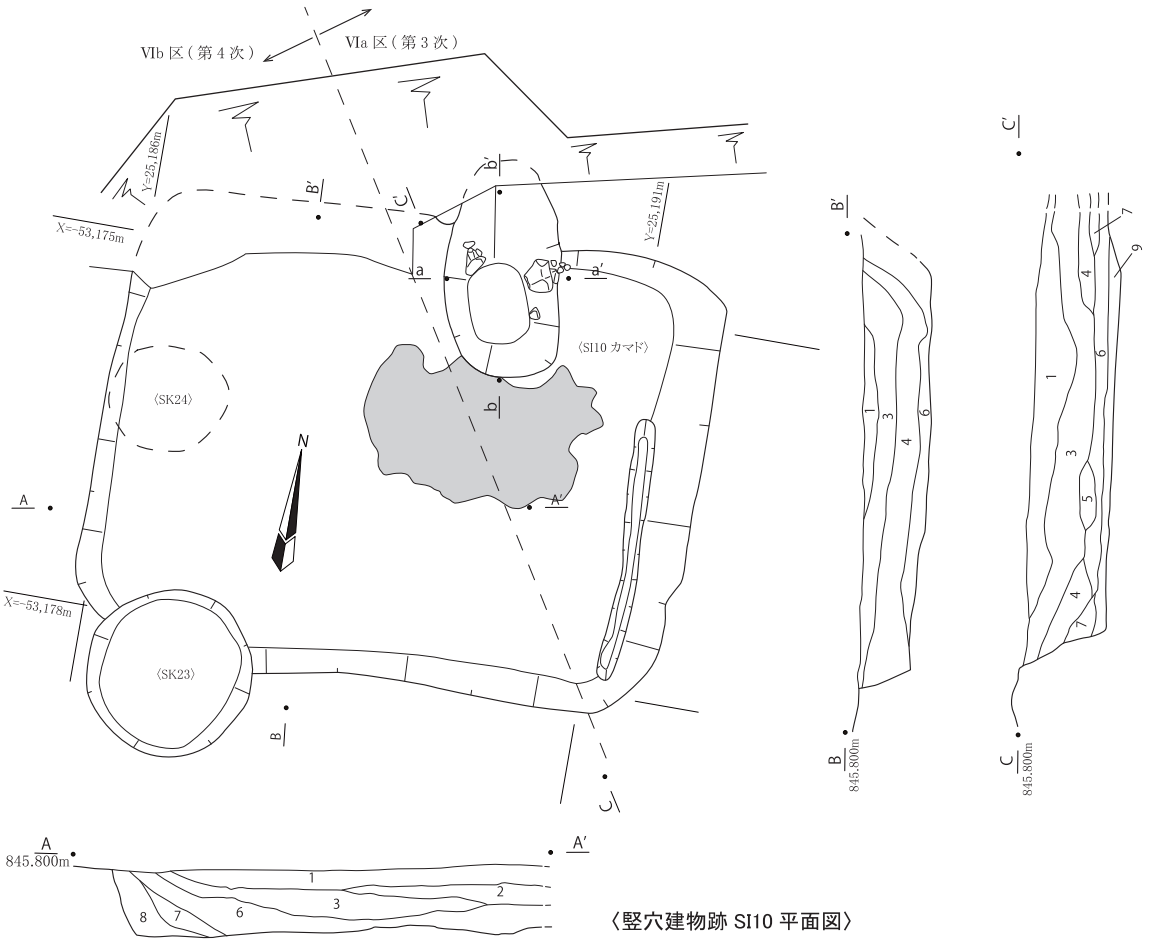
〈竪穴建物跡SI09カマド〉
1. 10YR2/3黒褐色粘質土(粘性やや弱、しまり弱、
スコリア粒少量含む、砂粒少量含む)
2. 10YR2/3黒褐色粘質土(粘性弱、しまりやや弱、
やや砂質、スコリア粒多く含む、砂粒多く含む)
3. 2と同じ土に粘土ブロック混じる
4. 5YR4/6赤褐色焼土層(粘性やや強、しまりなし)
5. 5YR3/6暗赤褐色砂質土(礫主体、粘性弱、しまりなし、
砂粒多く含む、炭化材多く含む)
6. 10YR2/2黒褐色灰層(粘性なし、しまり弱、
砂粒少量含む、小石多く含む)



〈竪穴建物跡 SI09 カマド内土器出土状況〉

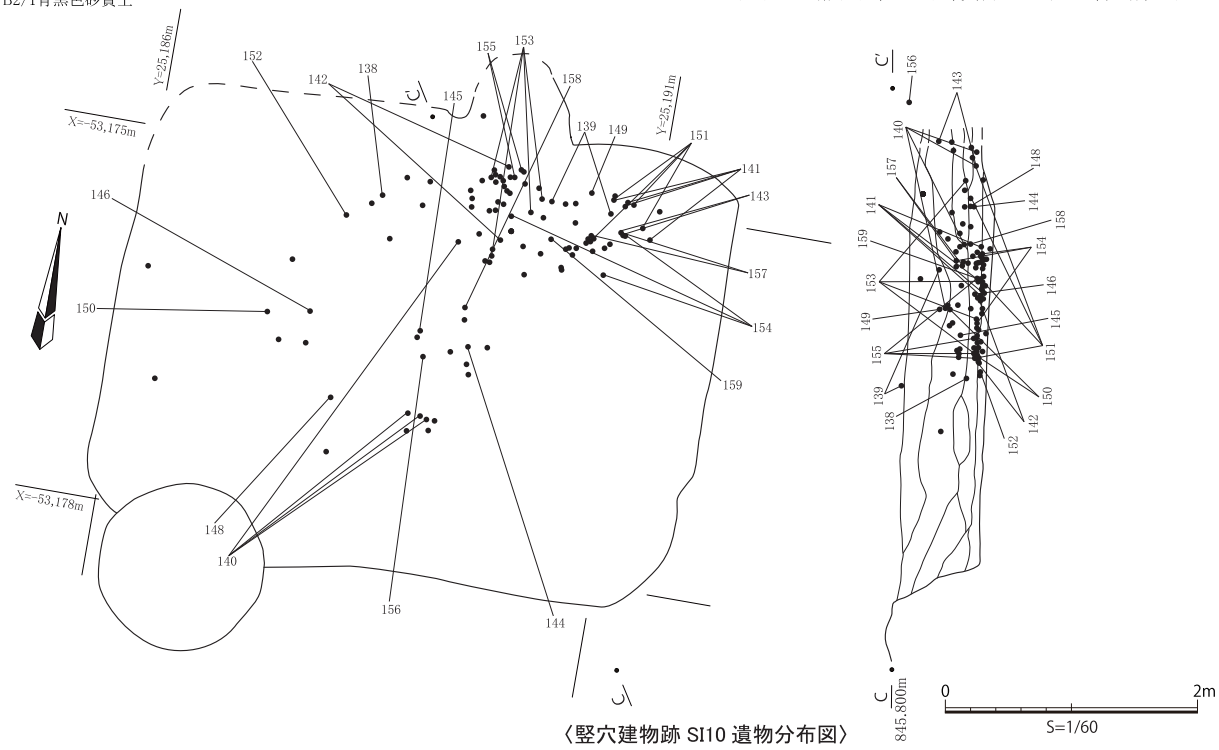
0 1m
S=1/30

第２０図　竪穴建物跡 SI09 カマド礫散乱状況・平面図・土器出土状況



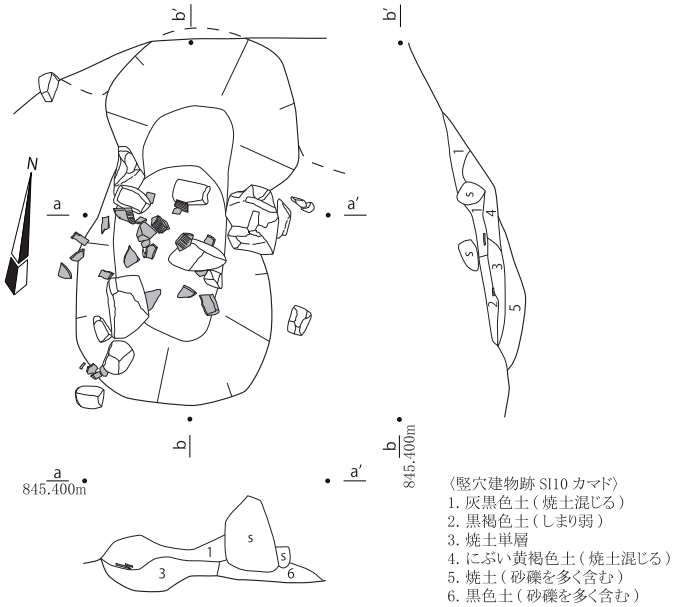
〈竪穴建物跡 SI10 平面図〉

〈竪穴建物跡SI10〉
1. 5B1.7/1青黒色粘質土(粘性やや強、小礫を微量に含む)
2. 10YR1.7/1黒色粘質土(粘性やや弱、しまりやや弱、スコリア粒少量含む)
3. N3/暗灰色砂質土(粘性やや弱、φ5～30mm程の礫を多く含む、スコリア粒微量に含む)
4. N3/暗灰色砂質土
5. 5PB2/1青黒色砂質土
6. 2.5Y2/1黒色土(粘性やや強)
7. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土(粘性やや強)
8. 10YR3/2黒褐色土(粘性なし、しまりなし、スコリア粒多量に含む)
9. 10Y2/1黒色土(粘性強、しまり強、黄褐色ブロックを含む)貼り床？

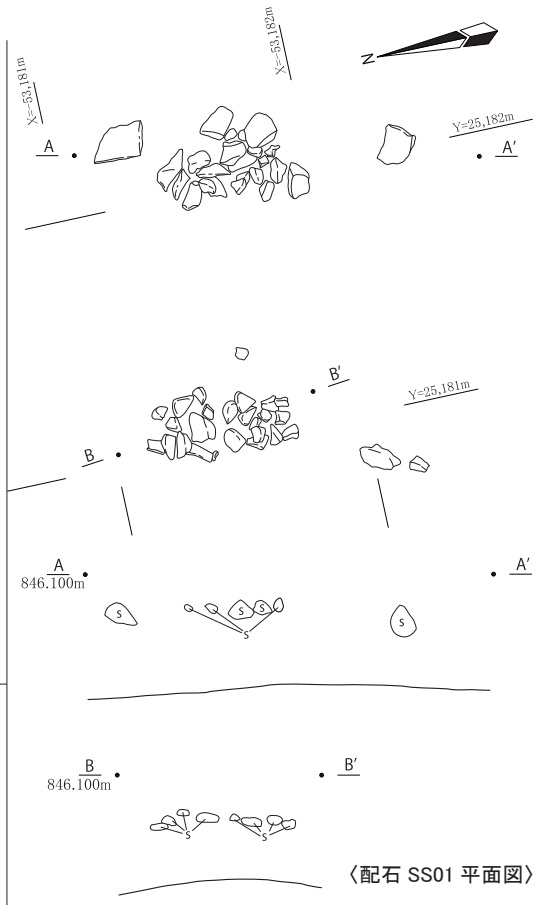


〈竪穴建物跡 SI10 遺物分布図〉

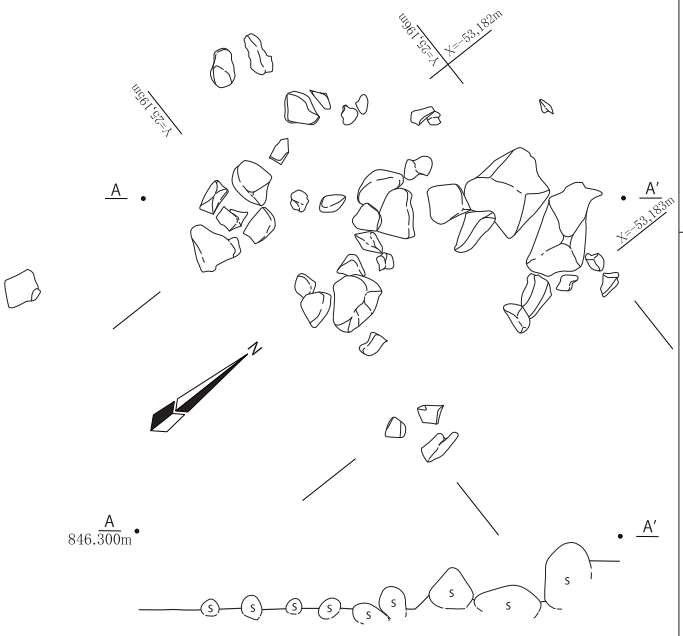
第２１図　竪穴建物跡 SI10 平面図・遺物分布図



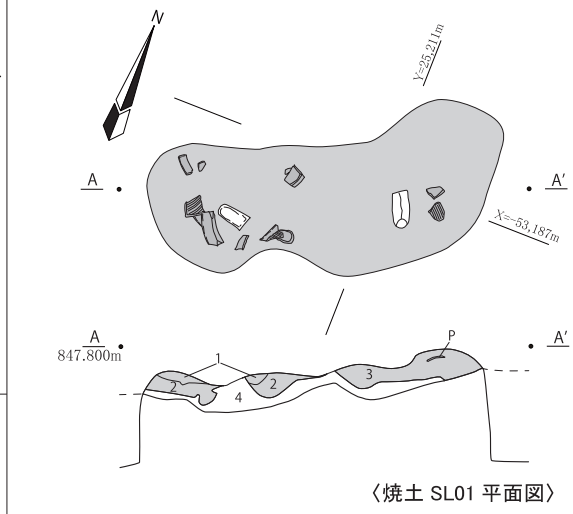
〈竪穴建物跡 SI10 カマド平面図〉



〈配石 SS01 平面図〉

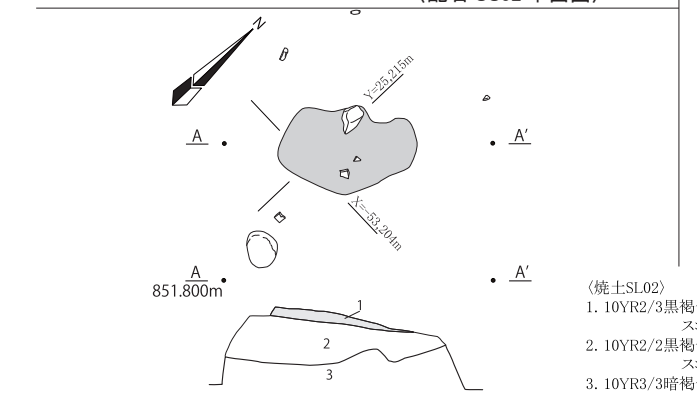


〈配石 SS02 平面図〉



〈焼土 SL01 平面図〉

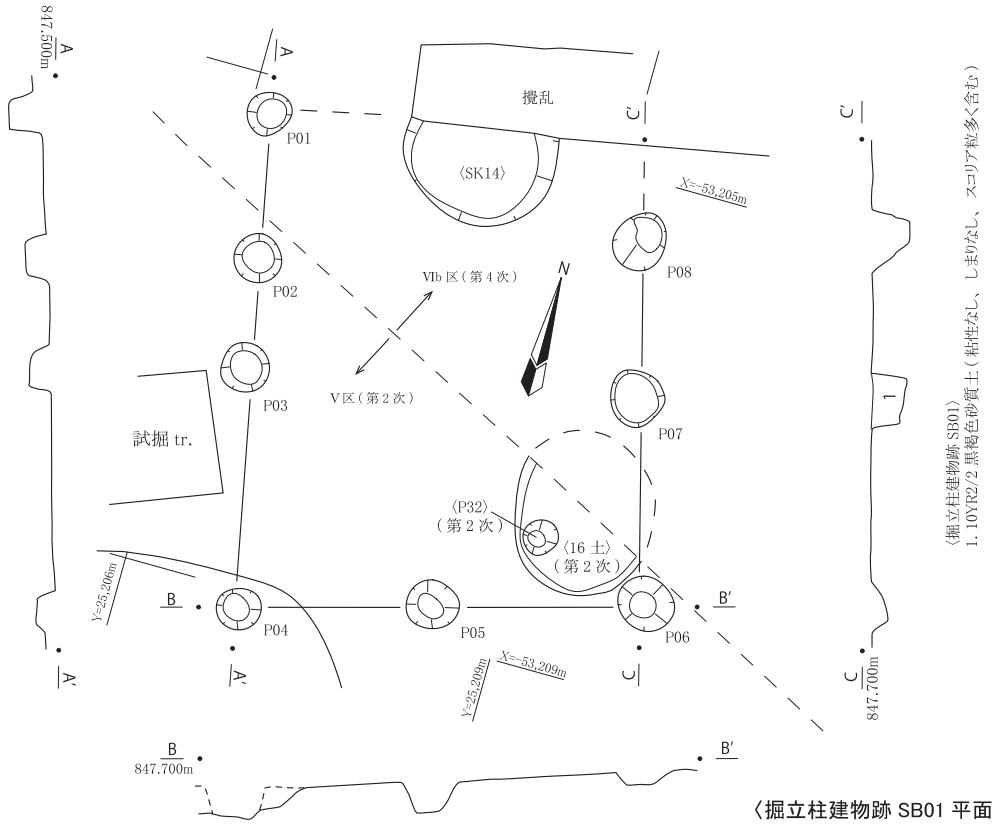
〈焼土SL01〉
1. 黄褐色土(しまり弱、黒色土＋焼土を含む)
2. 灰褐色土(しまりやや強、橙色ブロックを含む)
3. 赤褐色土(黒色土を含む、焼土)
4. 黒色土(しまり強、橙色ブロックを含む)



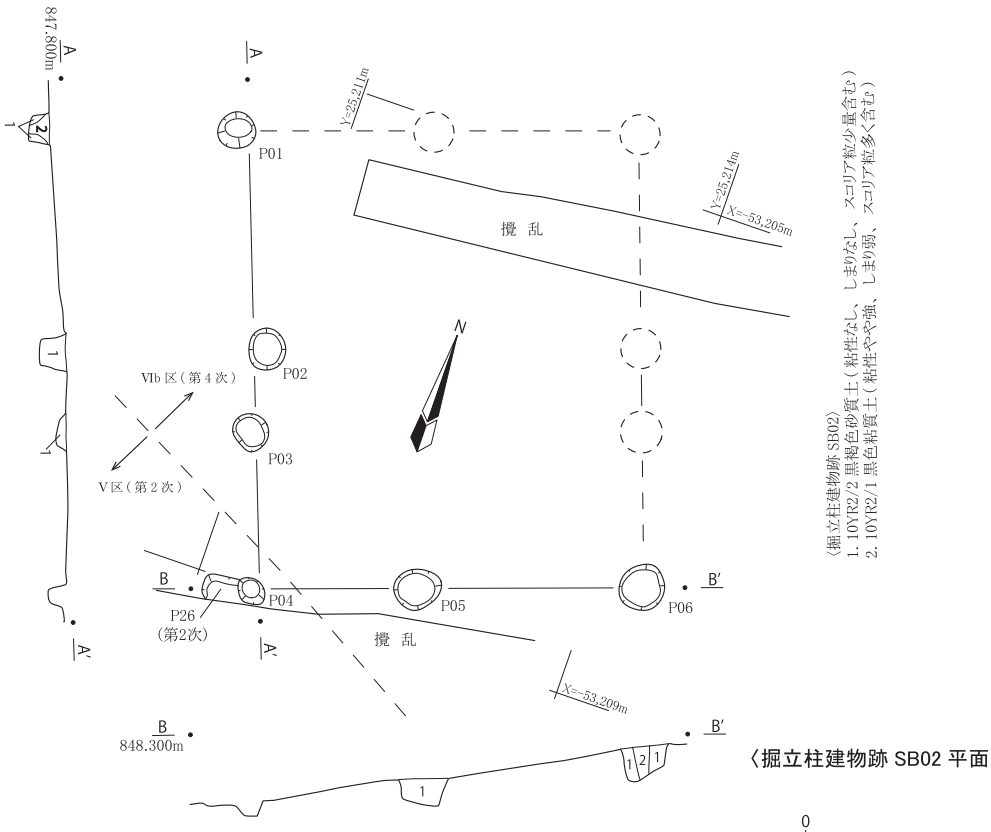
〈焼土 SL02 平面図〉

〈焼土SL02〉
1. 10YR2/3黒褐色土(粘性なし、しまり弱、
スコリア粒なし、焼土主体)
2. 10YR2/2黒褐色土(粘性なし、しまり弱、
スコリア粒少量含む、2mm程度の小石少量含む)
3. 10YR3/3暗褐色土(粘性なし、しまり弱、
スコリア粒微量含む、2mm程度の小石少量含む))

第２２図　竪穴建物跡 SI10 カマド、配石 SS01・SS02、焼土 SL01・SL02 平面図



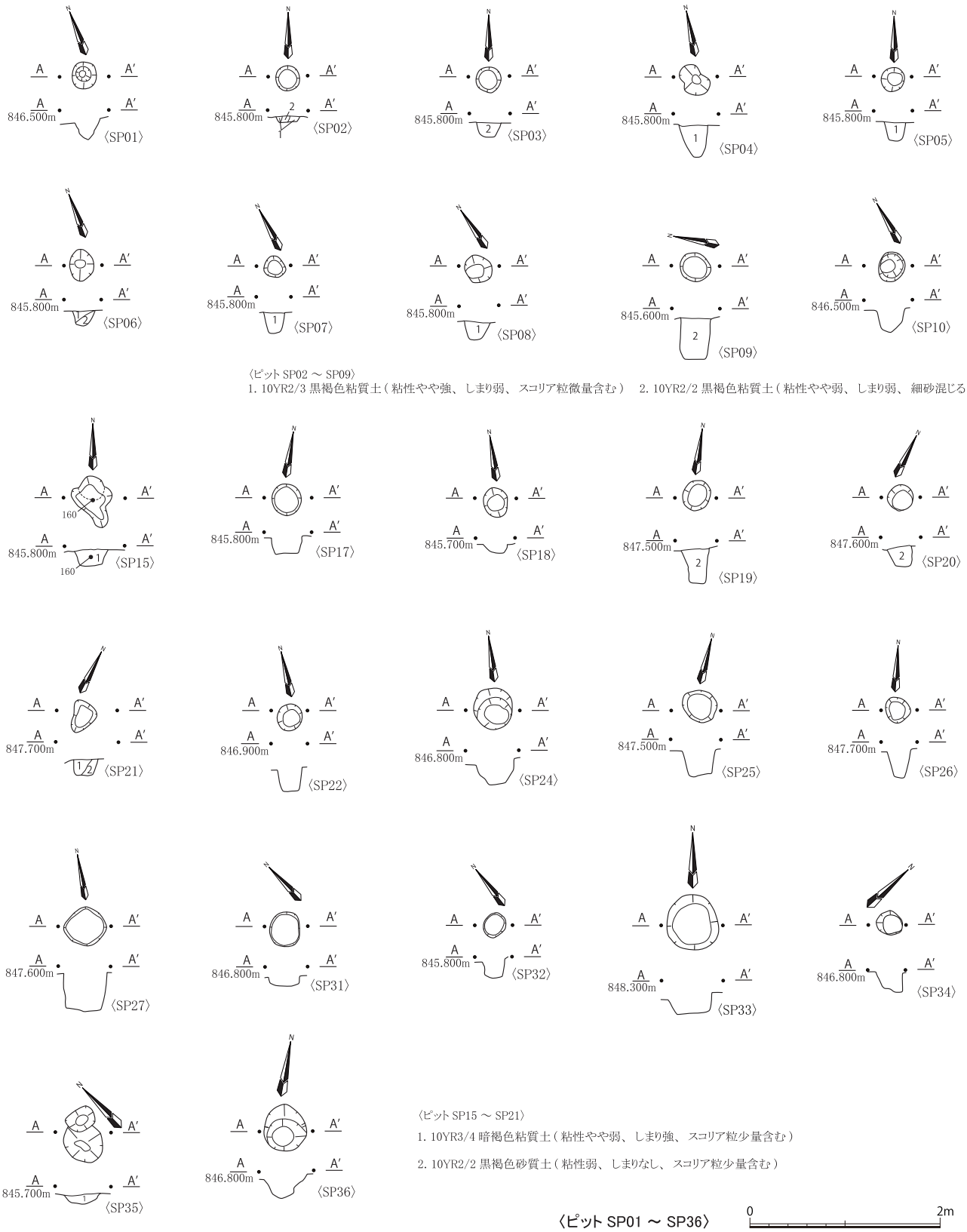
〈掘立柱建物跡 SB01 平面図〉



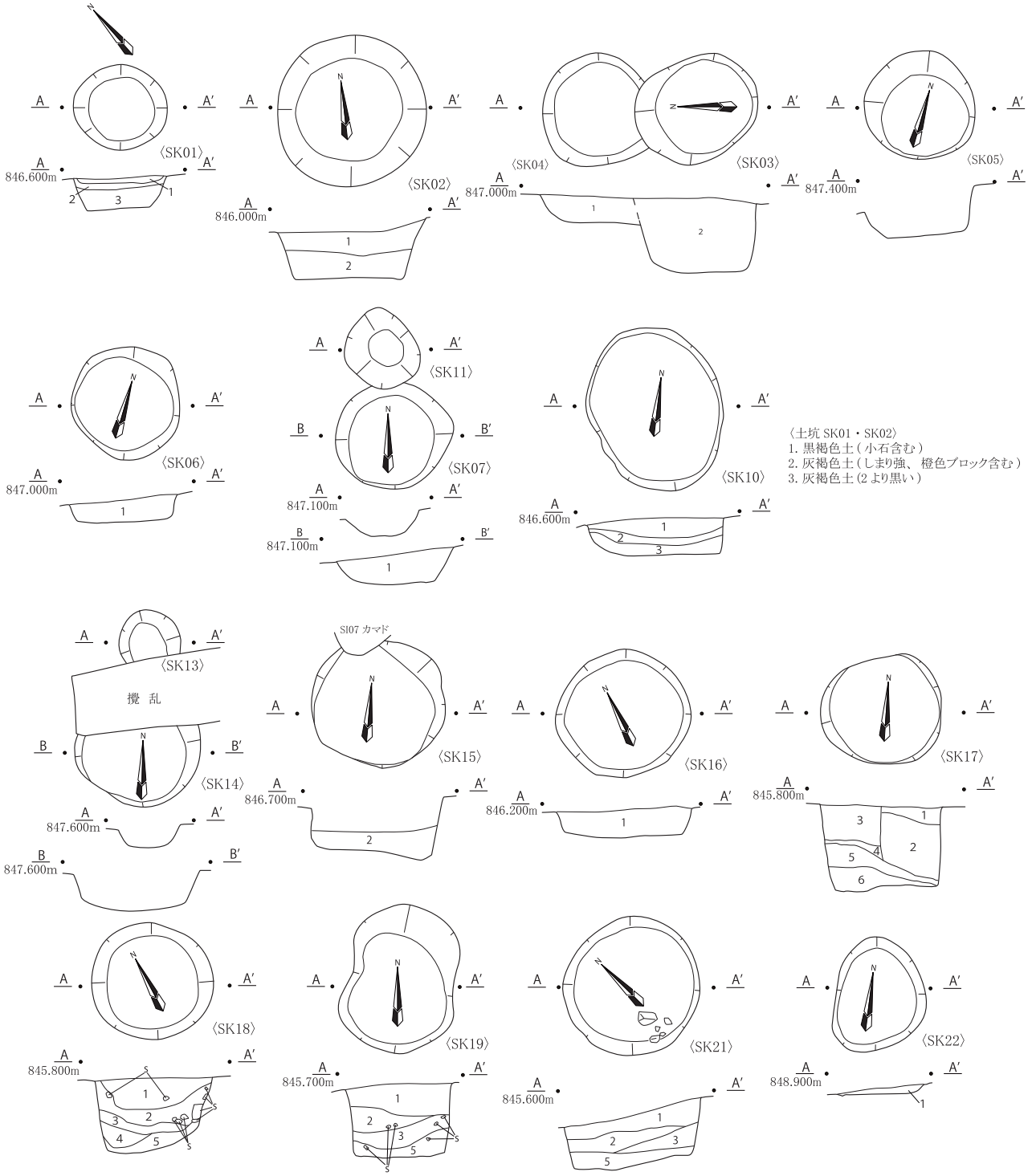
〈掘立柱建物跡 SB02 平面図〉

0　2m
S=1/60

第２３図　掘立柱建物跡 SB01・SB02 平面図



第２４図　ピット SP01 ～ SP36 平面図



〈土坑 SK01・SK02〉
1. 黒褐色土（小石含む）
2. 灰褐色土（しまり強、橙色ブロック含む）
3. 灰褐色土（2 より黒い）

〈土坑 SK03 ～ SK16〉
1. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒微量含む）
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒少量含む）
3. 10YR3/4 暗褐色砂質土（粘性弱、しまりなし、スコリア粒多量に含む）

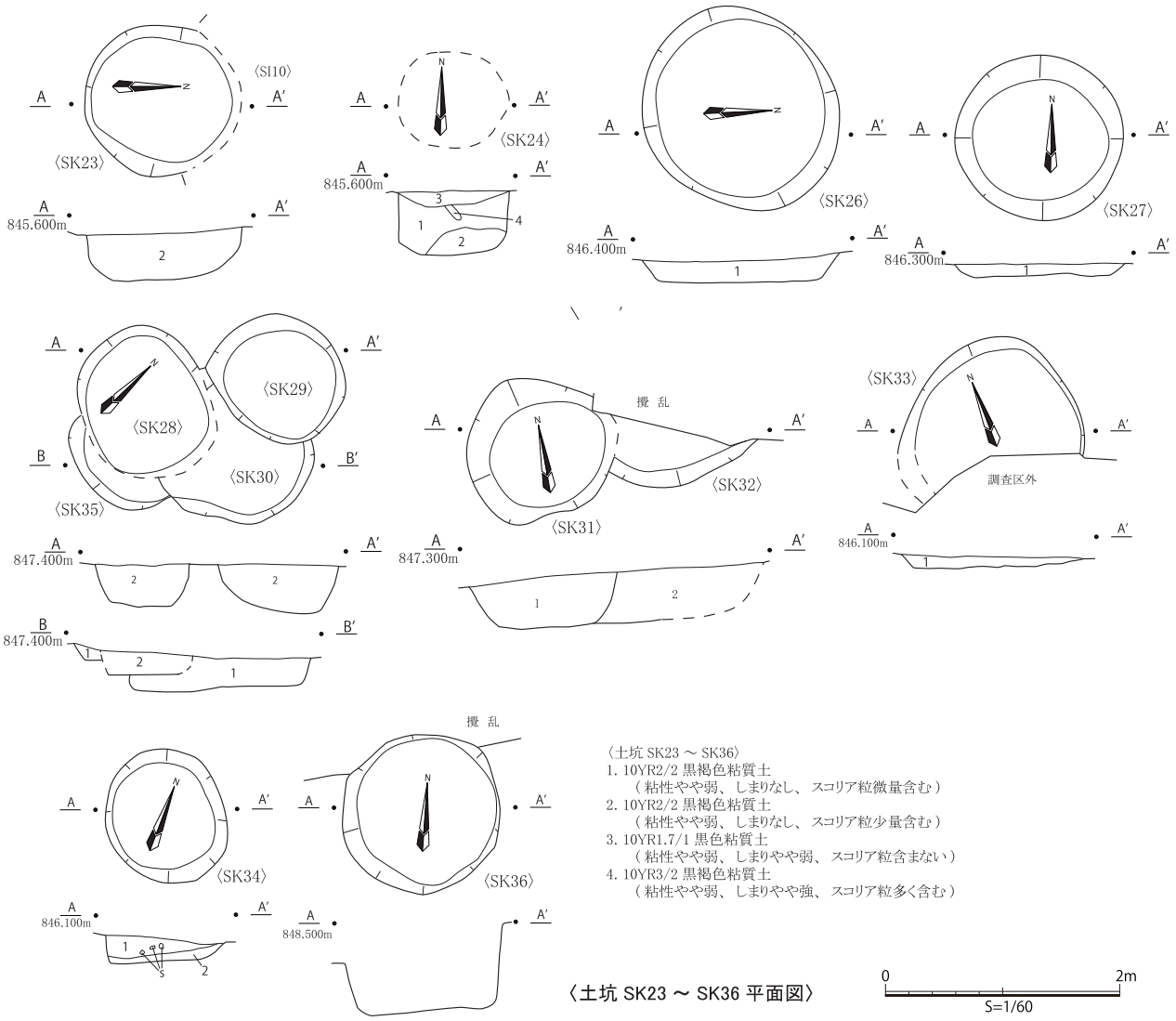
〈土坑 SK17〉
1. 10YR1.7/1 黒色砂質土（粘性弱、しまりなし、φ1mm 程のスコリア粒含む、炭化材含む）
2. 10YR2/2 黒褐色砂質土（粘性なし、しまりなし、細砂混じる、φ1mm 程のスコリア粒含む、小礫少量含む）
3. 10YR3/3 暗褐色砂礫層（2 ～ 10cm 程の礫主体、粘性なし、しまりやや強）
4. 10YR2/2 黒褐色砂質土（粘性やや弱、しまりなし、1cm 程の礫多く含む）
5, 10YR3/3 暗褐色砂礫層（3 と同じ）
6. 10YR2/1 黒褐色粘質土（粘性やや強、しまり弱、砂混じり、5cm 程の小礫主体）

〈土坑 SK18 ～ SK21〉
1. 10YR1.7/1 黒色砂質土（粘性やや弱、しまりなし粘土混じる）
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性やや強、しまり弱、スコリア粒少量含む）
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土（粘性弱、しまり弱、スコリア粒多く含む）
4. 10YR2/3 黒褐色砂質土（粘性弱、しまり弱、細砂混じる）
5. 10YR2/1 黒色粘質土（粘性やや強、しまりやや強、スコリア粒多く含む）

〈土坑 SK22〉
1. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒微量含む）

〈土坑 SK01 ～ SK22 平面図〉 0 2m S=1/60

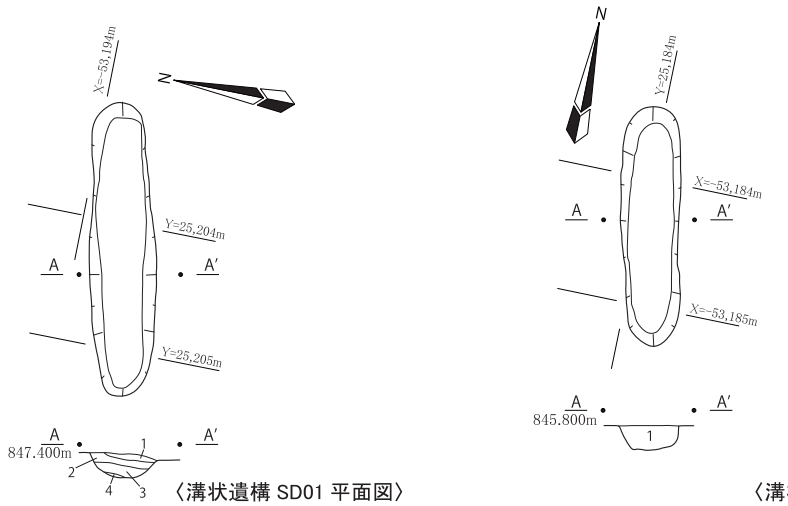
第２５図 土坑 SK01 ～ SK22 平面図



〈土坑 SK23 ～ SK36〉
1. 10YR2/2 黒褐色粘質土
（粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒微量含む）
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土
（粘性やや弱、しまりなし、スコリア粒少量含む）
3. 10YR1.7/1 黒色粘質土
（粘性やや弱、しまりやや弱、スコリア粒含まない）
4. 10YR3/2 黒褐色粘質土
（粘性やや弱、しまりやや強、スコリア粒多く含む）

〈土坑 SK23 ～ SK36 平面図〉

0 2m
S=1/60



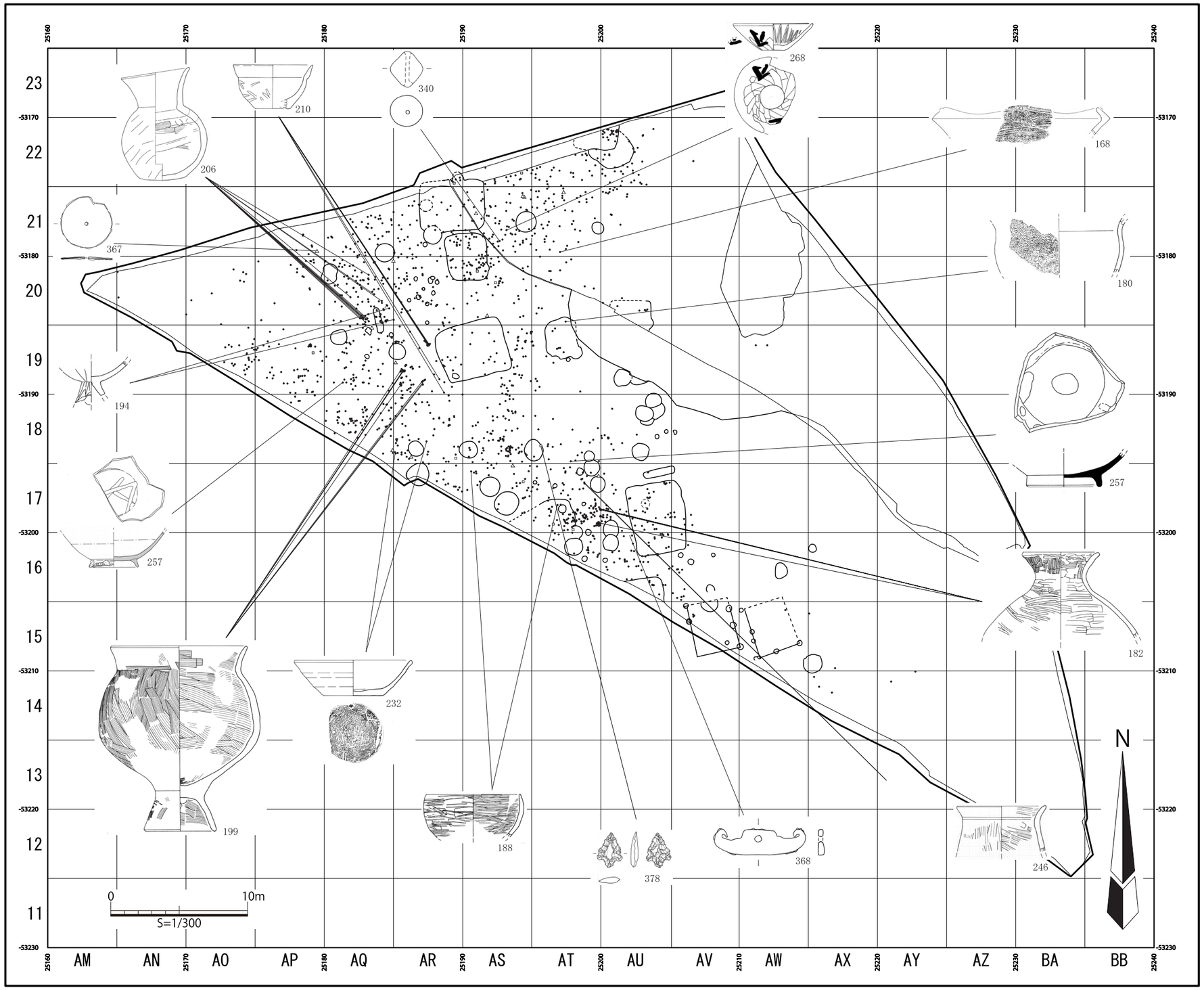
〈溝状遺構 SD01 平面図〉

〈溝状遺構 SD02 平面図〉

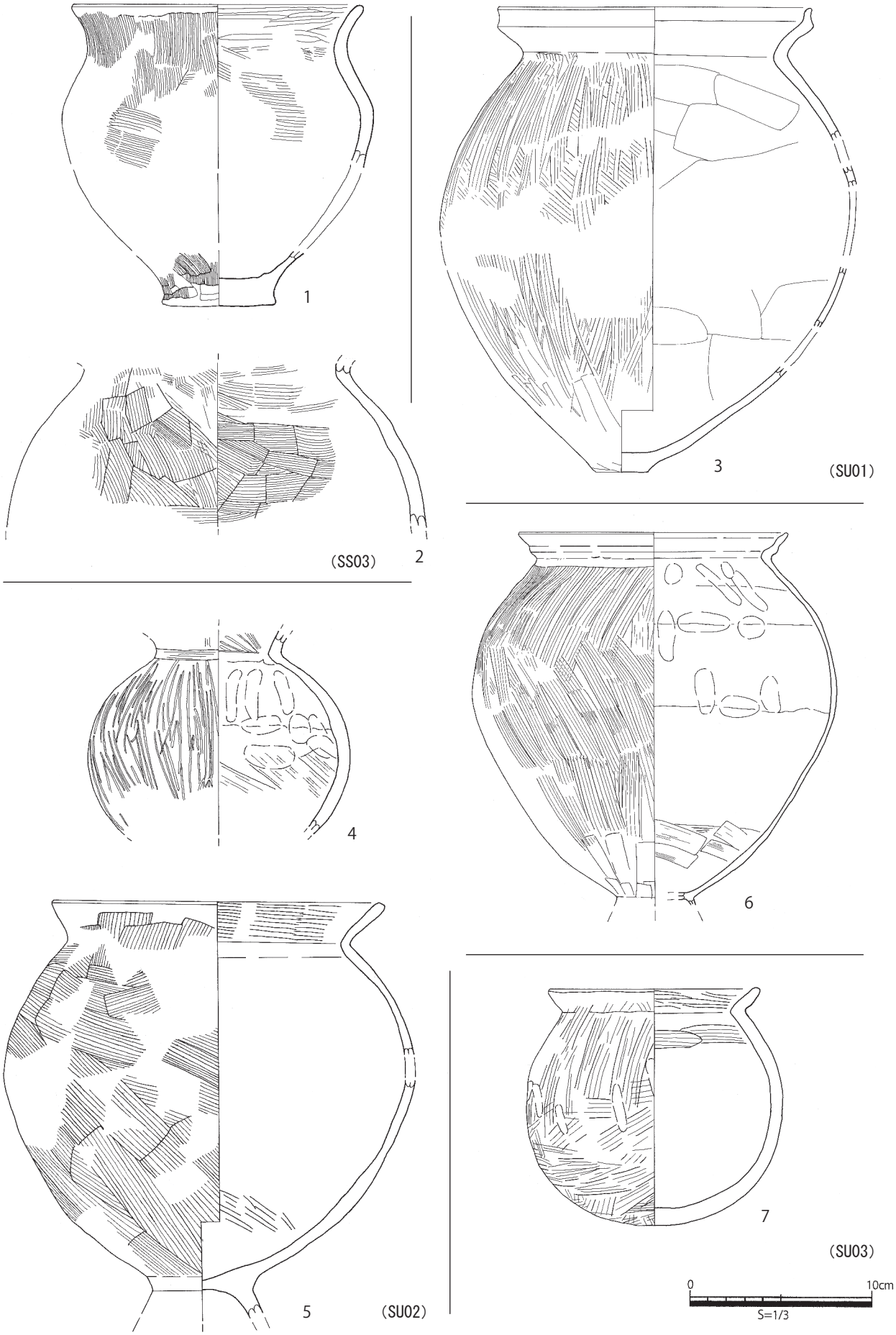
〈溝状遺構 SD01〉
1. 10YR1.7/1 黒色砂質土（粘性なし、しまり弱、
1mm 程度のスコリア粒少量含む）
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土（粘性弱、しまりなし、
1 ～ 2mm 程度のスコリア粒多く含む、極小礫混じる）
3. 10YR2/3 黒褐色砂質土（粘性なし、しまりやや弱、
極小スコリア粒微量含む、小礫少量含む）
4. 10YR2/3 黒褐色砂質土（粘性なし、しまりなし、
極小スコリア粒微量含む）

〈溝状遺構 SD02〉
1. 10YR2/2 黒褐色砂質土（粘性弱、しまりなし）

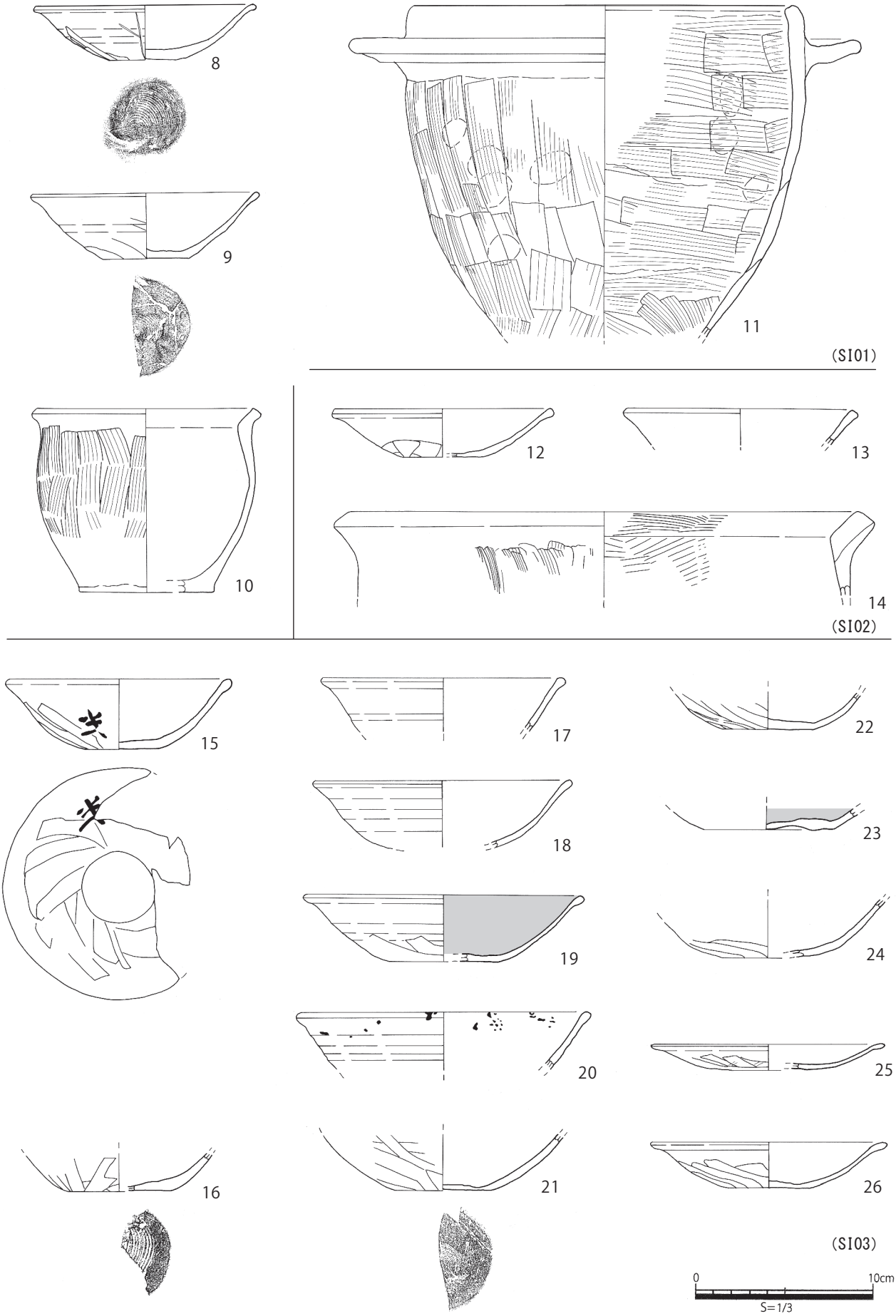
第２６図　土坑 SK23 ～ SK36、溝状遺構 SD01・SD02 平面図



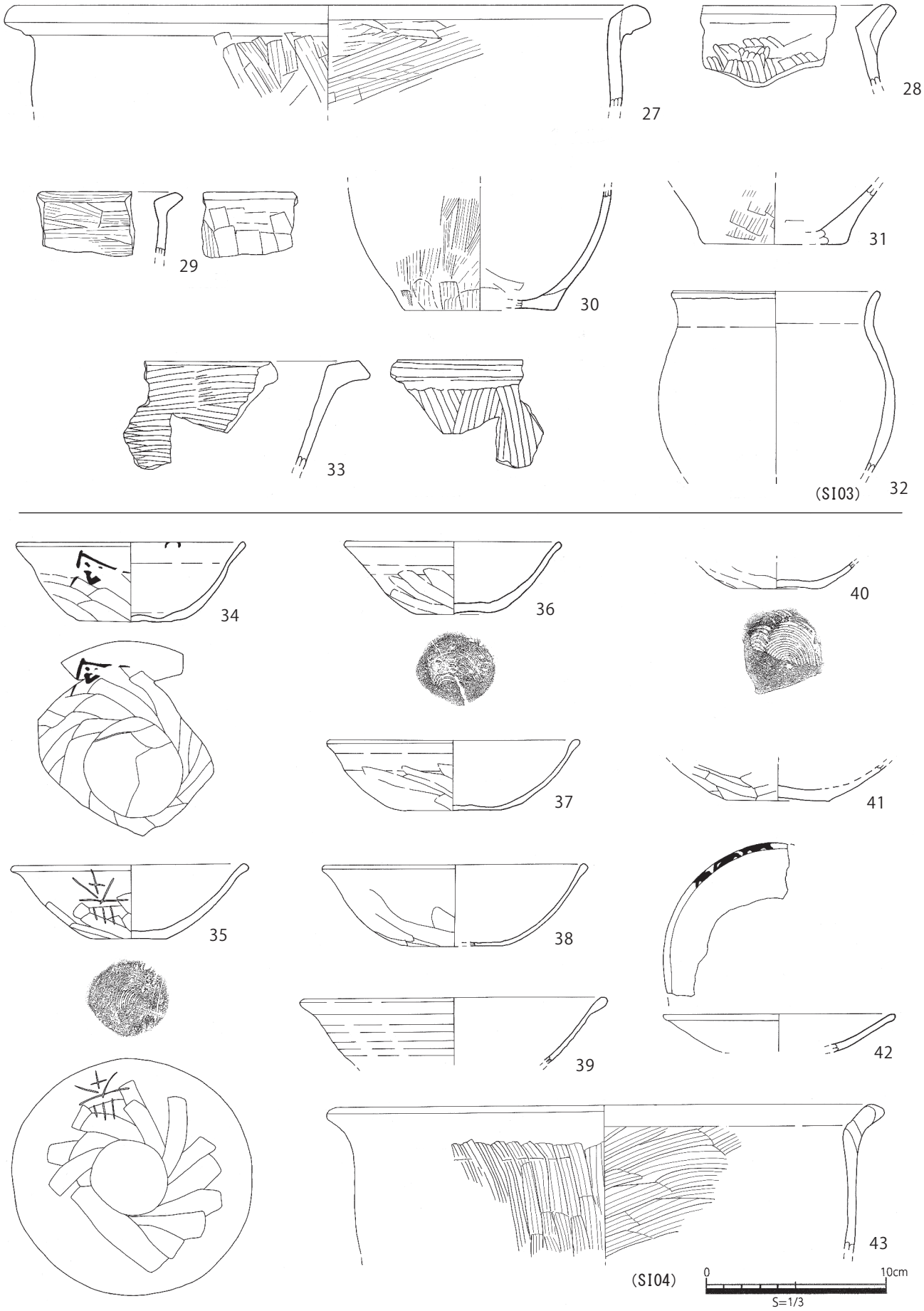
第 27 図　滝沢遺跡VI区遺構外遺物出土状況



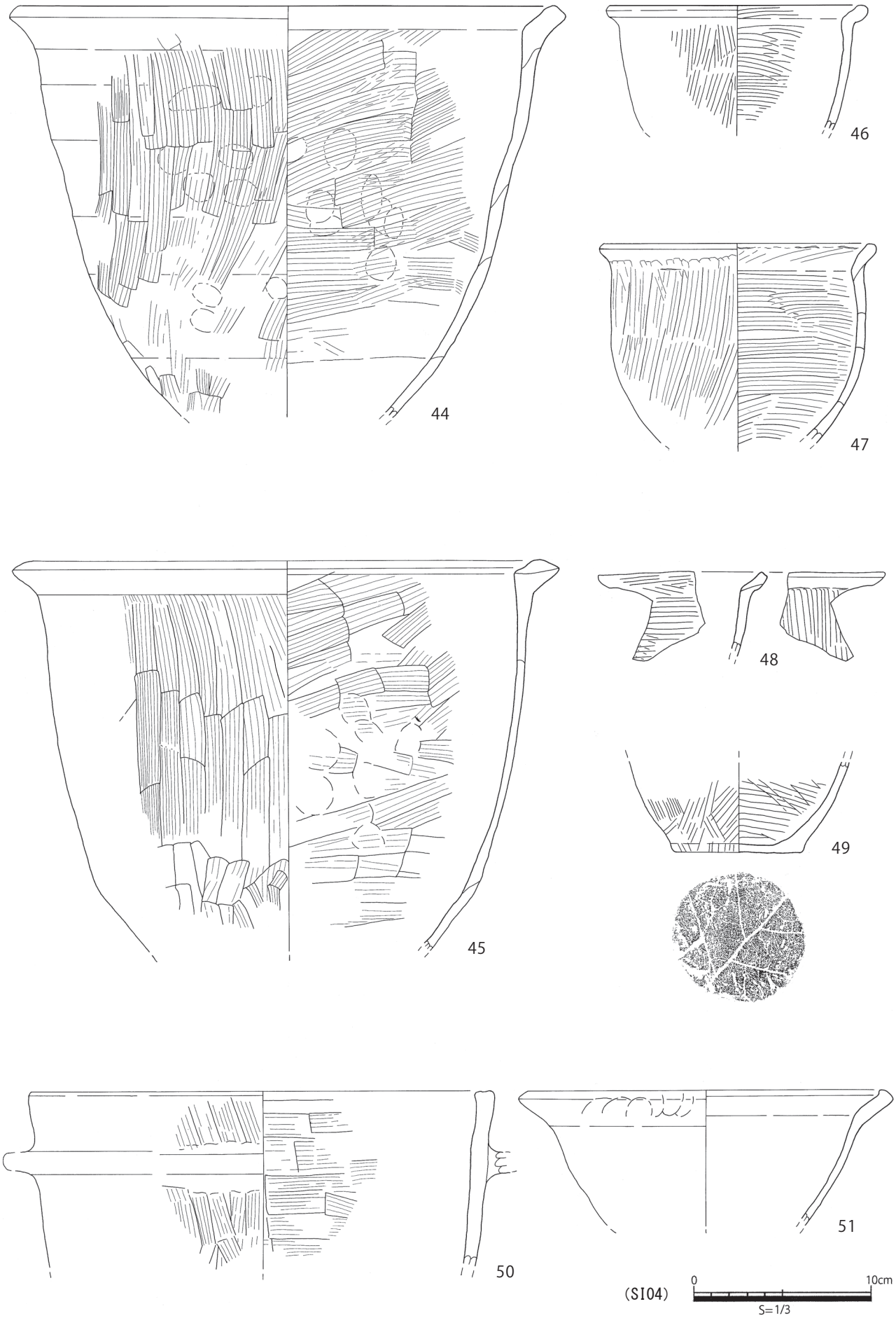
第２８図　出土土器（１）　配石SS03、土器集中SU01・SU02・SU03



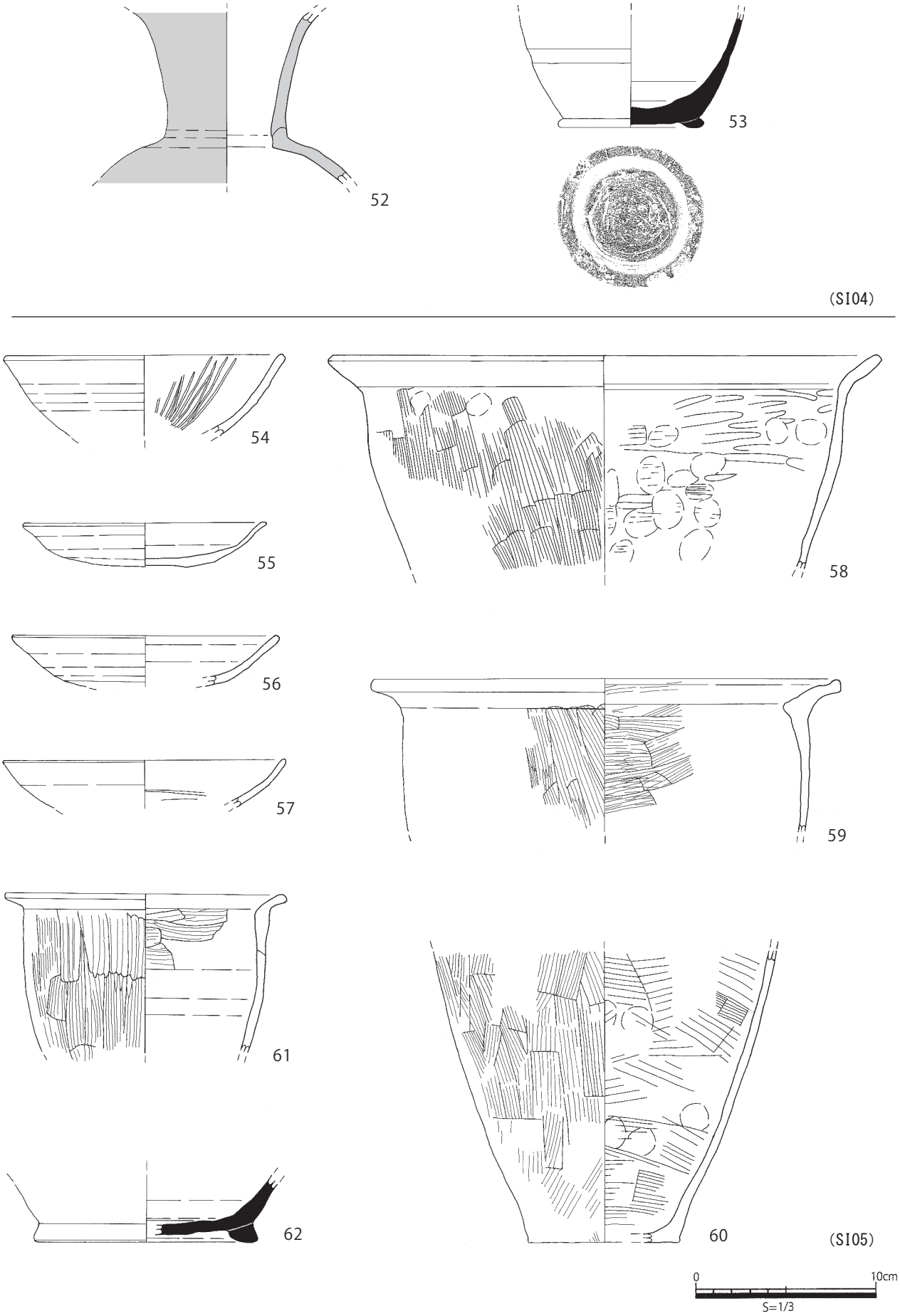
第２９図　出土土器（２）　竪穴建物跡SI01・SI02・SI03（１）



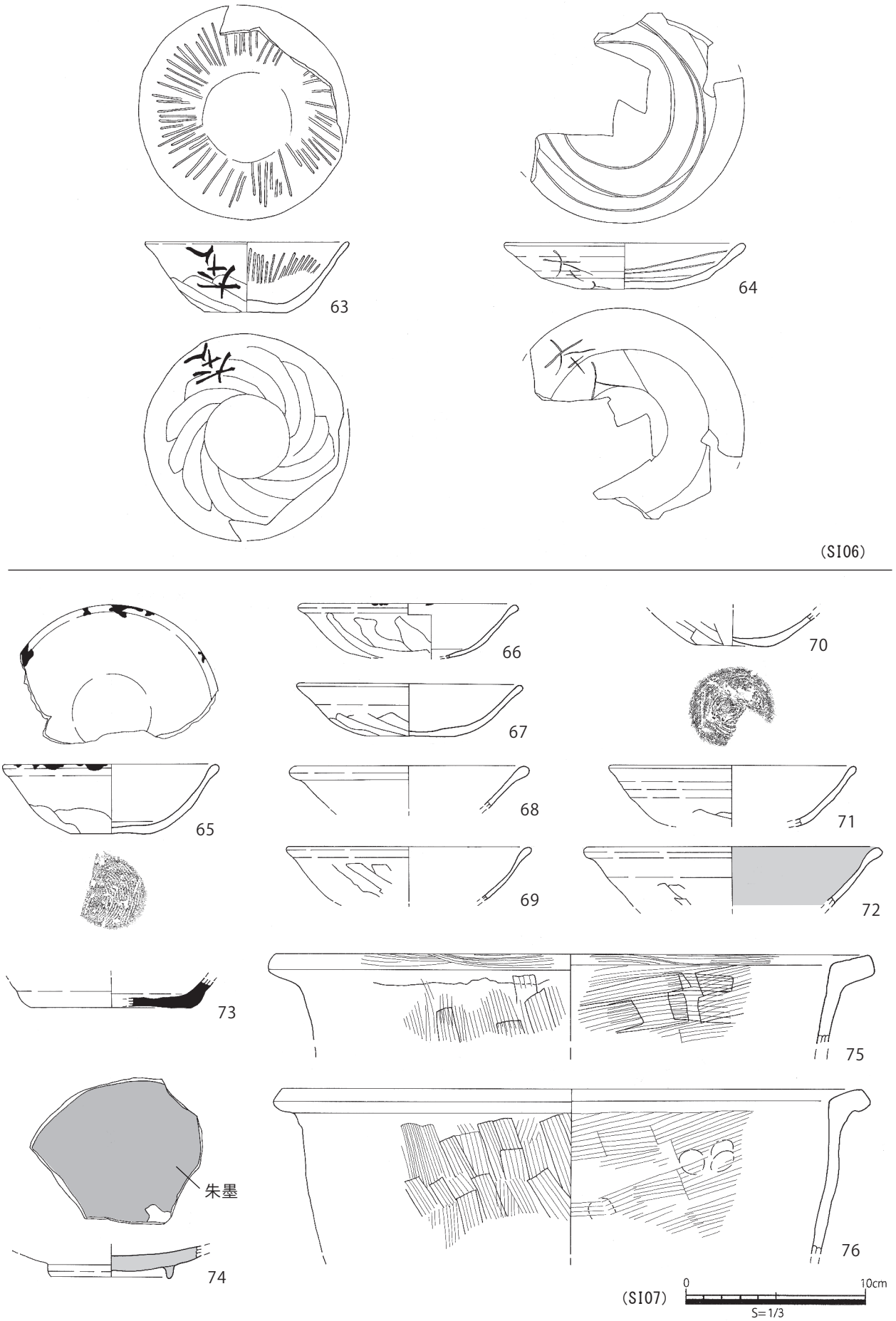
第３０図　出土土器（３）　竪穴建物跡SI03（２）・SI04（１）



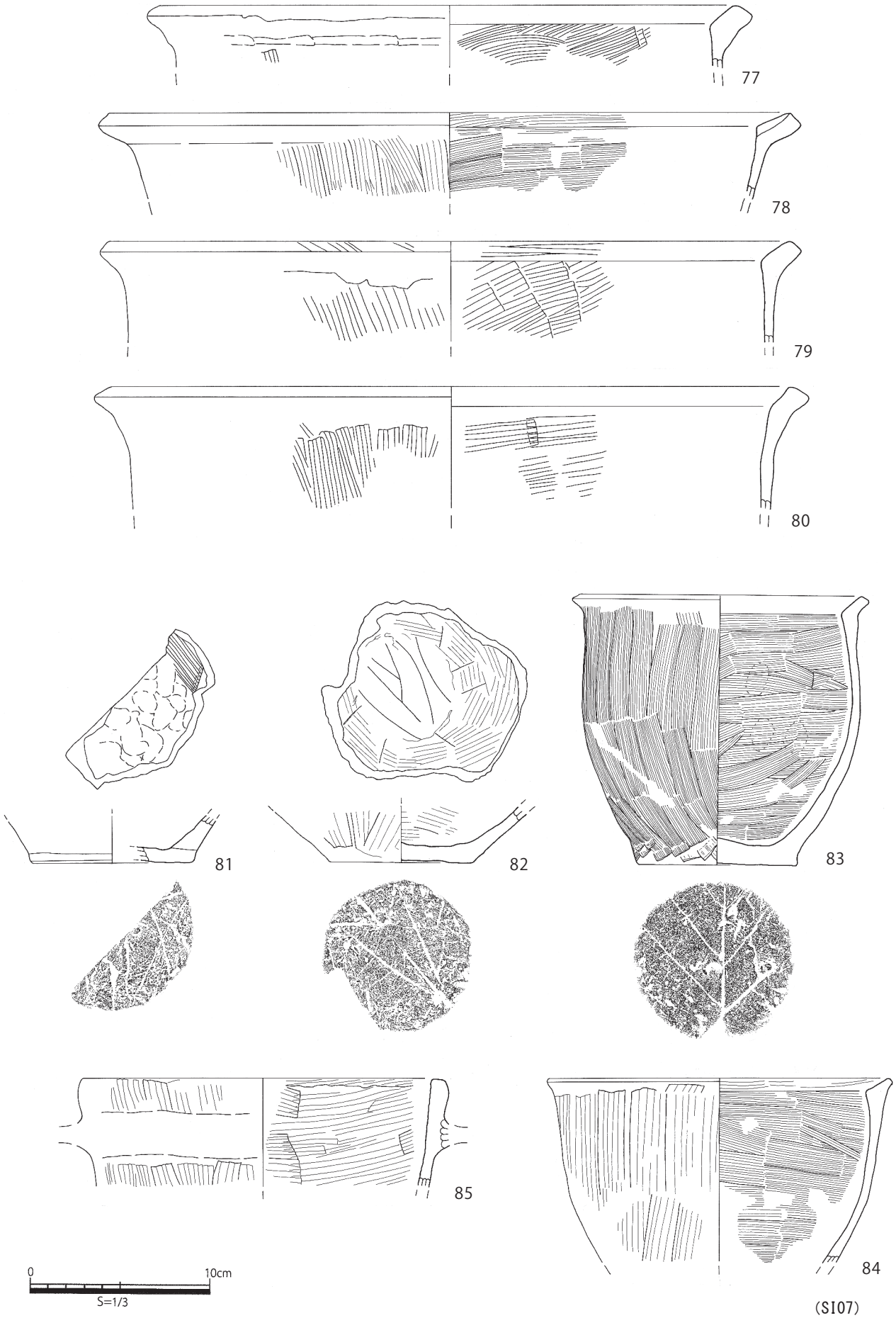
第３１図　出土土器（４）　竪穴建物跡SI04（２）



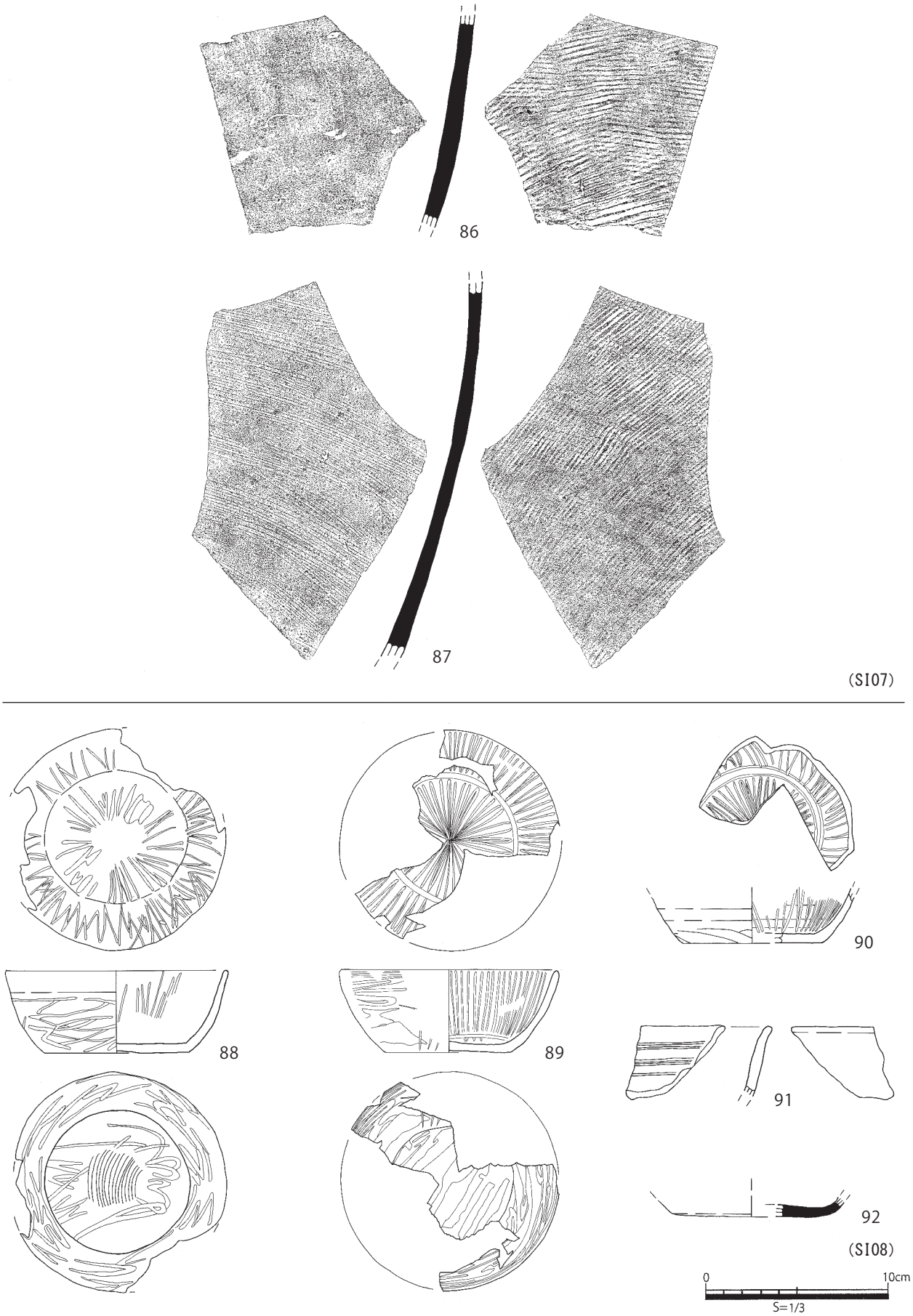
第32図　出土土器(5)　竪穴建物跡SI04(3)・SI05



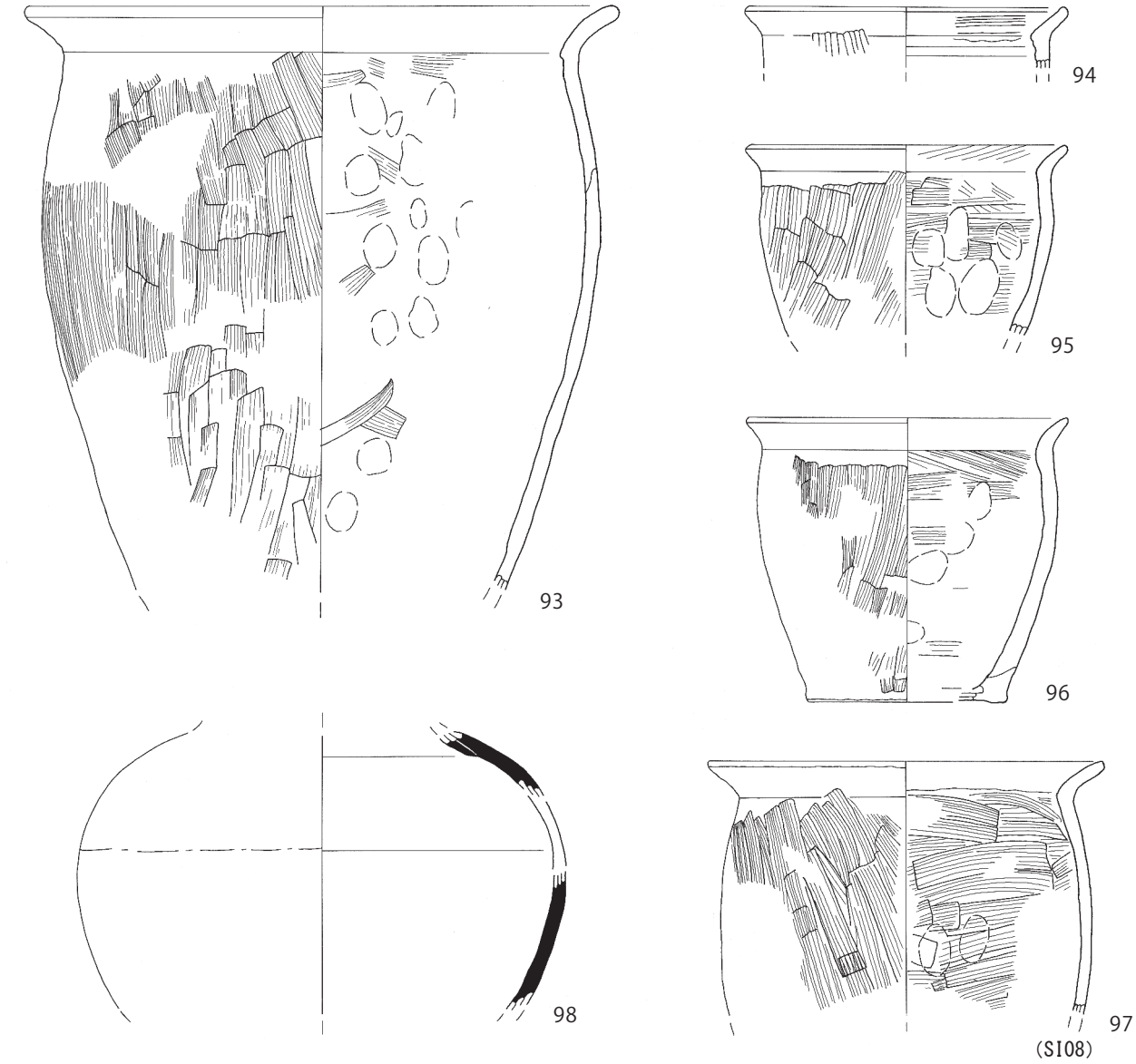
第３３図　出土土器（６）　竪穴建物跡SI06・SI07（１）

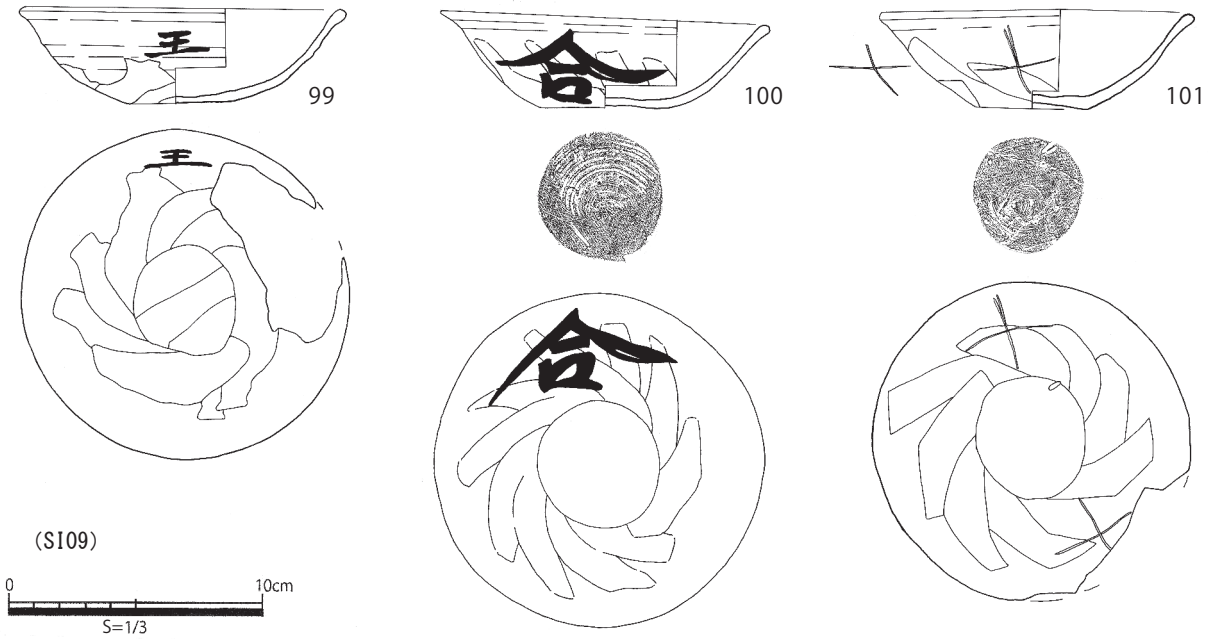


第３４図　出土土器（７）　竪穴建物跡SI07（２）

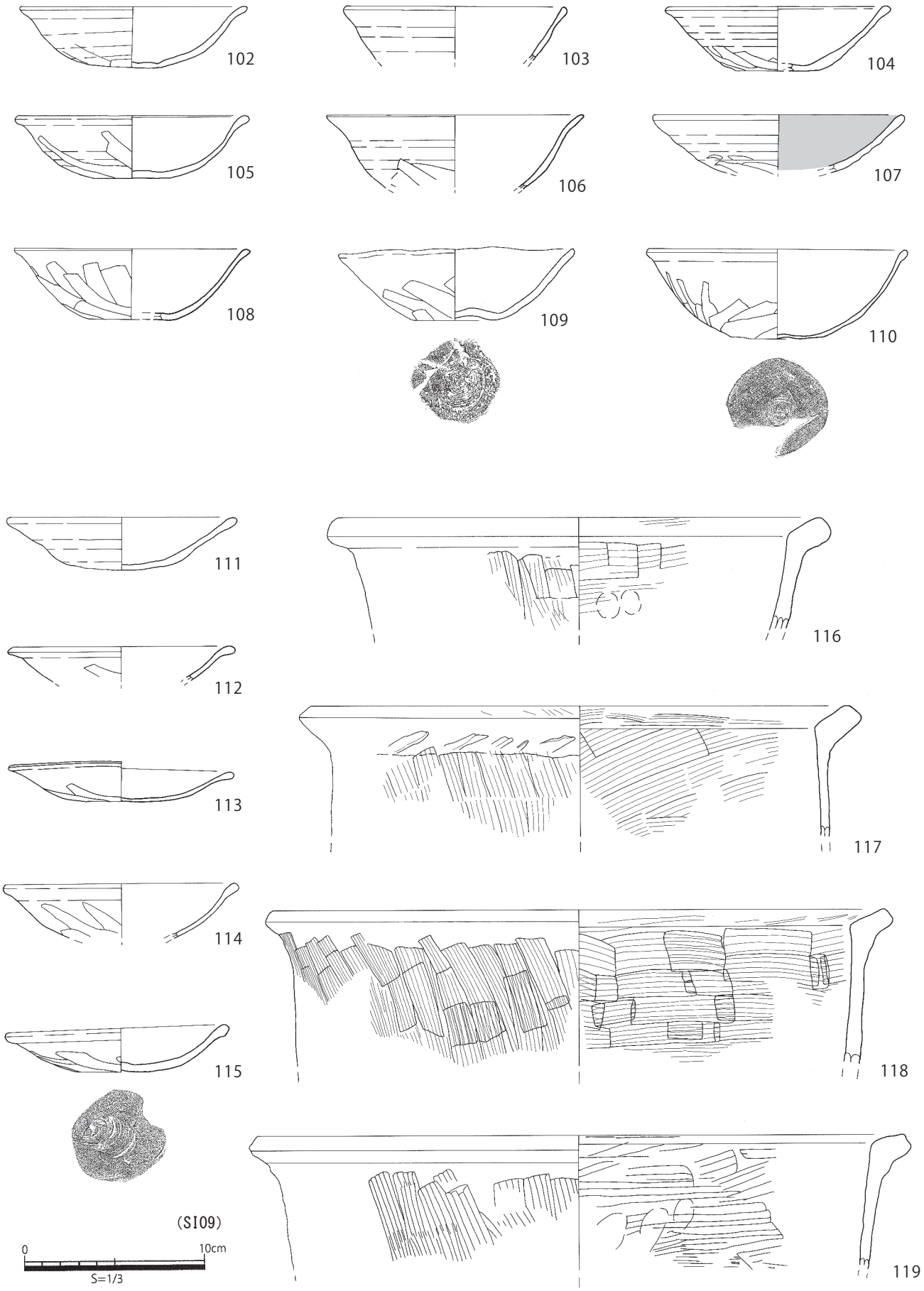


第３５図　出土土器（８）　竪穴建物跡SI07（３）・SI08（１）

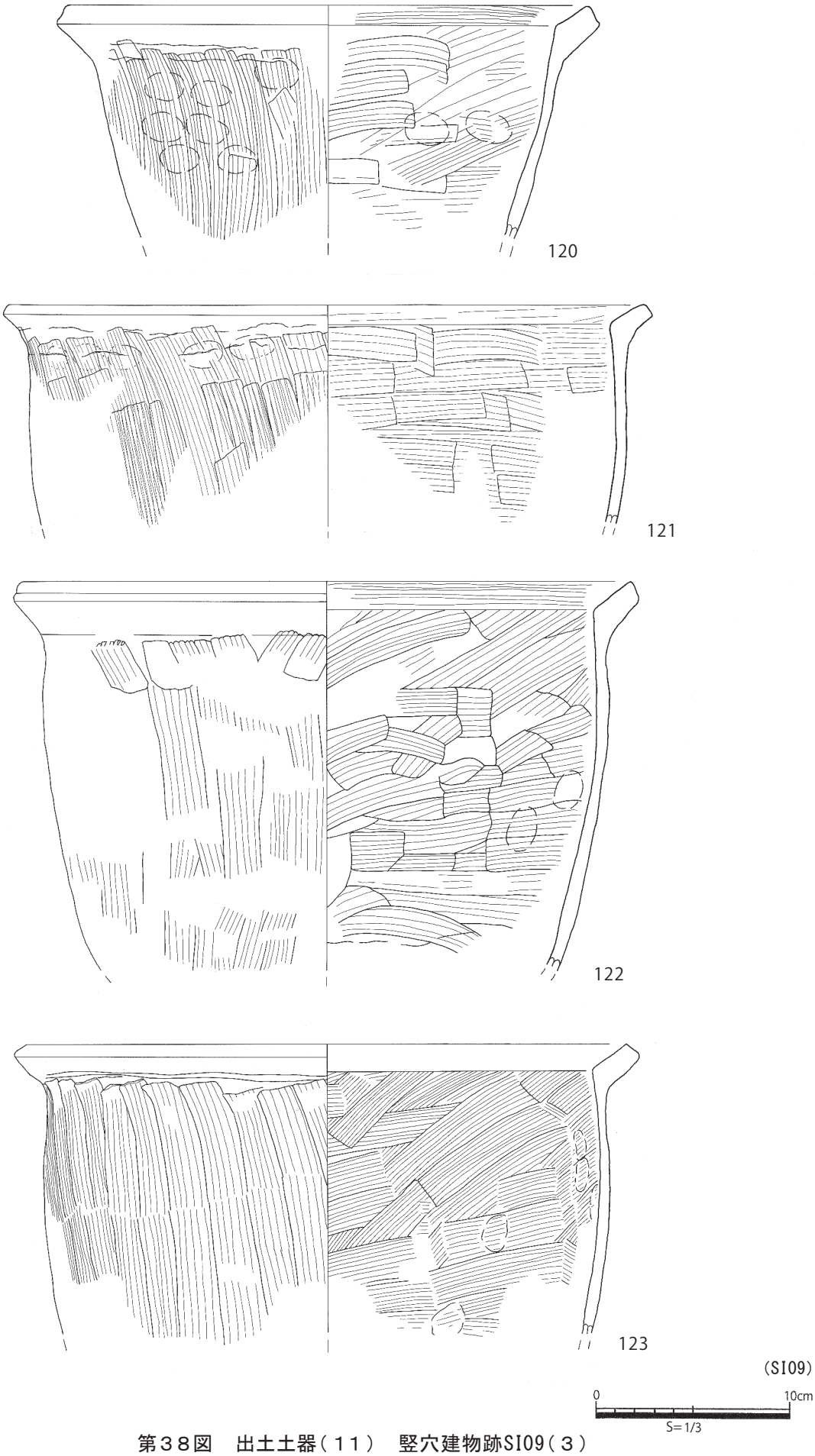




第３６図　出土土器（９）　竪穴建物跡SI08（２）・SI09（１）

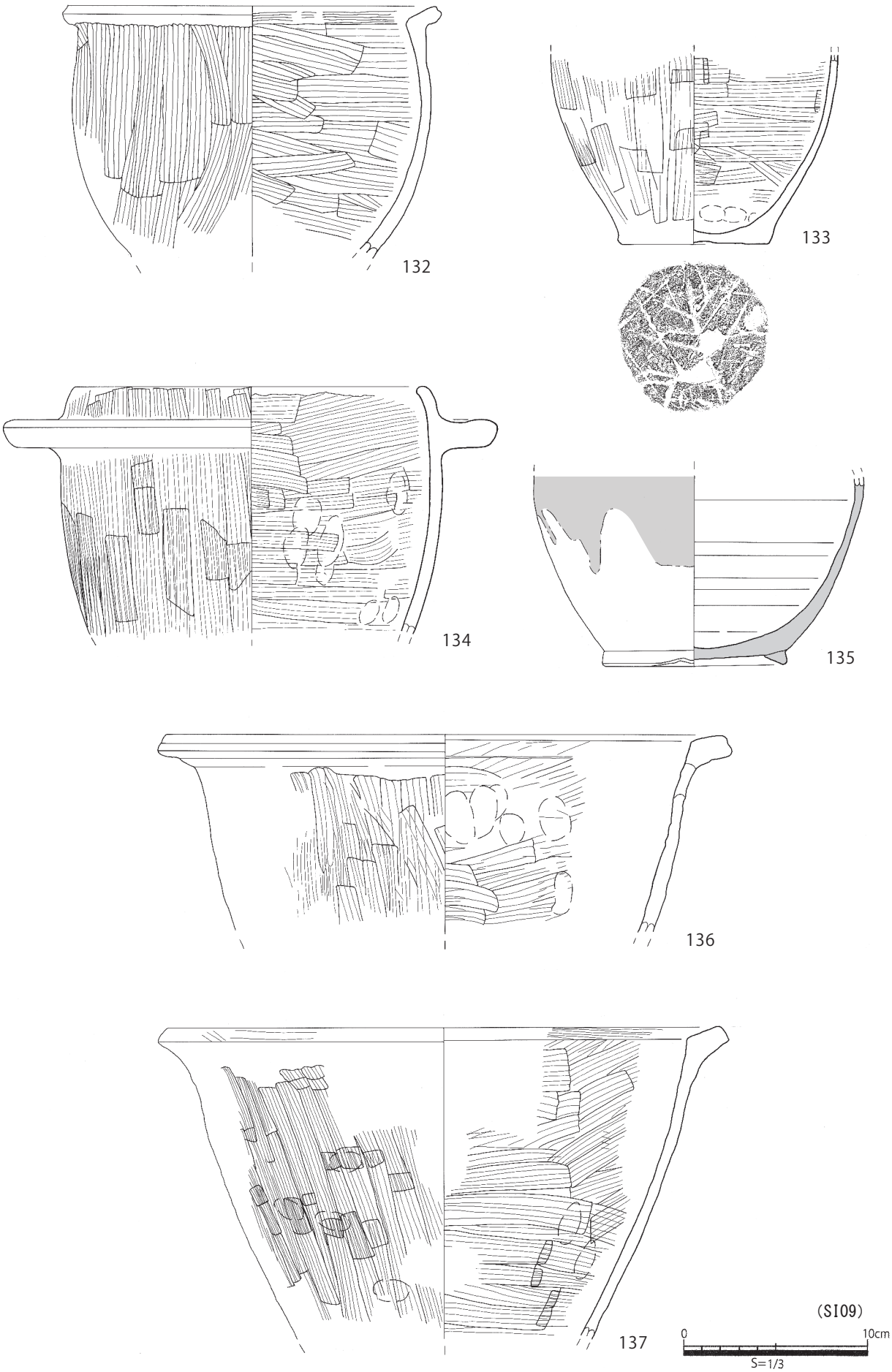


第３７図　出土土器（１０）　竪穴建物跡SI09（２）

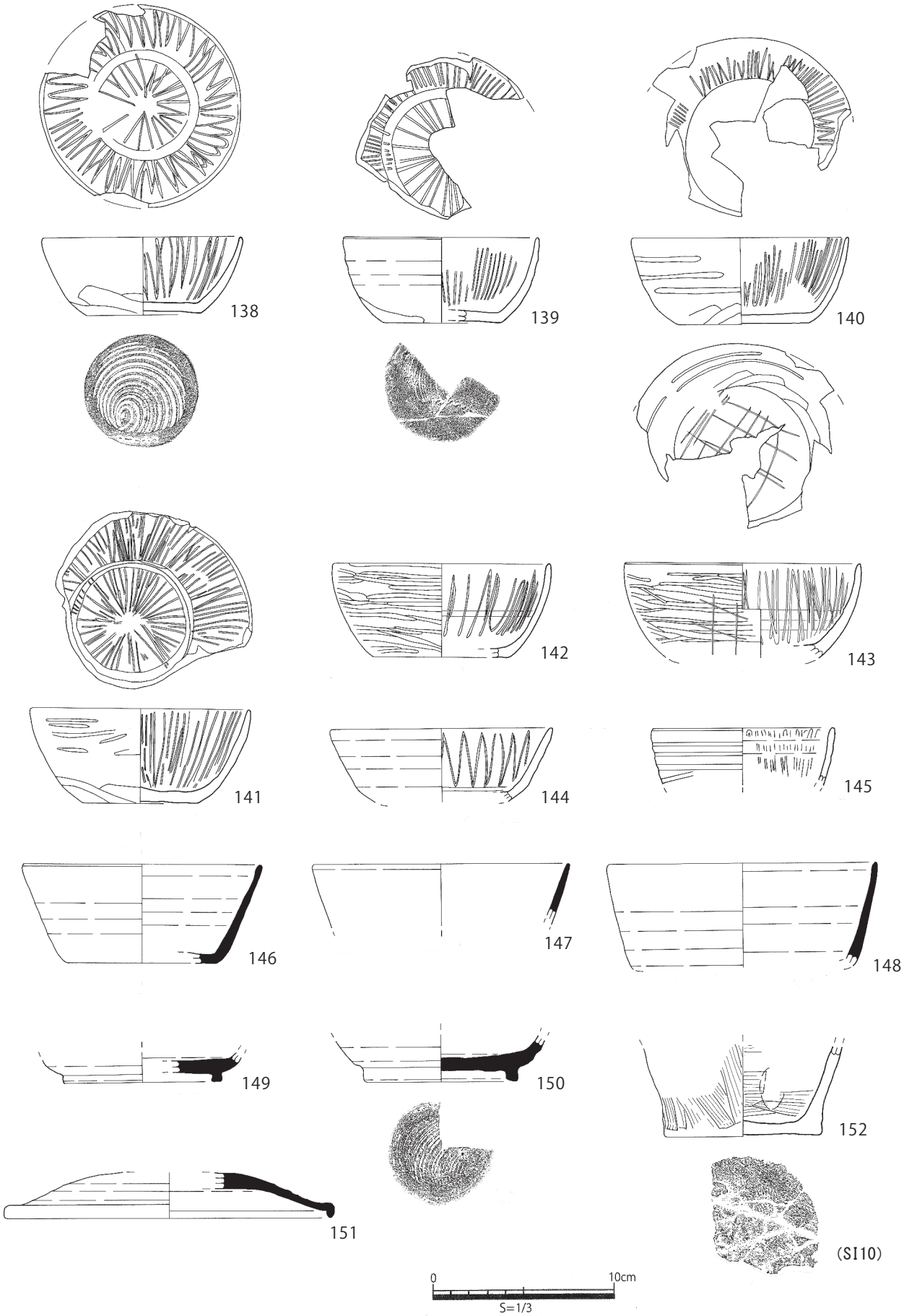


第３８図　出土土器（１１）　竪穴建物跡SI09（３）

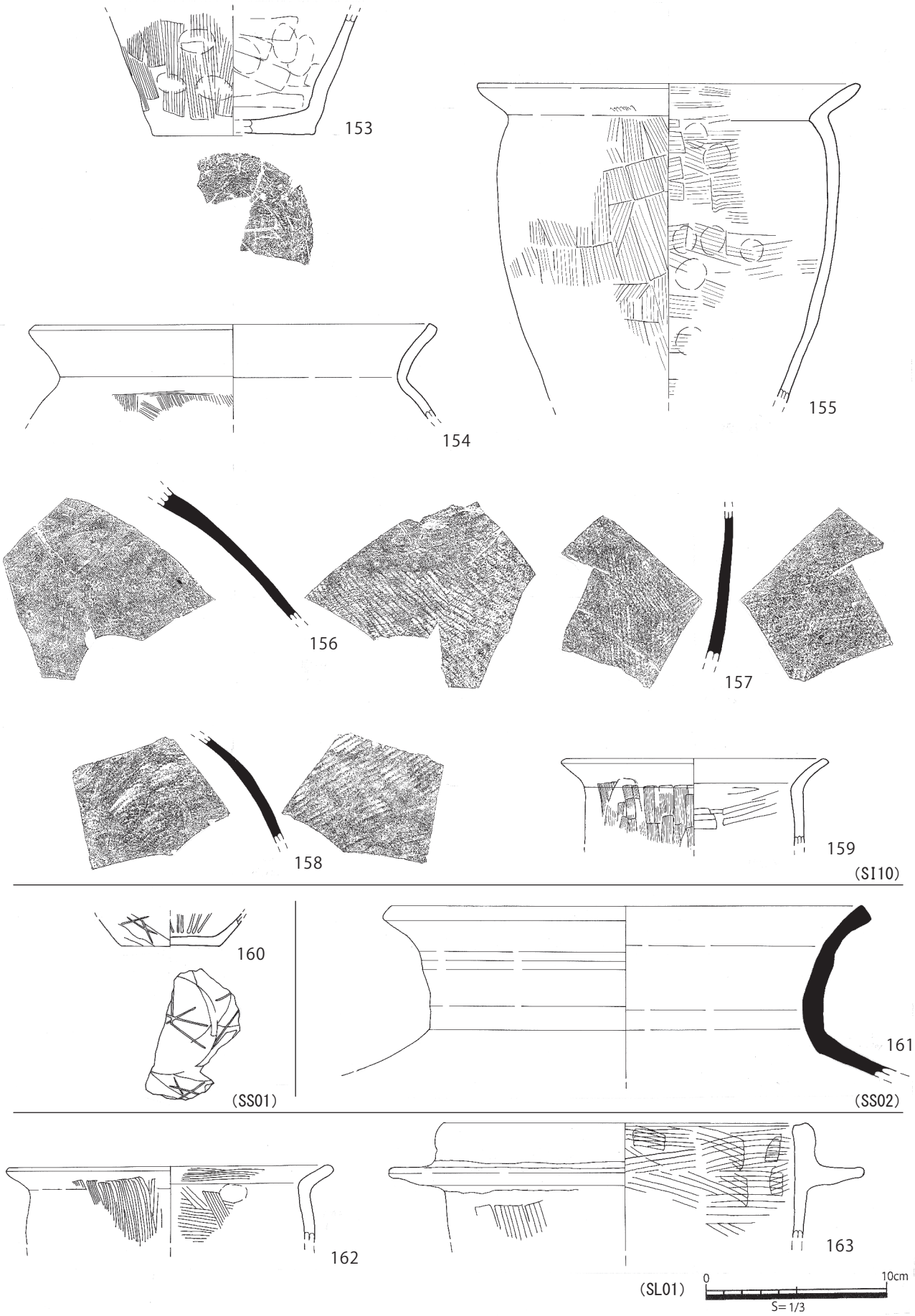
第３９図　出土土器（１２）　竪穴建物跡SI09（４）



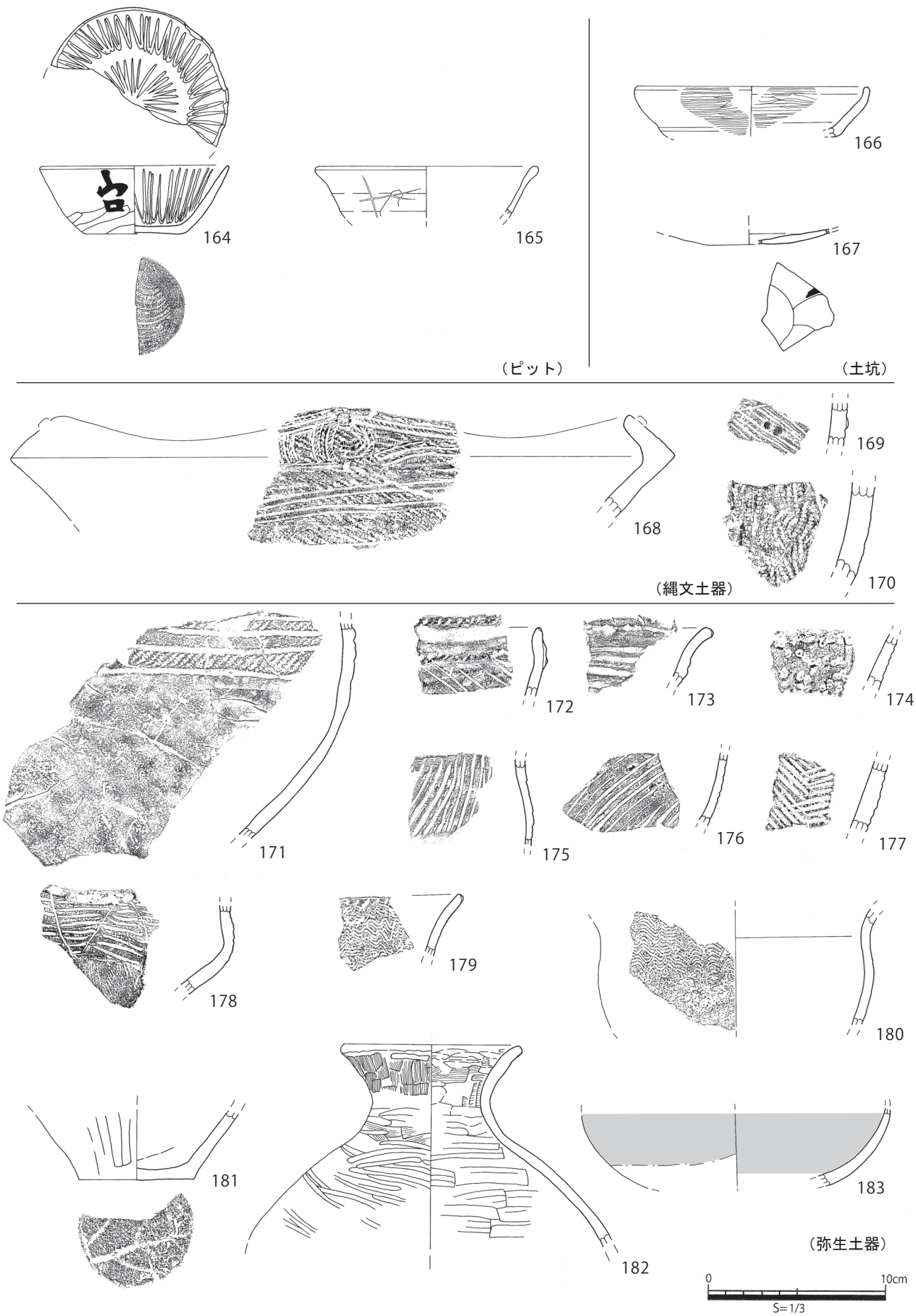
第４０図　出土土器（１３）　竪穴建物跡SI09（５）



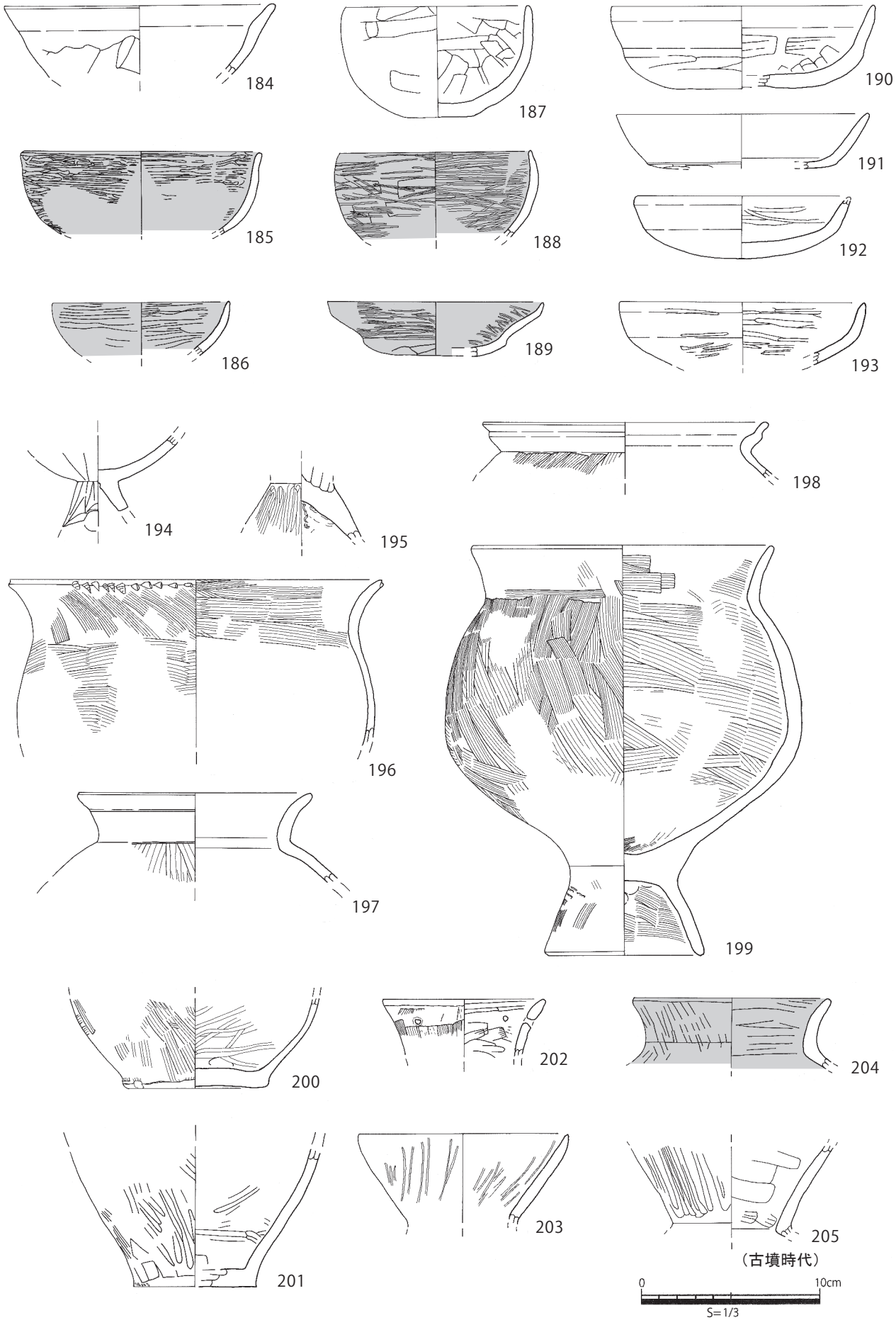
第41図　出土土器（14）　竪穴建物跡SI10（1）



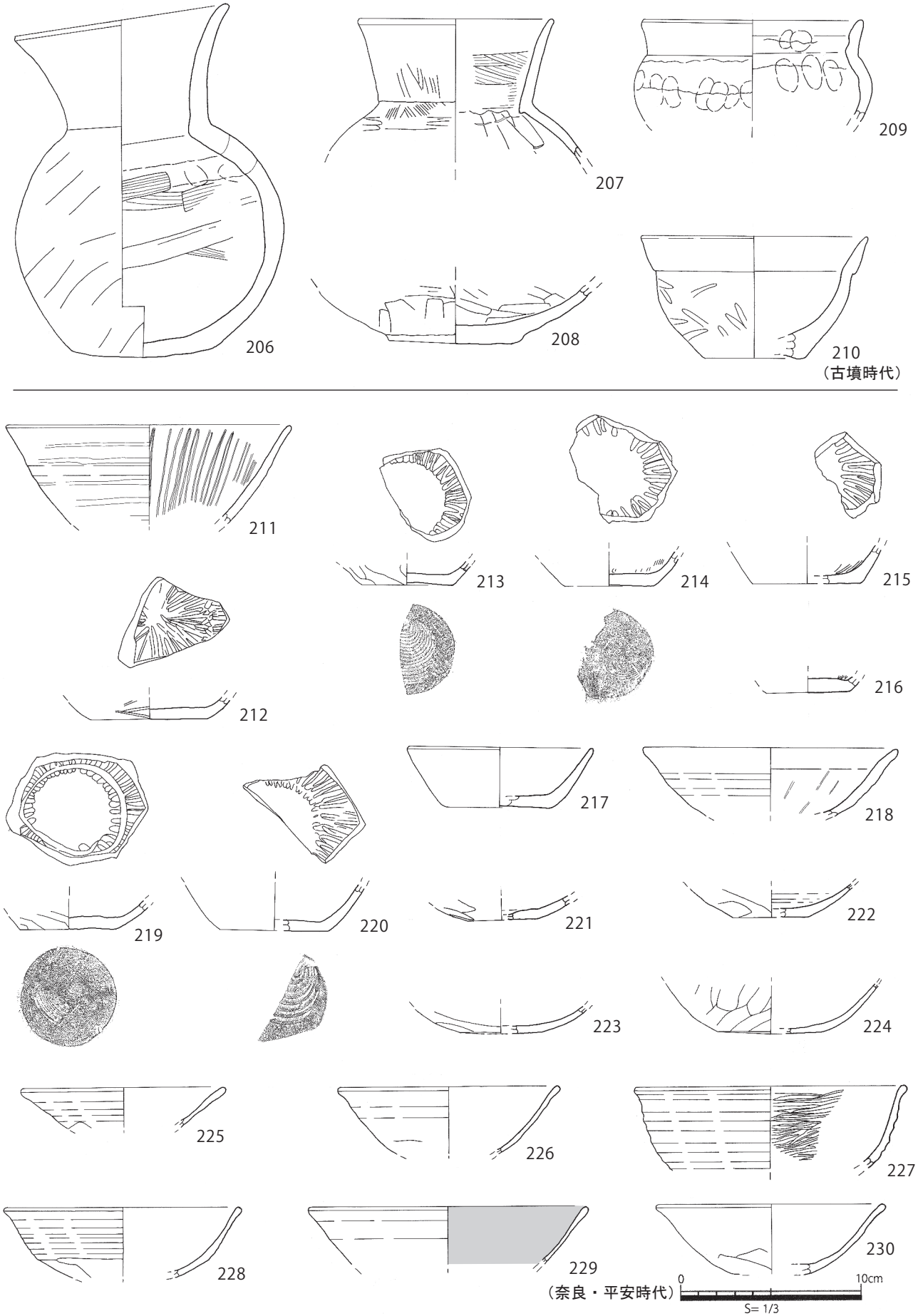
第４２図　出土土器（１５）　竪穴建物跡SI10（２）、配石SS01・SS02、焼土SL01



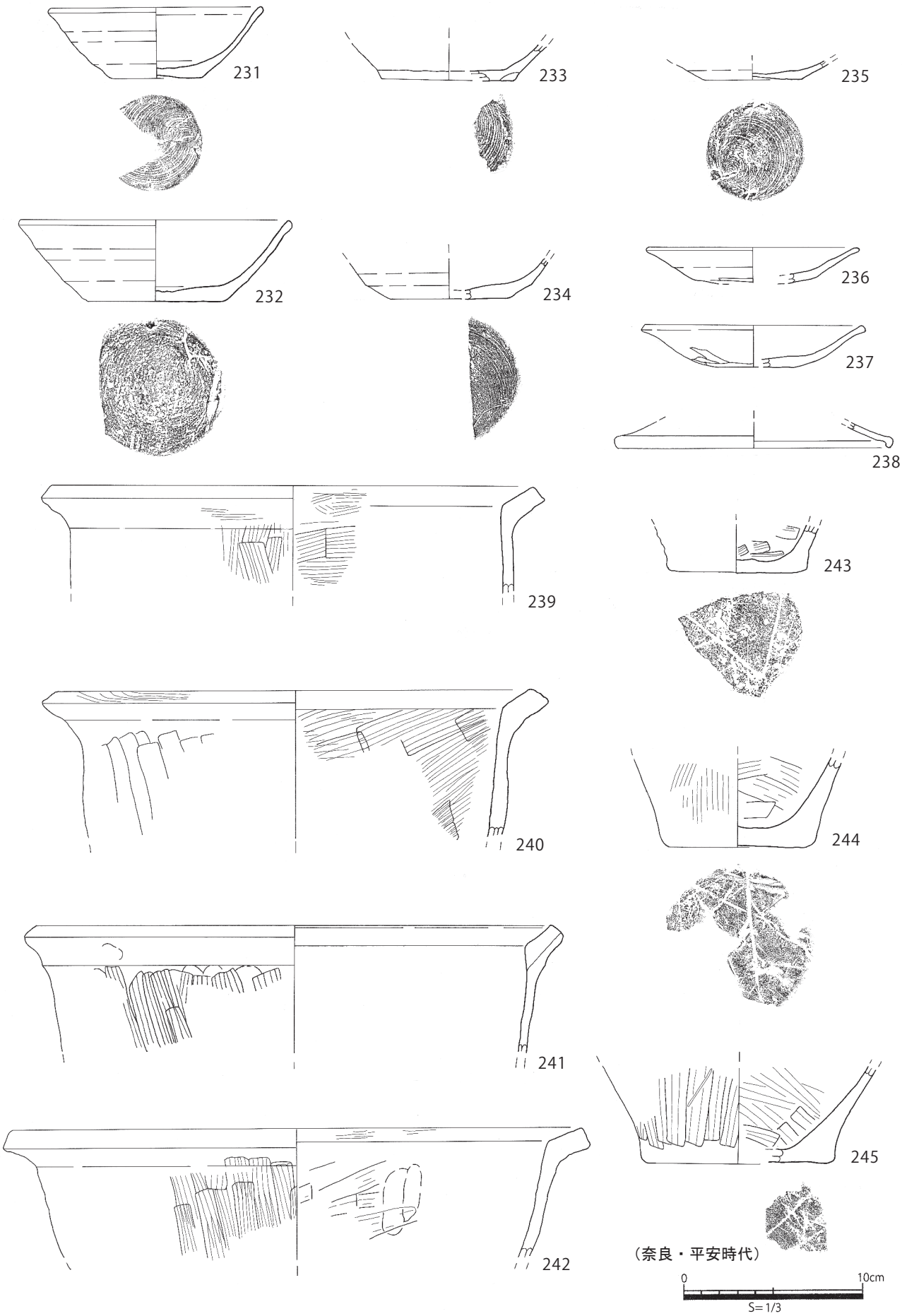
第４３図　出土土器（１６）　土坑・ピット・遺構外（縄文土器・弥生土器）



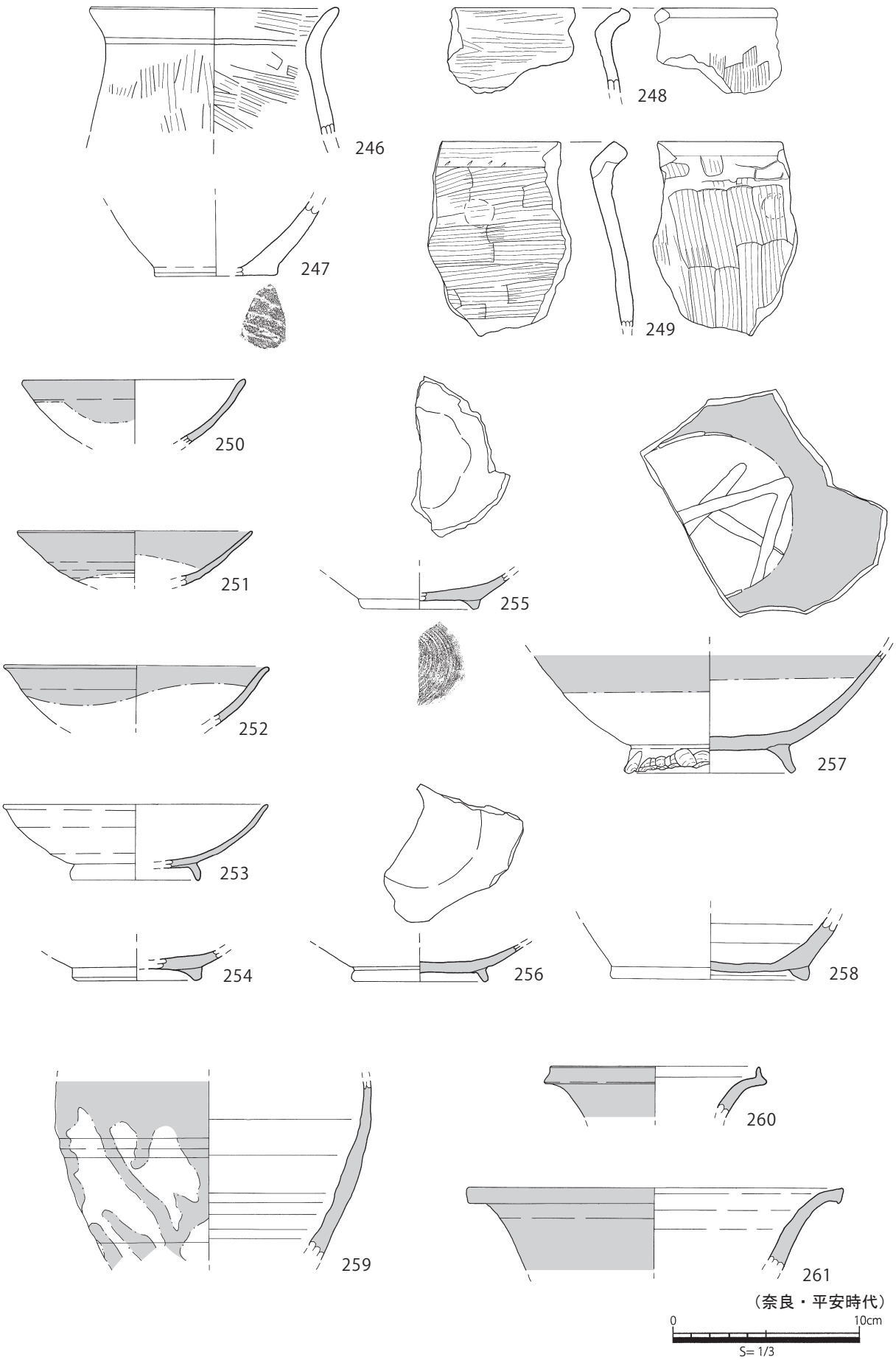
第４４図　出土土器（１７）　遺構外　古墳時代（１）



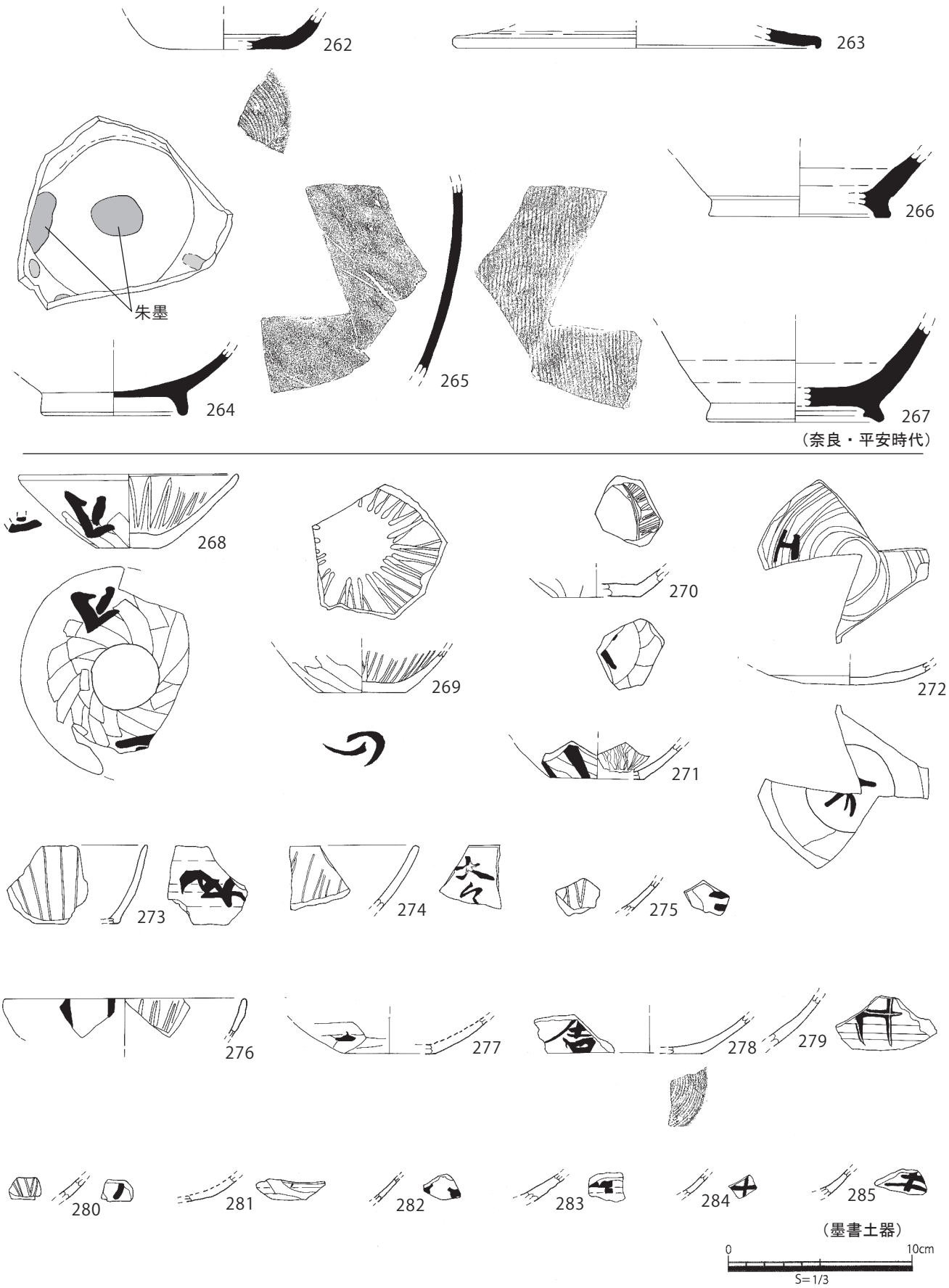
第４５図　出土土器（１８）　遺構外　古墳時代（２）、奈良・平安時代（１）



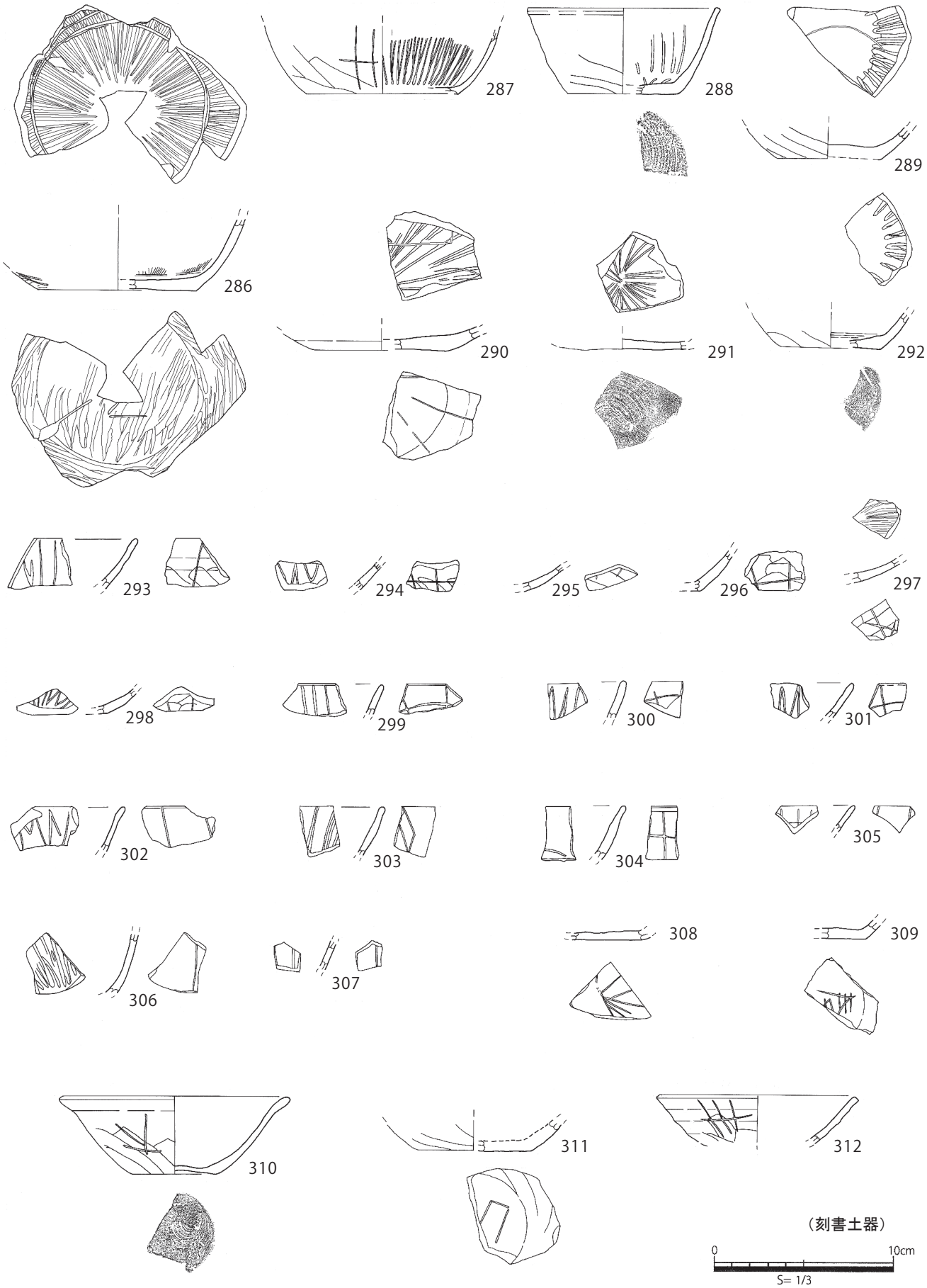
第４６図　出土土器（１９）　遺構外　奈良・平安時代（２）



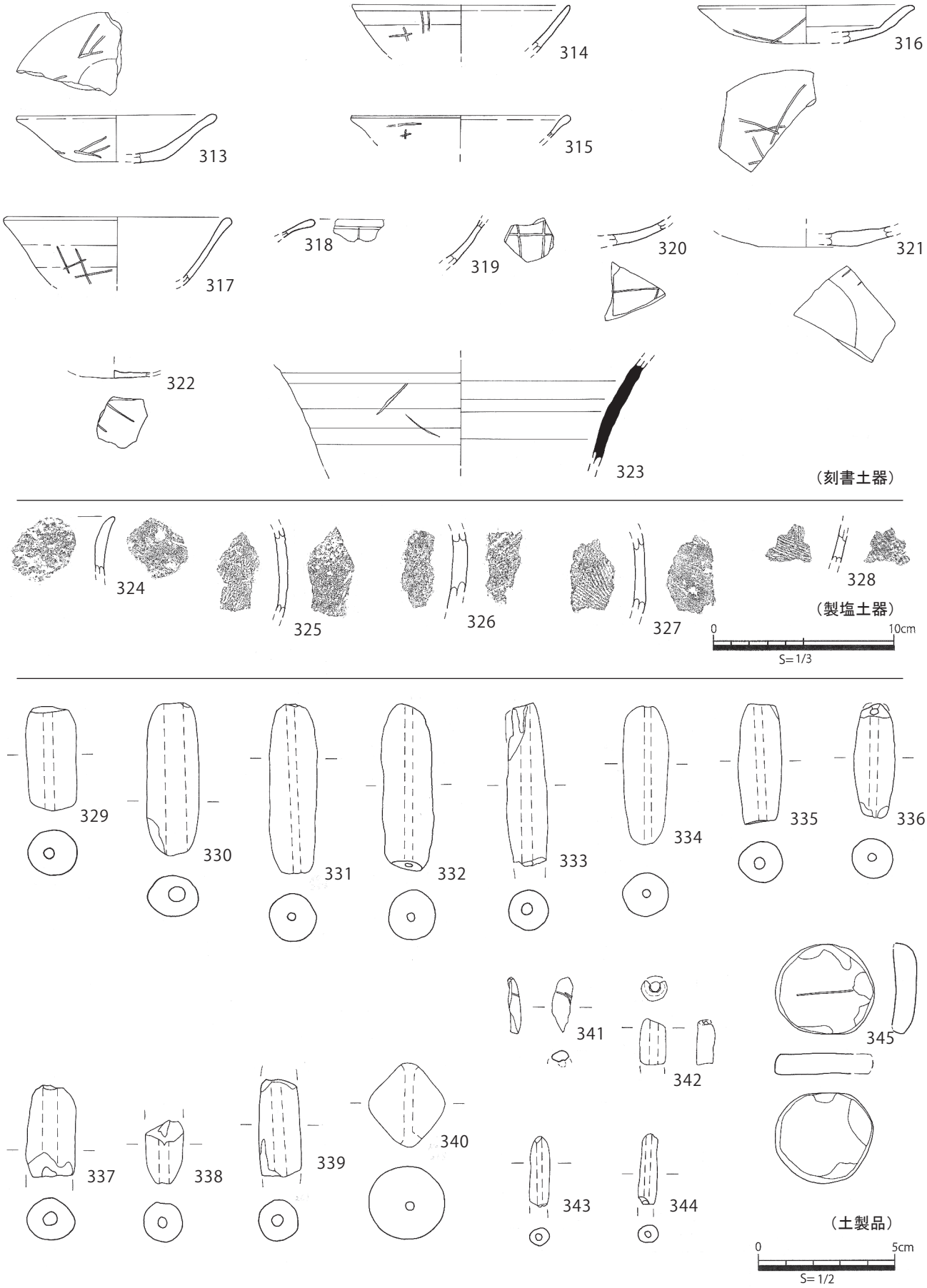
第47図　出土土器（２０）　遺構外　奈良・平安時代（３）



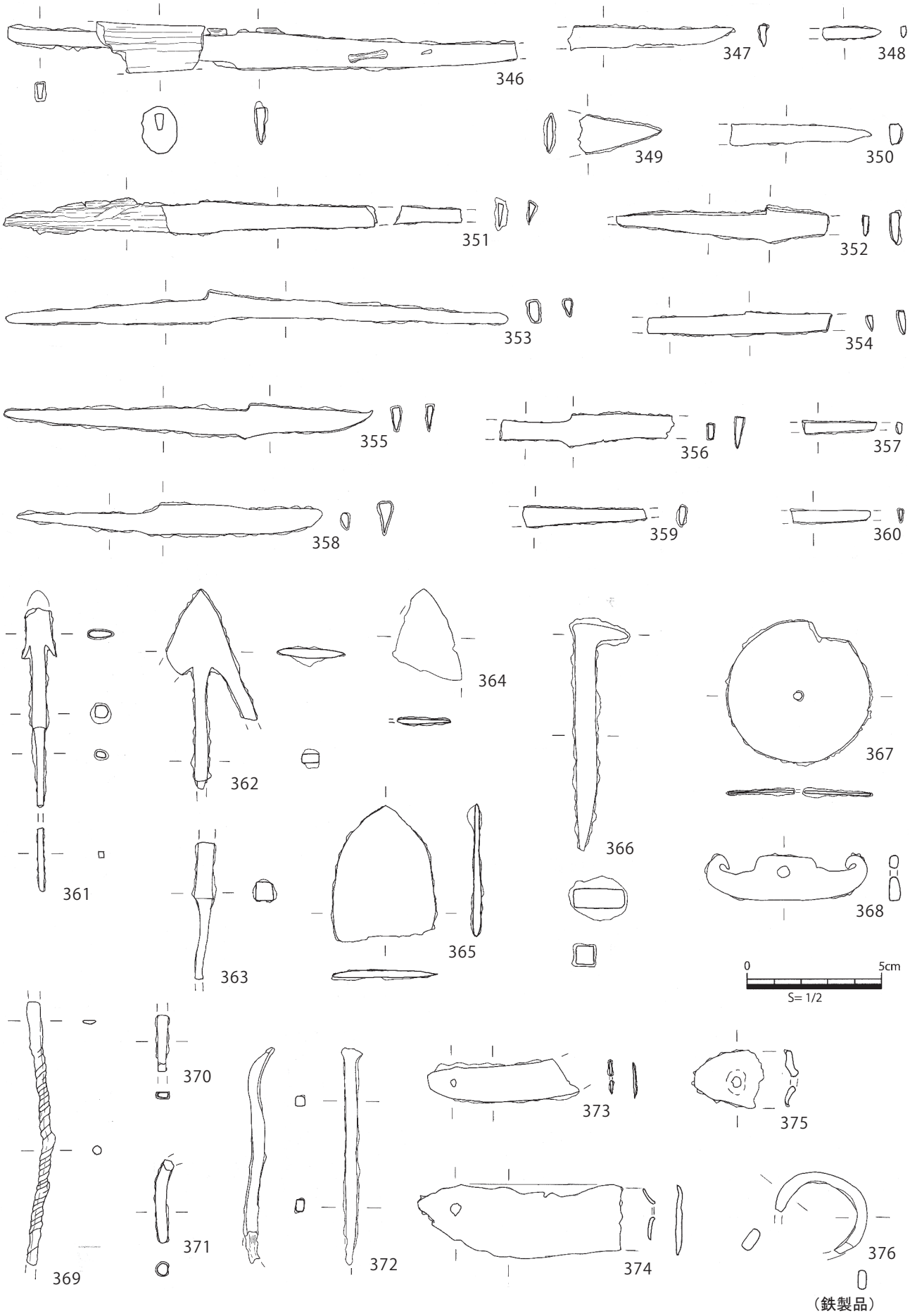
第４８図　出土土器（２１）　遺構外　奈良・平安時代（４）、墨書土器



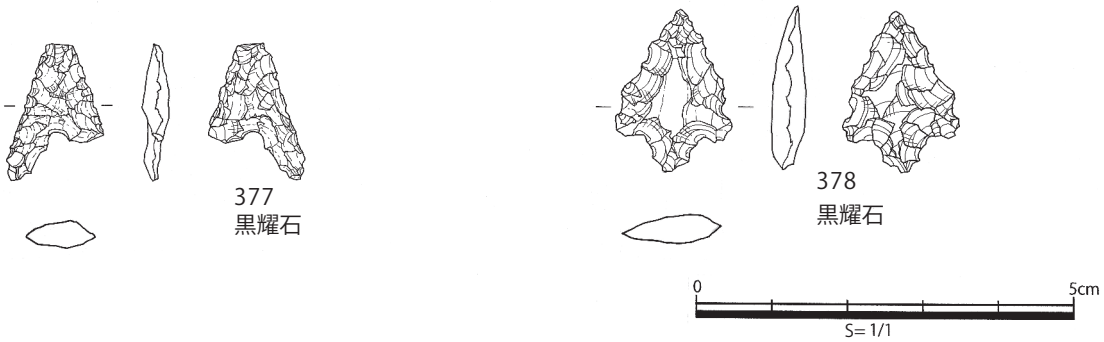
第４９図　出土土器（２２）　遺構外　刻書土器（１）

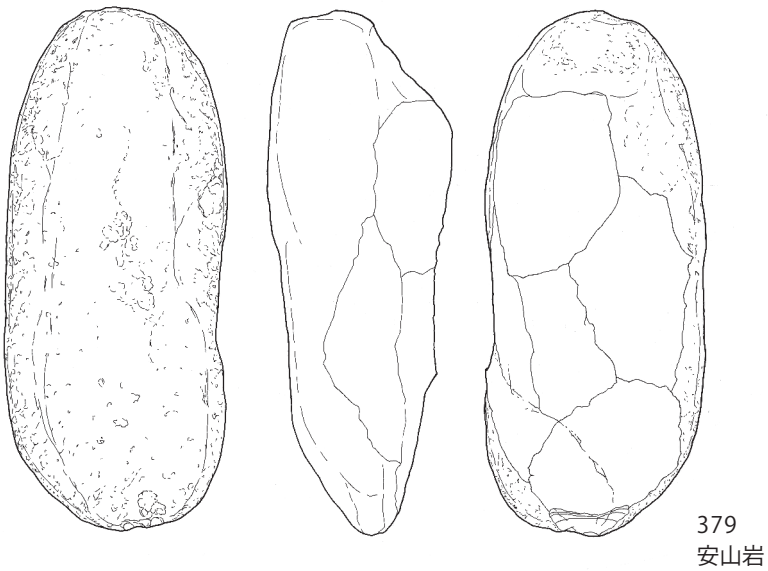


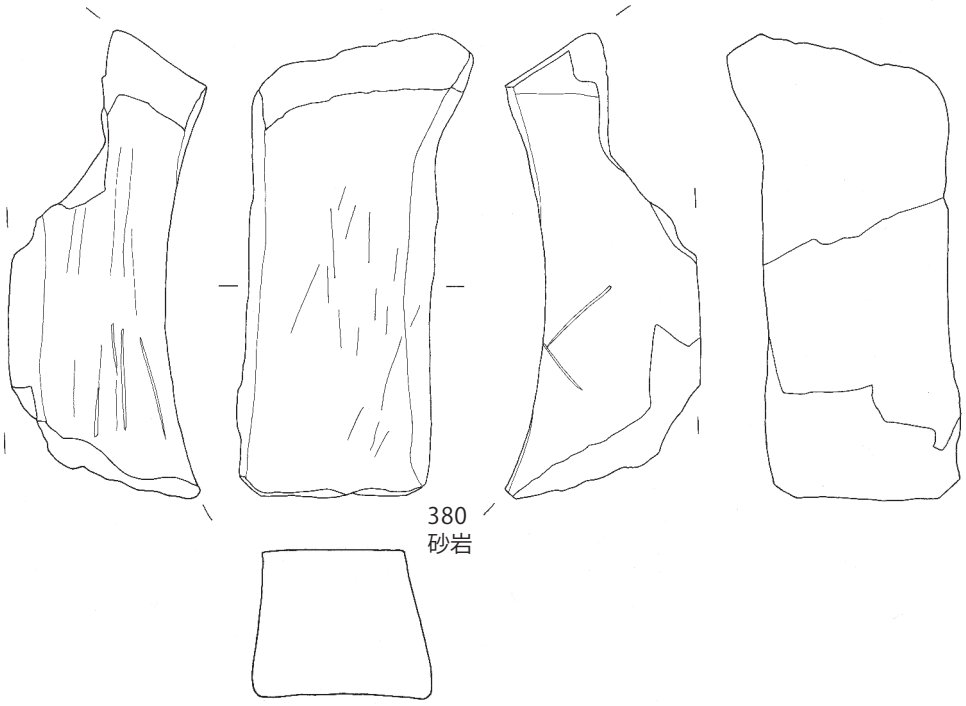
第５０図　出土土器（２３）　遺構外 刻書土器（２）、製塩土器、出土土製品


346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
0
5cm
S= 1/2
（鉄製品）

第５１図　出土鉄製品







（石製品）

0　5cm
S= 1/2

第５２図　出土石製品

第３表　土器観察表 (1)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
28	PL.13	1	SS03	土師器	甕	15.6	(11.9)	6.4	口縁部タテハケ 体部ヨコハケ	口縁部ヨコミガキ 体部ヨコハケ	ヘラケズリ	外：5YR4/4 にぶい赤褐色 内：5YR3/4 暗赤褐色	やや粗　白色粒子、石英含む	良好	80%	弥生後期～ 古墳前期	
28	PL.13	2	SS03	土師器	甕	-	(9.0)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良	10%	〃	外面スス付着
28	PL.13	3	SU01	土師器	甕	17.0	25.6	3.0	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコハケ	-	内：10Y3/1 オリーブ黒色 外：10YR5/4 にぶい黄褐色	砂粒（0 ～ 5㎜大）、白色粒子多く含む	良好	70%	古墳前期	口縁部、体部スス付着 内壁は黒色
28	PL.13	4	SU02	土師器	小型壺	-	(11.1)	-	タテミガキ	口縁部ミガキ 体部ナナメハケ、ユビオサエ	-	5YR5/3 にぶい赤褐色	密	良好	60%	〃	
28	PL.13	5	SU02	土師器	台付甕	18	(22.0)	-	ナナメハケ	頸部ヨコハケ 体部一部ナナメハケ		2.5YR4/6 赤褐色	やや粗　白色粒子多く含む	良好	70%	古墳	外面にスス付着
28	PL.13	6	SU02	土師器	S 字状口縁台付甕	14.6	(20.4)	-	口縁部ヨコナデ 体部上ナナメハケ、下タテハケ	口縁部ナデ 体部ユビオサエ、ヘラナデ	-	7.5YR4/6 褐色	密	良	30%	古墳前期	
28	PL.13	7	SU03	土師器	丸底壺	11.0	13.0	2.0	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	10YR5/6 黄褐色	やや粗　白色粒子　雲母	良好	60%	〃	
29	PL.13	8	SI01	土師器	坏	12.0	3.0	4.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子、スコリア含む	良好	30%	10世紀前半	刻書「□」
29	PL.13	9	SI01	土師器	坏	12.6	(3.6)	(5.0)	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切痕のち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、白色、黒色粒子含む	良好	40%	〃	
29	PL.13	10	SI01	土師器	小型甕	11.8	10.2	(7.5)	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	ナデ	木葉痕	5YR4/6 赤褐色	密　白色粒子、石英多く含む	良好	40%	〃	
29	PL.13	11	SI01	土師器	羽釜	21.0	(18.3)	-	タテハケ、ユビオサエ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR4/3 暗褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	40%	〃	
29	PL.13	12	SI02	土師器	坏	12.0	2.7	4.4	ヘラケズリ	ナデ	回転糸切り後ヘラケズリ	5YR5/8 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	25%	9世紀末～10世紀初頭	
29	PL.13	13	SI02	土師器	坏	12.5	(2.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR4/6 褐色	やや粗　白色粒子微量含む	良好	破片	〃	
29	PL.13	14	SI02	土師器	甕	28.0	(4.6)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	10YR4/6 褐色	密　白色粒子多く含む	良好	破片	〃	
29	PL.14	15	SI03	土師器	坏	12.0	3.9	4.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色、赤色、白色粒子含む	良好	60%	10世紀前半	
29	PL.14	16	SI03	土師器	坏	-	(2.0)	5.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　黒色粒子	良好	破片	〃	
29	PL.14	17	SI03	土師器	坏	13.4	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	内面にスス付着
29	PL.14	18	SI03	土師器	坏	14.0	(3.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR6/6 橙色	やや密	良好	破片	〃	
29	PL.14	19	SI03	土師器	内黒坏	15.2	4.7	(6.0)	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 内黒	ヘラケズリ	外：5YR5/6 明赤褐色 内：N 2/0 黒	密　黒色粒子、石英多く含む	良好	20%	〃	
29	PL.14	20	SI03	土師器	坏	16.4	(3.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2.5YR5/6 明赤褐色	緻密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	内外面口縁部付近にスス
29	PL.14	21	SI03	土師器	坏	-	(3.0)	5.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　黒色粒子、スコリア含む	良好	破片	〃	
29	PL.14	22	SI03	土師器	坏	-	(2.0)	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	外：2.5YR4/4 にぶい赤褐色 内：10YR3/2 黒褐色	密　白色粒子、スコリア含む	良好	破片	〃	
29	PL.14	23	SI03	土師器	内黒坏	-	(1.3)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ、内黒	全面ヘラナデ、ユビオサエ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色、赤色、白色粒子含む	良	破片	〃	
29	PL.14	24	SI03	土師器	坏	-	(3.2)	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	密　黒色、白色、赤色粒子含む	良好	40%	〃	
29	PL.14	25	SI03	土師器	皿	12.4	1.45	4.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR6/8 橙色	密　黒色粒子少量、赤色粒子多く含む	良好	25%	〃	
29	PL.14	26	SI03	土師器	皿	12.7	2.55	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	2.5YR5/8 明赤褐色	密　白色粒子少量、赤色粒子多く含む	良好	45%	〃	
30	PL.14	27	SI03	土師器	甕	34.8	5.6	-	タテハケ	口縁部ヨコハケ ナナメハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	28	SI03	土師器	甕	-	(4.5)	-	タテハケ	ヨコナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	29	SI03	土師器	小型甕	-	(3.5)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	外：5YR4/6 赤褐色 内：5YR3/2 暗赤褐色	密　白色粒子 , 金雲母含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	30	SI03	土師器	小型甕	-	6.7	8.4	タテハケ	ヘラナデ	木葉痕	7.5YR3/4 暗褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	31	SI03	土師器	小型甕	-	(3.35)	8.0	タテハケ	ナデ	木葉痕	外：5YR4/4 にぶい赤褐色 内：5YR3/2 暗赤褐色	密　白色粒子、石英、雲母多く含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	32	SI03	土師器	小型甕	11.3	(10.1)	-	ナデ	ナデ		5YR4/6 赤褐色	密　白色、黒色粒子　石英少	良好	15%	〃	
30	PL.14	33	SI03	土師器	鉢	-	(6.0)	-	タテハケ	ヨコハケ		2.5YR4/6 赤褐色	密　白色粒子、石英、雲母含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	34	SI04 カマド	土師器	坏	12.4	4.4	5.8	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	7.5YR5/8 明褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	60%	〃	墨書「舎」？
30	PL.14	35	SI04 カマド	土師器	坏	12.6	4.2	4.1	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	7.5YR6/6 橙色	密　黒色粒子含む	良好	完形	〃	刻書「川本」
30	PL.14	36	SI04 カマド	土師器	坏	11.9	4.2	4.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	10YR6/8 明黄褐色	密　黒色・白色粒子含む	良好	完形	〃	

第 4 表　土器観察表 (2)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
30	PL.14	37	SI04 カマド	土師器	坏	14.0	5.0	3.9	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	10YR5/6 黄褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	60%	10世紀前半	
30	PL.14	38	SI04 カマド	土師器	坏	14.8	4.5	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色、白色粒子含む	良好	40%	〃	
30	PL.14	39	SI04 カマド	土師器	坏	17.0	(3.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	40	SI04 カマド	土師器	坏か皿	-	(1.5)	4.6	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	2.5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	41	SI04 カマド	土師器	坏か皿	-	5.6	2.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	5YR6/6 明赤褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
30	PL.14	42	SI04 カマド	土師器	灯明皿	12.8	(2.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/8 明赤褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	口縁端部に灯心痕
30	PL.14	43	SI04 カマド	土師器	甕	29.4	-	(8.2)	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	口縁部ヨコナデ ナナメハケ	-	5YR4/8 赤褐色	密　金雲母、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
31	PL.14	44	SI04 カマド	土師器	甕	30.0	(23.1)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ、ユビオサエ	口縁部ヨコナデ ヨコハケ、ユビオサエ	-	外：7.5YR5/4 にぶい褐色 内：5YR4/6 赤褐色	密　金雲母、黒色粒子含む	良好	20%	〃	
31	PL.14	45	SI04 カマド	土師器	甕	28.4	21.8	-	口縁部ヨコハケ 体部タテハケ	ナナメハケ ユビオサエ	-	5YR5/8 明赤褐色	密　金雲母含む	良好	30%	〃	
31	PL.14	46	SI04 カマド	土師器	小型甕	14.6	(7.0)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	口縁部ヨコハケ 体部タテハケ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　黒色、白色粒子、雲母含む	良好	破片	〃	
31	PL.14	47	SI04 カマド	土師器	小型甕	15.2	(11.2)	-	口縁部ヨコナデ ヨコハケ	口縁部ナナメハケ ヨコハケ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　石英、雲母、黒色粒子含む	良好	30%	〃	
31	PL.14	48	SI04 カマド	土師器	小型甕	-	(4.5)	-	口縁部ヨコナデ タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　雲母、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
31	PL.14	49	SI04 カマド	土師器	甕	-	(5.1)	7.2	口縁部ヨコナデ タテハケ	口縁部ヨコハケ ヨコハケ	木葉痕	5YR4/6 赤褐色	密　雲母・石英・黒色粒子含む	良好	破片	〃	
31	PL.14	50	SI04 カマド	土師器	羽釜	26.0	9.9	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　雲母、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
31	PL.14	51	SI04	土師器	鉢	20.0	(7.6)	-	口縁部ヨコナデ タテハケ、ユビオサエ	ヨコナデ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　金雲母・白色粒子含む	良好	破片	〃	外面ハケ不明瞭
32	PL.14	52	SI04	灰釉陶器	長頸壺	-	(9.5)	-	ロクロナデ 灰釉	ロクロナデ	-	2.5Y7/1 灰白色	密	堅緻	20%	〃	
32	PL.14	53	SI04	須恵器	壺	-	8.0	(6.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り、貼付高台	10Y7/1 灰白色	密　黒色、白色粒子含む	堅緻	30%	〃	
32	PL.14	54	SI05	土師器	坏	15.0	(4.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色粒子少量含む	良好	破片	9 世紀後半	
32	PL.15	55	SI05	土師器	皿	13.2	2.5	4.6	ロクロナデ 体部下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 回転ヘラケズリ	5YR6/8 橙色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	
32	PL.14	56	SI05	土師器	皿	17.4	(2.8)	-	ロクロナデ 体部下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR4/6 褐色	やや粗　赤色粒子微量含む	良好	破片	〃	
32	PL.14	57	SI05	土師器	皿	15.4	(2.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 渦巻き状暗文	-	2.5YR4/6 赤褐色	密　石英、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
32	PL.14	58	SI05 カマド a	土師器	甕	30.1	(12.4)	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコナデ、ユビオサエ 体部上半ミガキ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　金雲母、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
32	PL.14	59	SI05 カマド a	土師器	甕	25.6	(8.5)	-	口縁部ヨコナデ タテハケ	ヨコハケ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
32	PL.14	60	SI05 カマド a	土師器	甕	-	(16.2)	8.4	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	5YR4/6 赤褐色	密　雲母、黒色、白色粒子含む	良好	30%	〃	
32	PL.15	61	SI05 カマド b	土師器	小型甕	15.2	(8.9)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	ヨコハケ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　金雲母、黒色粒子含む	良好	30%	〃	
32	PL.14	62	SI05	須恵器	壺？	-	(3.7)	12.4	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	5Y7/1 灰色	堅緻	良好	破片	〃	
33	PL.15	63	SI06	土師器	坏	11.4	3.9	4.8	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/8 明赤褐色	密　黒色粒子、白色粒子含む	良好	70%	9世紀 第4四半期	墨書土器「本人」
33	PL.15	64	SI06	土師器	皿	12.9	2.65	4.8	ロクロナデ 体部下半ロクロヘラケズリ	ロクロナデ 渦巻き状暗文	回転ヘラケズリ	10YR4/4 褐色	やや粗　ほぼ均一、赤色粒子含む	良	50%	〃	刻書土器「本人」
33	PL.15	65	SI07 カマド	土師器	灯明皿	12.0	3.85	4.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ヨコナデ	回転糸切り	7.5YR3/3 暗褐色	やや粗　赤色粒子多く含む	良好	45%	10世紀前半	口縁部に灯心痕
33	PL.15	66	SI07	土師器	灯明皿	11.9	(3.0)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR4/6 褐色	粗　赤色粒子含む　ほぼ均一	良好	破片	〃	口縁部に灯心痕
33	PL.15	67	SI07 カマド	土師器	坏	12.3	2.85	5.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	外：7.5YR6/6 橙色 内：5YR5/6 明赤褐色	密　石英、赤色粒子、白色粒子含む	良好	45%	〃	
33	PL.15	68	SI07	土師器	坏	12.6	(2.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR4/6 褐色	やや粗　赤色粒子含む　ほぼ均一	良好	破片	〃	
33	PL.15	69	SI07	土師器	坏	13.3	(3.0)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR4/6 赤褐色	やや粗　赤色粒子含む	良好	破片	〃	

第 5 表　土器観察表 (3)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
33	PL.15	70	SI07	土師器	坏	-	(1.9)	4.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/8 明赤褐色	密　金雲母、黒色粒子、白色粒子含む	良好	50%	10世紀前半	
33	PL.15	71	SI07	土師器	坏	13.3	(3.3)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　石英、白色粒子含む	良好	破片	〃	
33	PL.15	72	SI07	土師器	内黒坏	16.0	(3.3)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 内黒	-	外：5YR4/6 赤褐色 内：2.5Y2/1 黒色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
33	PL.15	73	SI07	須恵器	坏	-	(2.7)	8.8	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	外：2.5Y3/2 黒褐色 内：2.5Y4/4 オリーブ褐色	やや粗　ほぼ均一	不良	破片	〃	
33	PL.15	74	SI07	灰釉陶器	坏				ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	外：5Y7/1 灰白色 内：5Y6/1 灰色	緻密　黒色粒子、白色粒子含む	堅緻	70%	〃	みこみ部・高台頂部に摩耗（磨墨面）磨墨面に朱墨
33	PL.15	75	SI07	土師器	甕	33.0	(5.0)	-	口縁部ヨコハケ 体部タテハケ	ヨコナデ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
33	PL.15	76	SI07	土師器	甕	32.0	(9.1)	-	タテハケ	ヨコナデ ユビオサエ	-	7.5YR4/4 褐色	密　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	77	SI07	土師器	甕	32.0	(3.4)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ、ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ ヨコハケ	-	7.5YR4/4 褐色	密　雲母、石英、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	78	SI07	土師器	甕	38.0	(4.8)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	ヨコハケ	-	外：5YR4/6 赤褐色 内：5YR3/3 暗赤褐色	密　雲母、石英、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	79	SI07 カマド	土師器	甕	38.0	(5.5)	-	タテハケ	口縁部ヨコハケ 体部ナナメハケ	-	7.5YR4/3 褐色	密　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	80	SI07	土師器	甕	38.0	(6.8)	-	口縁部ヨコナデ 体部タテハケ	口縁部ヨコナデ 体部ヨコハケ	-	7.5YR4/3 褐色	密　雲母、石英、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	81	SI07	土師器	甕	-	(2.6)	8.8	ロクロナデ	ヨコハケ みこみ部ユビオサエ	-	7.5YR4/6 褐色	粗　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
34	PL.15	82	SI07	土師器	甕	-	(2.7)	8.0	タテハケ	ヨコハケ	木葉痕	10YR4/6 褐色	密　雲母、黒色粒子、白色粒子含む	良好	10% 以下	〃	
34	PL.15	83	SI07	土師器	小型甕	15.6	15.0	8.7	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	5YR4/6 赤褐色	密　雲母、石英、赤色粒子、白色粒子含む	良好	60%	〃	
34	PL.15	84	SI07 カマド	土師器	小型甕	19.0	(10.3)	-	タテハケ	ヨコナデ	-	外：5YR4/6 赤褐色 内：5YR3/4 暗赤褐色	密　雲母少量、石英、黒色、白色粒子含む	良好	15%	〃	
34	PL.15	85	SI07 カマド	土師器	羽釜	20.0	(6.0)	-	タテハケ	ヨコハケ		5YR4/6 赤褐色	やや粗　長石、白色粒子含む	良好	破片	〃	
35	PL.16	86	SI07	須恵器	甕	-	(11.5)	-	タタキ	ナデ、ユビオサエ	-	2.5YR3/1 黒褐色	密	堅緻	破片	〃	
35	PL.16	87	SI07	須恵器	甕	-	(20.4)	-	タタキ	ヘラナデ	-	5Y4/1 灰色	密　黒色粒子、白色粒子含む	堅緻	破片	〃	
35	PL.16	88	SI08	土師器	坏	(11.8)	4.5	7.8	ロクロナデ ヨコミガキ	みこみ部 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ、ミガキ	5YR6/6 明赤褐色	密　赤色粒子、黒色粒子、白色粒子含む	良好	80%	8世紀後半 ～9世紀初頭	
35	PL.16	89	SI08	土師器	坏	11.7	4.5	6.8	ロクロナデ ヨコミガキ	みこみ部 体部放射状暗文	全面ヘラケズリのちミガキ	2.5YR6/6 橙	密　白色粒子少量含む	良好	30%	〃	刻書「　」
35	PL.16	90	SI08	土師器	坏	-	(3.0)	(7.6)	ロクロナデ 底部下半斜位ヘラケズリ	みこみ部 体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　白色粒子少量、赤色粒子含む	良好	20%	〃	
35	PL.16	91	SI08	土師器	坏	-	(3.8)	-	ロクロナデ	ミガキ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	外面スス付着
35	PL.16	92	SI08	須恵器	坏	-	(1.1)	8.7	ロクロナデ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	2.5Y5/2 暗灰黄色	やや密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
36	PL.16	93	SI08	土師器	甕	25.2	(25.4)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　金雲母、黒色粒子含む	良好	25%	〃	
36	PL.16	94	SI08	土師器	小型甕	14.0	(2.6)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	外：7.5YR4/6 褐色 内：7.5YR2/1 黒色	やや粗　金雲母含む	良好	破片	〃	
36	PL.16	95	SI08	土師器	小型甕	14.4	(8.3)	-	タテハケ	口縁部ナナメハケ 体部ヨコハケ、ユビオサエ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　金雲母含む	良好	10%	〃	
36	PL.16	96	SI08	土師器	小型甕	13.8	12.4	8.4	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　金雲母、黒色粒子含む	良好	25%	〃	
36	PL.16	97	SI08	土師器	小型甕	17.0	(11.0)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR4/4 褐色	密　雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
36	PL.16	98	SI08	須恵器	壺	-	(11.9)	-	ナデ	ナデ	-	7.5Y4/1 灰色	密　白色粒子含む	堅緻	破片	〃	
36	PL.16	99	SI09	土師器	坏	12.3	3.9	4.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	5YR5/8 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	85%	10世紀前半	墨書「王」、みこみ部にスス溜まり
36	PL.16	100	SI09	土師器	坏	13.0	3.6	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 半分ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色、赤色粒子含む	良好	完形	〃	墨書「合」、内外面スス付着
36	PL.16	101	SI09	土師器	坏	12.6	4.2	4.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR6/8 橙色	密　赤色粒子含む	良好	ほぼ完形	〃	刻書「十」「十」
37	PL.16	102	SI09 カマド	土師器	坏	12.2	3.5	(2.4)	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	7.5YR5/8 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	95%	〃	
37	PL.16	103	SI09	土師器	坏	12.0	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR4/3 褐色	密　スコリア、白色粒子含む	良好	破片	〃	
37	PL.16	104	SI09 カマド	土師器	坏	12.6	3.6	4.4	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	5YR6/8 橙色	緻密　赤色、黒色粒子含む	良好	50%	〃	
37	PL.16	105	SI09 カマド	土師器	坏	12.6	3.5	4.4	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子、スコリア含む	良好	60%	〃	
37	PL.16	106	SI09	土師器	坏	14.2	(4.1)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	10YR3/3 暗褐色	密　白色、赤色粒子含む	良好	破片	〃	

第６表　土器観察表 (4)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
37	PL.16	107	SI09	土師器	内黒坏	13.7	3.2	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	内：2.5Y2/1 黒色 外：5YR3/2 暗赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	10世紀前半	
37	PL.16	108	SI09	土師器	坏	13.0	3.8	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR6/6 褐色	緻密　赤色、白色粒子含む	良好	40%	〃	底部外面にススス付着
37	PL.16	109	SI09	土師器	坏	12.9	4.1	4.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	2.5YR5/8 明赤褐色	密　黒色、白色粒子含む	良	99%	〃	
37	PL.16	110	SI09	土師器	坏	14.0	5.0	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　白色粒子、スコリア含む	良好	45%	〃	
37	PL.16	111	SI09	土師器	皿	13.0	3.0	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	7.5YR4/6 褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	60%	〃	
37	PL.16	112	SI09	土師器	皿	13.6	2.0	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	緻密　赤色粒子含む	良好	20%	〃	
37	PL.16	113	SI09	土師器	皿	12.1	2.3	3.6	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　白色、赤色粒子含む	良好	90%	〃	
37	PL.16	114	SI09	土師器	皿	13.0	(3.0)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR6/6 橙色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
37	PL.16	115	SI09 カマド	土師器	皿	11.9	3.1	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子、石英少量含む	良好	完形	〃	
37	PL.16	116	SI09	土師器	甕	27.0	(6.1)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	5YR4/6 赤褐色	密　白色、黒色粒子、雲母含む	良好	破片	〃	
37	PL.16	117	SI09 カマド	土師器	甕	30.0	(7.2)	-	口縁部ナナメハケ 体部タテハケ	口縁部ヨコハケ 体部ナナメハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色、赤色粒子、雲母多く、石英含む	良好	破片	〃	
37	PL.16	118	SI09 カマド	土師器	甕	34.0	(8.6)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	破片	〃	
37	PL.16	119	SI09 カマド	土師器	甕	36.0	(7.5)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	外：7.5YR4/3 褐色 内：5YR4/6 赤褐色	密　金雲母、黒色粒子、小石含む	良好	破片	〃	
38	PL.16	120	SI09 カマド	土師器	甕	27.0	12.0	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	10YR3/3 暗褐	密　白色粒子、雲母含む	良好	破片	〃	
38	PL.16	121	SI09 カマド	土師器	甕	33.0	(11.3)	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコハケ	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	密　白色粒子、雲母、スコリア含む	良好	破片	〃	
38	PL.16	122	SI09 カマド	土師器	甕	32.4	(20.0)	-	タテハケ	口縁付近ナナメハケ 体部ヨコハケ	-	2.5YR4/8 赤褐色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
38	PL.16	123	SI09 カマド	土師器	甕	31.0	(14.9)	-	タテハケ	口縁付近ナナメハケ 体部ヨコハケ、ユビオサエ	-	2.5YR4/4　にぶい赤褐色	密　白色粒子少量、雲母多く、石英含む	良好	15%	〃	
39	PL.16	124	SI09	土師器	甕	28.4	(19.0)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	5YR5/8 明赤褐色	密　金雲母、白色、黒色粒子含む	良好	20%	〃	
39	PL.16	125	SI09	土師器	甕	31.0	(17.2)	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR4/5 褐色	粗　２㎜程の砂粒多く、雲母含む	良好	20%	〃	
39	PL.17	126	SI09	土師器	甕	-	(4.6)	8.0	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　雲母、白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
39	PL.17	127	SI09 カマド	土師器	甕	-	(5.8)	8.4	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	5YR5/6 明赤褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
39	PL.17	128	SI09 カマド	土師器	甕か鉢	-	(3.6)	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	7.5YR3/3 暗褐色	密　白色、黒色粒子少量、石英、雲母多く含む	良好	破片	〃	
39	PL.17	129	SI09	土師器	小型甕	27.0	(7.6)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	7.5YR4/6 褐色	密　雲母、白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
39	PL.17	130	SI09 カマド	土師器	小型甕	16.0	(10.9)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/6 赤褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	75%	〃	
39	PL.17	131	SI09	土師器	小型甕	18.3	14.8	8.5	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	5YR4/3 にぶい赤褐色	密　白色、黒色粒子少量、石英、雲母含む	良好	65%	〃	
40	PL.17	132	SI09 カマド	土師器	小型甕	20.6	(13.5)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/8 赤褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	30%	〃	
40	PL.17	133	SI09 カマド	土師器	小型甕	-	(10.2)	8.0	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	外：7.5YR5/3 にぶい褐色 内：5YR4/3 にぶい赤褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	20%	〃	
40	PL.17	134	SI09 カマド	土師器	羽釜	19.0	(13.3)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	2.5YR4/3 にぶい赤褐色	やや粗　白色粒子、雲母含む	良好	20%	〃	
40	PL.17	135	SI09	灰釉陶器	壺	-	(10.3)	9.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切りのち 貼り付け高台	胎土：5Y6/1 灰釉：7.5Y 灰オリーブ	堅緻	良好	30%	〃	
40	PL.17	136	SI09 カマド	土師器	鉢	30.2	(10.6)	-	タテハケ	口縁部ナナメハケ 体部ヨコハケ、ユビオサエ	-	5YR4/6 赤褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
40	PL.17	137	SI09 カマド	土師器	鉢	30.0	(16.8)	-	タテハケ ユビオサエ	ヨコハケ ユビオサエ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　雲母、白色粒子、スコリア含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	138	SI10	土師器	坏	11.0	4.2	6.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	みこみ部 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	90%	８世紀後半 ～９世紀初頭	
41	PL.17	139	SI10	土師器	坏	10.5	4.7	6.4	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	みこみ部 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　白色、赤色粒子少量含む	良好	30%	〃	
41	PL.17	140	SI10	土師器	坏	12.0	4.7	7.6	ロクロナデ、ヨコミガキ 体部下半斜位ヘラケズリ	体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	5YR6/6 橙色	密　白色、黒色粒子含む	良好	50%	〃	底部刻書「九字」
41	PL.17	141	SI10	土師器	坏	12.0	5.1	6.2	ロクロナデ、ヨコミガキ 体部下半斜位ヘラケズリ	みこみ部 体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	5YR6/8 橙色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	45%	〃	
41	PL.17	142	SI10	土師器	坏	11.8	5.1	7.4	ロクロナデ、ヨコミガキ	みこみ部 体部放射状暗文	ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子少量含む	良好	20%	〃	
41	PL.17	143	SI10	土師器	坏	12.7	5.2	-	ロクロナデ、ヨコミガキ	体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、赤色、黒色粒子、石英少量含む	良好	15%	〃	刻書「＃」

第７表　土器観察表 (5)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
41	PL.17	144	SI10	土師器	坏	12.4	3.9	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	体部放射状暗文	-	5YR4/6 赤褐色	密　赤色粒子、石英少量含む	良好	15%	8 世紀後半 ～ 9 世紀初頭	
41	PL.17	145	SI10	土師器	坏	10.0	(3.1)	-	ヨコミガキ	放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色粒子少量含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	146	SI10	須恵器	坏	12.9	5.4	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	N3/ 暗灰色	堅緻　白色粒子多く含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	147	SI10	須恵器	坏	14.0	(3.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5Y4/1 灰色	密　白色粒子多く含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	148	SI10	須恵器	坏	14.5	(5.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	N2/0 黒色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	149	SI10	須恵器	坏	-	(1.5)	8.5	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2.5YR4/1 黄灰色	密　白色粒子含む	不良	破片	〃	
41	PL.17	150	SI10	須恵器	高台坏	-	(2.5)	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り後ナデのち 貼付高台	外：10YR5/3 にぶい黄褐色 内：7.5Y3/1 オリーブ黒	密　白色粒子、長石含む	良好	破片	〃	
41	PL.17	151	SI10	須恵器	蓋	18.0	(2.5)	-	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5Y5/1 灰	密　白色粒子、石英　含む	良好	40%	〃	
41	PL.17	152	SI10	土師器	甕	-	(4.8)	8.5	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	木葉痕	7.5YR4/4 褐色	密　雲母多く、白色粒子、スコリア含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	153	SI10	土師器	甕	-	(6.6)	8.8	タテハケ、ユビオサエ	ヘラナデ、ユビオサエ	木葉痕、外周ヘラケズリ	外：7.5YR4/3 暗褐色 内：10YR3/2 黒褐色	密　白色粒子、雲母、長石含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	154	SI10	土師器	甕	21.6	(5.6)	-	タテハケ	ナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子少、白色粒子、石英、雲母含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	155	SI10	土師器	甕	23.0	(17.5)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR4/6 褐色	密　白色、黒色、赤色粒子含む	良好	20%	〃	
42	PL.17	156	SI10	須恵器	甕	-	(9.2)	-	タタキ、自然釉	ナデ、自然釉	-	7.5Y4/1 灰色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	157	SI10	須恵器	甕	-	(8.3)	-	タタキ	ヨコ～ナナメハケ	-	外：N3/0 暗灰色 内：N4/0 灰色	密　白色粒子多く、石英少量含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	158	SI10	須恵器	甕	-	(5.5)	-	タタキ、自然釉	同心円状の当て具痕	-	外：2.5GY2/1 黒色 内：5Y5/1 灰色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	
42	PL.17	159	SI10	土師器	小型甕	14.2	(4.70)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR5/8 明赤褐色	密　金雲母、白色、黒色粒子含む	良	破片	〃	内面スス付着
42	PL.17	160	SS01	土師器	坏	-	(1.4)	5.4	ロクロナデ 底部下半斜位ヘラケズリ	体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子、スコリア含む	良好	破片	9 世紀代	刻書あり
42	PL.17	161	SS02	須恵器	甕	26.0	(7.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	外：10YR5/2 灰黄褐色 内：10YR7/1 灰白色	密　白色、黒色、赤色粒子含む	良好	破片	平安？	
42	PL.17	162	SL01	土師器	甕	17.0	(4.2)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色、黒色粒子、雲母含む	良好	破片	10世紀前半以降	
42	PL.17	163	SL01	土師器	羽釜	20.0	(6.3)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/6 赤褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	破片	〃	
43	PL.18	164	SP15	土師器	坏	10.5	3.8	5.4	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	みこみ部 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子含む	良好	40%	8 世紀後半 ～ 9 世紀初頭	墨書「山口」
43	PL.18	165	SP22	土師器	坏	12.0	(2.9)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	10YR3/1 黒褐色	密　白色粒子含む	良好	破片	10世紀前半以降	刻書「十」
43	PL.18	166	SK19	土師器	坏	12.6	(2.8)	-	ヨコミガキ、黒色処理	ヨコミガキ、黒色処理	-	10YR5/4 にぶい黄褐色	密	良	破片	古墳後期	
43	PL.18	167	SK30	土師器	坏か皿	-	(0.8)	4.8	体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	密　白色、赤色粒子微量含む	良好	破片	平安	墨書あり
43	PL.18	168	AT-21 区	縄文土器	深鉢	32.0	(5.8)	-	羽状口縁、縄文地文	ナデ	-	10YR3/1 黒褐色	密　白色粒子、長石、スコリア含む	良好	破片	縄文前期後半	諸磯Ｂ３
43	PL.18	169	AT19 区	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	集合沈線、ボタン状貼付文	ナデ	-	外：10YR3/3 暗褐色 内：5YR5/6 明赤褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	破片	縄文前期後半	諸磯Ｃ
43	PL.18	170	AR21 区	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	-	縄文地文	ナデ	-	7.5YR4/4 褐色	密　白色粒子、石英含む	良好	破片	縄文中期	
43	PL.18	171	AS-18・19 AR-21 区	弥生土器	壺	-	(9.5)	-	横位沈線、縄文充填	ナデ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　白色粒子含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	172	AQ-19 区	弥生土器	甕か壺？	-	(3.8)	-	口縁部・隆線上に刻み 斜行沈線	ナデ	-	2.5YR2/1 黒色	密　白色粒子、長石含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	173	AT-16 区	弥生土器	甕か壺？	-	(3.2)	-	口縁部刻み、朱塗り 横位沈線	ナデ	-	10YR3/1 黒褐色	密　白色粒子、石英、雲母含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	174	AT-17 区	弥生土器	甕か壺？	-	(3.2)	-	竹管状工具による刺突	ナデ	-	外：7.5YR4/4 褐色 内：10YR2/1 黒色	密　白色粒子、石英、雲母含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	175	AP-20 区	弥生土器	甕か壺？	-	(4.0)	-	斜行沈線	ナデ	-	10YR6/4 にぶい黄橙色	密　白色粒子、石英含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	176	AO-20 区	弥生土器	甕か壺？	-	(4.0)	-	斜行沈線	ナデ	-	2.5Y4/2 暗灰黄色	密　白色粒子、長石含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	177	AW-16 区	弥生土器	甕か壺？	-	(4.0)	-	矢羽根条線	ナデ	-	2.5YR4/2 暗灰黄色	密　白色粒子、長石含む	良好	破片	弥生中期中葉	
43	PL.18	178	AR-18 区	弥生土器	甕か壺？	-	(5.3)	-	横位、斜行沈線	ナデ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　雲母、スコリア含む	良好	破片	弥生中期後半以前	
43	PL.18	179	AS-19 区	弥生土器	甕？	-	(3.5)	-	口縁部刻み 頸部櫛描波状文	口縁部ヨコナデ 頸部ヨコミガキ	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	やや粗　白色、黒色粒子多く、雲母微量含む	良好	破片	弥生中期	栗林式土器
43	PL.18	180	AT-19 区	弥生土器	甕	-	(6.5)	-	体部上半櫛描波状文	ヨコミガキ	-	7.5YR5/3 にぶい褐色	やや粗　白色、黒色粒子多く、雲母微量含む	良好	破片	弥生中期	栗林式土器
43	PL.18	181	AS-18 区	弥生土器	甕	-	(3.8)	6.4	ヘラケズリ	ナデ	木葉痕	2.5Y6/4 にぶい黄色	密　白色、黒色粒子、雲母含む	良好	破片	弥生時代	
43	PL.18	182	AV-17 区	弥生土器	壺	9.6	(11.2)	-	口縁部ミガキ、タテハケ 頸部ハケ後ミガキ　体部ミガキ	頸部ミガキ 体部ヨコハケ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　黒色粒子、スコリア含む	良好	破片	弥生中期	
43	PL.18	183	AO-19 区	弥生土器	壺	-	(4.3)	-	ナデ、赤彩	ナデ、赤彩	-	2.5Y7/3 浅黄色	白色粒子、砂粒多く含む	良好	破片	弥生時代	
44	PL.18	184	AT-17 区	土師器	坏	14.9	(3.9)	-	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	古墳	
44	PL.18	185	AT17 区	土師器	坏	13.1	(4.6)	-	ヨコミガキ、黒色処理	ヨコミガキ、黒色処理	-	7.5YR3/4 暗褐色	密　赤色粒子、白色粒子含む	良好	破片	古墳中～後期	
44	PL.18	186	AT17 区	土師器	坏	9.6	(3.0)	-	ヨコミガキ、黒色処理	ヨコミガキ、黒色処理	-	10YR2/2 黒褐色	密　赤色粒子含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	187	AT-17 区	土師器	丸底坏	10.0	6.2	4.0	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黄色粒子含む	良好	85%	古墳後期	内面スス付着
44	PL.18	188	AS-17 区	土師器	坏	10.6	(4.9)	-	ヨコミガキ、黒色処理	ヨコミガキ、黒色処理	-	10YR3/2 黒褐色	密	良	破片	古墳中～後期	

第８表　土器観察表 (6)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
44	PL.18	189	AQ-20 区	土師器	坏	12.0	3.0	-	ヨコミガキ、黒色処理	ヨコミガキ、黒色処理	ヘラケズリ	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	密	良	25%	古墳後期	
44	PL.18	190	AT-17 区	土師器	坏	14.4	4.6	-	体部下半ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	5YR6/6 橙色	密　白色、黒色粒子含む	良好	40%	〃	
44	PL.18	191	AO-20 区	土師器	坏	13.8	3.1	10.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	10YR5/8 黄褐色	やや密　白色粒子微量含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	192	AQ-21 区	土師器	坏	12.0	(3.8)	-	ロクロナデ	ヨコミガキ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色、白色粒子含む	良	50%	〃	
44	PL.18	193	AQ-21 区	土師器	坏	13.6	(3.6)	-	ヨコミガキ	ヨコミガキ	-	2.5YR5/8 明赤褐色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	194	AQ-20 区	土師器	高坏	-	(5.1)	-	ヘラケズリ	細かいヨコミガキ	ヘラケズリ	内：10YR6/4 にぶい黄橙色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	古墳中期	
44	PL.18	195	AQ-21 区	土師器	高坏	-	(4.8)	-	高台タテミガキ	-	ユビオサエ	7.5YR6/4 にぶい橙色	密　均一	良好	破片	〃	
44	PL.18	196	AR-19 区	土師器	甕	20.6	(9.25)	-	口縁部ナナメハケ 口縁端部刺突、体部ヨコハケ	ヨコハケ	-	10YR5/4 にぶい黄褐色	密　白色、黒色粒子、石英含む	良好	15%	古墳前期	
44	PL.18	197	AR-19 区	土師器	甕	12.8	(5.0)	-	タテハケ	ナデ	-	10YR6/4 にぶい黄褐色	密　白色、黒色粒子、石英含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	198	AP-21 区	S	S 字状口縁台付甕	15.0	(3.1)	-	タテハケ	ナデ	-	外：2,5Y2/1 黒色 内：7.5YR4/3 褐色	密　白色粒子、雲母含む	良好	破片	古墳中期？	
44	PL.18	199	AR-19 区	土師器	単純口縁台付甕	16.5	22.8	8.4	頸部ヨコハケ　タテハケ	ヨコハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	7.5YR5/6 明褐色	密　白色、赤色粒子、石英含む	良好	35%	古墳前期	
44	PL.18	200	AR-20 区	土師器	甕か壺	-	(5.0)	15.6	タテハケ	ヨコミガキ	ヘラケズリ	5YR5/3 にぶい赤褐色	やや密	良	破片	〃	
44	PL.18	201	AS-18 区	土師器	甕	-	(7.6)	6.8	タテハケ後タテミガキ	ヨコミガキ みこみ周辺ヘラナデ	ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子、石英、雲母含む	良好	15%	〃	
44	PL.18	202	AT-17 区	土師器	壺	9.0	(3.10)	-	タテハケ後ナデ	ヨコハケ 口縁部ヨコミガキ	-	7.5YR6/8 橙色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	有孔
44	PL.18	203	AP-19 区	土師器	小型丸底坩	11,6	(5,20)	-	タテミガキ	タテミガキ	-	7.5YR5/8 明褐色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	204	AQ-20 区	土師器	単純口縁壺	10.8	(3.9)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	7.5YR6/6 橙色	やや粗　白色粒子含む	良好	破片	〃	
44	PL.18	205	AP-19 区	土師器	壺？	-	(5.0)	-	ヨコミガキ	ヨコハケ	-	7.5YR6/8 橙色	密　赤色粒子含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	206	AQ-20 区	土師器	丸底壺	11.8	18.7	8.0	ナナメヘラケズリ	ヨコハケ、ユビオサエ	ケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	45%	古墳中期	
45	PL.18	207	AS-19 区	土師器	壺	10.6	(8.1)	-	頸部タテハケ 体部ヨコミガキ	ヨコハケ	-	5YR5/6 明赤褐色	やや粗　白色粒子少量含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	208	AP-19 区	土師器	甕か壺	-	(3.3)	7.4	タテハケ	ヨコハケ	ヘラケズリ	10YR5/4 にぶい黄褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	209	AO-19 区	土師器	小型壺	12.0	(5.6)	-	ヨコナデ、ユビオサエ	ヨコナデ、ユビオサエ	-	10YR5/4 にぶい黄褐色	密　白色粒子、石英含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	210	AR-19 区	土師器	小型鉢	12.4	6.6	5.4	ミガキ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　金雲母、白色、黒色粒子含む	良好	65%	〃	
45	PL.18	211	AS-20 区	土師器	坏	15.3	(5.4)	-	ロクロナデ、ヨコミガキ	ロクロナデ 放射状暗文	-	5YR4/6 赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	15%	９世紀後半	
45	PL.18	212	AS-18 区	土師器	坏	-	(1.1)	6.4	ロクロナデ、ヨコミガキ	ロクロナデ みこみ・体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	密　赤色粒子微量含む	良好	破片	９世紀前半	
45	PL.18	213	AR-17 区	土師器	坏	-	(1.3)	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	９世紀後半	
45	PL.18	214	AS-19 区	土師器	坏	-	(1.9)	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色粒子少量含む	良好	破片	９世紀前半	
45	PL.18	215	AP-19 区	土師器	坏	-	(2.1)	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	5YR6/6 橙色	密　赤色粒子含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	216	AR-17 区	土師器	坏	-	(0.7)	4.6	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	全面ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	やや粗　砂粒微量含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	217	AR-20 区	土師器	坏	10.0	3.3	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR7/6 橙色	密　スコリア含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	218	AU-16 区	土師器	坏	14.0	(3.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	2.5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	25%	９世紀後半	
45	PL.18	219	AS-19 区	土師器	坏	-	(1.6)	5.4	ロクロナデ体部 下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	やや密　赤色粒子少量、雲母微量含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	220	AX-15 区	土師器	坏	-	(2.7)	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密	良好	破片	〃	
45	PL.18	221	AQ-21 区	土師器	坏か皿	-	(0.7)	4.0	体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	5YR6/6 橙色	緻密　赤色粒子含む	良好	破片	９世紀末～ 10 世紀前半	
45	PL.18	222	AT-22 区	土師器	坏か皿	-	(1.8)	4.2	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	2.5YR5/8 明赤褐色	密　赤色粒子、含む石英	良好	破片	〃	
45	PL.18	223	AT・AU-22 区	土師器	坏か皿	-	(1.2)	4.3	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ	5YR4//6 赤褐色	やや粗　白色、赤色粒子多く含む	良好	破片	〃	
45	PL.18	224	AS・AT-21・22 区	土師器	坏	-	(2.8)	(5.7)	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち ヘラケズリ	7.5YR5/8 明褐色	やや密　赤色粒子多く含む	良好	30%	10 世紀前半	
45	PL.18	225	AR-20 区	土師器	坏	10.9	(2.2)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	やや粗、白色、赤色粒子微量含む	良好	破片	９世紀末～ 10 世紀初頭	
45	PL.18	226	AU-20 区	土師器	坏	12.0	(3.7)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密	良	破片	10 世紀前半	
45	PL.18	227	AT-17 区	土師器	坏	14.8	(4.6)	-	ロクロナデ	ヨコミガキ	-	内：5YR4/6 赤褐色 外：10YR5/4 にぶい黄褐色	やや密　4mm 程度の小石含む	良好	破片	〃	
45	PL.19	228	AS-21・22 区	土師器	坏	12.6	(3.8)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	やや密　白色、赤色粒子含む	良	破片	〃	

第９表　土器観察表 (7)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
45	PL.19	229	AQ-20 区	土師器	内黒坏	15.2	(3.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	外：7.5YR5/4 にぶい褐色 内：7.5Y2/1 黒色	密　赤色、黒色粒子、石英含む	良好	破片	10 世紀前半	
45	PL.19	230	AT-22 区	土師器	坏	12.3	(3.9)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR4/3 褐色	密　赤色粒子少量、石英多く含む	良好	破片	〃	内外面スス付着
46	PL.19	231	AT・AU-22 区	土師器	坏	12.0	4.0	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR6/8 橙色	緻密　赤色粒子含む	良好	45%	9世紀末~10世紀初頭	
46	PL.19	232	AR-18 区	土師器	坏	14.7	4.5	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR5/8 明赤褐色	密　白色、黒色粒子少量、石英多く含む	良好	40%	10 世紀後半	
46	PL.19	233	AU-17 区	土師器	坏	-	2.0	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	7.5YR5/6 明褐色	密　黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	234	AT-17 区	土師器	坏	-	(2.2)	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR4/6 赤褐色	密　スコリア含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	235	AT-17 区	土師器	坏か皿	-	(1.0)	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	2.5YR5/6 明赤褐色	密　白色、赤色粒子、石英含む	良好	15%	〃	
46	PL.19	236	AQ-20 区	土師器	皿	11.5	(2.0)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、赤色、黒色粒子含む	良好	破片	9 世紀後半 ～10世紀前半	
46	PL.19	237	AR-19 区	土師器	皿	12.0	2.3	4.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	238	AP-19 区	土師器	蓋	15.0	(1.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　スコリア含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	239	AS・AT-21 区	土師器	甕	27.0	(5.8)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	2.5YR4/4　にぶい赤褐色	密　雲母、長石、黒色粒子含む	良	破片	10 世紀前半	
46	PL.19	240	AU-17 区	土師器	甕	28.6	(7.0)	-	タテハケ、ユビオサエ	ヨコナデ	-	7.5YR6/6 橙色	密　3mm 程度の白色粒子、雲母含む	良好	破片	10 世紀後半	
46	PL.19	241	AT-17 区	土師器	甕	26.0	(8.0)	-	口縁部ヨコハケ 体部タテハケ	ヨコハケ	-	7.5YR4/3 褐色	密　白色粒子、雲母、スコリア含む	良好	破片	10 世紀前半	
46	PL.19	242	AT-22 区	土師器	鉢	31.6	(7.10)	-	タテハケ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	10YR3/2 黒褐色	密　金雲母、白色粒子含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	243	AS-20 区	土師器	甕	-	(2.5)	8.0	ナデ	ヨコハケ	木葉痕	7.5YR4/6 褐色	やや粗　白色粒子、金雲母含む	良好	破片	〃	
46	PL.19	244	AQ-20 区	土師器	甕	-	(5.0)	(8.0)	タテハケ	ヨコハケ	木葉痕	10YR5/4 にぶい黄褐色	やや粗	良	破片	〃	
46	PL.19	245	AS-21 AU-22 区	土師器	甕	-	(5.3)	10.0	タテハケ	ヨコハケ	木葉痕	外：5YR3/1 黒褐色 内：5YR4/3 にぶい赤褐色	密　白色粒子、雲母、スコリア含む	良好	破片	〃	
47	PL.19	246	AT-17 区	土師器	甕	13.0	(6.7)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	10YR5/3 にぶい黄褐色	密　白色粒子、石英含む	良好	破片	〃	
47	PL.19	247	試掘 6tr.	土師器	甕	-	(4.0)	6.6	ナデ	ナデ	木葉痕	外：10YR6/3 にぶい黄橙色 内：5YR6/8 橙色	密　黒色、白色粒子、小石含む	良好	破片	〃	
47	PL.19	248	試掘 6tr.	土師器	甕	14.0	(4.5)	-	タテハケ	ヨコハケ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　雲母、赤色、白色粒子含む	良	破片	〃	
47	PL.19	249	AS-17 区	土師器	甕	-	(10.2)	-	タテハケ、ユビオサエ	ヨコハケ、ユビオサエ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　金雲母、白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
47	PL.19	250	AT・AU-22 区	灰釉陶器	坏	-	(3.5)	-	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	-	外：2.5Y6/1 黄灰色 内：2.5Y5/2 暗灰黄色	緻密　白色粒子含む	良好	破片	平安	
47	PL.19	251	AT-21 区	灰釉陶器	坏	12.4	(2.9)	-	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	-	10YR7/1 灰白色	密	良好	破片	〃	
47	PL.19	252	AS-20 区	灰釉陶器	坏	13.9	(3.1)	-	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	-	5Y6/1 灰色	密　小石、白色粒子含む	良好	15%	〃	
47	PL.19	253	AR-21 区	灰釉陶器	高台坏	14.0	4.0	6.6	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	貼付高台	10YR7/1 灰白色	密　白色、黒色粒子含む	良好	20%	〃	
47	PL.19	254	AP-18・19 区	灰釉陶器	高台坏	-	(1.6)	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切りのち 貼付高台	2.5Y5/2 暗灰黄色	堅緻　ほぼ均一	良好	破片	〃	
47	PL.19	255	試掘 6tr.	灰釉陶器	高台坏	-	(2.0)	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切りのち 貼付高台	2.5Y6/2 灰黄色	密　白色粒子少量含む	良好	破片	〃	みこみ部に摩耗
47	PL.19	256	AU-16 区	灰釉陶器	高台坏	10.4	(2.8)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	10YR7/1 灰白色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	みこみ部に摩耗
47	PL.19	257	AQ-19 区	灰釉陶器	高台坏	-	(6.5)	8.8	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	2.5Y7/1 灰白色	堅緻　均一	良好	30%	〃	みこみ部に 4 条の筋状の火襷 高台端部が打ち欠かれる
47	PL.19	258	AT-21・22 区	灰釉陶器	壺？	-	(3.6)	10.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切りのち 貼付高台	2.5Y6/2 灰黄色	白色、黒色粒子微量含む	堅微	破片	〃	
47	PL.19	259	AR-17 区	灰釉陶器	壺	-	(9.5)	-	ロクロナデ、施釉？	ロクロナデ	-	2.5Y7/2 灰黄色	やや粗　均一	良好	破片	〃	
47	PL.19	260	AR-21 区	灰釉陶器	須恵器	11.0	(2.7)	-	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	-	5Y4/1 灰色	密	良好	破片	〃	
47	PL.19	261	AQ-20 区	灰釉陶器	須恵器	20.0	(4.3)	-	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	-	外：10YR1.7/1 黒色 内：10YR4/1 褐灰色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
48	PL.19	262	AQ-20 区	須恵器	坏	10.4	(1.8)	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	2.5Y4/1 黄灰色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
48	PL.19	263	AS-18 区	須恵器	蓋	20.0	(1.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2.5Y5/1 黄灰色	緻密	良好	破片	〃	
48	PL.19	264	AT-18 区	須恵器	壺？	-	(3.6)	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ、自然釉	貼付高台	外：10YR7/4 にぶい黄橙色 内：2.5Y6/2 灰黄色	密　赤色、白色粒子含む	良好	破片	〃	みこみ部・高台頂部に摩耗（磨墨面）磨墨面に朱墨 焼きムラが著しい
48	PL.19	265	AS-18 区	須恵器	甕	-	(10.4)	-	タタキ	ナデ、ユビオサエ	-	外：10YR5/2 灰黄褐色 内：2.5Y6/1 灰白色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	
48	PL.19	266	AR-19 区	須恵器	壺？	-	(3.5)	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	外：10YR3/1 黒褐色 内：2.5Y5/1 黄灰色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	
48	PL.19	267	AS-17 区	須恵器	壺？	-	(4.9)	9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	10YR6/1 褐灰色	密　黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	
48	PL.19	268	AS-21・22 区	土師器	坏	12.0	4.0	3.7	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	2.5YR4/8 赤褐色	緻密　赤色、黒色粒子含む	良好	55%	〃	墨書「刀」
48	PL.19	269	AU-16 区	土師器	坏	-	(2.3)	4.7	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　白色粒子少量、石英多く含む	良好	30%	〃	底部に墨書「刀」
48	PL.19	270	AS-17 ～ 21 区	土師器	坏	-	(1.5)	4.8	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 全面ヘラケズリ	7.5YR7/6 橙色	やや密　白色粒子微量含む	良好	破片	〃	底部に墨書あり

第 10 表　土器観察表 (8)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
48	PL.19	271	AQ-21 区	土師器	坏	-	(2.0)	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	密　均一	良好	破片	平安	体部に墨書あり
48	PL.19	272	AT-18 区	土師器	坏	-	(1.2)	4.8	回転ヘラケズリ	ロクロナデ 渦巻き状暗文	回転ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　ほぼ均一	良好	破片	〃	墨書内面「工」、底部「□」
48	PL.19	273	AR-21 区	土師器	坏	-	(4.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/8 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書「□」
48	PL.19	274	AQ-21 区	土師器	坏	-	(3.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/6 明褐色	密	良	破片	〃	墨書「大□ (々？)」
48	PL.19	275	AQ-20 区	土師器	坏	-	(1.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色、白色粒子含む	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	276	AP-21 区	土師器	坏	12.9	(2.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	10YR5/6 黄褐色	密　ほぼ均一	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	277	AQ-20 区	土師器	坏	-	(2.0)	5.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	剥離	-	7.5YR5/6 明褐色	やや密　赤色、白色粒子少量含む	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	278	AU-17 区	土師器	坏	-	(4.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR5/6 明赤褐色	緻密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書「舎」
48	PL.19	279	AR-20 区	土師器	坏	-	(2.9)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書のち線刻「□」
48	PL.19	280	AQ-20 区	土師器	坏	-	(1.2)	-	ロクロナデ	体部放射状暗文	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　赤色、白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	281	AU-16 ～ 20 区	土師器	坏か皿	-	(1.2)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	剥離	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	やや密　白色粒子少量含む	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	282	AR-17 区	土師器	坏	-	(1.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　赤色、白色粒子含む	良好	破片	〃	墨書「□□」
48	PL.19	283	AP-19 区	土師器	坏か皿	-	(1.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書あり
48	PL.19	284	AR-21 区	土師器	坏か皿	-	(1.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書「十？」
48	PL.19	285	表採	土師器	坏か皿	-	(1.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2.5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	墨書「□」
49	PL.19	286	AQ-19 区	土師器	坏	-	(5.0)	8.8	ロクロナデ ヨコミガキ	ロクロナデ みこみ部、体部放射状暗文	-	7.5YR5/8 明褐色	密　ほぼ均一	良好	25%	〃	刻書「□」
49	PL.19	287	AR-21 区	土師器	坏	-	(3.8)	8.4	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密	良好	破片	〃	刻書「□」
49	PL.19	288	AR-20 区	土師器	坏	10.4	4.8	6.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ、 みこみ部、体部放射状暗文	回転糸切り痕	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	20%	〃	底部に刻書「一？」
49	PL.19	289	AP-20 区	土師器	坏	-	(1.9)	5.8	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	剥離	5YR6/6 橙色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	〃	みこみ部刻書？
49	PL.19	290	AO-20 区	土師器	坏か皿	-	(1.3)	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ、放射状暗文	全面ヘラケズリ	7.5YR5/8 明褐色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	〃	底部放射方向に 3 本の刻書
49	PL.19	291	AR-21 区	土師器	坏か皿	-	(0.7)	-	-	みこみ部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	5YR4/6 赤褐色	密　赤色、黒色粒子含み	良好	破片	〃	底部に刻書「十」
49	PL.19	292	AP-19 区	土師器	坏	-	(2.1)	5.5	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	10YR6/6 明黄褐色	密　ほぼ均一	良好	破片	〃	底部に刻書「□」
49	PL.19	293	AR-18 区	土師器	坏	-	(2.8)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	密　白色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	294	AQ-21 区	土師器	坏か皿	-	(1.5)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「□」
49	PL.19	295	表採	土師器	坏か皿	-	(1.9)	-	ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	296	AQ-18 区	土師器	坏	-	(2.2)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「□」
49	PL.19	297	AP-21 区	土師器	坏か皿	-	(1.3)	-	ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/6 明褐色	やや密　ほぼ均一	良好	破片	〃	刻書「□」
49	PL.19	298	AQ-20 区	土師器	坏か皿	-	(1.3)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　赤色、黒色粒子、雲母少量含む	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	299	AR-21 区	土師器	坏	-	(1.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR6/6 橙色	密	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	300	AR-18 区	土師器	坏	-	(1.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR6/6 橙色	密　黒色粒子、雲母少量含む	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	301	AQ-18 区	土師器	坏	-	(1.9)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/6 明褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「十？」
49	PL.19	302	AS-17 区	土師器	坏	-	(2.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　赤色、黒色粒子、雲母少量含む	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	303	AQ-21 区	土師器	坏	-	(2.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/6 明褐色	密　均一	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	304	AR-21 区	土師器	坏	-	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部渦巻き状暗文？	-	7.5YR6/6 橙色	密　赤色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「十？」
49	PL.19	305	AO-19 区	土師器	坏か皿	-	(1.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書あり
49	PL.19	306	AS-18 区	土師器	坏	-	(3.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR6/6 橙色	密　赤色粒子少量含む	良好	破片	〃	刻書あり

第 11 表　土器観察表 (9)

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)			成形及び調整技法			色調	胎土	焼成	残存率	時期	備考
						口径	器高	底径	外面	内面	底部						
49	PL.19	307	AP-21 区	土師器	坏か皿	-	(1.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体部放射状暗文	-	7.5YR5/6 明褐色	密　均一	良好	破片	平安	刻書あり
49	PL.19	308	AR-18 区	土師器	坏か皿	-	(0..6)	-	-	ロクロナデ	回転糸切り痕	7.5YR5/3 にぶい褐色	やや密　赤色粒子微量含む	良好	破片	〃	底部刻書あり
49	PL.19	309	AR-18 区	土師器	坏か皿	-	(1.1)	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	5YR5/4 にぶい赤褐色	密　スコリア含む	良好	破片	〃	刻書「春」
49	PL.19	310	表採	土師器	皿	12.3	5.6	4.6	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐色	密　赤色、白色粒子含む	良好	25%	〃	刻書「下？」
49	PL.19	311	AP-21 区	土師器	皿	-	(1.4)	6.0	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	剥離	全面ヘラケズリ	7.5YR6/6 橙色	密　赤色粒子微量含む	良好	破片	〃	底部に刻書あり
49	PL.19	312	AU-22 区	土師器	皿	10.8	(2.6)	-	ロクロナデ 体部下半斜位ヘラケズリ	ロクロナデ	-	5YR4/6 赤褐色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「　」
50	PL.19	313	AR-18 区	土師器	皿	13.0	2.6	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り痕	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、白色粒子含む	良好	20%	〃	刻書「刀」
50	PL.19	314	AR-17 区	土師器	坏か皿	12.0	(2.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書あり
50	PL.19	315	AS-20 区	土師器	坏か皿	12.0	(1.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書あり
50	PL.19	316	AU-16 区	土師器	皿	12.0	2.1	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	底部に刻書あり
50	PL.19	317	AT-16 区	土師器	坏	12.0	(3.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色粒子含む	良好	破片	〃	刻書「#」
50	PL.19	318	表採	土師器	坏か皿	-	(1.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	密　白色粒子微量含む	良好	破片	〃	刻書あり
50	PL.19	319	表採	土師器	坏	-	(2.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR6/6 橙色	密　均一	良好	破片	〃	刻書「□」
50	PL.19	320	AP-19 区	土師器	坏か皿	-	(1.9)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR5/6 明褐色	密　均一	良好	破片	〃	刻書あり
50	PL.19	321	AP-20 区	土師器	坏か皿	-	(1.1)	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	全面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	刻書あり
50	PL.19	322	AQ-21 区	土師器	坏か皿	-	(0.4)	-	-	ロクロナデ	回転糸切りのち 外周ヘラケズリ	7.5YR4/6 褐色	密　赤色、黒色粒子含む	良好	破片	〃	底部に刻書あり
50	PL.19	323	AR-17 区	須恵器	甕か壺	-	(6.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10Y4/1 灰色	堅緻　白色粒子含む	良好	破片	〃	頸部に刻書「人？」
50	PL.19	324	AS-21 区	土師器	製塩土器	-	(3.3)	-	ナデ	-	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	密　黒色粒子含む	良好	破片	〃	
50	PL.19	325	AT-19 区	土師器	製塩土器	-	(4.9)	-	ナデ	タテハケ	-	10YR6/4 にぶい黄褐色	粗　白色粒子少量含む	良好	破片	〃	
50	PL.19	326	AR-21 区	土師器	製塩土器	-	(4.3)	-	ナデ	タテハケ	-	外：10YR7/4 にぶい黄橙色 内：10YR7/6 明黄褐色	粗　白色粒子少量含む	良好	破片	〃	
50	PL.19	327	AS-18 区	土師器	製塩土器	-	(4.4)	-	ナデ	ヨコハケ	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	密	良好	破片	〃	
50	PL.19	328		土師器	製塩土器	-	(2.0)	-	ナデ	タテハケ、ヨコハケ	-	10YR5/8 黄褐色	密　小石多く含む	良好	破片	〃	

第 12 表　土製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	寸法（cm）			特徴	色調	胎土	焼成	時期	備考
					長さ	径	孔径						
50	PL.19	329	竪穴建物跡 SI09	土錘	3.4	1.8	0.4		7.5YR5/6 明褐色	密	良	平安	
50	PL.19	330	竪穴建物跡 SI10	土錘	6.7	1.9	0.6		10YR4/4 褐色	密　砂粒、黒色粒子含む	良好	奈良～平安	完形
50	PL.19	331	竪穴建物跡 SI10	土錘	6.3	1.8	0.3		5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良	奈良～平安	完形
50	PL.19	332	AV16 区	土錘	6.2	1.8	0.3		5YR4/4 にぶい赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良	平安	完形
50	PL.19	333	AR19 区	土錘	6.0	1.5	0.4		5YR4/4 にぶい赤褐色	密　黒色粒子含む	良	平安	完形
50	PL.19	334	AT22 区	土錘	5.05	1.65	0.25		7.5YR5/6 明褐色	密　白色粒子含む	良好	平安	一部欠損
50	PL.19	335	AQ18 区	土錘	4.45	1.6	0.4		5YR3/4 暗赤褐色	密　白色粒子含む	良好	平安	完形
50	PL.19	336	AT17 区	土錘	4.2	1.5	0.3		5YR5/6 明赤褐色	密　白色、黒色粒子含む	良	平安	一部欠損
50	PL.19	337	AR19 区	土錘	(3.4)	1.8	0.5		10YR5/2 黒褐色	密　白色、黒色粒子含む	良好	平安	一部欠損
50	PL.19	338	AP20 区	土錘	(2.4)	1.4	0.4		7.5YR6/6 橙色	密	良	平安	欠損
50	PL.19	339	表採	土錘	(3.6)	1.5	0.4		7.5YR6/6 橙色	密	良	平安	欠損
50	PL.19	340	AS21 区	土錘	3.15	2.7	0.3		7.5YR6/6 橙色	密	良好	平安	欠損
50	PL.19	341	AO19 区	土錘	(3.0)	(1.0)	(0.35)	算盤珠形	10YR5/6 黄褐色	密	良好	平安	完形
50	PL.19	342	AQ21 区	土錘	(2.5)	1.4	0.5		7.5YR7/6 橙色	密	良好	平安	欠損
50	PL.19	343	土坑 SK33	土製管玉	(2.6)	0.7	0.2		2.5Y4/4 オリーブ褐色	密　白色、黒色粒子含む	良	－	欠損
50	PL.19	344	土坑 SK10	土製管玉	(2.6)	0.7	0.2		7.5Y4/1 灰色	密　白色、黒色粒子含む	良	－	欠損
50	PL.20	345	包含層一括	土製円盤	φ 5.4	厚：1.25	-	表面に「一」の刻みあり	7.5YR6/6 橙色	密　白色、赤色粒子微量含む	良好	－	欠損

第 13 表　金属製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	寸法 (cm)			重量（g）	特徴	時期	備考
					長さ	幅	厚さ				
51	PL.20	346	竪穴建物跡 SI09	刀子	19.1	刃幅：1.8　茎幅：0.6	身厚：0.3　茎厚：0.25	28.0	茎部に炭化した柄（モモ）が遺存する	平安	保存処理 No.39533
51	PL.20	347	竪穴建物跡 SI08	刀子刃部	(6.3)	8.0	0.3	13.3		奈良～平安	保存処理 No.39558
51	PL.20	348	AR20 区	刀子茎部	(2.2)	5.0	2.5	0.6		平安	保存処理 No.39547
51	PL.20	349	AS21 区	刀子刃部？	(3.1)	(1.53)	0.46	2.7		平安	保存処理 No.37868
51	PL.20	350	竪穴建物跡 SI10	刀子	5.3	0.8	0.4	5.4		奈良～平安	保存処理 No.39551
51	PL.20	351	AR17 区	刀子	16.7	1.4	0.4	15.4	鞘の木質が遺存する	平安	保存処理 No.39535
51	PL.20	352	AT21 区	刀子	(7.92)	1.4	0.4	8.4		平安	保存処理 No.37865
51	PL.20	353	竪穴建物跡 SI05	刀子	(18.9)	刃幅：1.35　茎幅：0.45	刃厚：0.45　茎厚：0.55	14.1		奈良～平安	保存処理 No.39534
51	PL.20	354	AS19 区	刀子	(6.95)	刃幅：1.0　茎幅：0.8	刃厚：0.35　茎厚：0.25	6.0		平安	保存処理 No.39538
51	PL.20	355	AS20 区	刀子	(13.9)	刃幅：1.1　茎幅：1.0	刃厚：0.35　茎厚：0.4	14.7		平安	保存処理 No.39537
51	PL.20	356	AR17 区	刀子	(6.6)	刃幅：1.4　茎幅：0.8	刃厚：0.8　茎厚：3.5	6.5		平安	保存処理 No.39542、39543
51	PL.20	357	竪穴建物跡 SI09	刀子茎部？	(2.9)	0.6	0.3	0.9		平安	保存処理 No.39550
51	PL.20	358	AQ20 区	刀子	(11.5)	刃幅：1.3　茎幅：0.7	刃厚：0.6　茎厚：0.35	11.2		平安	保存処理 No.39536
51	PL.20	359	AS20 区	刀子	(4.6)	0.86	0.47	3.0		平安	保存処理 No.39549
51	PL.20	360	AR18 区	刀子茎部？	(3.0)	0.6	0.3	1.3		平安	保存処理 No.39545
51	PL.20	361	AV15 区	鉄鏃	(9.9)	刃幅：1.25　茎幅：0.7	刃厚：0.4　茎厚：0.7	7.5		平安	保存処理 No.39539
51	PL.20	362	竪穴建物跡 SI08	鉄鏃	(7.6)	刃幅：(3.5)　茎幅：0.7	刃厚：0.4　茎厚：0.4	16.5		奈良～平安	保存処理 No.39541
51	PL.20	363	AS21 区	鉄鏃茎部	(5.1)	0.65	0.8	5.1		平安	保存処理 No.37866
51	PL.20	364	表採	鉄鏃刃部	(2.84)	2.7	4.5	4.2		平安	保存処理 No.39621
51	PL.20	365	AT18 区	鉄鏃刃部	(5.15)	4.05	0.3	13.8		平安	保存処理 No.39544
51	PL.20	366	AT17 区	鉄釘	8.75	2.3	1.1	40.0		不明	保存処理 No.39553
51	PL.20	367	AP21 区	紡錘車	5.49	5.46　孔：φ：0.3	0.41	18.4		平安	保存処理 No.39556
51	PL.20	368	AS17 区	火打ち金	6.0	1.7　孔：φ 0.4	0.4	9.2		中世？	保存処理 No.39540
51	PL.20	369	竪穴建物跡 SI08	ねじり棒状鉄製品	10.0	0.5	0.35	6.2	中央部にねじりがあり、一端は偏平	奈良～平安	保存処理 No.39557
51	PL.20	370	AS20 区	棒状鉄製品	(2.2)	0.6	0.3	0.8		平安	保存処理 No.39548
51	PL.20	371	AR19 区	棒状鉄製品	(3.2)	φ 0.5	-	2.5		平安	保存処理 No.39546
51	PL.20	372	AQ19 区	棒状鉄製品	(8.2)	0.57	0.53	7.6		平安	保存処理 No.39622
51	PL.21	373	AR17 区	有孔板状鉄製品	(5.8)	1.5　孔：φ 0.2	0.2	5.0	板状の先端に近いところに孔あり	平安	保存処理 No.39555
51	PL.21	374	AS21 区	有孔板状鉄製品	(7.8)	2.6　孔：φ 0.5	0.25	14.6	板状の先端に近いところに孔あり	平安	保存処理 No.37864
51	PL.21	375	AS21 区	有孔板状鉄製品	(2.6)	2.2　孔：φ 0.4	0.3	3.4	板状の先端に近いところに孔あり	平安	保存処理 No.37867
51	PL.21	376	AS20 区	半環状鉄製品	3.55	2.38　板幅：0.7	0.84	7.0	0.7cm × 0.84cm の板を環状にしたもの	平安	保存処理 No.39623
-	PL.21	381	竪穴建物跡 SI09	花弁状銅製品	-	-	-	-		平安	

第 14 表　石製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	種別	寸法			重量（g）	石材	時期	備考
					長さ	幅	厚さ				
52	PL.21	377	SI04 履土	石鏃	(3.8)	(2.6)	0.7	0.5	黒曜石	縄文	
52	PL.21	378	AT18 区	石鏃	4.2	3.1	0.7	1.0	黒曜石	縄文	完形
52	PL.21	379	竪穴建物跡 SI09	叩き石	13.9	5.8	4.9	471.2	安山岩	平安	敲打による欠損あり
52	PL.21	380	竪穴建物跡 SI09	砥石	12.4	5.8	5.2	329.6	砂岩	平安	表裏および両側面に使用痕がみられる

第４章　滝沢遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第１節　第３次調査における自然科学分析

はじめに

滝沢遺跡（山梨県南都留郡富士河口湖町河口）は、河口湖北東の山地より流下する河川が形成した小規模な扇状地上に位置する。本遺跡は、これまでの発掘調査によって、平安時代前期～中期（9 ～ 10 世紀）頃の集落の広がりが明らかとされている。今回のⅥａ区を対象とした第３次発掘調査では、上記した集落においても初現期と考えられる８世紀後半～９世紀初頭とみられる住居跡、および 10 世紀後半と考えられる住居跡などが確認されている。

本報告では、上記した平安時代の集落でも古い時期と位置づけられる竪穴建物跡 SI10 の年代、および当該期の植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

第１項　放射性炭素年代測定・樹種同定

1. 試料

試料は、Ⅵａ区竪穴建物跡 SI10 から出土した炭化材２試料（No.1・2）と、Ⅵａ区竪穴建物跡 SI03 のカマド 焼土（No.4）の微細物分析によって抽出された炭化材である。

Ⅵａ区竪穴建物跡 SI10 炭化材（No.1・2）は同一の試料であり、炭化材を多数含む黒色土である。分析目的および試料の観察結果から、径約 2.5cm × 2cm の芯持丸木（仮 cw1）と径 0.6cm 程度の芯持丸木（仮 cw2）を抽出し、前者を放射性炭素年代測定に、後者を樹種同定の各分析に供した。前者の試料については、試料の履歴（樹種）に関わる情報を得るため、試料の一部を分割し、樹種同定対象としている。

また、後述するように住居跡のカマド焼土や焼土遺構からは、炭化種実は多く得られなかった。そのため、本分析では竪穴建物跡 SI03 カマド 焼土の燃料材に関わる情報を得るため、検出された炭化材より５点を無作為に抽出し、樹種同定に供した。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX- Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）

であり、誤差は標準偏差（One Sigma ; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2 σ（σは統計的に真の値が 68%、2 σは真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（2）炭化材（樹種）同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。

3. 結果

（1）放射性炭素年代測定

Ⅵ a 区竪穴建物跡 SI10 炭化材（cw1）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は 1,310 ± 20yrBP を示す。較正暦年代（測定誤差σ）は calAD 663-calAD 765 である（表 15）。

（2）樹種同定

樹種同定結果を表 16 に示す。Ⅵ a 区竪穴建物跡 SI03 および SI10 の炭化材は、広葉樹 5 分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節、フサザクラ、カマツカ属、トチノキ、ムラサキシキブ属）に同定された。以下に、各分類群の主な解剖学的特徴などを記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Quercus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・フサザクラ（Euptelea polyandra Sieb. et Zucc.）　フサザクラ科フサザクラ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った円～楕円形、単独または 2-3 個が放射方向・斜方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状となる。放射組織は異性、1-10 細胞幅、1-80 細胞高。

・カマツカ属（Pourthiaea.）　バラ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または 2-4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5 細胞幅、1-30 細胞高。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高で層階状に配列する。

・ムラサキシキブ属（Callicarpa）　クマツヅラ科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高。

第 15 表 . 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代								相対比	測定機関 Code No.
№.1,2 滝沢遺跡第 3 次 竪穴建物跡 SI10 炭化材 (トチノキ)	1310 ± 20	-25.66 ± 0.44	1310 ± 23	σ	cal	AD	663	-	cal	AD	693	0.717	IAAA-112760
					cal	AD	748	-	cal	AD	765	0.283	
				2 σ	cal	AD	658	-	cal	AD	722	0.723	
					cal	AD	740	-	cal	AD	770	0.277	

第 16 表 . 樹種同定結果

№.	地区	試料名		形状	樹種	備考
1･2	VIa 区	4 号住居跡　炭化材	仮 cw1	芯持丸木	トチノキ *	径約 2.5 × 2cm
			仮 cw2	芯持丸木	ムラサキシキブ属	径約 0.6cm
4		3 号住居跡　カマド 焼土		-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				-	フサザクラ	
				-	カマツカ属	

* 放射性炭素年代測定試料

4. 考察

滝沢遺跡の調査所見から、平安時代の集落の中でも古い時期と推定されているⅥ a 区竪穴建物跡 SI10 は、出土炭化材（仮 cw1）が 7 世紀中頃～ 8 世紀中頃に相当する年代（較正暦年代）を示した。本遺構は、出土遺物などから 8 世紀後半～ 9 世紀初頭と推定されている。今回の結果は遺物等から推定される年代よりも若干古い値を示すが、Ⅴ区の住居跡などで得られている年代よりも古く、調査所見を支持すると考える。

また、Ⅵ a 区竪穴建物跡 SI10 炭化材（No.1・2）より抽出した芯持丸木の炭化材には、トチノキとムラサキシキブ属が確認された。トチノキは谷筋などに生育する落葉高木であり、ムラサキシキブ属は林縁や二次林などの明るい林内に生育する落葉低木である。トチノキに同定された炭化材は、小径であることから枝と考えられる。また、ムラサキシキブ属は低木であるが、分析に供した炭化材は主幹としては小径であるため、枝の可能性がある。これらの試料は同一の試料より抽出されたことから、枝などの小径木を含む木材利用が推定される。

一方、Ⅵ a 区竪穴建物跡 SI03 のカマド焼土より検出された炭化材には、コナラ節、フサザクラ、カマツカ属が認められた。この結果から、カマドの燃料材として少なくとも 3 種類の木材の利用されていたことが明らかとなった。なお、コナラ節は二次林を構成する落葉高木であり、カマツカ属も二次林に生育する落葉低木である。フサザクラは、谷筋や崩壊地などに生育する落葉高木であることから、遺跡周辺に生育した樹木を利用したことが推定される。

第 2 項　微細物分析

1. 試料

試料は、10 世紀後半とされるⅥ a 区竪穴建物跡 SI01、奈良・平安時代とされるⅥ a 区竪穴建物跡 SI03、8 世紀後半～ 9 世紀初頭とされる竪穴建物跡 SI10、10 世紀後半とされる焼土 SL01 から採取された土壌 6 点（No.3 ～ 7）である。これらの試料の内訳は、竪穴建物跡 SI01 がカマドの焼土より採取された灰褐～褐色土（No.3）、竪穴建物跡 SI03 がカマドの焼土より採取された赤褐～褐色土の偽礫が混じる黒～黒褐色土（No.4）と同建物跡の黒褐色土（No.5；焼土①）、および橙褐色土（No.5；焼土②）、竪穴建物跡 SI10 がカマドの焼土より採取された（暗）褐色土（No.6）、焼土 SL01 が褐～橙褐色土の偽礫が混じる暗褐色土（No.7）からなる。

2. 分析方法

土壌試料の洗出は、事前の試料観察で炭化物や骨片が混じる状況が確認されたことや、前報で微細な魚骨片が検出されたことなどから、これらの微細遺物を壊さずに回収することを考慮して、以下の方法を実施した。また、これまでの滝沢遺跡の同様の分析結果の産状も考慮し、1 試料あたり土壌 1kg（No.5 の焼土①・②は各 0.5kg）を常温乾燥後、肉眼観察で確認された種実遺体を抽出対象としている。

試料を水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾斜させて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返

す（20 ～ 30 回程度）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体や、主に 4mm 以上の炭化材、骨片、土器片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）などを参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。炭化材、骨片、土器片は、常温乾燥後の重量と最大径を表示し、No.4 の炭化材の一部を樹種同定対象とする。分析後は、抽出物を種類毎に容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表 17 に示す。全試料を通じて、草本 6 分類群（アワ、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、マメ科、エノキグサ）34 個の種実遺体が確認された。この他、炭化材 0.31g、骨片 50 個、土器片 4 個、昆虫類 2 個が検出された。炭化した種実遺体の保存状態は、破損および泥の付着などにより極めて不良である。炭化種実は、栽培種のアワの穎・胚乳が No.4 から 1 個、胚乳が No.6 から 1 個と、栽培種の可能性があるマメ科の種子が No.6 から 1 個が確認された。栽培種以外の分類群は、イネ科の胚乳が No.3、No.5 の焼土①から各 1 個、No.4 から 2 個、アカザ科の種子が No.4 から 21 個、No.5 の焼土①から 1 個の、計 26 個が確認された。

炭化材は全ての試料から確認され、No.3 で 0.1g と最も多い。骨片は No.6 から 48 個（3.24g）、No.5 の焼土②から 2 個（0.01g 未満）が確認された。いずれも焼骨で、No.6 で最大 11.4mm を測る。分析残渣は砂礫を主体とし、No.4 では炭化材、No.6 では炭化材と焼骨の微細片を含む。

なお、No.7 から確認されたカヤツリグサ科の果実 1 個、アカザ科の種子 1 個（分析中に発芽）、エノキグサの種子 3 個と、No.5 の焼土②から確認された昆虫類 2 個は、炭化が認められない試料である。これらは、分析に供された試料がカマド内や焼土遺構から採取されていることから、炭化種実や後述する炭化材や後述する焼骨などと由来が異なり、後代の混入と推定されるため、考察からは除外している。

第 17 表 . 微細物分析結果

			VI a 区						備考
			1 号住居跡	3 号住居跡			4 号住居跡	1 号焼土	
			カマド	カマド	焼土		カマド	焼土	
			焼土	焼土	①	②	焼土		
種類名	部位	状態	No. 3	No. 4	No. 5	No. 5	No. 6	No. 7	
・炭化種実									
アワ	穎・胚乳	完形	-	1	-	-	-	-	腹面に穎付着
	胚乳	完形	-	-	-	-	1	-	
イネ科	胚乳	完形	1	2	1	-	-	-	
アカザ科	種子	完形	-	13	-	-	-	-	
		破片	-	8	1	-	-	-	
マメ科	種子	完形	-	-	-	-	1	-	長さ 4.19, 幅 3.56, 厚さ 2.14mm
・炭化材			0.10	0.07	0.02	0.02	0.08	0.02	乾燥重量 [g]
			5.7	10.0	4.2	4.0	6.2	4.0	最大径 [mm]
・骨片			-	-	-	2	48	-	
			-	-	-	<0.01	3.24	-	乾燥重量 [g]
			-	-	-	3.7	11.4	-	最大径 [mm]
・土器片			-	-	1	3	-	-	
			-	-	1.31	1.43	-	-	乾燥重量 [g]
			-	-	21.2	15.2	-	-	最大径 [mm]
・炭化していない種実遺体									
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	-	-	-	1	
アカザ科	種子	完形	-	-	-	-	-	1	分析中に発芽
エノキグサ	種子	完形	-	-	-	-	-	1	
		破片	-	-	-	-	-	2	
炭化していない昆虫類		破片	-	-	2	-	-	-	
分析残渣									
炭化材主体			-	0.35	-	-	0.03	-	乾燥重量 [g]
砂礫主体			74.13	82.33	33.78	38.38	111.86	100.21	乾燥重量 [g]
分析量			1002.64	1007.94	506.95	503.57	1002.60	1006.13	重量 [g]

以下に、本分析で確認された炭化種実の形態的特徴を記す。

・アワ（Setaria italica (L.) P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

胚乳・穎は炭化しており黒色。長さ 1.1 ～ 1.2mm、幅 1.1 ～ 1.2mm、厚さ 0.7 ～ 0.9mm 程度の半偏球体で腹面は平ら。背面は丸みがある。基部正中線上は、背面に長さ 0.8mm、幅 0.4mm の馬蹄形、腹面に径 0.3mm の広倒卵形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で横皺状模様があり、No.4 から出土した胚乳は背面に穎（果）の破片が付着する。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。

・イネ科（Gramineae）

胚乳は炭化しており黒色、長さ 1.3mm、幅 0.5mm のやや偏平な狭倒卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上は、背面に長さ 0.3mm、幅 0.2mm、腹面に径 0.2mm 程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で微細な網目模様が縦列する。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子は炭化しており黒色、径 1.0 ～ 1.1mm 程度のやや偏平な円形。基部は凹み、中心に向かって食い込む。種皮はやや硬く、表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・マメ科（Leguminosae）

種子は炭化しており黒色。長さ 4.2mm、幅 3.6mm、厚さ 2.1mm のやや偏平な楕円体。腹面の子葉合わせ目上には、長さ 1.5mm の幼根がやや突出し、隣接する長楕円形の臍は欠損して窪む。種皮は薄く、表面は粗面。

4. 考察

Ⅵ a 区より検出された住居跡 カマドおよび焼土遺構の微細物分析の結果、アワと栽培種の可能性があるマメ科などの雑穀と、草本のイネ科とアカザ科の炭化種実が検出された。また、竪穴建物跡 SI03 の焼土（No.5）と竪穴建物跡 SI10 のカマド 焼土（No.6）からは焼骨片も確認された。

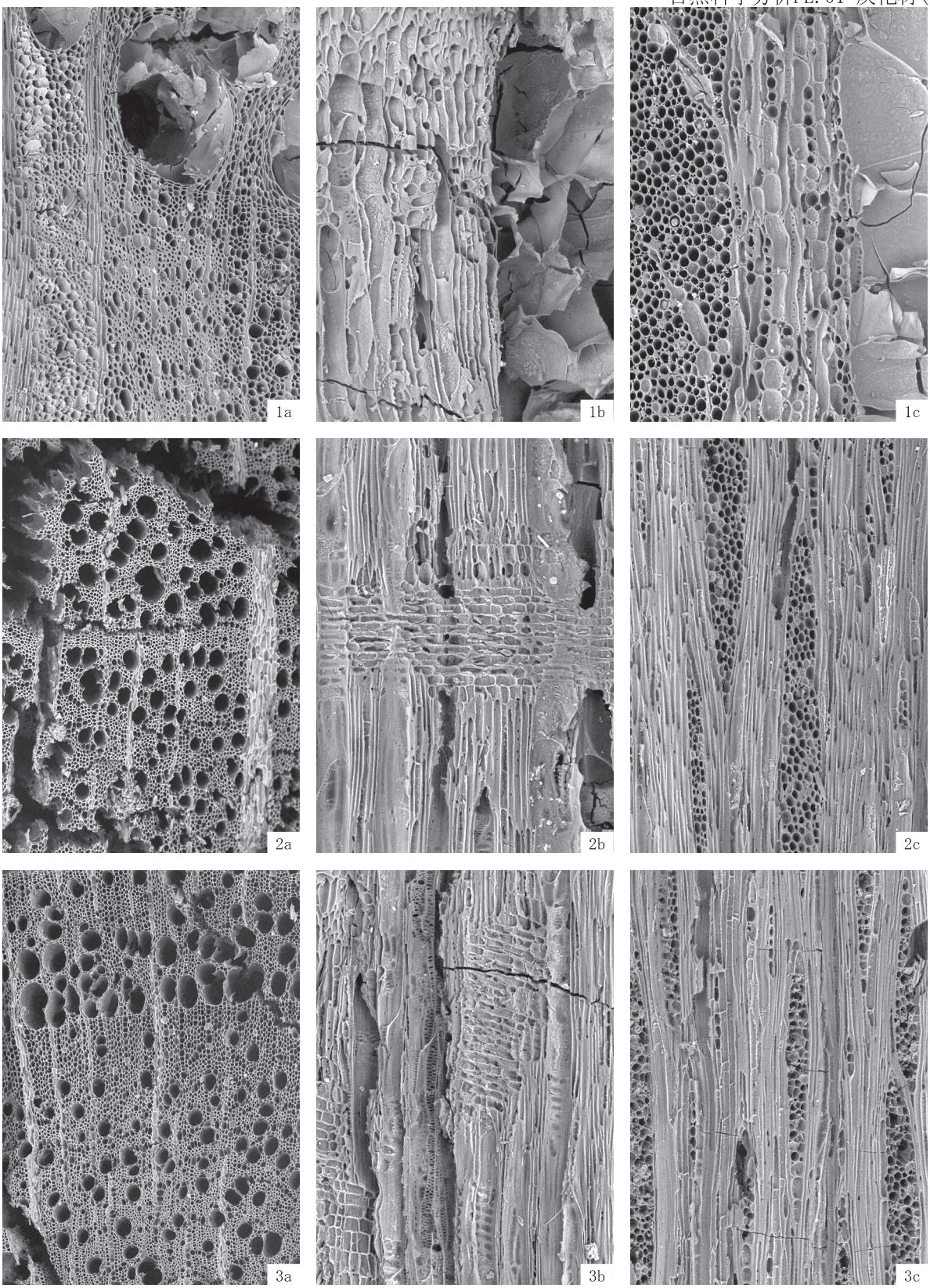
穀類のアワは胚乳が食用される植物質食糧で、マメ科には種子が食用される栽培種を含まれる。これらの炭化穀粒は、出土個数が僅かではあるが、当該期の食利用の痕跡と考えられる。また、アワには、表面に穎が付着した胚乳が確認されたことから、穎がついた生の状態で火を受けたと推定される。

滝沢遺跡では、過去にも住居跡に付帯するカマドの埋積物や土坑覆土を対象に調査が実施されており、今回確認されたアワとマメ科のほか、モモ、イネ、ヒエ（近似種）、キビ（近似種）などの栽培種の炭化種実が確認されている。これらの種実構成については、出土量が少ないため量比の比較は難しいものの、アワ（近似種）が多く、次いでイネが多いという傾向が窺える。さらに、カマド内からは、ウグイ亜科やコイ科などの淡水性魚類の骨片も検出されている。今回の分析においても焼骨が確認されているため、今後は炭化種実および動物遺存体の双方を対象とした、資料の蓄積が期待される。

また、草本のイネ科とアカザ科は、明るく開けた場所に生育する人里植物に属する分類群である。おそらく調査区近辺の草地に生育していたと考えられる。

引用文献

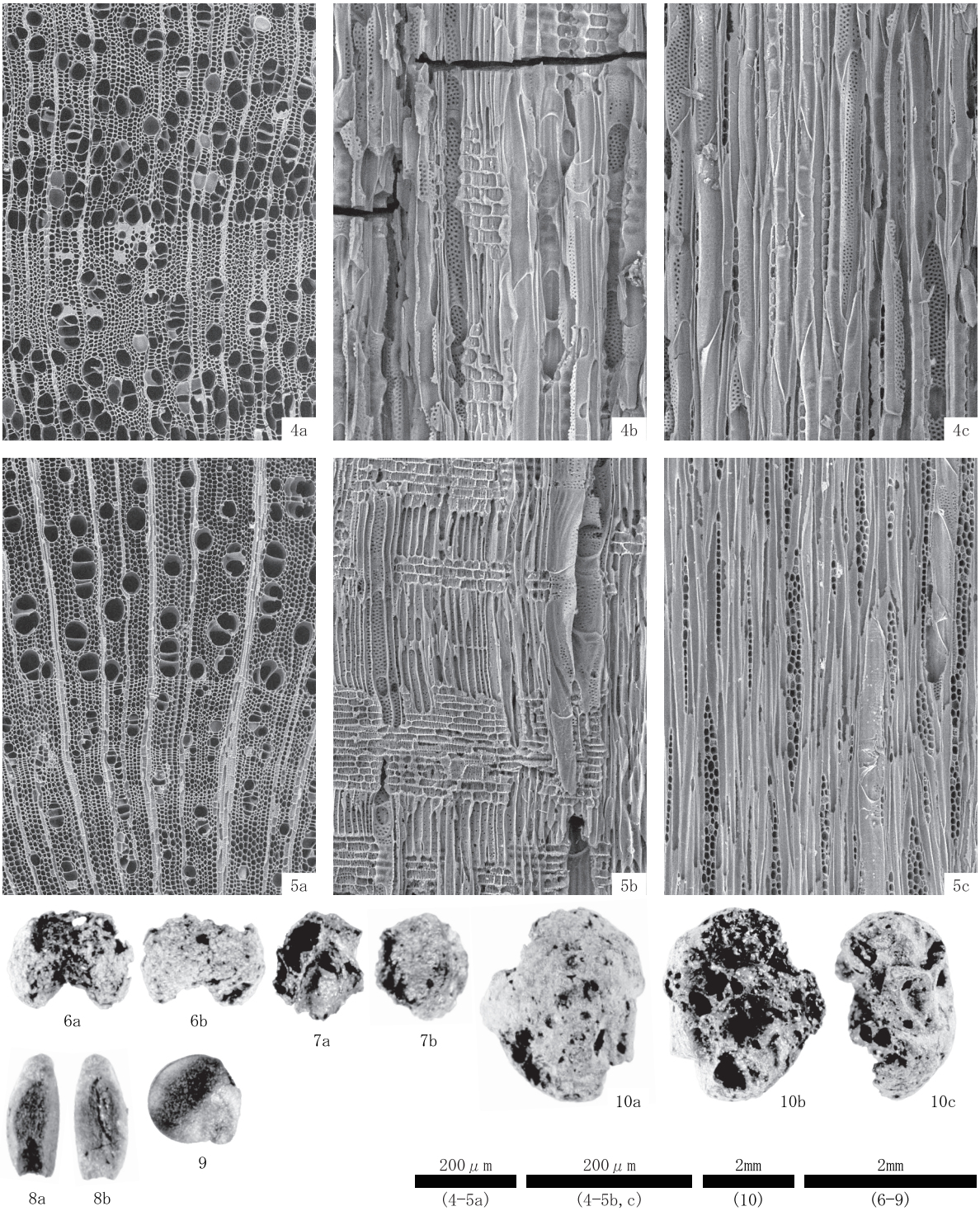
林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.
伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.
伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節(No.4)
2. フサザクラ(No.4)
3. カマツカ属(No.4)
　a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:a
200 μm:b, c

自然科学分析PL.02 炭化材(2)・種実遺体



4. トチノキ(No.2;竪穴建物跡SI10)
a:木口, b:柾目, c:板目
5. ムラサキシキブ属(No.1;竪穴建物跡SI10)
6. アワ 胚乳(No.6;竪穴建物跡SI10カマド 焼土)
7. アワ 穎・胚乳(No.4;竪穴建物跡SI03カマド 焼土)
8. イネ科 胚乳(No.4;竪穴建物跡SI03カマド 焼土)
9. アカザ科 種子(No.4;竪穴建物跡SI03カマド 焼土)
10. マメ科 種子(No.6;竪穴建物跡SI10カマド 焼土)

第２節　第４次調査における自然科学分析

はじめに

滝沢遺跡（山梨県南都留郡富士河口湖町河口）は、河口湖の北東岸側、後背の山地より流下する河川が形成した小規模な扇状地上に立地する。滝沢遺跡のこれまでの発掘調査の結果、平安時代を主体とする集落の存在が明らかとされており、8 世紀後半～ 9 世紀初頭頃を初現期として、9 ～ 10 世紀を主体とすることが確認されている。今回のⅥｂ区では、これまでに確認されている様相と同様に 8 世紀後半から 10 世紀初頭までの竪穴建物跡や、中世以降の掘立柱建物跡、土坑等が確認されている。

本報告では、滝沢遺跡Ⅵｂ区の平安時代の集落における植物利用、とくに植物質食料や竪穴建物跡における建築部材の樹種および木材利用の検討を目的として、微細物分析・樹種同定を実施した。

第１項　微細物分析

1. 試料

試料は、平安時代の竪穴建物跡に付帯するカマド内より採取された焼土や灰、平安時代に帰属すると思われる配石 SS02 より採取された土壌 8 点（No.1 ～ 8）である。焼土や灰等のカマド埋積物は、竪穴建物跡 SI04・05 および SI07 ～ 09 まで 5 軒より採取されており、SI05 からは 2 基のカマドから採取された土壌、SI07 では同じカマド内より焼土と灰が採取されている。試料の内訳は、結果とともに表 1 に示す。

2. 分析方法

本分析では、炭化種実等の遺物を可能な限り壊さず回収するために、以下の工程にて分析を行った。

1）水洗前抽出

土壌試料を秤り取り、常温乾燥後、肉眼観察で確認される炭化種実を抽出する。

2）水洗・抽出・分類

乾燥後の試料を、水を満たした容器に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20 ～ 30 回）。残土は粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別に常温乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や、主に径 4mm 以上の炭化材、骨片、土器片等の遺物を抽出する。抽出物および分析残渣（砂礫等）は、重量と最大径（一部）を記録後、容器に入れて保管する。

3）同定

炭化種実の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。

3. 結果

結果を表 18 に示す。土壌 8 試料（計 6,700g）を通じて、炭化種実 13 個（0.1g 未満）、炭化材（0.9g）、骨片 1 個（0.001g 未満）、土器片 3 個（4.0g）が抽出された。分析残渣は、砂礫（1251.3g）を主体とし、炭化材の微細片主体（2.2g）が次いで多く、炭化していない植物片（0.04g）も確認される。炭化していない植物は、根等を主体とする他、SI07 カマドからマツ属複維管束亜属の種子翼、SI04 カマドから草本のイネ科の果実、ハコベ類の種子、SI05 カマド a から草本のエノコログサ属、イネ科、タデ属、タンポポ属、キク科の果実等が確認された。これらの炭化していない植物遺体は、保存状態が極めて良好であることから、後代の混入の可能性が高いと判断し、解析からは除外している。

炭化種実は、落葉広葉樹のオニグルミの核の破片が 2 個、栽培種のイネの胚乳の破片が 2 個、コムギの胚乳が 3 個（完形 1、破片 2）、アワの穎・胚乳の破片が 1 個、胚乳が 2 個（完形 1、破片 1）、ヒエ？の胚乳が 1 個、ソバの果実の破片が 2 個確認された。炭化種実の出土状況は、SI04 カマドが 6 個（イネ 2 個、コムギ 3 個、

アワ１個)、SI05 カマドｂが３個（オニグルミ２個、アワ１個)、SI07 カマドが２個（ソバ２個)、SI07 カマドが１個（ヒエ？１個)、SS02 が１個（アワ１個）である。この他の SI05 カマドａ、SI08 カマド、SI09 カマドからは確認されなかった。炭化種実の保存状態は、いずれも不良で、焼き崩れや発泡がみられる。

炭化材は、各試料より検出され、SI05 カマドｂで最も多く（0.4g)、最大破片は 1.3cm を測る。また。各試料に含まれる炭化材（主体）の量は、いずれも少量で、SI05 カマドａが最多（0.12%）である。この他、骨片が SI04 カマドから１個（0.001g 未満、径 2.1mm)、土器片が SI04 カマドから２個（3.6g)、SI05 カマドｂから１個（0.4g）確認された。

以下に、確認された炭化種実各分類群の形態的特徴等を述べる。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Kudo) Kitamura）　クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色を呈す。完形ならば、長さ３～4cm、径 2.5 ～ 3cm の広卵体で頂部が尖り、１本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には維管束の痕跡である縦網状の彫紋があり、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。SI05 カマドｂより出土した破片２個(0.004g) は、最大 2.3mm を測る。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

胚乳（炭化米）は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。焼き崩れて保存状態は不良であるが、胚乳両面にある２～３本の縦隆条がかろうじて確認される。01 カマドより出土した破片２個(0.001g 未満）のうち、大きな破片は、残存長 2.8mm、残存幅 2.0mm、残存厚 1.9mm を測り、下部を欠損する。

・コムギ（Triticum aestivum L.）　イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色、丸みを帯びた楕円体で、腹面正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な粒状模様がある。SI04 カマドより出土した完形１個（0.006g）は、長さ 4.1mm、幅 3.0mm、厚さ 2.8mm を測り、背面上部等を欠損する。

第 18 表 . 微細物分析結果

種類	部位	状態	竪穴 建物跡 SI04 カマド 焼土 No. 1	竪穴 建物跡 SI05 カマド 01 焼土 No. 2	竪穴 建物跡 SI07 カマド 02 焼土 No. 3	竪穴 建物跡 SI07 カマド 焼土 No. 4	竪穴 建物跡 SI07 灰 No. 5	竪穴 建物跡 SI08 カマド 焼土 No. 6	竪穴 建物跡 SI09 カマド 焼土 No. 7	配石 SS02 土壌 No.8	備考
炭化種実											
オニグルミ	核	破片	-	-	2	-	-	-	-	-	0.004g 最大 2.3mm
イネ	胚乳	破片	2	-	-	-	-	-	-	-	<0.001g, 残存長 2.8mm, 残存幅 2.0mm, 残存厚 1.9mm
コムギ	胚乳	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	0.006g, 長さ 4.1mm, 幅 3.0mm, 厚さ 2.8mm
		破片	2	-	-	-	-	-	-	-	<0.001g, 残存長 2.1mm
アワ	穎・胚乳	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	<0.001g, 穎 : 側面残存
	胚乳	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	<0.001g
		破片	-	-	-	-	-	-	-	1	<0.001g
ヒエ？	胚乳	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	<0.001g, 背面胚凹部欠損
ソバ	果実	破片	-	-	-	2	-	-	-	-	<0.001g, 残存長 2.2mm, 残存径 1.8mm
炭化材 (主に径 4mm 以上)			7.6	7.6	12.9	4.8	6.4	4.9	3.0	6.4	最大径 (mm)
			0.11	0.13	0.39	0.01	0.15	0.02	0.01	0.11	乾重 (g)
炭化材主体 (4 ～ 0.5mm)			0.46	0.74	0.41	0.02	0.31	0.08	0.02	0.12	乾重 (g)
骨片			1	-	-	-	-	-	-	-	<0.001g, 径 2.1mm
土器片			2	-	1	-	-	-	-	-	個数
			30.4	-	15.2	-	-	-	-	-	最大径 (mm)
			3.6	-	0.4	-	-	-	-	-	乾重 (g)
砂礫主体											
4mm 以上			27.7	42.6	43.3	14.8	84.3	315.6	13.0	19.3	乾重 (g)
4-2mm			25.1	33.3	38.5	18.9	25.9	92.0	19.8	22.3	乾重 (g)
2-1mm			23.6	23.5	34.4	21.3	15.7	70.1	14.7	44.7	乾重 (g)
1-0.5mm			20.1	18.3	22.5	11.8	15.1	32.8	12.8	33.5	乾重 (g)
炭化していない植物			<0.001	0.033	<0.001	-	0.001	-	<0.001	0.005	混入の可能性
分析量			800	750	850	800	850	1100	650	900	重量 (g)
炭化材 (主体) の含有量			0.07%	0.12%	0.09%	0.004%	0.05%	0.01%	0.004%	0.03%	
砂礫主体の含有量			12.1%	15.7%	16.3%	8.4%	16.6%	46.4%	9.3%	13.3%	

・アワ（Setaria italica (L.) P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

穎（果）・胚乳は、炭化しており黒色、径 1.3mm、厚さ 1.0mm 程度の半偏球体で、背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線上は、背面に長さ 1.0mm、幅 0.7mm の深い馬蹄形、腹面に径 0.4mm 程度の浅い広倒卵形の胚の窪みがある。胚乳表面は粗面で、SI05 カマド b より出土した胚乳は、側面に穎の付着が確認された。

・ヒエ（Echinochloa cf. utilis Ohwi et Yabuno）？　イネ科ヒエ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ 1.6mm、幅 1.4mm、厚さ 1.1mm のやや偏平な半広卵体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。胚乳基部正中線上は、背面に長さ 1.4mm、幅 0.6mm の馬蹄形、腹面に径 0.7mm の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。SI07 カマドより出土した胚乳は、アワよりも細長い形状を呈する。背面の胚部分を欠損するため、ヒエの可能性がある種実としている。

・ソバ（Fagopyrum esculentum Moench）　タデ科ソバ属

果実は炭化しており黒色、稜が鋭く尖る三稜状広卵体で、基部に萼がある。果皮表面は粗面で、浅く細い横筋がある。SI07 カマドより出土した破片 2 個（0.001g 未満）のうち、大きな破片は、残存長 2.2mm、残存径 1.8mm を測り、基部の萼が残存する。

4. 考察

平安時代の竪穴建物跡のカマド埋積物（焼土、灰）および配石より採取された土壌の水洗選別の結果、栽培種主体の炭化種実、炭化材、骨片、土器片が検出された。栽培種の炭化種実は、SI04 カマドからイネ、コムギ、SI07 カマドからソバ等の穀類が確認されたほか、SI04 カマド・SI05 カマド b、SS02 からアワ、SI07 カマドからヒエ？等の微小な雑穀類も確認された。

滝沢遺跡では、これまでにもカマド埋積物等を対象とした調査が実施されており、Ⅴ区やⅥ a 区の平安時代の竪穴建物跡からモモ、イネ、アワ、ヒエ近似種、キビ近似種、マメ科等の栽培種（可能性を含む）の炭化種実が確認されている。今回確認された栽培種の炭化種実は、上記したこれまでに確認されている炭化種実群と概ね同様の組成からなり、当時利用された植物質食料を示していると考えられる。

また、栽培種（その可能性があるものを含む）を除いた分類群は、SI05 カマド b からオニグルミが確認された。オニグルミは、川沿い等の湿潤な肥沃地に生育する河畔林要素の落葉高木で、核内部の子葉が生食できる。出土核は破片であったことから、子葉を取り出した後に廃棄された食料残滓の可能性がある。

第 2 項　炭化材同定

1. 試料

試料は、焼失住居とされる竪穴建物跡 SI09 の床面より出土した建築部材と考えられる炭化材 26 点と、炭化した刀子の柄 1 点の計 27 点（No.1 ～ 27）である。各試料の形状や木取りの観察を行った際、W-7・15・18・20・24 には、明らかに由来が異なると思われる炭化材が複数認められたことから、それぞれについて樹種同定を実施している。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。

3. 結果

同定結果を表 19 に示す。SI09 より出土した炭化材は、針葉樹 2 分類群（モミ属、カヤ）と、広葉樹 5 分類群（コ

ナラ属コナラ亜属コナラ節、エノキ属、カツラ、モモ、サクラ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（Abies）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-20 細胞高。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には 2 本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Quercus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属（Celtis）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高で鞘細胞が認められる。

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-30 細胞高。

第 19 表 . 樹種同定結果

№	遺構名	種別	注記№	仮名	形状＊		種類（分類群）	備考
1	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-1		分割材 (半裁) 状	約 4.0cm	サクラ属	
2	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-2		分割材 (ミカン割) 状	(≧ 2,5cm)	エノキ属	
3	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-3		分割材 (≒半裁) 状	約 3.5cm	カヤ	
4	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-4		分割材 (≒半裁) 状	約 5.0cm	カツラ	
5	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-5		芯持丸木	約 2.7cm	エノキ属	
6	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-6		分割材 (ミカン割) 状	(>1.5cm)	カツラ	
7	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-7	a	(板目) 板状		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				b	(板目～追柾) 板状		モミ属	
8	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-8		(板目) 板状		モミ属	
9	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-9		(板目～追柾) 板状		モミ属	
10	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-10		(柾目) 板状		モミ属	
11	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-11		(板目) 板状		モミ属	
12	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-12		(板目) 板状		モミ属	
13	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-13		(柾目～追柾) 板状		モミ属	
14	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-15	a	(柾目) 板状		モミ属	
				b	芯持丸木	約 2.0cm	エノキ属	樹皮あり
15	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-16		(板目) 板状		カヤ	
16	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-17		(板目) 板状		モミ属	
17	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-18	a	(追柾) 板状		モミ属	
				b	芯持丸木	約 2.0cm	エノキ属	樹皮あり
18	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-19		分割材 (ミカン割) 状	(約 4.5cm)	サクラ属	
19	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-20	a	(板目) 板状		モミ属	
				b	(柾目) 板状		モミ属	
20	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-21		(板目) 板状？		モミ属	
21	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-22		(板目) 板状		モミ属	
22	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-23		分割材 (ミカン割) 状	(>4.5cm)	エノキ属	
23	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-24	a	分割材 (ミカン割) 状	(>3.5cm)	カツラ	
				b	分割材 (ミカン割) 状	(>3.0cm)	カツラ	
24	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-25		分割材状		サクラ属	
25	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-26		分割材 (半裁) 状	約 8.5cm	エノキ属	樹皮あり
26	竪穴建物跡 SI10	建築部材	W-28		(板目) 板状		モミ属	
27	竪穴建物跡 SI10	刀子柄	F-1		分割材状		モモ	

＊炭化材の外観及び横断面の残存形状を示す。なお、数値は直径、括弧内の数値は半径に相当する。

・モモ（Prunus persica Lindley）　バラ科サクラ属

環孔性を帯びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が 4-5 列配列した後、やや急激に径を減じて単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-60 細胞高。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

散孔材で、道管は単独または 2-8 個が斜方向あるいは放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5 細胞幅、1-30 細胞高。

4. 考察

焼失建物跡とされる SI09 から出土した建築部材と考えられる炭化材は、残存する形状等の観察の結果、板状を呈する資料が比較的多く認められたほか、半裁状（類するものを含む）やミカン割状等の分割材状を呈する資料、さらに芯持丸木等も認められた。

これらの炭化材には、針葉樹のモミ属やカヤ、広葉樹のコナラ節、エノキ属、カツラ、モモ、サクラ属の計 6 分類群が確認された。針葉樹のモミ属は山地斜面等に生育する常緑高木であり、カヤは河畔等に生育する常緑高木である。広葉樹のコナラ節は二次林等に生育する落葉高木、エノキ属は河畔等に生育する落葉大高木、カツラは河畔・渓谷に生育する落葉高木、サクラ属は、二次林等に生育する落葉低木～高木である。また、各分類群の材質をみると、モミ属の木材は木理が通直で割裂性が高く、強度や保存性は低い。カヤは重硬・緻密で強度・耐水性が高い。コナラ節は樹硬で強度が高く、エノキ属はやや重硬な部類に入るが、強度や保存性は低い。カツラは木理が通直で割裂性が高いが、強度と保存性は低く、サクラ属は重硬・緻密で強度が高いが、保存性は低い。

上記した炭化材の形状別の樹種構成についてみると、板状を呈する資料は針葉樹のモミ属が主体を占め、この他にコナラ節やカヤが認められる。一方、分割材状を呈する資料にはカヤ、サクラ属、エノキ属、カツラ、芯持丸木を呈する資料にはエノキ属が認められた。出土炭化材の形状が本来の部材の形状を保存しているか等の課題が残るものの、形状別に樹種構成が異なるという特徴が指摘できる。

さらに、これらの炭化材の出土位置と樹種の関係について検討してみたい。SI09 は、調査所見によれば、平面が南北方向を長軸とする、南北約 3.4m、東西約 3m を測る長方形を呈する。出土炭化材は、竪穴建物跡のほぼ床面全体より確認されているが、とくに北半部に明瞭に残存する。今回の分析に供された資料は、竪穴建物跡の南東隅 - 南壁 - 南西隅に分布する炭化材（W-1 ～ 5）と、建物跡北半の西壁付近より出土した炭化材（W-6・7）と東壁付近より出土した炭化材（W-23 ～ 26）、さらにこれらの炭化材を結んだラインよりも北側に分布する炭化材とに分けられる。板状を呈する資料は、建物跡北半に集中しており、壁に沿って出土する資料や、壁からやや離れ、ある程度の長さや幅を有する資料等が認められる。このような出土状況を踏まえると、板状を呈する資料に多く認められたモミ属は、明らかに複数個体に由来することが示唆され、とくに建物跡の北半部を構成する部材として多く利用されていた状況が窺える。モミ属の利用は、おそらく強度や保存性は低いものの板状加工が容易であることなどが背景と考えられる。この他、分割材状や芯持丸木を呈する資料は、概ね建物跡の壁際や壁付近より出土するが、強度が高いカヤ、サクラ属、コナラ節と、強度が低いカツラ、エノキ属等が混在する。このうち、芯持丸木については、直径が 2 ～ 3㎝で、いずれもエノキ属が認められているため、強度を要する主要な部材とは考えにくい。また、分割材とした資料には比較的径が大きいものが含まれる。このうち、直径が 5cm 前後および 5cm 以上と推定される資料は、南西隅付近（W-4）、北東隅付近（W-19）、東壁中央の壁際および壁より離れた地点（W-23 から 26）より出土している。また、W-23 ～ 26 と対となる位置にあたる西壁付近には W-6,W-7 が認められている。このうち、W-7 は、残存形状より（板目）板状としているが接線面が約 5.5cm、放射面が約 2cm を測る、比較的大形の資料である。材質的な点においては、強度が異なる木材が混在するものの、出土位置や形状等からこれらの径や形状が比較的大きい資料が主要な部材

に由来する可能性もある。

また、SI09 から出土した刀子 (346) の柄は、広葉樹のモモの分割材を削り出した状態と考えられる。モモは、栽培種として渡来した落葉高木であり、木材は比較的重硬・緻密で強度が高い。

刀子の木質に関する調査事例（伊東・山田 ,2012）ついてみると、山梨県内では大師東丹保遺跡（旧甲西町）の鎌倉時代とされる刀子の鞘にヒノキ属近似種が確認されているのみである。そこで、近隣県の資料についてみると、古代の資料では元総社寺田遺跡（群馬県前橋市）でアカガシ亜属、社宮司遺跡（長野県千曲市）でカエデ属、伊場遺跡（静岡県浜松市）でヒノキとカシ類、池ヶ谷遺跡（静岡県静岡市）でイヌマキ等の事例が確認できる。調査事例が少なく詳細な木材選択の傾向は判然としないが、比較的重硬な木材が利用される傾向にあり、今回の確認されたモモは材質的な点において共通する木材利用と言える。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

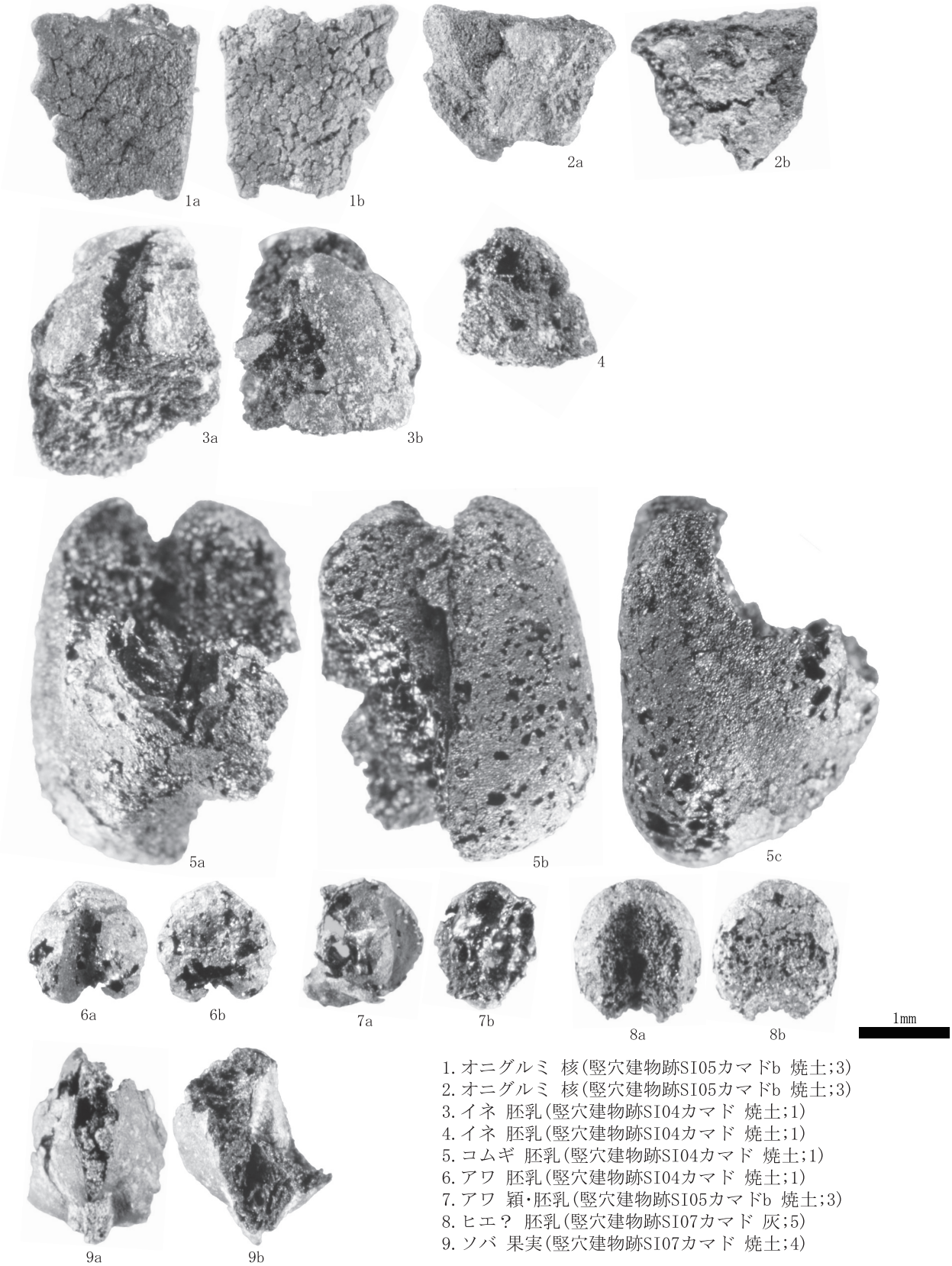
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I.and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I.and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2012, ネイチャーウォッチングガイドブック　草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－ . 誠文堂新光社 ,272p.

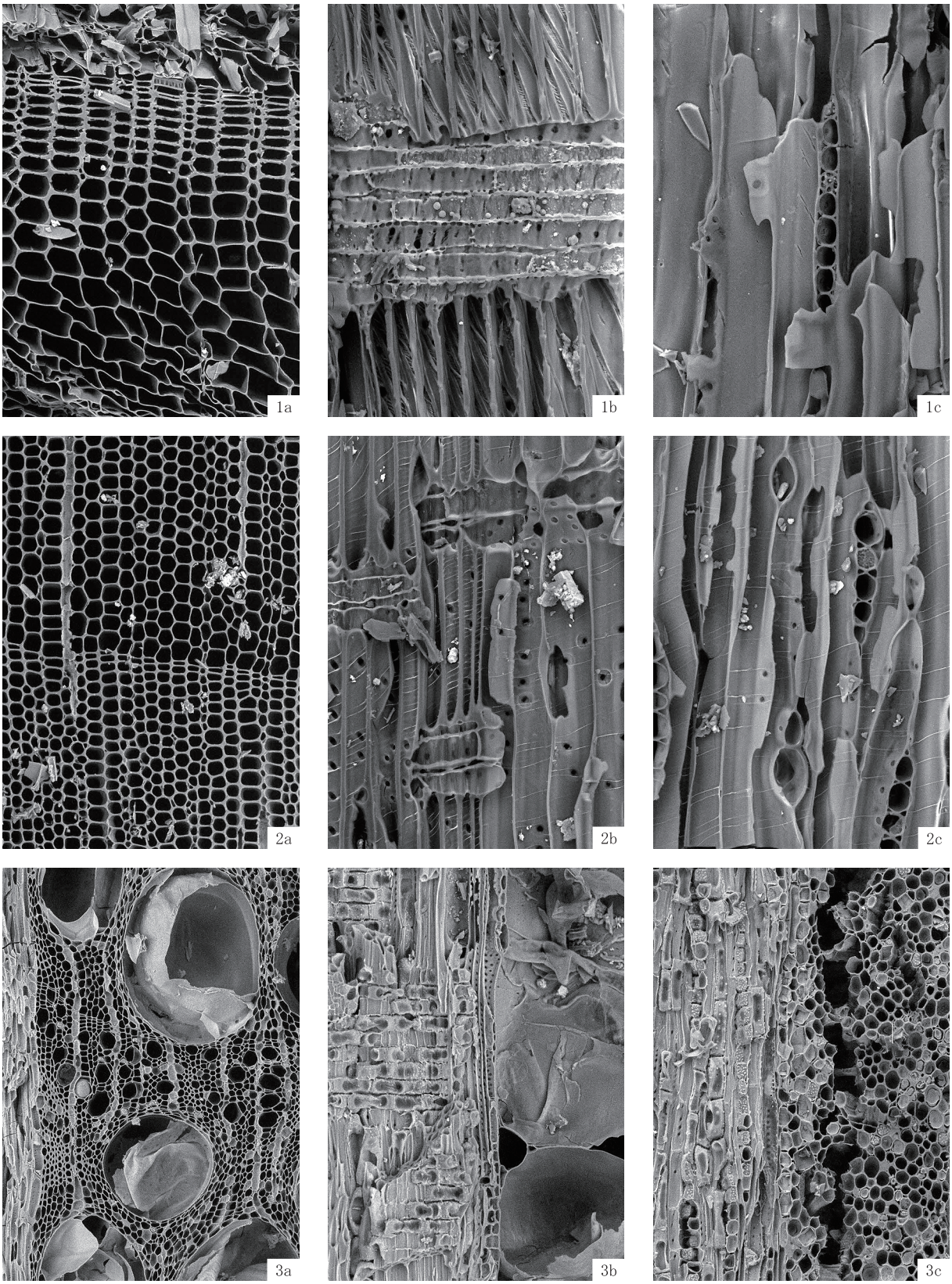
Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

自然科学分析PL.03 炭化種実



1. オニグルミ 核(竪穴建物跡SI05カマドb 焼土;3)
2. オニグルミ 核(竪穴建物跡SI05カマドb 焼土;3)
3. イネ 胚乳(竪穴建物跡SI04カマド 焼土;1)
4. イネ 胚乳(竪穴建物跡SI04カマド 焼土;1)
5. コムギ 胚乳(竪穴建物跡SI04カマド 焼土;1)
6. アワ 胚乳(竪穴建物跡SI04カマド 焼土;1)
7. アワ 穎・胚乳(竪穴建物跡SI05カマドb 焼土;3)
8. ヒエ？ 胚乳(竪穴建物跡SI07カマド 灰;5)
9. ソバ 果実(竪穴建物跡SI07カマド 焼土;4)

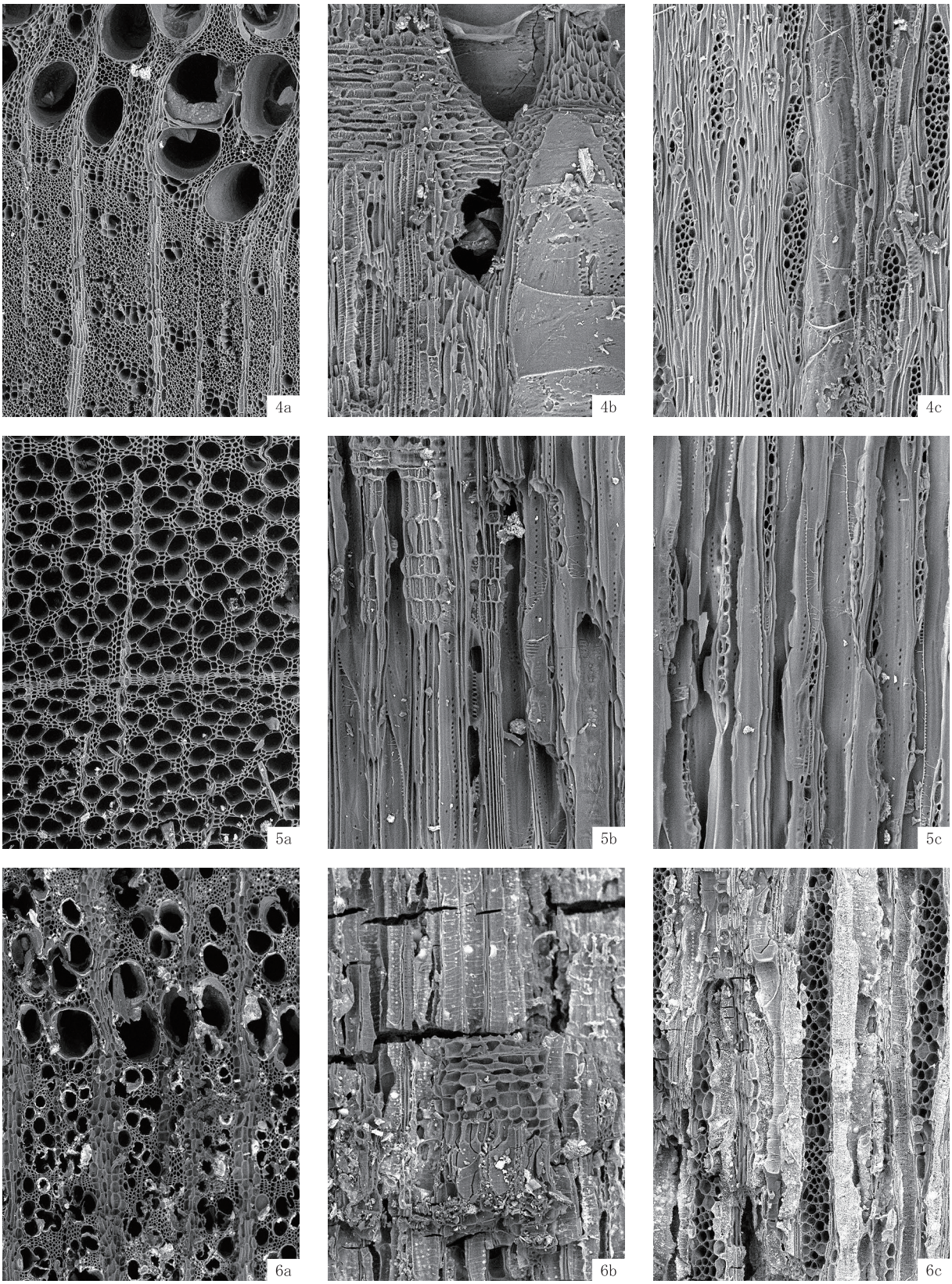
自然科学分析PL.04 炭化材(1)



1.モミ属(竪穴建物跡SI09;W-22)
2.カヤ(竪穴建物跡SI09;W-3)
3.コナラ属コナラ亜属コナラ節(竪穴建物跡SI09;W-7a)
a:木口,b:柾目,c:板目

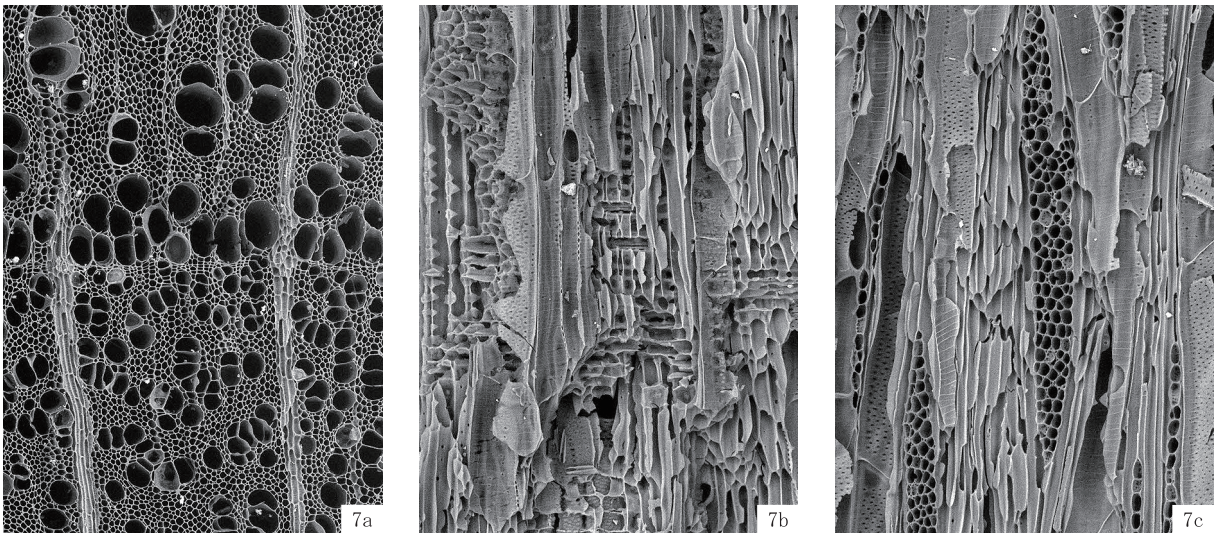
100μm:3a
100μm:1-2a,3b,c
100μm:1-2b,c

自然科学分析PL.05 炭化材(2)



4.エノキ属(竪穴建物跡SI09;W-2)
5.カツラ(竪穴建物跡SI09;W-4)
6.モモ(竪穴建物跡SI09;F-1)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c



7.サクラ属(竪穴建物跡SI09;W-1)
a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第５章　総括

第１節　奈良・平安時代の滝沢遺跡

第１項　滝沢遺跡における土器編年の再検討

滝沢遺跡における土器編年については、すでに第１次調査にあたるⅠ～Ⅲ区の報告書にてその大枠が整理され、奈良・平安時代の土器を甲斐型土器編年Ⅴ期～ⅩⅢ期を７段階に大別している。また、第２次調査にあたるⅣ・Ⅴ区の報告書では、住居の切り合い関係より第４段階に新・旧の各段階が存在することが指摘されていたが、その特徴については整理されていない。河口湖２期バイパス建設に関わる事業が最終年度を迎える本調査の報告において、ひとまず奈良・平安時代の土器を再整理しておく。

滝沢遺跡ではこれまでにⅠ～Ⅵ区の発掘調査が実施され、その総面積は8,146㎡に及ぶ。そして、第３・４次調査において第１段階に該当する竪穴建物跡が確認されたことにより、第１段階～第７段階までのすべての時期区分に該当する遺構が発見されたこととなった。第20表には第２次調査報告書にてまとめられた甲斐型土器による編年対照表に即して、表を一部改編、第３・４次調査成果を付加したものを掲載した。

なお、第１次調査で設定された第１段階の土器様式は、Ⅱ区３号住居跡覆土から出土した２点の土師器坏を基にしている。ここで、第３・４次調査で発見された第１段階に該当する竪穴建物跡SI08とSI10の土器を総体的にチェックしていき、今一度、土器の様態を再確認しておきたい。また、第２次調査にて指摘された第４段階の新・旧段階における土器についても触れておく。

(1) 第１段階の段階設定

第３・４次調査で奈良・平安時代第１段階に該当する遺構に竪穴建物跡SI08とSI10の２つがある。土師器坏・甕・小型甕に須恵器坏・坏蓋・甕・壺が共伴する。土師器坏の形態は、口径に対して底径が大きい箱形を呈する。寸法は口径10.0～11.0cm、底径6.2～6.4cm、器高3.1～4.7cmの一群（Ⅰ群）と口径11.7～12.7cm、底径6.2～7.8cm、器高3.9～4.5cmの一群（Ⅱ群）がみられ、いずれも口径＜底径×２の領域に入る。体部外面には横位のミガキがみられ、内面及び見込み部には放射状暗文が施される。見込み部から体部への立ち上がりの境界に同心円状の沈線が施されるものもある。底部は全面ヘラケズリのものと外周ヘラケズリのものがあり、一部ヘラケズリ後ミガキが施される。体部外面下半に横位～斜位ヘラケズリが施されるものもある。土師器甕は口径21.6～25.2cm、器高、底径は判然としない。器壁の厚さは体部から口縁部にかけて同様の厚さを呈し、体部から頸部にかけて内傾して屈曲する。

一方、土師器甕は体部から頸部、口縁部にかけての器壁厚が一定で、頸部のくびれ部分は胴部の張り出しに対して大きく内側に入り込む長胴形を呈する。小型甕も同様に体部から頸部、口縁部にかけての器壁厚はほぼ一定であるが、口縁端部がやや尖形を呈するものもある（95・96）。口径は21.6cm～25.0cmを測る。小型甕に関しては、胴部が張り出す球胴形のものが一般的であるが頸部から垂直に底部に向かう長胴形のもの（159）もあり、小型甕はバリエーションがある。

(2) 滝沢編年第４段階について

第２次調査における報告書にて、Ⅴ区１・２号住居の切り合い関係から新・旧段階に細分できることが指摘された。第３・４次調査において、同じく第４段階に帰属する遺構が切り合う状況があればと期待されたが竪穴建物跡が切り合う状況は確認できなかったため、竪穴建物跡から出土した第４段階の土器をそれぞれ再検討して、Ⅴ区１・２号住居の状況とともに時期を設定していく。

これまでに第４段階に該当する竪穴建物跡は14軒を数える。なお、第２次調査にて第５段階（９世紀末～10世紀初頭）と報告されたⅤ区６号住居と同10号住居は、第５段階を特徴付ける暗文の消滅が出土土器にみられないため、第４段階まで引き上げてもよいだろう。ここでは第４段階として扱い、検討の対象軒数に含んでいる。

以下に、第４段階古段階と新段階を設定する特徴を整理する。

(a) 第 4 段階古段階

土師器坏は、調整方法に前時代との差異はそれほど明確にみられないが、口縁端部の形状は丸縁を基本形とする。体部内面に放射状暗文を施すものと施さないものの 2 種類が存在するが、前者の比率の方がやや多い。土師器甕は、体部から頸部、口縁部にかけて器壁厚が一定で、やや胴部が張り出す長胴形を呈する。土師器坏、皿、甕、小型甕に須恵器蓋、長頸壺の伴出が確認されている。Ⅰ区 2 号住居、Ⅴ区 1・3（・7）・13 号住居、Ⅵ区 SI05 を当てる。

(b) 第 4 段階新段階

土師器坏は第 4 段階古段階同様前段階よりほとんど差異がみられないが、口縁端部の形状には玉縁のものが混在するようになる。体部内面の放射状暗文は、古段階と同様で放射状暗文を施すものと施さないものの両者が存在し、前者の方が多い。土師器甕は、体部から頸部と、頸部から口縁部にかけての器壁厚が一定ではなくなり、後者の方がやや厚みを増す。この傾向は、第 5 段階における甕の口縁部肥厚傾向の兆候である。土師器坏、皿、甕、小型甕に須恵器蓋、長頸壺があり、本期以降、大型甕の伴出が確認されるようになる。Ⅰ区 5 号住居、Ⅱ区 1・3a 号住居、Ⅴ区 2・6・8、Ⅵ区 SI06（Ⅴ区 10 号住居）を当てる。

第 20 表　甲斐型土器による編年対照表

甲斐型土器編年	山梨県史	滝沢編年	時期	滝沢遺跡第 1 次	滝沢遺跡第 2 次	滝沢遺跡第 3・4 次
Ⅴ期	Ⅲ期	第 1 段階	8 世紀後半			Ⅵ区 SI08・SI10
Ⅵ期			8 世紀末			
Ⅶ期	Ⅳ期	第 2 段階	9 世紀前半	Ⅱ区 3b 号住		
Ⅷ期		第 3 段階		Ⅱ区 2 号住	Ⅴ区 9・15 号住・1 号集石	
Ⅸ期	Ⅴ期	第 4 段階 (古)	9 世紀後半	Ⅰ区 2・5 号住 Ⅱ区 1・3a 号住	Ⅴ区 1・3・7?・13 号住	Ⅵ区 SI05?
Ⅹ期		第 4 段階 (新)			Ⅴ区 2・8 号住	Ⅵ区 SI06（Ⅴ区 10 号住）
Ⅺ期		第 5 段階	9 世紀末～ 10 世紀初頭	Ⅰ区 3 号住 Ⅱ区 6b 号住	Ⅴ区 5・6・10 号住	Ⅵ区 SI02
Ⅻ期	Ⅵ期	第 6 段階	10 世紀前半	Ⅰ区 1 号住 Ⅱ区 4・5・6a 号住	Ⅴ区 4・12・14 号住	Ⅵ区 SI01・SI03・SI04・SI07（Ⅴ区 12 号住）・SI09
XIII 期	Ⅶ期	第 7 段階	10 世紀後半		Ⅴ区 11 号住	

※山梨県教育委員会 2011『滝沢遺跡（第 2 次）』山梨県埋蔵文化財調査報告第 294 集を参考にして作成

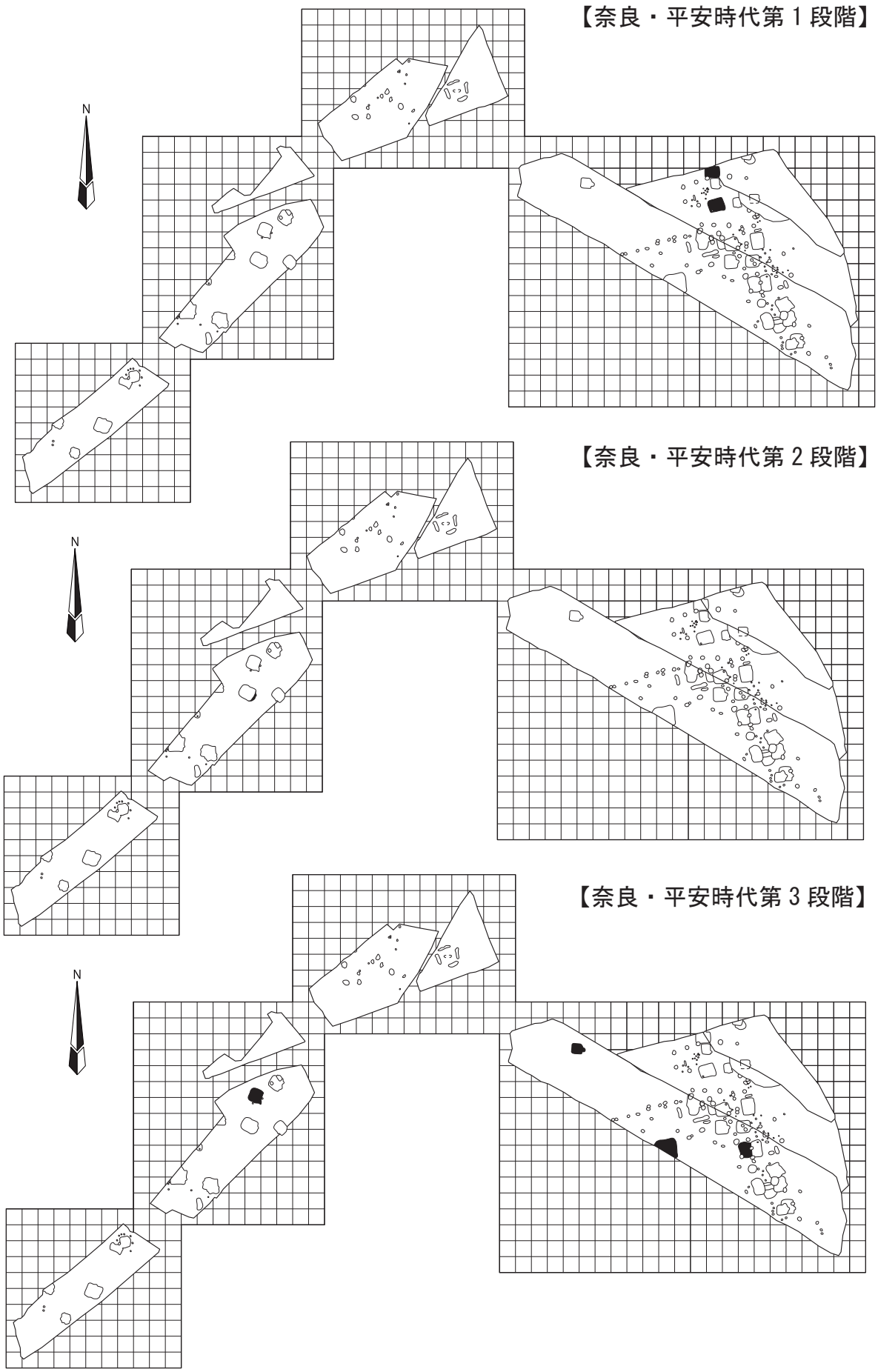
以上、第 4 段階における新・古段階の設定を行ったが、土師器坏の調整技法や口縁部形状、全体的なフォルムなどはやや曖昧で、かつ第 4 段階に該当する遺構から出土する土器が少ないものも多くあり、十分な検討が出来ていない竪穴建物跡もある。ここでは、ひとまず第 20 表に掲載したとおりに設定して遺構の変遷について検討していく。

第 2 項　集落の変遷について

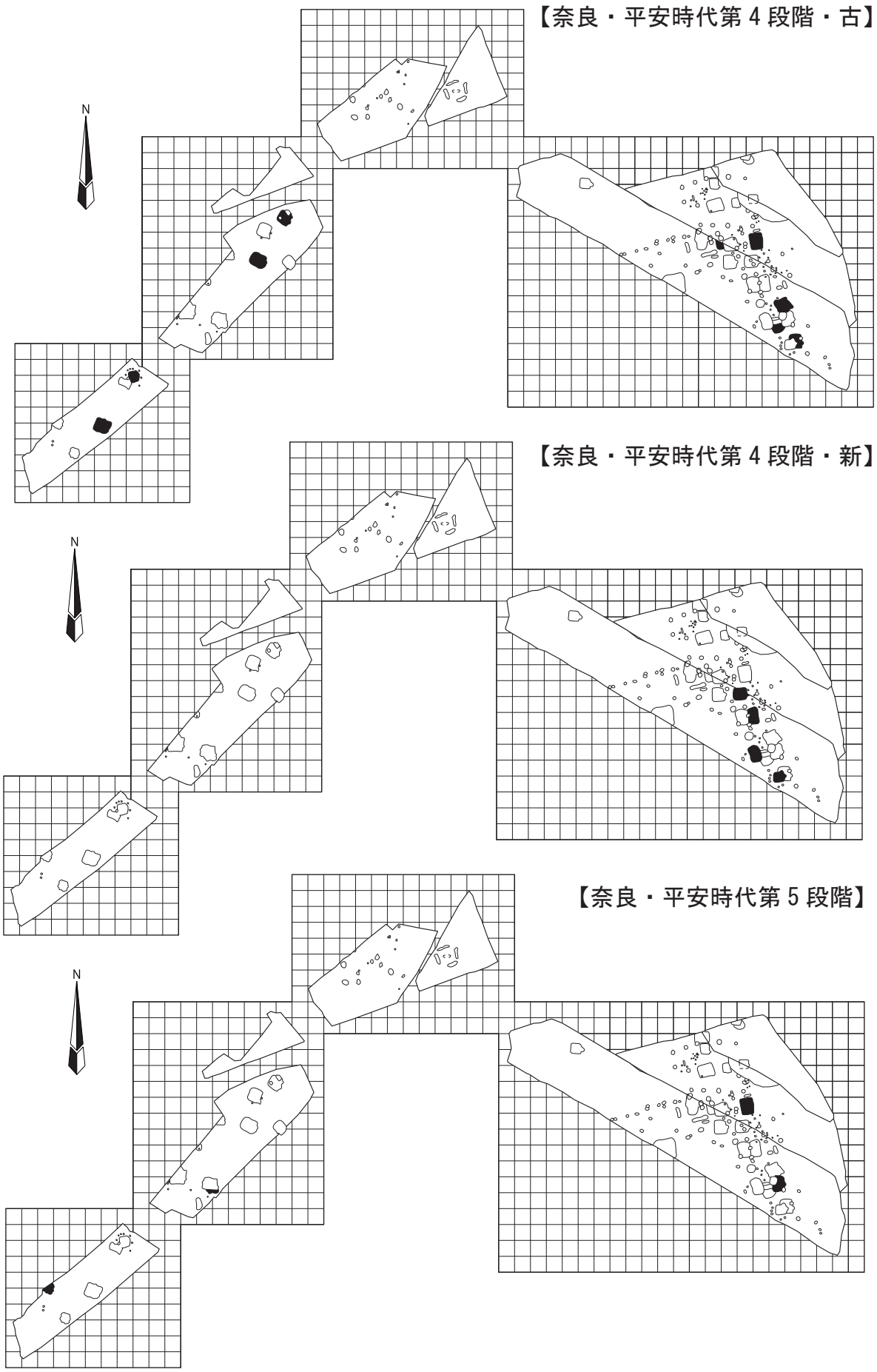
第 1 次調査報告において、滝沢遺跡の奈良・平安時代は 7 段階 9 時期 (甲斐型土器編年 Ⅴ ～ XIII 期) が設定され、連綿と集落が継続していく様子が見て取れる。単純な検出遺構の時期的構成を見ていくと、第 1 段階では 2 軒、第 2 段階では 1 軒と検出されている遺構は少ない。滝沢遺跡において竪穴建物の軒数が増加するのは第 3 段階で、そこから 10 世紀前半まで継続的に調査区域において竪穴建物の検出がみられる。10 世紀前半には竪穴建物の数は最大になるが、その直後の 10 世紀後半には竪穴建物の軒数は急激に減少し、この時期以降に集落が廃絶するようである。

第 53 ～ 55 図に各段階における竪穴建物の分布を示した。第 1 次調査の報告にてⅠ～ Ⅲ 区までの遺構変遷は検討されているが、Ⅳ ～ Ⅵ 区の遺構変遷を加味したうえで改めて土地利用の遷移を考えてみる。

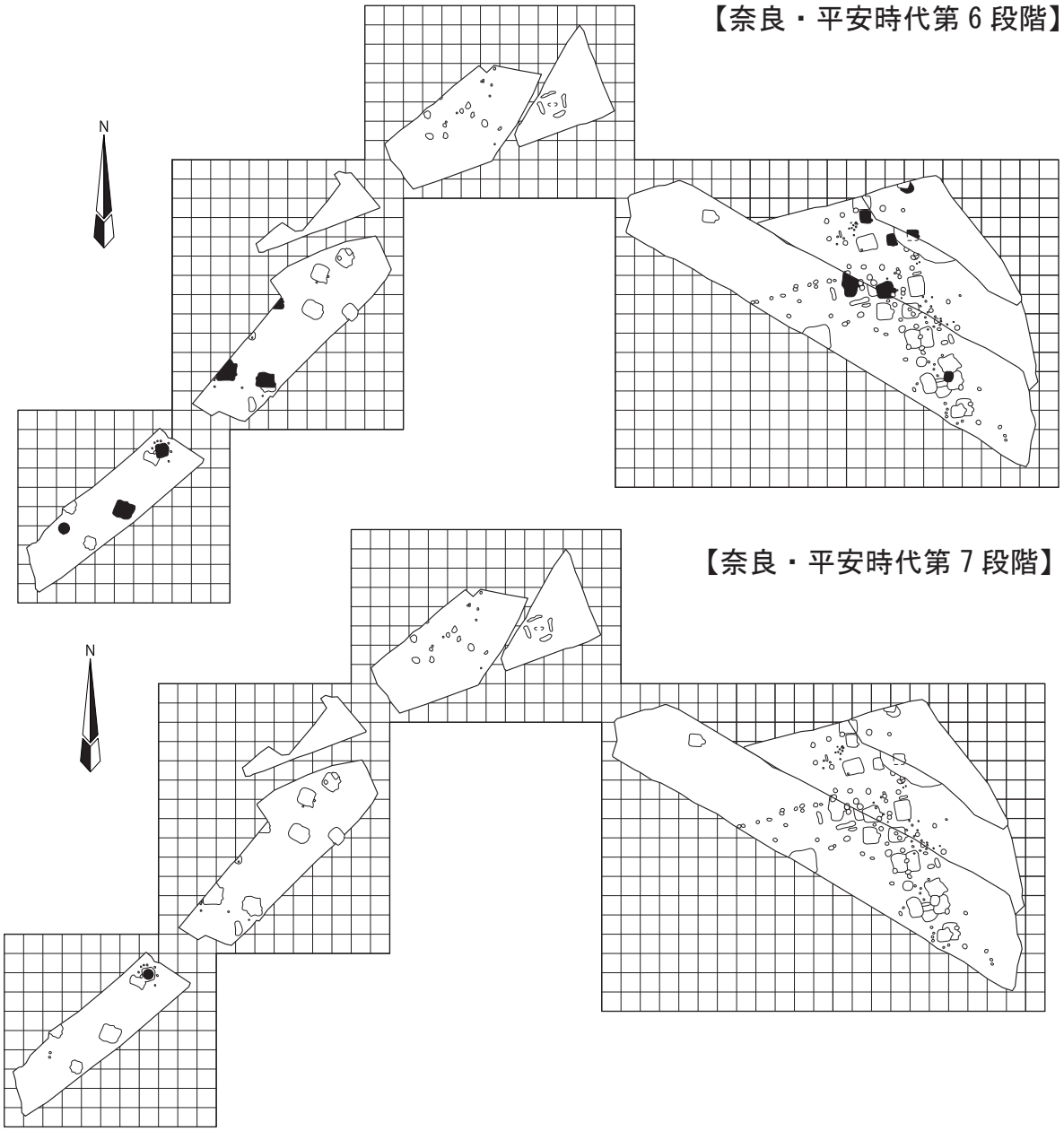
滝沢遺跡でこれまでに発見されている竪穴建物跡は、平安時代の遺構が検出されないⅢ区を境界として西群と東群に分けられる。それぞれ西群では 13 軒、東群では 25 軒が該当する。西群の建物配置は散在している一方、



第 53 図　滝沢遺跡遺構変遷図（1）



第 54 図　滝沢遺跡遺構変遷図（２）



第 55 図　滝沢遺跡遺構変遷図（３）

東群はある一定の範囲に集中して配置している。次に各時期における建物配置を見てみると、第 1 段階の竪穴建物跡は、これまでに 2 軒が検出されており、東群にみられる。第 2 段階では、これまでに西群にあたるⅡ区で 1 軒が検出されており、東群で遺構は検出されない。第 3 段階では建物数も増加し、ここで初めて東群と西群の両方で竪穴建物が存在するようになる。第 4 ～ 5 段階では建物数は安定して存在し、西群・東群ともに建物跡が分布している様子は前段階と同様である。第 6 段階で建物数は最大となり、東群・西群とも広く遺構が分布する。しかし、次の第 7 段階に該当する竪穴建物跡はこれまでに 1 軒が検出されているのみで急激に建物数が減少する。これ以降、遺構・遺物とも検出されず集落が廃絶する。滝沢遺跡に隣接する鯉ノ水遺跡で検出した古代官道の道路遺構の一部は、土石流により破壊されている状況が確認されている。この土石流路からは 9 世紀末～ 10 世紀初頭頃の甲斐型土器が数多く出土しており、このころに土石流が発生したものと推測されている（杉本 2014）。土石流により破壊された古代官道には補修された痕跡はみられず、道路の使用頻度は極端に減少したと考えられる。交通路沿いに所在する滝沢遺跡にとって集落の経営状況は厳しいものであっただろう。こうした背景により集落は衰退していき 10 世紀後半には完全に廃絶したと考えられる。

ここまで遺構配置の推移を整理した。ここで集落の変遷について周辺遺跡の状況を交えて検討する。滝沢遺

跡から北へ約 2km 向かったところに所在する河口浅間神社の西部に、古墳時代の散布地として登録されている周知の埋蔵文化財包蔵地「西川遺跡」が所在する。富士河口湖町教育委員会による一般住宅建設に先行する試掘調査において、滝沢遺跡第 1 段階（8 世紀末～ 9 世紀初頭）に先行する 8 世紀中葉頃から 10 世紀にかけての甲斐型坏が出土している。出土した土師器坏には墨書や刻書が施されるものが多くみられるほか、須恵器や土師器片を硯として二次利用した転用硯、灰釉陶器の薬壺、製塩土器片などが出土している（杉本 2010・2011）。こうした官衙的要素を含む出土遺物の構成からみても滝沢遺跡の状況と酷似している。西川遺跡の状況は、調査範囲が狭小であったことから未確認の部分も多いが、駅家に関連する遺跡である可能性を秘めている。滝沢遺跡に先行している点と出土遺物が酷似している状況は、滝沢遺跡における奈良・平安時代集落の形成に大きな影響を与えたことは容易に想像がつく。もし仮に西川遺跡が駅家に関連する遺跡であった場合、滝沢遺跡はそれに従事するやや一般的集落相に偏重した集落と考えられる。

第 3 項　出土遺物の検討

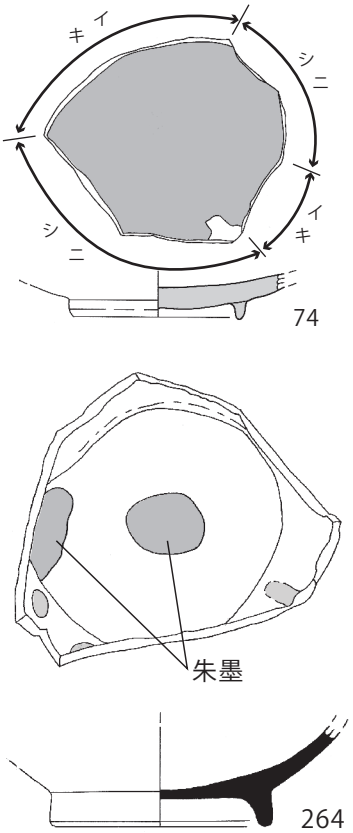
(1) 硯としての二次使用の痕跡がみられる土器

第 4 次調査では、2 点の硯として二次使用した転用硯が出土している（74・264）。74 は灰釉陶器底部の破片を二次的に利用したもので、見込み部全体が磨墨により滑らかになっている。胎土の隙間には朱墨の塊が入り込んでいることから、朱墨をするための硯であることが観察できる。また、74 の割れ口には朱が入り込むところと純粋な割れ口の部分の 2 つが存在する。前者の割れ口は硯に転用する際に打ち欠いた部分で、後者は埋没過程において欠損した箇所である（第 56 図）。第 6 段階（10 世紀前半）の竪穴建物跡 SI07（Ⅴ区 12 号住居）から出土した。264 は須恵器底部の破片を二次利用したものである。見込み部には 74 と同様に、磨墨により滑らかになっているが 74 ほど明瞭ではない。見込み部に朱墨と思われる痕跡があり、264 も朱墨硯の可能性がある。遺構外 AT-18 区から出土した。

滝沢遺跡における発掘調査では、これまで多量の墨書土器が出土しているが、現在のところ朱墨で書かれた資料は見つかっていない。逆に黒色の墨を磨った痕跡が残る硯・転用硯なども出土していない。朱墨硯 74 が 10 世紀前半の竪穴建物跡から出土した状況から、滝沢集落内で使用されたとみて大過ないだろう。朱墨を用いて書かれたものは、おそらく滝沢遺跡の地質条件では遺存しない木質遺物などの材質のものか、朱墨で書かれたものは全て集落外へ持ち出されたかのいずれかであろう。朱墨の用途は、寺院に関連する経典の注釈などに用いられるほか、運搬される荷物の検閲に用いられることが指摘されている。いずれにしても、この集落においては発見されないことが想定される。ただし、今のところ滝沢遺跡周辺の遺跡では、当該期の寺院跡などの遺構は発見されていない。一方、滝沢遺跡に隣接して通過する古代官道の存在は後者の可能性を支持しようか。

(2) 製塩土器

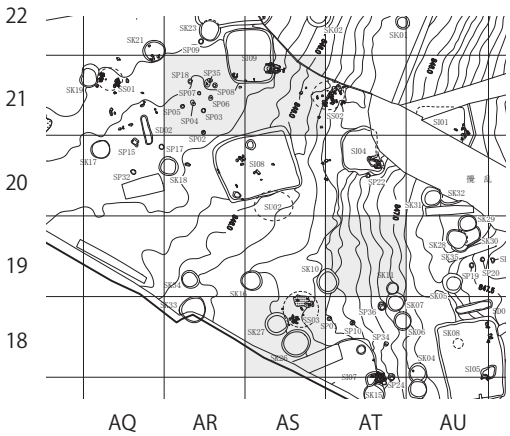
滝沢遺跡における製塩土器の発見の契機となったのは、滝沢遺跡に隣接する鯉ノ水遺跡で検出した土石流路から出土した製塩土器片に端を発する。富士河口湖町教育委員会が発掘調査した鯉ノ水遺跡では、滝沢遺跡の範囲を経由して流れたと思われる土石流路が検出されている。鯉ノ水遺跡の発掘調査を担当した杉本悠樹氏は、この土石流路覆土中より製塩土器片を発見したことにより、滝沢遺跡でも製塩土器が出土しているのではないかという推測をした。実際、滝沢遺跡Ⅵ区の整理作業中であった当センター整理室に立ち寄った際に杉本氏が偶然発見し、Ⅵ区調査で出土したすべての土器片を見直して、5 点の製塩土器を抽出することができた。以上の経過を受けて、これまで調査されたⅠ区～Ⅴ区までの出土土器を山梨文化財研究所の平野修氏と杉本氏で再調査を行っている。その調査の成果は当セン



第 56 図　滝沢遺跡出土の朱墨硯

ターから 2015 年 3 月に刊行予定の『研究紀要 31』にて掲載予定なので、そちらを参考にされたい。

さて、第 3・4 次調査で発見された 5 点の製塩土器（324 ～ 328）について概要を述べる。324 は口縁部破片である。口縁部から体部にかけて屈曲する部分で、内面は剥離による欠損が著しい。体部外面には横方向または縦方向のハケ目がみられる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には砂粒が混入しているほか黒色粒子もみられ、白色粒子もごく少量見受けられる。また、断面は灰色で表裏面がにぶい黄褐色のサンドウィッチ構造の色調を呈している。325 は体部破片と思われる。体部内面には縦方向のハケ目が見られる。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には砂粒の混入が見られるほか、黒色粒子、白色粒子が多量に含まれる。325 には 324 にみられるようなサンドウィッチ構造の色調の変化は見られない。326 は体部破片と思われる。体部外面には斜め方向のハケ目が施される。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒が大量に混入するほか、白色粒子が含まれる。また、断面は灰色で表裏面が黄褐色のサンドウィッチ構造で、灰色の部分の割合が大きい。327 は体部破片である。内外面をハケによって調整しており、内面にはハケ目が良く残る。色調は、内面が灰色、外面がにぶい黄褐色を呈しており、外面のにぶい黄褐色はごく表面のみである。胎土中に砂粒の混入は少なく、褐色の粒子が大量に含まれる。328 は体部破片と思われる。内面のハケ目が良く残り、横方向と縦方向のハケ目により調整されている。色調はやや明るめの黄褐色を呈し、胎土にはやや粗い砂粒が混入する。以上、5 点の製塩土器片を確認した。総重量は 38.3g である。



第 57 図　製塩土器出土グリッド

これらの製塩土器は、調査区内の一辺 20m 四方の範囲から集中して出土し、その範囲は竪穴建物跡が集中する箇所から外れた場所にある。出土位置はすべて遺構の外からであり、南アルプス市野牛島・西ノ久保遺跡出土の製塩土器のようなカマド内からの出土はない。平野氏が指摘しているように、宮ノ前第 5 遺跡や宮ノ前遺跡、西田町遺跡といった官衙や寺院と密接に関わる場所に集中しており（平野 2010）、滝沢遺跡からの製塩土器の出土も駅家に影響を受けた集落という位置付けで製塩土器の出土が認められると考えられる。

(3) 墨書土器

第 3・4 次調査では、総数 71 点の墨書・刻書土器が出土した。遺構に伴って出土した墨書・刻書土器は 15 点、遺構外からは 56 点の出土があった。そのうち文字が判読できるもので、複数書かれるもの含めて数えると 23 字であった。判読できた文字には、「半（15）」・「舎（34・278）」・「川本（35）」・「本人（63・64）」・「王（99）」・「合（100）」・「十（101）」・「＃（143）」・「山口（164）」・「刀（268・269・313）」・「工（272）」・「大（274・310）」・「春（309）」・「人（323）」が認められる。「本人」の墨書・刻書は、第 1 次調査～第 4 次調査を通して滝沢遺跡から普遍的に出土する字面である。第 3・4 次調査では、第 4 段階新段階に該当する竪穴建物跡 SI06 から 2 点出土した。全体的にみれば出土量が多い「本人」墨書の土器であるが、そのほとんどが西群の調査である第 1 次調査に偏る。比率にして、西群 11 点に対して東群 3 点である。遺構密度に加え調査面積からしても西群に偏重して出土することは明白である。西群と東群の建物群には機能的・性格的差異が存在したのであろうか。その他、「舎」・「十」・「＃」・「合」・「刀」は第 1・2 次調査でも少量ながら出土がみられる文字である。また、140 の底部には陰陽道に関わる九字が刻印されている。第 1 段階に該当する竪穴建物跡 SI10 から出土したもので、この段階から陰陽道による宗教的儀礼がおこなわれていたことが示唆される。ここまで墨書土器について非常に簡単に概観したが、「本人」墨書・刻書土器の多さには目を見張るものがあるが、それ以外にも、第 1 ～ 4 次調査を通して一定量の出土がみられる文字も存在する。また、「山本」や「山口」といった文字は、甲斐国府方面へ向かう御坂峠や東海道方面へ向かう追坂峠に関わる可能性があり、注視すべきである。

第４項　奈良・平安時代の集落像

ここまで滝沢遺跡における奈良・平安時代の集落像について論じてきた。第１・２次調査で論じられてきた多量の墨書・刻書土器の出土に加えて、第３・４次調査では朱墨硯や製塩土器の出土が確認されたことにより、滝沢遺跡の特異性が浮き彫りとなった。これらの遺物は、いずれも官衙または寺院に関連した遺跡において出土する傾向がある点で共通する。一方、遺構に目を向けると奈良・平安時代に帰属する掘立柱建物跡はこれまでに見つかっておらず、竪穴建物が主体の一般集落的様相を呈する。こうした状況を鑑みれば、「駅戸」集落に該当する可能性がある。駅戸は駅家に従事し、駅馬の飼育・駅田の管理を行い、駅務を行う駅子を出す義務を負う集落を指す。こうした駅戸集落に関しては、考古学的な定義が提示されておらず、また、河口駅が確認されていない現段階において滝沢遺跡を駅戸と認識することは尚早であろう。ここでは可能性に留めておき、今後の調査による資料の増加を待ちたい。

第２節　滝沢遺跡出土の受け口状口縁甕について

土器集中 SU01 から出土した受け口状口縁甕（3）は、いわゆる近江系とされる古墳時代初頭頃に比定される土器である。第２次調査報告書にて、弥生時代～平安時代にかけて相模・信州・武蔵といった近隣諸国との交流が想定される遺物の中に畿内系叩き甕（Ｖ区第 74 図 -124）の出土があり、第３次調査において出土した受け口状口縁甕は、当時の甲斐国における交流の範囲の広さを示すものであり、かつその文物の交流ルートに東海道を経由し、河口湖東岸地域を介する経路が用いられたことを示している。甲斐国における古墳文化の流入は、中道古墳群とのアクセスを考慮して中道往還が想定されている。一方、出土遺物では、古墳時代の文物の流入には御坂路ルートも同時に使用されていたと推測される。こうした状況を踏まえて、改めて河口湖周辺地域における物流の交流拠点として、または交流に使用される交通路について検討していく必要がある。

【参考文献】

小竹森直子 1989「1．近江の地域色の再検討 2―周辺地域における近江系土器について―」『紀要』第２号　財団法人滋賀県文化財保護協会

杉本悠樹 2014『東海道「甲斐路」の最新調査（鯉ノ水遺跡の発掘調査）』大野山福光園寺 第２回歴史シンポジウム発表資料

杉本悠樹 2011「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」『山梨県考古学協会誌』第 20 号　山梨県考古学協会

杉本悠樹 2010「富士河口湖町河口　西川遺跡の調査成果について（報告）」『山梨県考古学協会誌』第 19 号　山梨県考古学協会

奈良文化財研究所編 2003『古代の陶硯をめぐる諸問題 - 地方における文書行政をめぐって -』

奈良文化財研究所編 2013『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書　塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第 12 冊

比田井克仁 2004「第二節　受け口状口縁甕の出自」「終章　土器移動の類型と原理」『古墳出現期の土器交流とその原理』

平野修 2010「考古学から見た古代内陸地域における塩の流通 -8 世紀代から 9 世紀代における甲斐国の事例を中心に -」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第 14 集』

廣山堯道・廣山謙介 2003『古代日本の塩』雄山閣

山梨県教育委員会・山梨県土木部 2007『滝沢遺跡・疱橋遺跡・谷抜遺跡　一般国道 137 号河口２期バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 247 集

山梨県教育委員会・山梨県県土整備部 2012『滝沢遺跡（第２次）　一般国道 137 号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 282 集

写 真 図 版

Ⅵ a 区（第 3 次調査）全景

Ⅵ b 区（第 4 次調査）全景

Ⅵ区調査前風景

Ⅵ a 区調査風景

写真図版 2

土器集中 SI01 検出状況

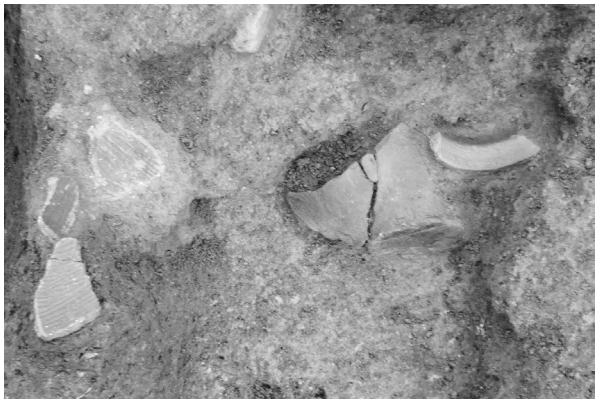
土器集中 SI01 調査風景

土器集中 SI02 検出状況

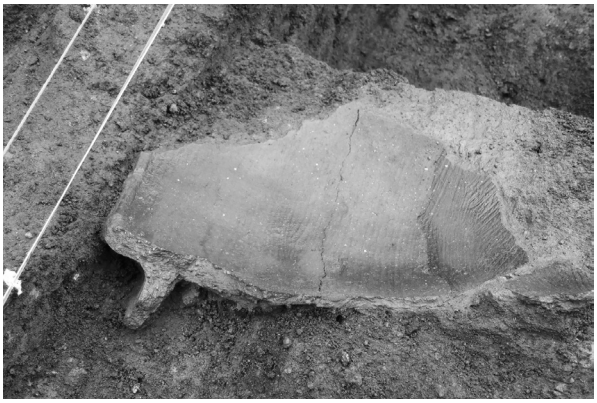
土器集中 SI03(7) 検出状況

竪穴建物跡 SI01 検出状況

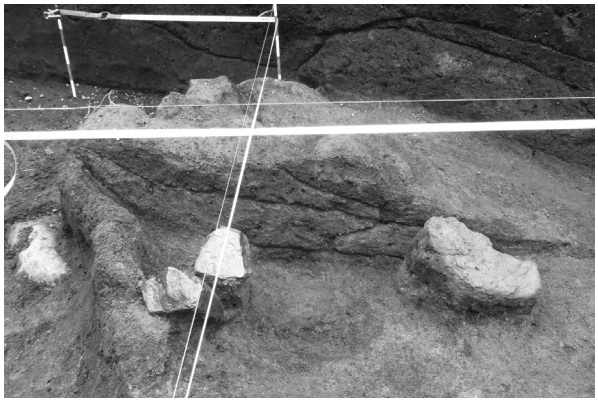
竪穴建物跡 SI01 カマド検出状況



竪穴建物跡 SI01 カマド内土器出土状況



竪穴建物跡 SI01 カマド内羽釜 (11) 出土状況



竪穴建物跡 SI01 カマド半裁状況

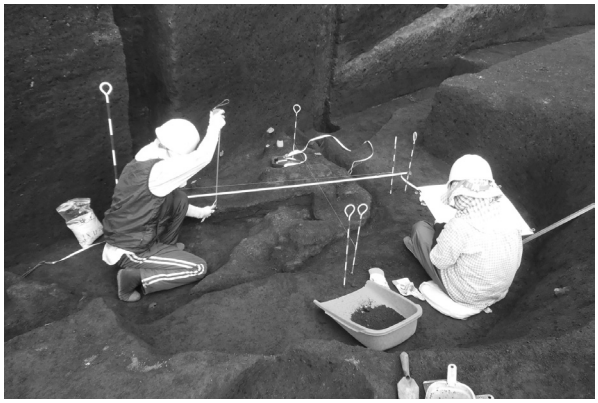
竪穴建物跡 SI02 遺物出土状況

竪穴建物跡 SI02 出土土器

竪穴建物跡 SI02 完掘状況、SI03 検出状況

竪穴建物跡 SI03 土器出土状況

竪穴建物跡 SI03 カマド半裁状況



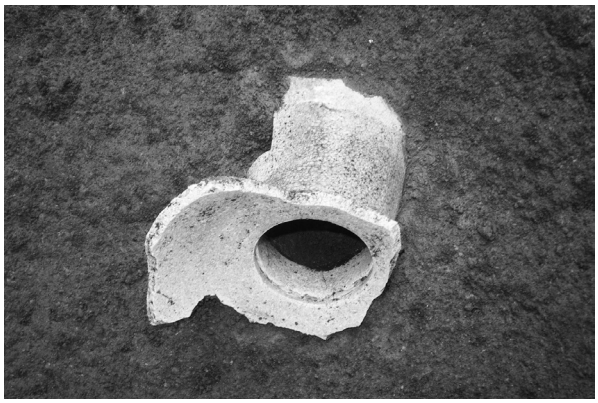
竪穴建物跡 SI03 カマド調査状況

竪穴建物跡 SI04 土器出土状況

写真図版 4

竪穴建物跡 SI04 カマド土器出土状況

竪穴建物跡 SI04 カマド（横から）



竪穴建物跡 SI04 灰釉陶器 (52) 出土状況

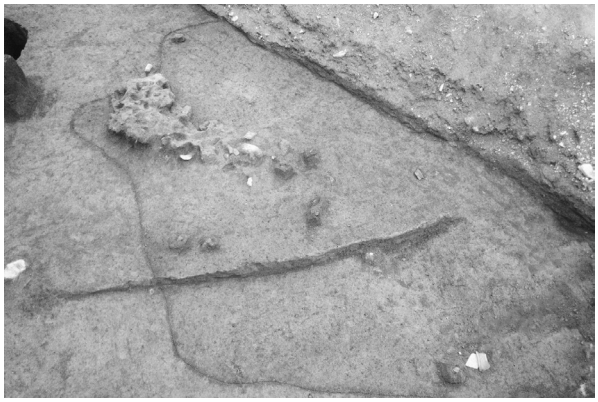
竪穴建物跡 SI04 須恵器 (53) 出土状況

竪穴建物跡 SI05 カマド a 検出状況

竪穴建物跡 SI05 カマド b 検出状況

竪穴建物跡 SI05 完掘状況

竪穴建物跡 SI06 完掘状況

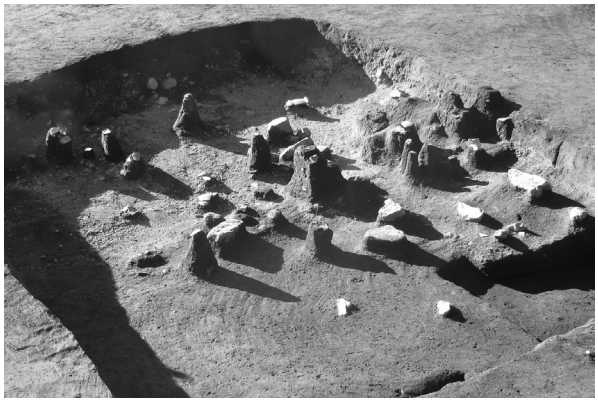


竪穴建物跡 SI07 検出状況

竪穴建物跡 SI07 礫散乱状況

竪穴建物跡 SI07 カマド検出状況

竪穴建物跡 SI07 完掘状況



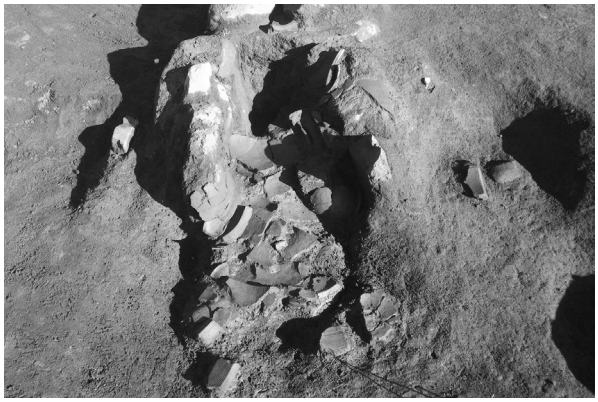
竪穴建物跡 SI08 遺物出土状況

竪穴建物跡 SI08 完掘状況

竪穴建物跡 SI09 検出状況

竪穴建物跡 SI09 礫散乱状況

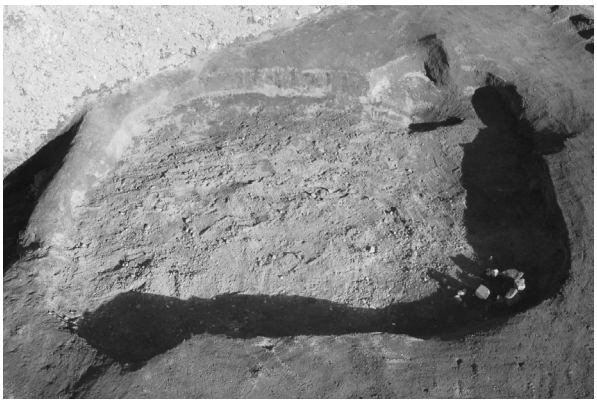
写真図版 6



竪穴建物跡 SI09 カマド内遺物出土状況

竪穴建物跡 SI09 カマド完掘状況

竪穴建物跡 SI09 配石遺構



竪穴建物跡 SI09 完掘状況

竪穴建物跡 SI09 坏 (109) 出土状況

竪穴建物跡 SI09 カマド皿 (115) 出土状況

竪穴建物跡 SI09 花弁状銅製品 (381) 出土状況

竪穴建物跡 SI10 遺物出土状況（第 3 次調査）

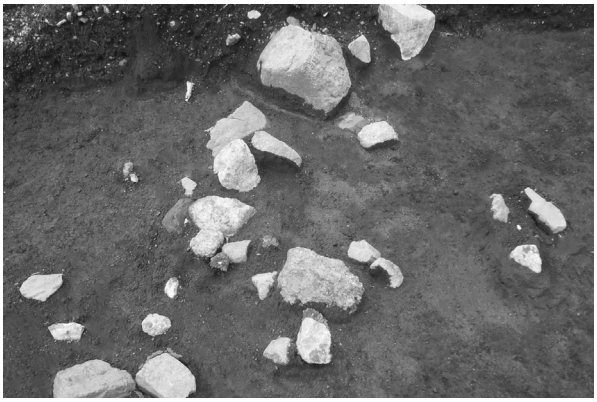
竪穴建物跡 SI10 遺物出土状況

竪穴建物跡 SI10 焼土検出状況

竪穴建物跡 SI10 カマド半裁状況

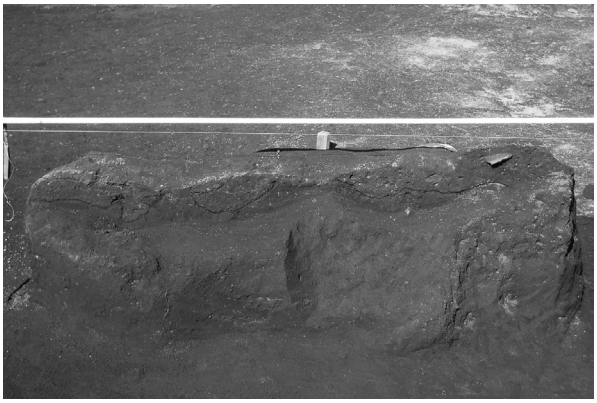
竪穴建物跡 SI10 完掘状況（第 4 次調査）

配石 SS01 検出状況



配石 SS02 検出状況

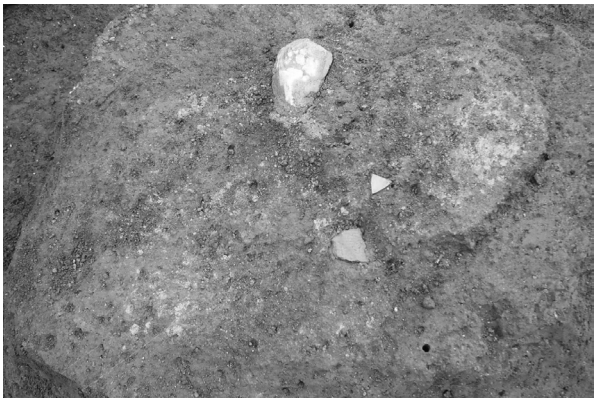
焼土 SL01 検出状況



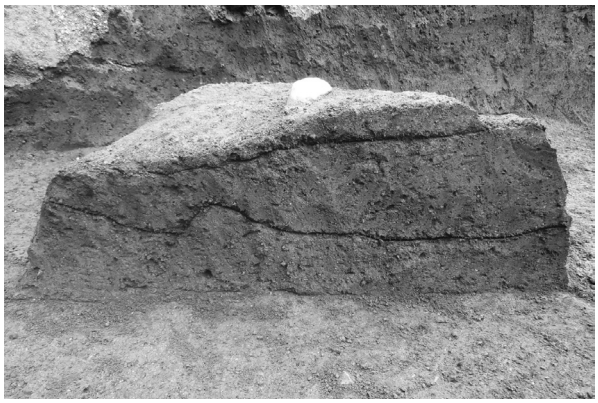
焼土 SL01 半裁状況

写真図版 8

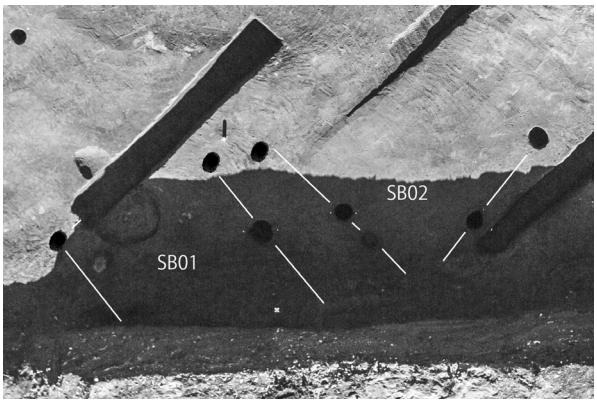
焼土 SL01 遺物出土状況



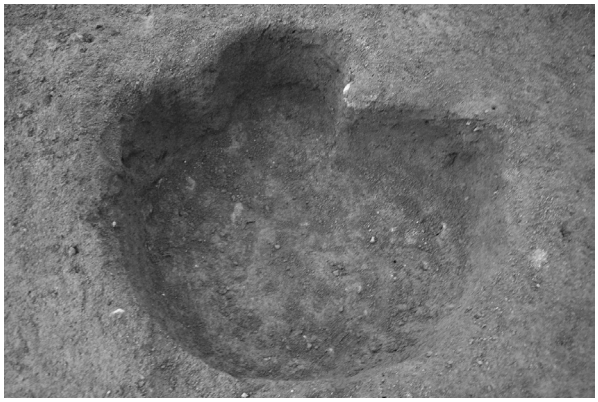
焼土 SL02 検出状況



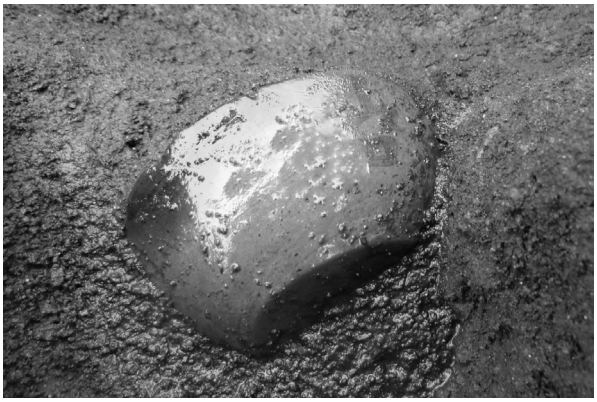
焼土 SL02 半裁状況



掘立柱建物跡 SB01・SB02 検出状況



ピット SP15 完掘状況



ピット SP15 墨書土器 (164) 出土状況

ピット SP22 完掘状況

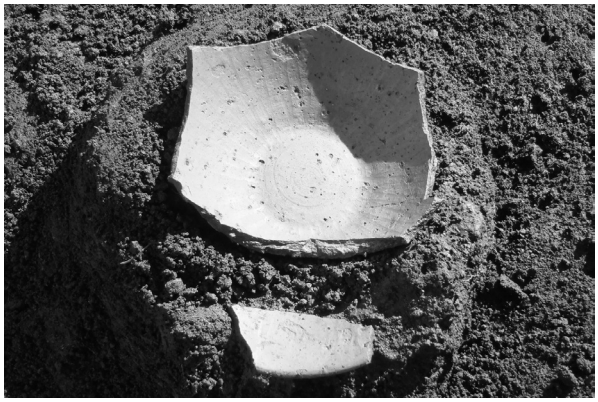
土坑 SK10 完掘状況

土坑 SK17 完掘状況

AR18 区　弥生土器 (178) 出土状況

AP21 区　古墳時代土師器坏 (192) 出土状況

AR19 区　古墳時代台付甕 (199) 出土状況

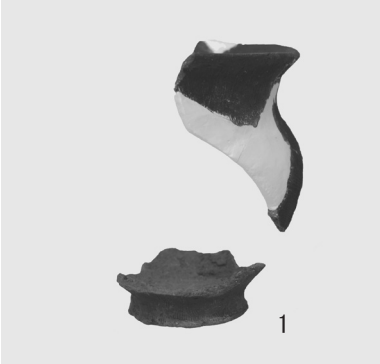


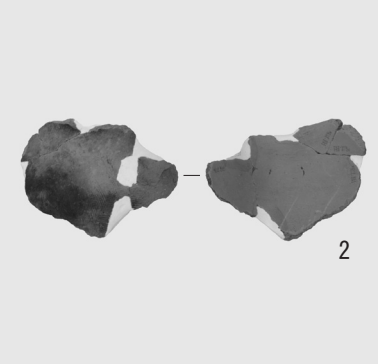
AS22 区　墨書土師器坏 (268) 出土状況

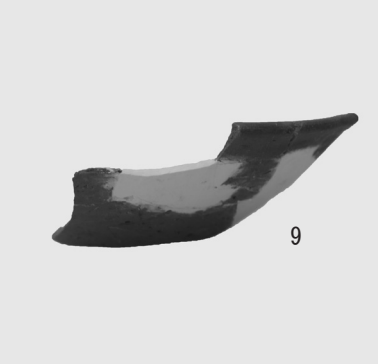
AR19 区　土錘 (333) 出土状況

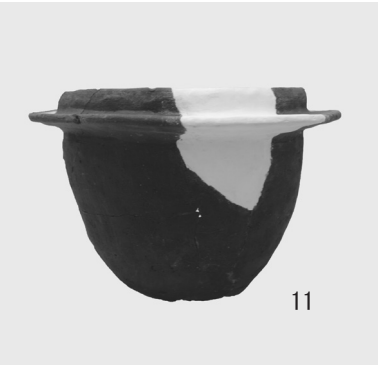
AP21 区　紡錘車 (367) 出土状況

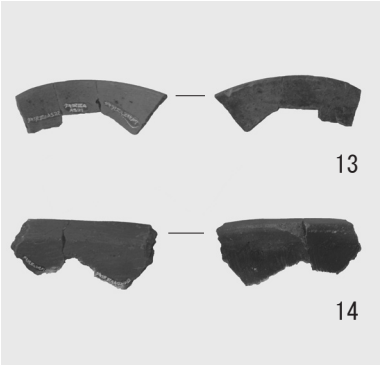
竪穴建物跡 SI04 覆土　石鏃 (378) 出土状況

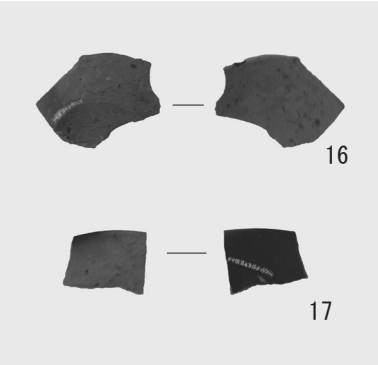




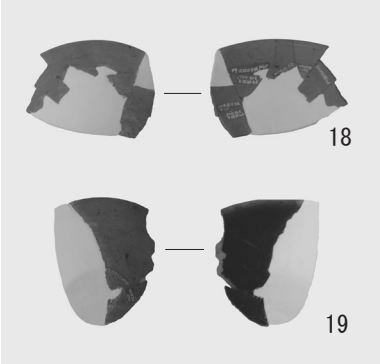


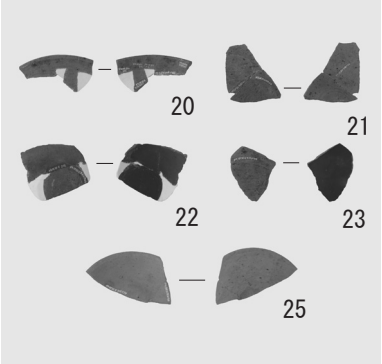






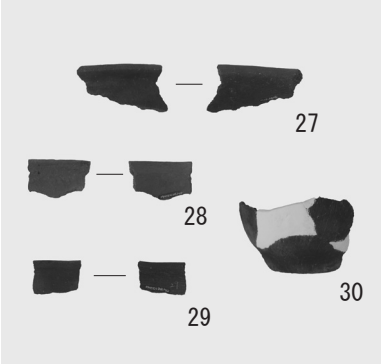
出土遺物写真（1）

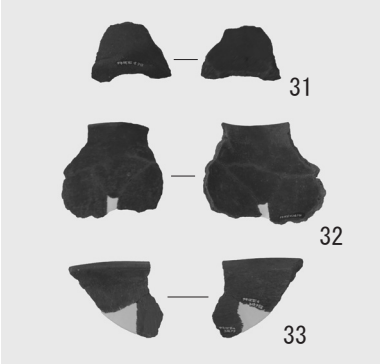

18
19


20
21
22
23
25

24

26


27
28
29
30


31
32
33

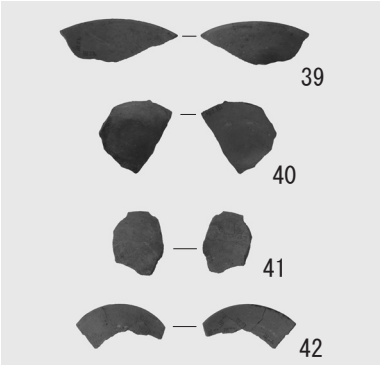
34

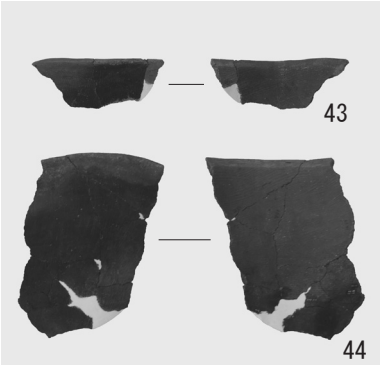
35

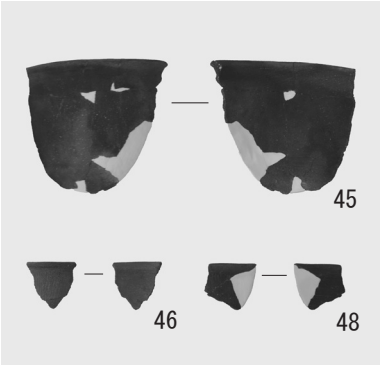
36

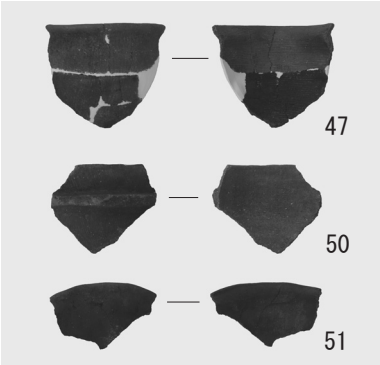
37

38


39
40
41
42


43
44


45
46
48

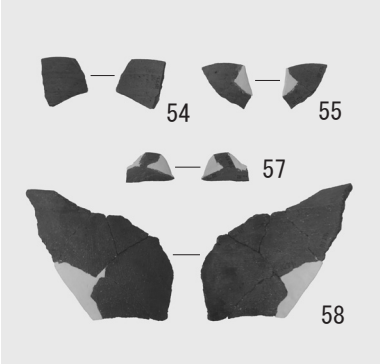

47
50
51

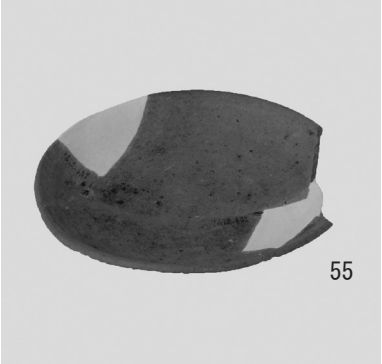
出土遺物写真（2）

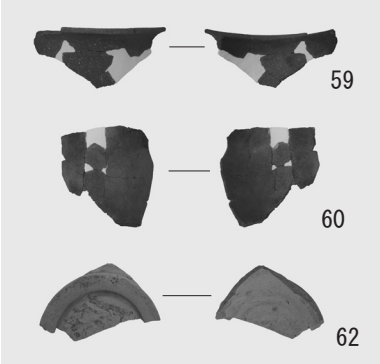
49

52

53

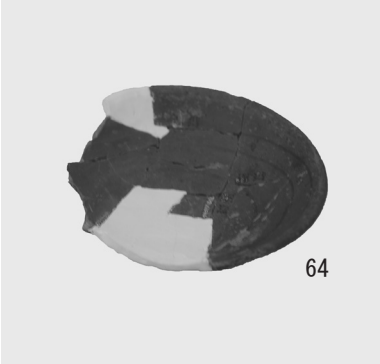

54
55
57
58


55

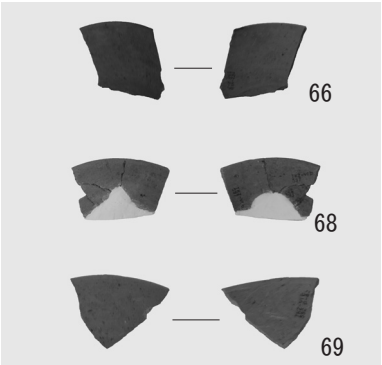

59
60
62

61

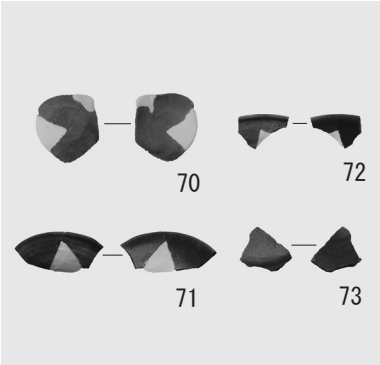
63


64

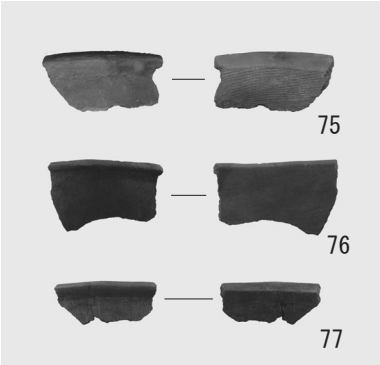
65


66
68
69

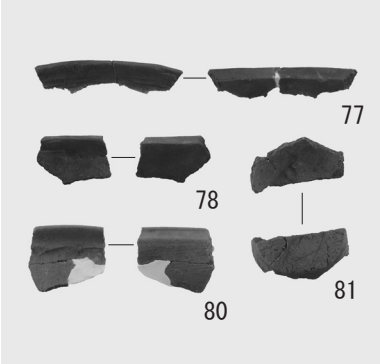
67


70
72
71
73

74

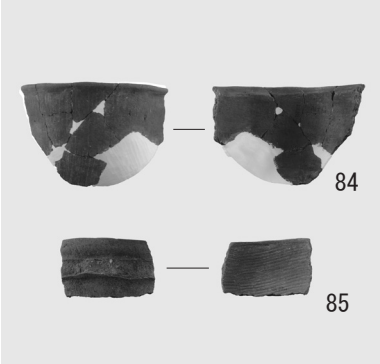

75
76
77

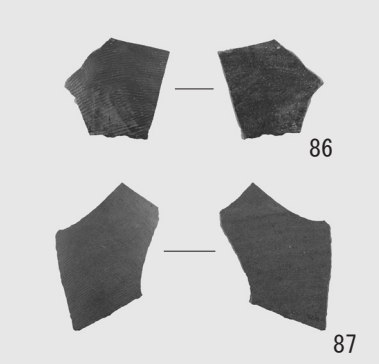
出土遺物写真（3）


77
78
80
81

82

83

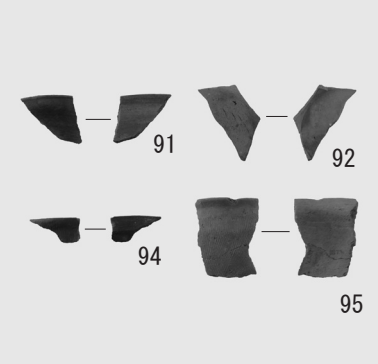

84
85

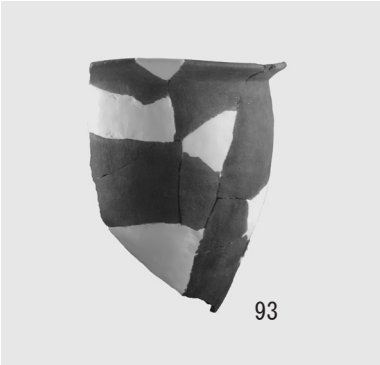

86
87

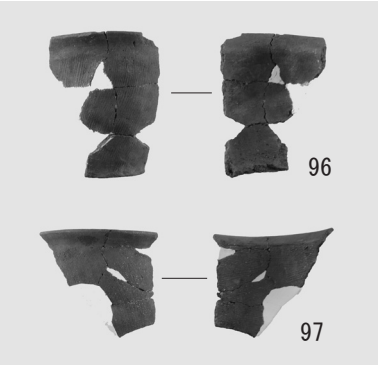
88

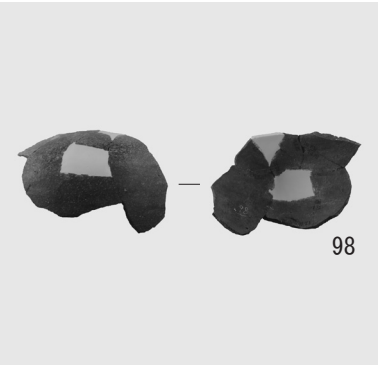
89

90


91
92
94
95


93


96
97


98

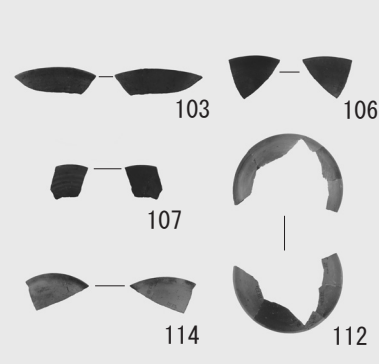
99

100

101

出土遺物写真（4）

102


103
106
107
114
112

104

105

108

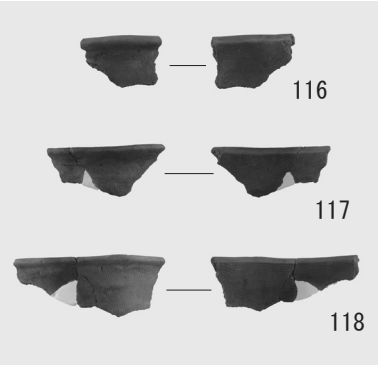
109

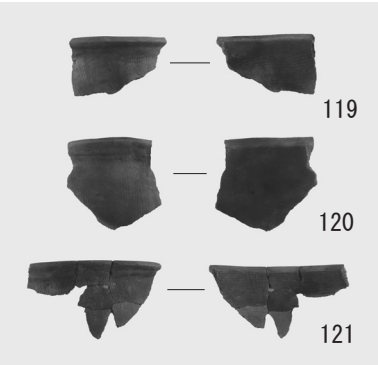
110

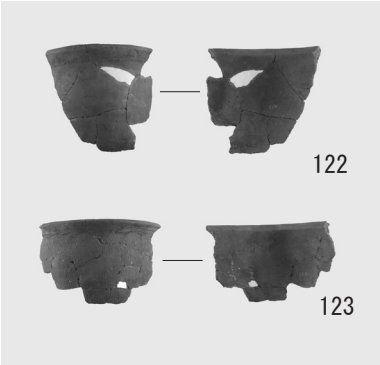
111

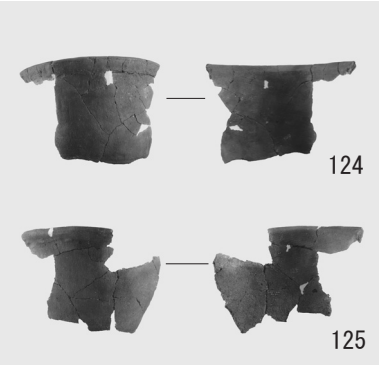
113

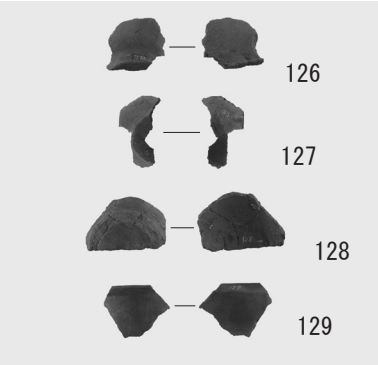
115


116
117
118

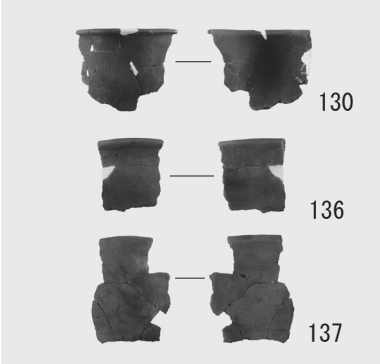

119
120
121


122
123


124
125


126
127
128
129

出土遺物写真（5）


130
136
137

131

132

133

134

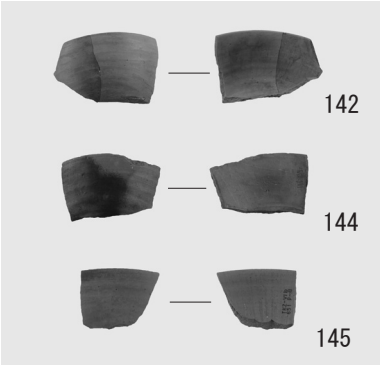
135

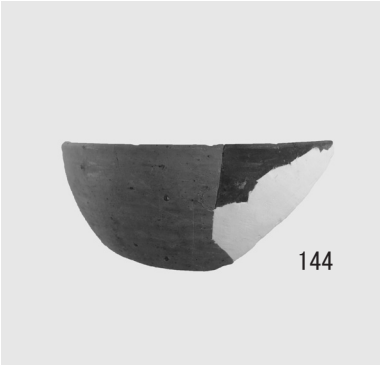
138

139

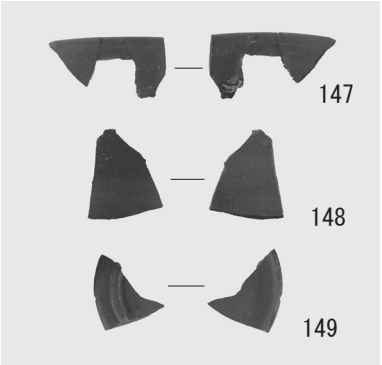
140

141


142
144
145


144

146


147
148
149

150

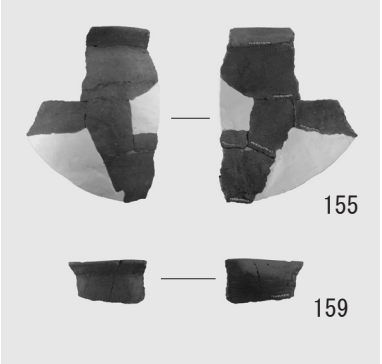
出土遺物写真（6）

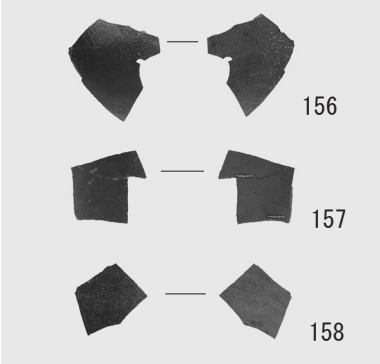
151

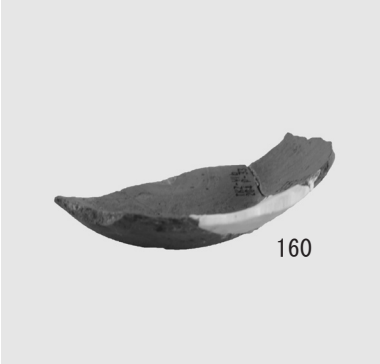
152

153

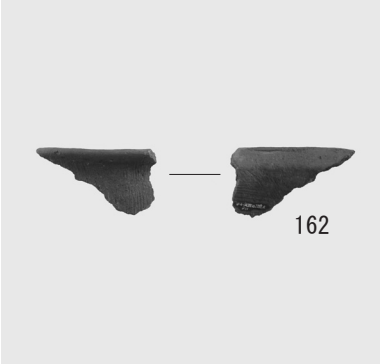
154


155
159


156
157
158

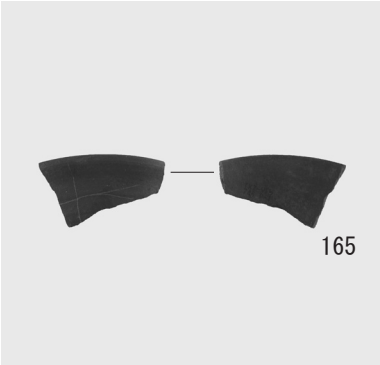

160

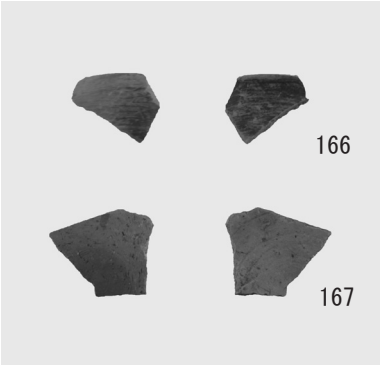
161

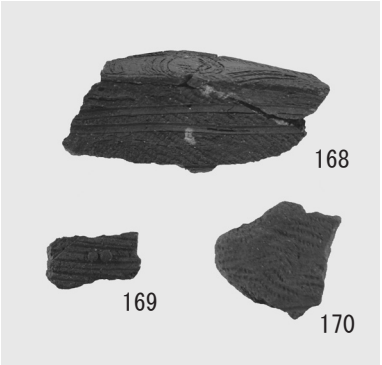

162

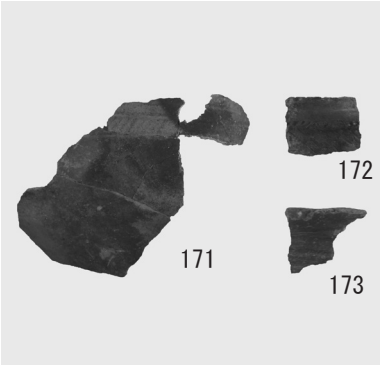
163

164


165

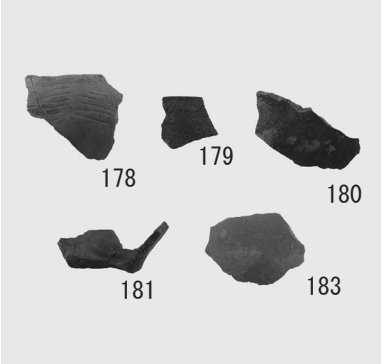

166
167


168
169
170

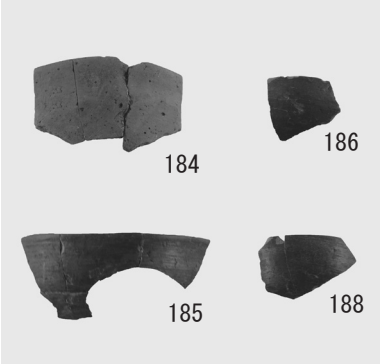

172
171
173

出土遺物写真（7）

174
175
176
177

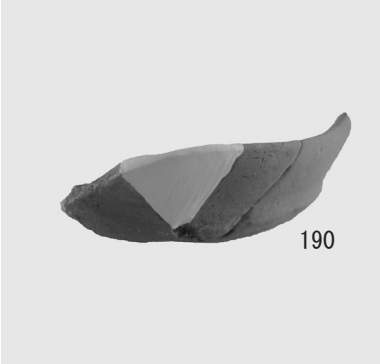

178
179
180
181
183

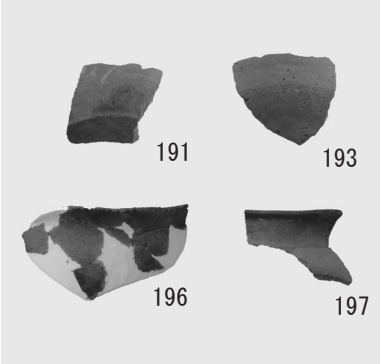
182


184
186
185
188

187

189

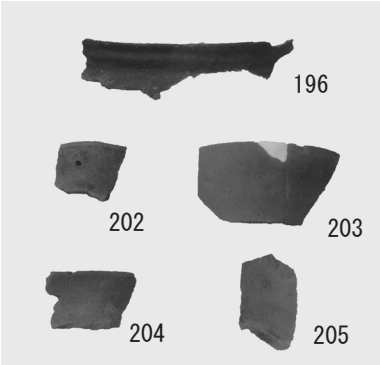

190

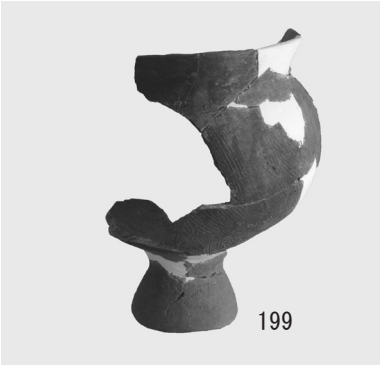

191
193
196
197

192

194

195


196
202
203
204
205

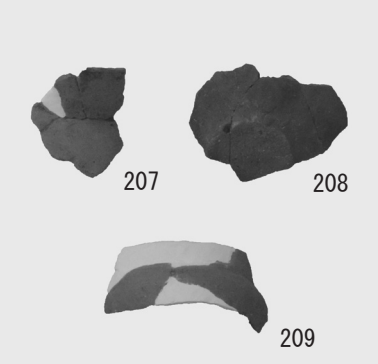

199

200

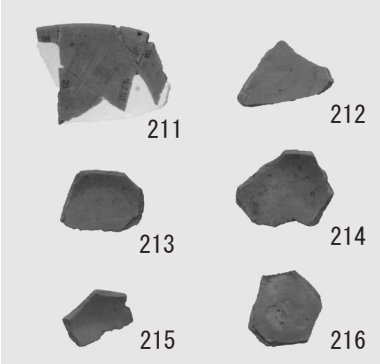
201

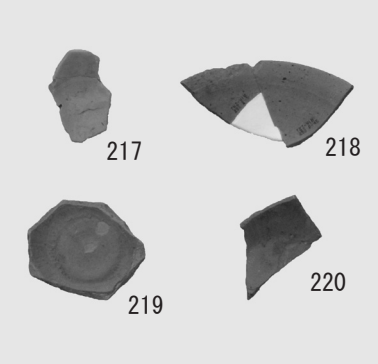
出土遺物写真（8）

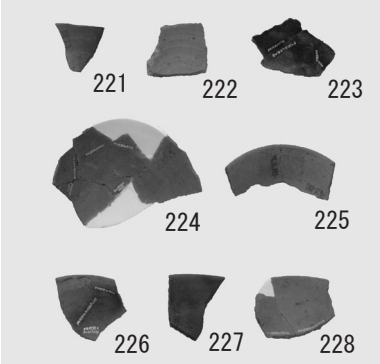
206

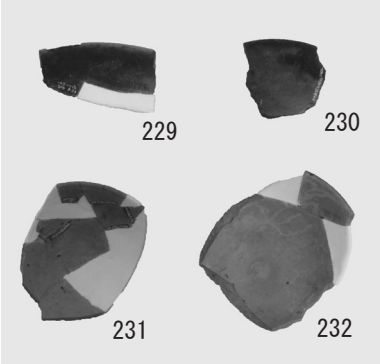

207
208
209

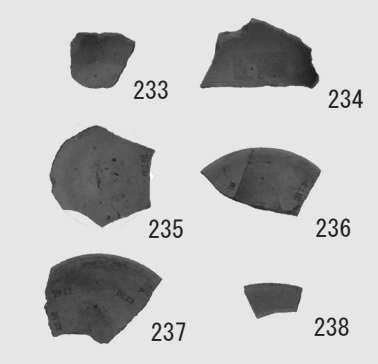
210

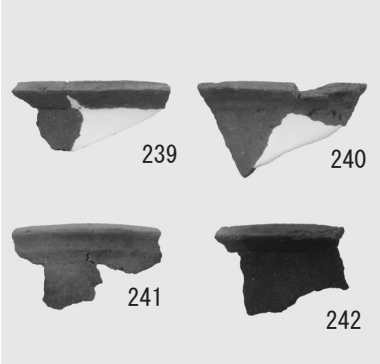

211
212
213
214
215
216

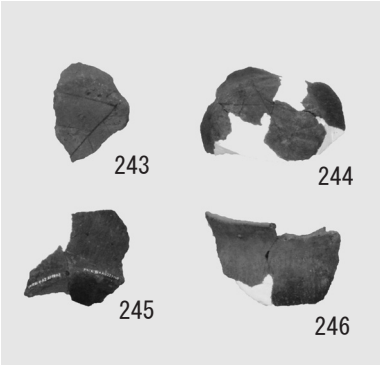

217
218
219
220

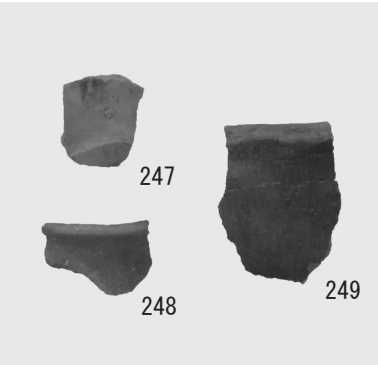

221
222
223
224
225
226
227
228

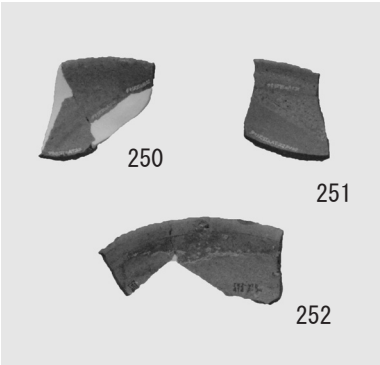

229
230
231
232

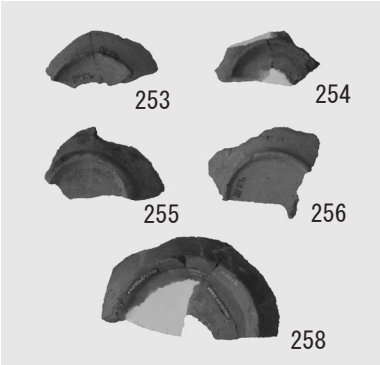

233
234
235
236
237
238


239
240
241
242

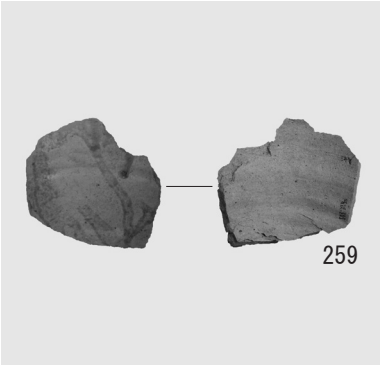

243
244
245
246


247
248
249

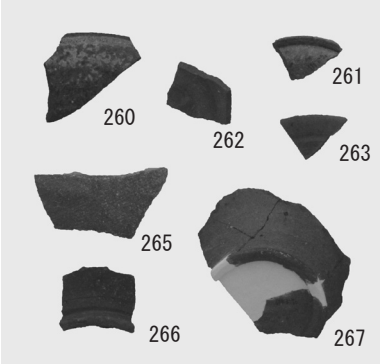

250
251
252


253
254
255
256
258

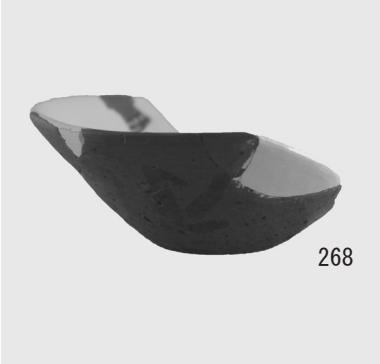
257

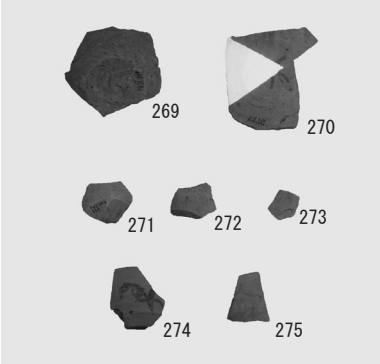

259

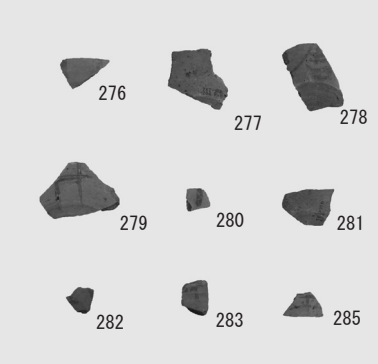
出土遺物写真（9）

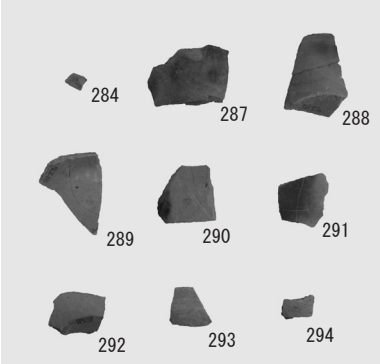

260
261
262
263
265
266
267

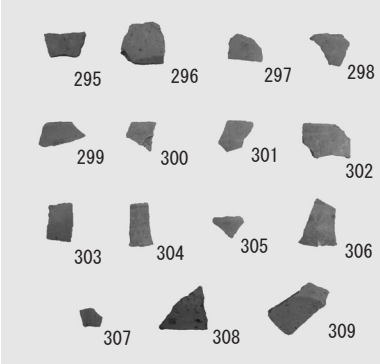
264


268

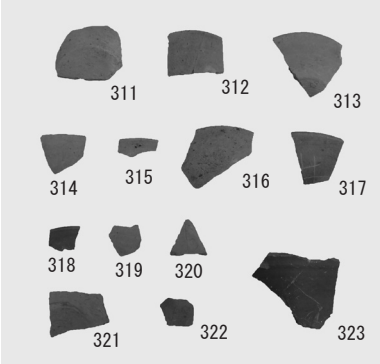

269
270
271
272
273
274
275

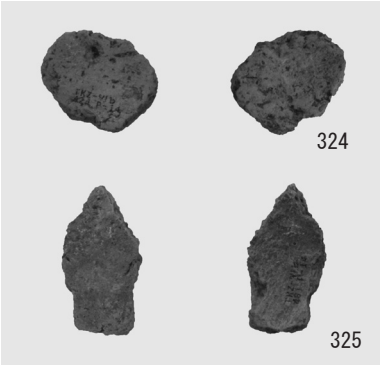

276
277
278
279
280
281
282
283
285

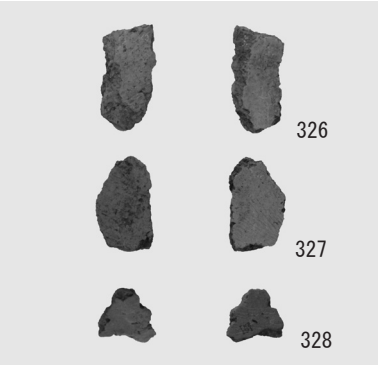

284
287
288
289
290
291
292
293
294

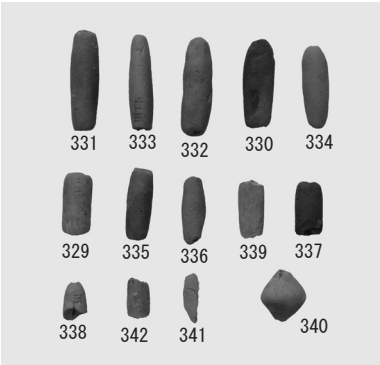

295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309

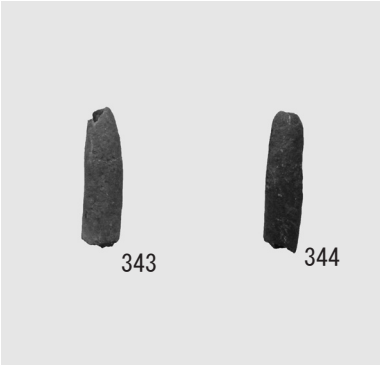
310

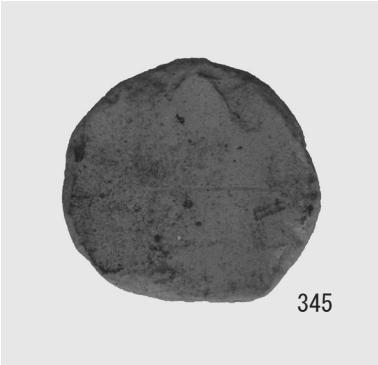

311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323

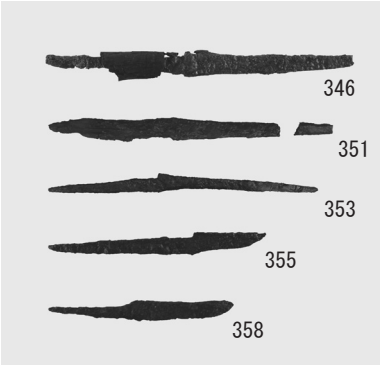

324
325


326
327
328

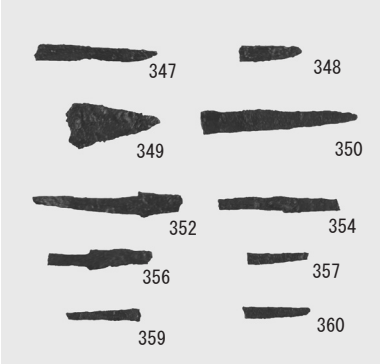

331
333
332
330
334
329
335
336
339
337
338
342
341
340

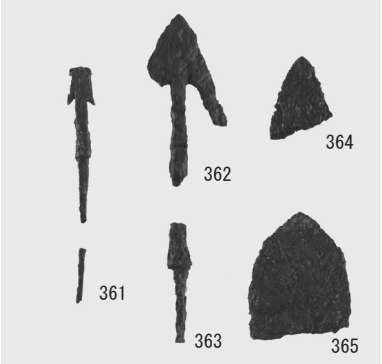

343
344

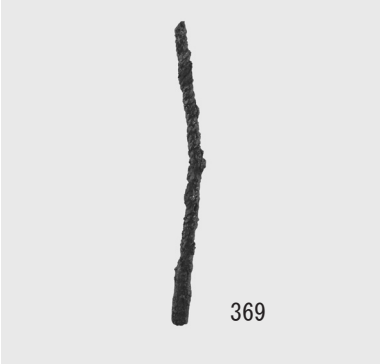

345

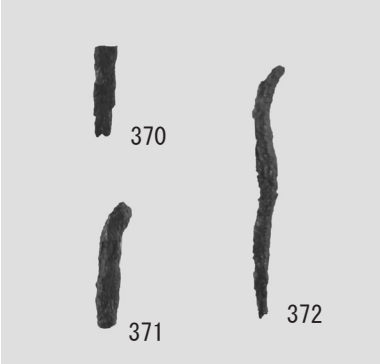

346
351
353
355
358

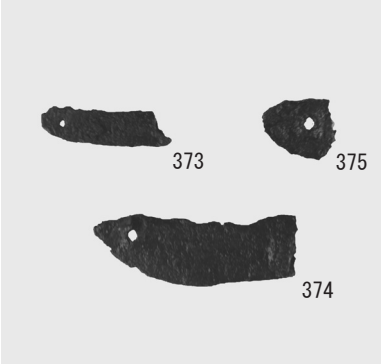
出土遺物写真（10）

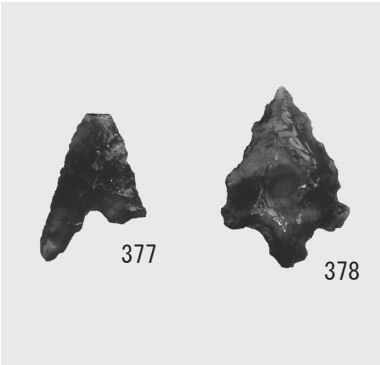


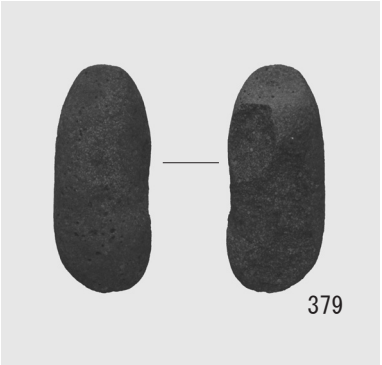


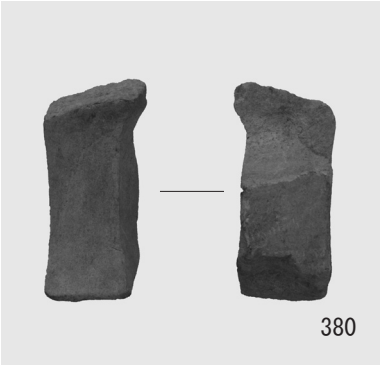


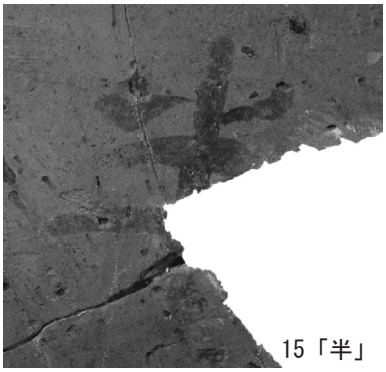


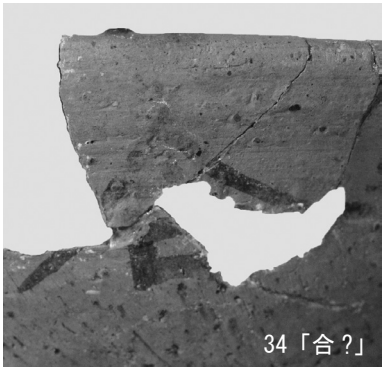




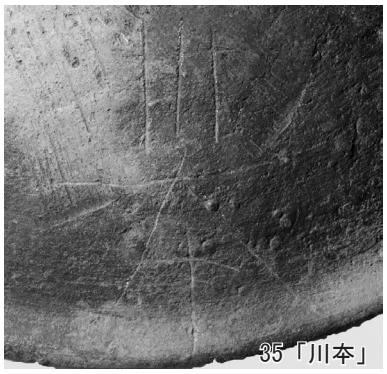




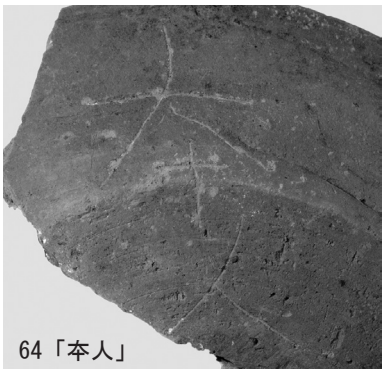


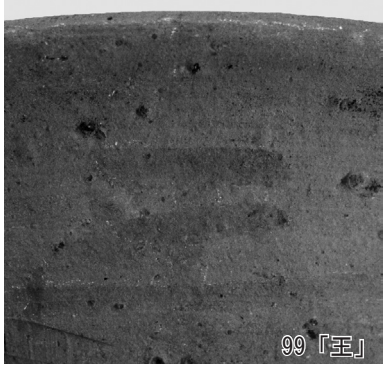


出土遺物写真（11）・出土墨書土器（1）

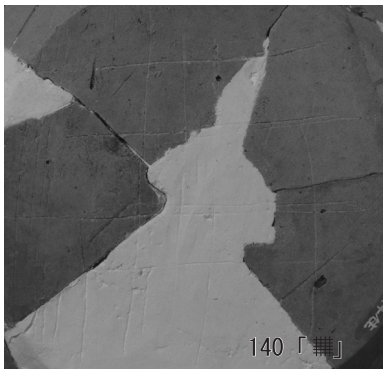

35「川本」

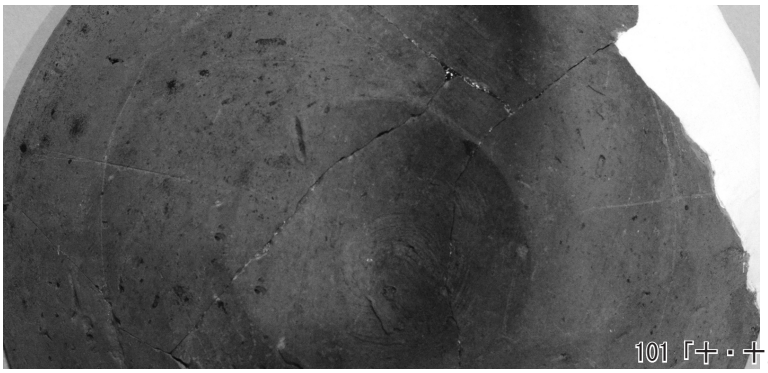
63「本人」


64「本人」

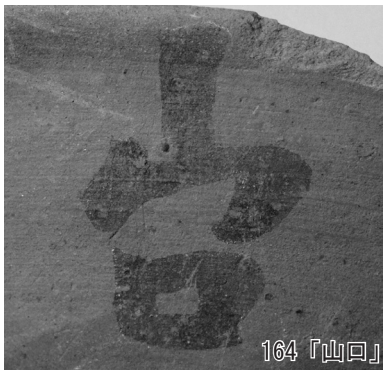

99「王」

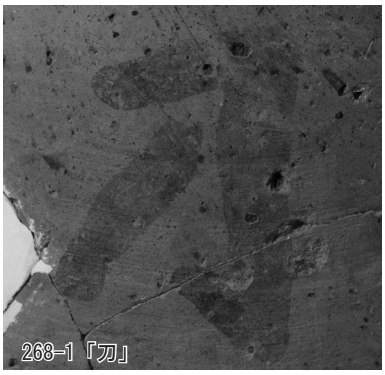
100「合」

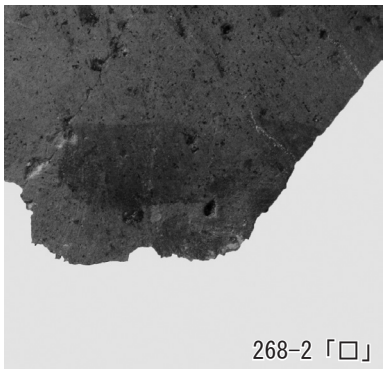

140「卌」

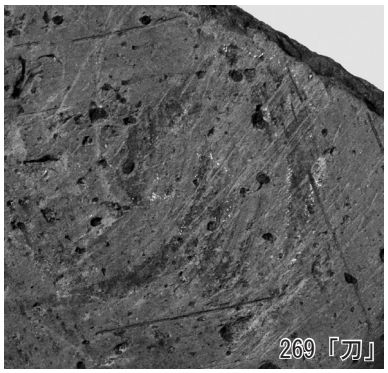

101「十・十」

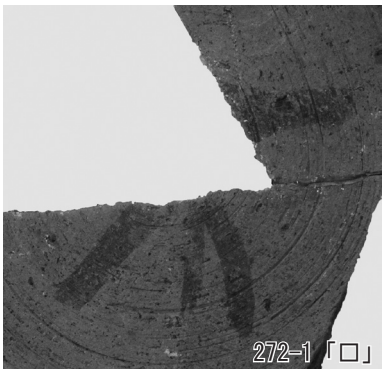
143「＃」


164「山口」

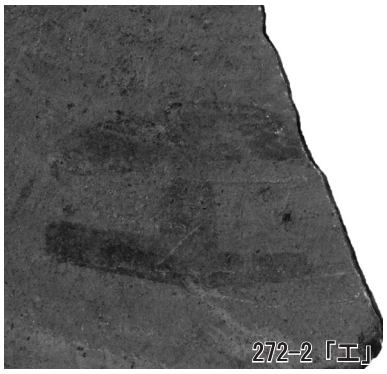

268-1「刀」

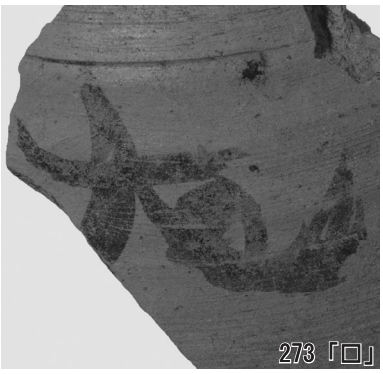

268-2「口」

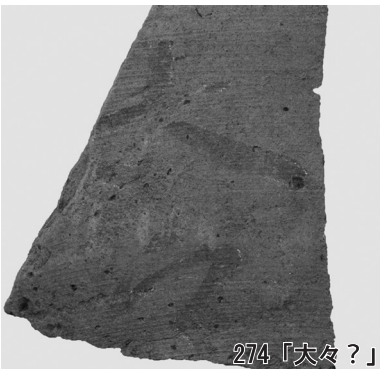

269「刀」


272-1「口」

出土墨書土器（2）

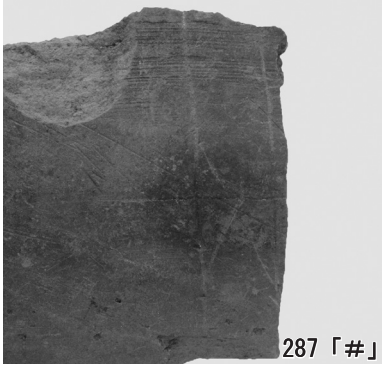

272-2「工」

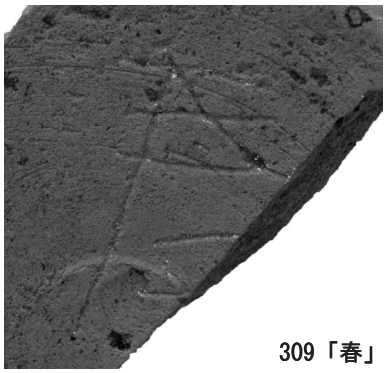

273「口」


274「大々？」

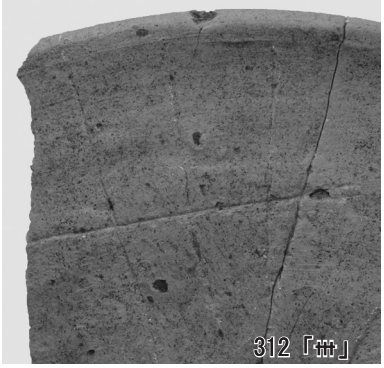
278「舎」

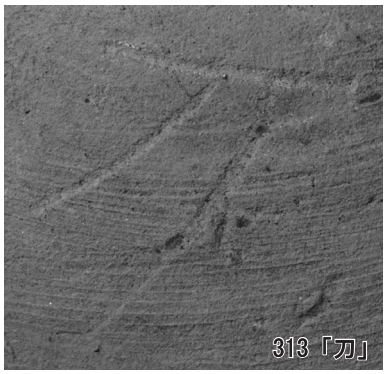
279「口」

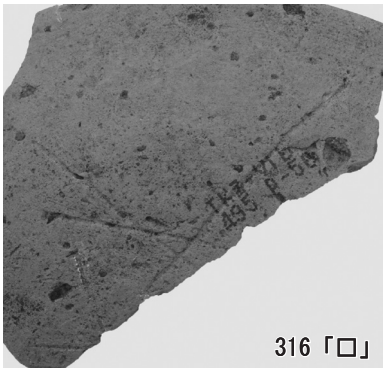

287「#」

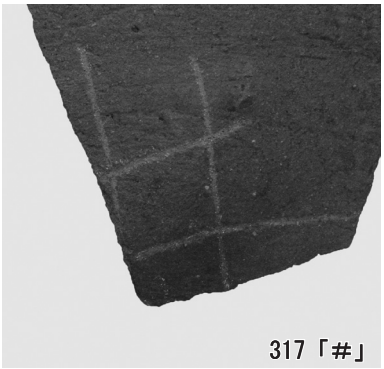

309「春」

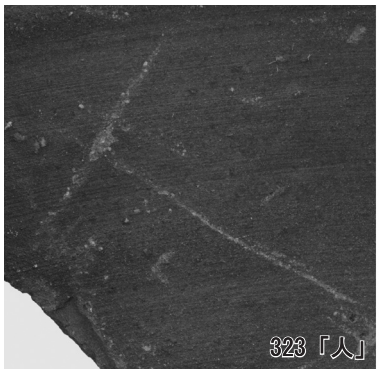
310「大」


312「卅」


313「刀」


316「口」


317「#」


323「人」

写真図版中番号は、遺物番号に対応する。

出土墨書土器（3）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	たきざわいせき（だいさん・よじ）
書　　名	滝沢遺跡（第３・４次）
副　　題	一般国道 137 号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第 304 集
著　者　名	御山亮済
発　行　者	山梨県教育委員会・山梨県県土整備部
編　集　機　関	山梨県埋蔵文化財センター
所 在 地・電 話	〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923　TEL055-266-3016
発 行 年 月 日	2015 年 3 月 20 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 （新）	東経 （新）	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たきざわいせき 滝沢遺跡 （第３・４次）	やまなしけんみなみつるぐんふじかわぐちこまちかわぐち 山梨県南都留郡富士河口湖町 河口 535-1 ほか	19430	河－ 11	35° 31' 13"	138° 46' 40"	第３次 2011/10/04 ～ 2011/12/05	738㎡	一般国道 137 号吉田河口湖バイパス建設
						第４次 2013/09/03 ～ 2013/12/06	1,328㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
滝沢遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世 近世	〔古墳時代以前〕 配石１基、土器集中３ヶ所 〔平安時代〕 竪穴建物跡 10 軒、焼土２基、配石２基 〔中世以降ほか〕 掘立柱建物跡２軒、ピット 28 基、土坑 32 基、溝状遺構２基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、土製品、石製品、鉄製品、銅製品	平安時代の土師器には墨書・刻書土器、製塩土器を含む。須恵器・陶器には一部、硯として二次使用した痕跡がみられるものがある。

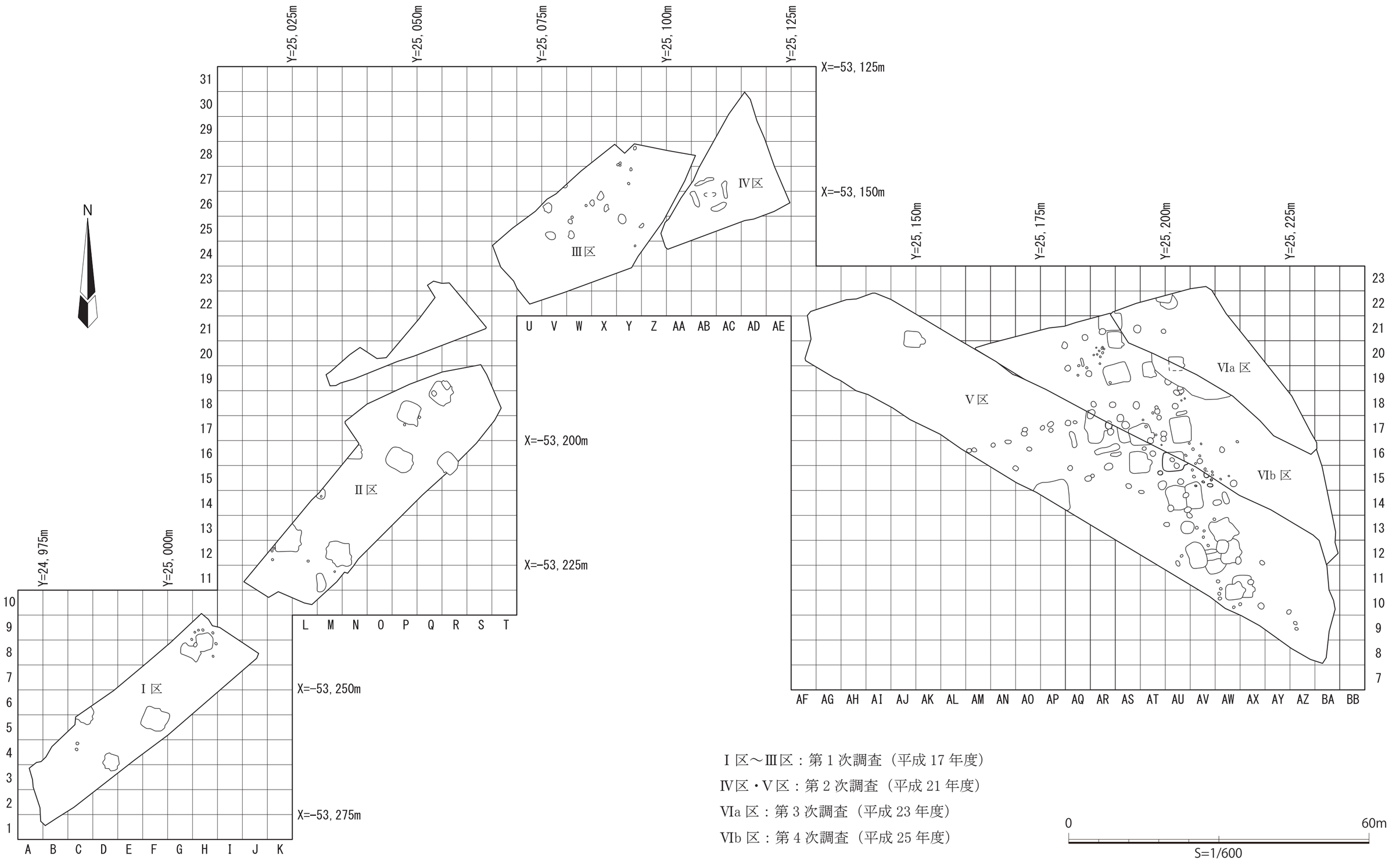
要　　約	滝沢遺跡は古代官道「御坂路（・甲斐路）」に沿って営まれた奈良～平安時代の集落跡で、これまでに一般国道 137 号河口２期バイパスおよび同道吉田河口湖バイパス建設に伴い発掘調査が実施され、本調査で第４次を数える。本調査では、8 世紀後半～ 10 世紀前半までの竪穴建物跡 10 軒、配石遺構２基、焼土遺構２基の他、古墳時代以前の配石遺構１基、土器集中３基、中世以降の掘立柱建物跡２軒、ピット 28 基、土坑 32 基、溝状遺構２条を検出した。本調査では、滝沢遺跡においてもっとも古い段階の竪穴建物跡が２軒確認された。また、朱墨をする硯としての二次使用がみられる灰釉陶器や須恵器が出土してたほか、製塩土器片なども確認され、古代官道及び駅家周辺地域の集落相の一端が窺える。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 304 集

滝沢遺跡（第3・4次）

― 一般国道 137 号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書 ―

印刷日　2015（平成 27 年）年３月 20 日
発行日　2015（平成 27 年）年３月 20 日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL 055-266-3016　FAX 055-266-3882
発　行　山梨県教育委員会
山梨県県土整備部
印　刷　株式会社　峡南堂印刷所



Ⅰ区～Ⅲ区：第 1 次調査（平成 17 年度）
Ⅳ区・Ⅴ区：第 2 次調査（平成 21 年度）
Ⅵa 区：第 3 次調査（平成 23 年度）
Ⅵb 区：第 4 次調査（平成 25 年度）